

くノ一の魔女～ストライクウィッチーズ異聞

高嶋ぽんず

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ストライクウィッチーズの二次創作になります。

扶桑皇国陸軍、東部第33部隊所属の初美あきら少尉は、ネウロイとの戦争が終わらぬ欧州へ派遣されました。この話は、彼女が経験する欧州での出会いの物語になります。

一話あたりは非常に短いのでお気軽にどうぞ。

あらすじに書くことではないかもしれませんが、活動報告で、裏話的な何かを報告しております。大した内容ではありませんが、それも含めてお楽しみいただけたら幸いです。

なお、この小説はPixivに投稿していたものの再投稿になります。

友人であり敬愛するイラストレーター兼同人作家の助谷クロウさんが、主人公の初美あきらさんを描いてくれました。これをみたときガチ泣きしました。暫く、見ては泣いて見ては泣いてを繰り返してました。未だに目が潤んでしまいます。

<https://www.dlsite.com/maniawork//product/id/RJ249878.html>

宣伝させていただきます。くノ一の魔女の同人版になります。

内容は、一の巻と二の巻に加筆修正したことになります。

お値段は540円。

よろしくお願いします。

目次

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	一の卷	その一
1		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	一の卷	その二
5		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その一
10		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その二
13		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その三
16		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その四
19		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その五
23		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その六
26		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その七
29		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その八
34		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その九
36		
くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞	二の卷	その十
40		

- くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 二の巻 その十一
- 44 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 二の巻 その十二
- 48 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その一
- 52 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その二
- 55 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その三
- 58 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その四
- 61 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その五
- 63 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その六
- 67 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その七
- 70 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その八
- 74 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その九
- 77 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その十
- 81 くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の巻 その十一

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	84	三の巻	その十二
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	87	三の巻	その十三
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	90	三の巻	その十四
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	93	三の巻	その十五
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	99	三の巻	その十六
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	102	三の巻	その十七
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	106	三の巻	その十八
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	109	三の巻	その十九
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	112	三の巻	その二十
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	115	三の巻	その二十一
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	120	外伝1の巻	—
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	123	四の巻	その一
くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞	129	四の巻	その二

- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その三 133
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その四 137
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その五 141
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その六 145
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その七 148
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その八 151
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その九 155
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その十 158
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その十一 163
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 外伝2 169
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の巻 その一 176
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の巻 その二 179
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の巻 その三

- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の巻 その四 182
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の巻 その五 185
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の巻 その六 189
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その一 192
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その二 200
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その三 204
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その四 207
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その五 211
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その六 215
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その七 219
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その八 223
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その九 227

- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その十 231
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その十一 236
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その十二 239
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その十三 243
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その十四 247
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その十五 250
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の巻 その十六 254
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その一 257
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その二 260
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その三 263
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その四 267
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その五 271
- くの一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その五 274

- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その六
277
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その七
280
- ワールドウィッチーズ異聞 くノ一の魔女 七の巻 その八 — 284
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その九
288
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その十
292
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その十一
295
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その十二
299
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その十三
302
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その十四
305
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その一
309
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二
313
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その三
317
- くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その四
321

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その五

324 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その六

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その七

327 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その八

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その九

331 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十一

334 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十二

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十三

338 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十四

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十五

342 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十六

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十七

346 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十八

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その十九

350 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二十

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二十一

356 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二十二

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二十三

372 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二十四

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二十五

376 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二十六

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二十七

379 くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の巻 その二十八

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 九の巻 その一

382

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 九の巻 その二

386

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 一の巻 その一

自分は、昼間だというのに薄暗い森の中を背負子とそれに乗せてる燃料缶を背負いながらカールスラント陸軍のIIII号戦闘脚で進んでいた。

ネウロイがいなければ、きっと鹿や猪、狼もいただろうこの黒い森を慎重に、ゆつくりと。

緑と土のおいが漂う。扶桑の森と違って、馴染みのない植生ではあるが、このあたりの可食なキノコや野草は一通り頭の中に入れてるので問題はないだろう。

そんな中、遠くから怪鳥の声が聞こえてきた。

おそらく、陸戦ネウロイが何体かそう遠くない場所をうろついているのだ。ここはまだ人類が取り戻していない、ネウロイの支配地域であるが故に、それは当然ということだろう。

自分は、固有魔法の《迷彩》を使いながらこの危険極まりない森を進んでいく。迷彩色のフィールドが発生し、電波をシャットアウトするのだ。長時間使えるが、難点はこれを使ってる間、無線通信が不可能になる。

報告によるとこの先、数キロの地点にカールスラント空軍のウィッチが一名墜落しているはずだ。なんでも、初陣を飾って数日の新米ウィッチで、偵察の途中でネウロイと交戦、撃破するも、混乱のうちに進路を誤りこの辺りに燃料切れで墜落したのだという。

通信は可能だったようで、アンテナ持ちのウィッチが彼女の居場所を割り出し、自分にそのウィッチの救出を依頼して来たのだ。

新米ウィッチは、目印に白いスカーフを隠れてる木の枝に縛りつけておくと言っていたらしい。

一応、自分は扶桑陸軍の遣欧部隊所属ではあるのだが、上の指示なしでは動くこともままならない。

そこをおして、と言われたあげくに自分の上官にもこちらから話を

通しておくから、とまで言われたのでは仕方ない。

ならばせめての条件として、III号戦闘脚と砲弾の用意をしてくれるなら、と言ったら一時間で揃えてもつてきたのだから大したものだ。

「そろそろ新米さんがいる地点なのだが……」

エンジンオイルの焼けたにおいがしないか、人間の声が聞こえないか、空軍のカールスラントグレーの制服が見えないか、そして目印の白いスカーフか木の枝に縛られていないか、五感を研ぎ澄ませてあたりをさぐる。

とはいえ、簡単に見つかるものでもない。

「さてはて、どこにいるやら」

戦闘脚を待機状態にしておりる。そして、手頃な近くの木にのぼつてあたりを見回した。巣がさほど遠くない場所にあるからか、木の間に大型の陸戦ネウロイが見え隠れしていた。

「くわばらくわばら、と……ん？」

視界に、白い何かが目に入った。普通の人間なら、まず気づかないような白い点だ。

おそらくあれだろう。巨大な木の枝に目標は結ばれていた。前方、およそ百メートルといったところだろう。

すると下に降りて陸戦ユニットをはくと、スカーフの木の下へむかう。

木の根元、ウロの中に救出対象は隠れていた。

「待たせたな。自分は扶桑陸軍少尉、初美あきらだ。貴君がジークリンデ・レムケ少尉か」

ジークリンデ少尉は、ウロの中で身を丸め眠っていた。体力温存のためだろう。いい選択だ。

「ん……ああ」

眠気まなこをこすって、純朴そうなウィッチは顔を上げた。

「おはよう。先ずは水とこいつだ」

首にかけていた水筒と、携帯していたポーチから携帯食料の乾パンとソーセージを一本取り出し、渡した。

そして、あたりを警戒する。

「ありがとう、初美少尉」

水を飲み、乾パンやソーセージを食べる音が聞こえる。

「貴君の教官や友人が自分に依頼をしてきたのだ。感謝はありがたいが、彼らにこそ感謝を捧げてほしい」

がさ、と前方で音が聞こえる。

蛇だ。

すぐさま、懐から棒手裏剣を取り出して、頭に向けて打つ。手裏剣はずどんと音を立てて蛇の頭を貫通し地面に縫い付けた。

蛇はうねるようにのたうつ。

「初美少尉、いまなにを」

「蛇がいたのでな」

直ぐにそいつを回収して口を一気に引き裂く。すると、皮と内臓が剥がれる。蛇は、こうすれば腑分けをする必要がなく、楽に食せる。

「蛇？」

「ああ、蛇は山の滋養。味も悪くない。味噌もあるから、味噌焼きなどがいいだろうな」

師匠曰く、山を歩くなら味噌は持ち歩け、だ。

「味噌？」

「扶桑の大豆の発酵食品だな。携帯の調味料として最適だ。クセはあるが、美味いぞ」

味を想像して、にや、と笑ってしまう。しかも、贅沢品としてなかなか市場に出回らない八丁味噌ときたものだからたまらない。こんなものを配給してくれるのだから、扶桑陸軍も嬉しいことをしてくれる。

「まずは、今はここから離れないとな」

近くにあったストライカーユニットには、最新式の時限信管の爆弾をしかけてネウロイに情報を渡さないようにした。ついでに、自分たちが脱出するための陽動にする。

そして、燃料が心もとなくなってきたIII号戦闘脚に補給し、燃料缶を放置されたストライカーユニットのそばに置いておく。

「ジークリンデ少尉、脱出するから自分の背負子に座ってくれ」
彼女は言われた通りしゃがんだ私の背負子に座る。

ひと一人なら、そんなに重くない。

自分は立ち上がると《迷彩》で隠れながら基地へと帰還するのだ
た。

とはいえ、簡単に帰還できるものでもない。行きは問題なくやって
これたが、それでもここに来るまで半日を費やしてきたのだ。帰りも
すんなりいくなどは考えられない。

勝つてなどいないが、兜の緒を締めるつもりで進み始めた。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 一の 巻 その二

五時間ほどうすんだだろうか。辺りは暗くなり、進むのが困難になる。ネウロイの巢からもそれなりに離れ、安全とはいわないまでも、ネウロイとの遭遇率が減少してるだろう地域までやってこれた。幸いにして、浅めとはいえ川がある。

自分達は、用心のため川を渡ったところにある河原で野営をして朝を待つことにした。

「今日はここで野営だ」

大きな岩の陰にⅠⅠⅠ号戦闘脚を中座させ、降りるとジークリンデ少尉に背負子から降りるよう促す。

「あと基地まで半日、か」

「ああ。まだあと半日だ。安心して居られぬ」

河原にある倒木から、薪に使えそうなものを拾い上げて、戦闘脚を置いてあるところまで持っていった。

ジツポライターで薪に火を起すと、ここまできると途中で、見つけて腑分けをしておいた蛇（加工が容易なタンパク源なので、優先して集めていた）を取り出した。

「ほ、本当に蛇、食べるの？」

多少の嫌悪感があるのだろうが、食べてもらわないことには体もたない。

「もう、携帯食料も心許ないからな。それに、いざという時に動けるようにしなければ、何かあった時に困る。現地調達できるものは現地調達だ」

木の枝に蛇を刺し、味噌を塗って火にかざす。

「初美少尉って、陸戦ウィッチなのよね。どうしてカールスラントの戦闘脚を履いてるの？」

「いや、空戦ウィッチだ。ただ、陸戦ウィッチの訓練も受けていたのでな。今回の任務では陸戦ユニットのほうが向いているから、カールス

ラントに要請した」

「空戦なのにどうして？」

びつくりしたのか、ジークリンデ少尉は素っ頓狂な声をあげた。空戦ウィッチは、基本的に陸戦ウィッチの訓練を受けることはない。

「単純な話だ。この手の任務では、陸戦ユニットのほうが向いてるからな。それだけの話だ」

「それだけって、陸戦ユニットも使うにはそれなりの訓練が必要じゃない」

「自分は忍びだからな。忍びは可能な限りなんでもこなさなければならぬ、というのが師匠の教えで、それに従い陸空両方のユニットを使えるよう訓練した」

「シノビ？」

「忍び、つまりは忍者だ。元々、女の忍者ーくノ一、というやつでな。本来なら欧州にいるはずではなかった。修業中にたまたまウィッチの力が発現して、欧州派遣部隊に選ばれたのだ」

「ニンジャ？ 少尉はニンジャだったの？」

ジークリンデ少尉は、興味津々といった感じで話に食いついてきた。

「あー、なにか勘違いしてそうだが、自分は別に巻物くわえて大蝦蟇を呼び出したりなどしないぞ。使い魔はムササビで蝦蟇なんかじゃない。それから、自分の主な任務は戦場の偵察だ。おかしな勘違いはせぬように」

欧州にきてから、何度もやり取りした会話だ。ニンジャというのはどうにも魅力的な単語らしい。侍然とした扶桑撫子はあちこちにいるから珍しくはないのだが、くノ一となると自分もとんと見かけた記憶がない。

ウィッチとなったくノ一は、それなりの人数がいるはずなのだが、自分のようにおおっぴらに動いているくノ一ウィッチが珍しい、ということなのだろう。

ぱち、ぱちと木の皮が爆ぜ始めて、同時に味噌の焼ける匂いが香ばしく嗅覚を直撃し、食欲をノックする。

「いい匂いがしてきた。香ばしくて、お腹すいてきちゃう」

きゆううう、と腹の虫の音が自分にも聞こえてきた。たしかに乾パンと水だけでは腹もすく。

「空腹が一番の調味料とも言っしな。そら、できたぞ」

先に焼けた方を、ジークリンデに渡す。

「ありがとう、少尉」

受け取って、にんまりと笑みを浮かべながら蛇にかぶりつく。噛みちぎって何度か口の中で咀嚼し、

「うわ……ちよつと変な匂いするけど、美味しいっ！」

そう感想を言うと、後は一心不乱に食べていく。墜落してから、ほぼ初めての調理した食事だ。粗末な味噌焼きでもきつとフルコースのメインディッシュのように感じてるのだろう。

「口にあつたようで何よりだ」

ジークリンデ少尉が一心不乱に食事してるのを見て、自分も空きつ腹に蛇の肉を詰め込んでいく。味を楽しんでいたが、まだネウロイの支配地域だ。警戒に意識を割いておく必要があるだろう。

そうこうしてるうちに、少尉があれよあれよと蛇を三尾平らげ、自分はただただ彼女の健啖ぶりに瞠目していると、遠くから木が折れる音が聞こえてきた。

「少尉」

声をかけるときすがはカールスラント軍人か。串がわりの木の枝を投げ捨てて焚き火に土を被せ、火を消した。

「残弾は少ないけど、MP43がある」

「了解した。が、少尉はストライカーユニットを履いて、待機してくれ。魔導砲の撃ち方ぐらいはわかるだろう」

「え？」

「自分には、固有魔法の《迷彩》がある。いつも、これで接近し、扶桑刀と手裏剣で撃破してきた。三号戦闘脚を借り受けたのは、少尉の身を守るためだ」

「いや、初美少尉。いくらなんでも……」

「大丈夫だ。以前の哨戒任務で、この辺りにはコア持ちの陸戦ネウロ

イの出現率は低いことが判明している。コアがないなら、ユニットなどなくてもどうということはない」

「そうじゃなくて、逃げたほうがいいんじゃないの?」

「いや、逃げたところで発見されて追いつかれるのがオチだ。それなら撃破したほうがいい。それから、もし戻らないことがあるなら、少尉はなんとかこのユニットで逃げてほしい」

「少尉!」

そう告げると、彼女の返答を待たず固有魔法を発動、頭上の木の枝へと跳躍した。

「さてはて。うまく嘘をついたつもりだったが……」

木の上に立つと、月明かりを頼りに音が聞こえた方を見る。

めき、と音が聞こえて、鳥の鳴き声も森に響く。

縦長の桃岳に蜘蛛の脚をつけたような姿のネウロイが一瞬見てとれる。コア持ちだ。

「やはり嘘つきにはバチが当たるわけだな」

資料によると、あのネウロイのコアは頭の中にある。

「とはいえ、自分の任務は少尉を救い出すこと。オン・マリシエイ・ソワカー!」

木の枝から木の枝へと飛び移り、ネウロイへと近づいていく。

「あのネウロイのコアは胴の中心……いざっ!」

飛び込み、ネウロイの胴を切り裂く!

あやまたず、コアを露出させた。

反対側の木の幹に着地し、返す刀で見えたコアに切りつけー

「くっ!」

熱戦が一条、自分めがけて飛んでくる。シールドをはり難を逃れるが、これで簡単には終わらなくなったわけだ。さてどうする、と刀を構えていると。

ドン! と魔導砲の音が響いて、砲弾がコアを一撃の元に撃ち抜いた。バリン、とひび割れ、千々に砕けていくネウロイ。

「ジークリンデ少尉か!」

《迷彩》を解除すると無線が復帰し、同時に少尉の怒鳴り声が飛んでく

る。

『少尉！ 初美少尉！ 無茶すぎです！』

なんとも耳が痛い。

「扶桑の魔女は伝統的に無茶が好きでな」

『噂には聞いていましたか……まさか本当にこんなだとは』

「これだから、扶桑のウィッチは、か？」

『貴女が言っているいい台詞ではありません！ はあ……報告書になんて書けば……』

「起きたありのままを書けばいい。二人で陸戦ネウロイを共同撃破しました、とな」

結局、その後はネウロイに襲われるでもなく、無事、ジークリンデ少尉を基地まで運ぶことができた。

道中、彼女の口が開くたびに出てくる言葉は自分への説教で、延々それを聞かされた耳にはタコができそうになった。

汲めども尽きぬ小言かな、といったところだろうか。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その一

「高高度からのネウロイ支配地域の偵察、ですか」

自分が、扶桑陸軍欧州派遣部隊本部無線室にて、所属部隊である東部第33部隊の川股少将より直接指令をうけたのは、朝の鍛錬を終えて風呂に入ろうかというところだった。

『場所はガリアのセダン。501の活躍によりガリアは解放されたが、ネウロイの残存勢力はいまだ侮れない数が存在する。つまり、少尉の任務はそれらの調査とブラウシュテルマーの確認、並びに可能なブラウシュテルマーの破壊になるわけだ。これは西部方面統合軍総司令部からの要請でもある』

「その作戦、くノ一少尉のウィッチ一人に任せるには随分と責任が重大ではありませんか、少将殿。それにブラウシュテルマーの破壊は、自分には不可能です」

調査はともかく、ブラウシュテルマーの破壊までは無理だ。これは爆撃ウィッチの本分であり、偵察を主たる任務とする自分にやらせるような任務ではない。

おまけにその場所がセダンときた。

第506統合戦闘航空団の基地の候補地じゃないか。確かに自分は、欧州の政治情勢の調査の為に派遣された部分はあるが、それは枝葉の部分であって、木の幹の様子を探れと言われた覚えはない。

契約外もいいところだ。

『耳が早いな』

「感心しないで頂きたいであります。事はくノ一人でどうにかなる程単純ではありません」

『破壊は不可能かね』

言外に、506に探りを入れるのは不可能か、と言っているのだ。

「少将、わかってて言ってるのではありませんか？」

『いやまあ、そうなんだが……』

聞こえてくる声色は、明らかにしよげていた。

黒縁メガネのちよび髭が肩を落としている様を思うと、なにやらこちらが悪いことをした気分になってくる。

せめて、ブラウシユテルマーの破壊だけでも請け負う事としよう。「了解しました、川股少将。本作戰は、初見あきら少尉が受命するものであります。ただし、こちらからも条件があります」

『やってくれるか！ で、条件とはなんだね』

「カールスラントのある基地から、J u 87、スツーカーの貸し出しを依頼したくあります。あの基地なら、無くてもどこからかかっぱらって持つてくるはずであります」

自分のセリフを聞いた時、無線の向こうから喉の奥の笑い声が聞こえてきた気がする。あのちよび髭、自分の都合のいいように解釈したか。

「こちらが、スツーカーとその受領書になります」

カールスラント空軍の輸送兵が、書類をこちらに渡しながら継げた。

「貴重なユニット、お貸し頂き感謝致します」

自分はそれにサインし、手渡す。

カールスラント空軍のトラックに乗せられたスツーカーが届いたのは、川股少将とのやりとりがあつてから三日たった日の昼頃であつた。

そもそも爆撃隊がないあの基地に、スツーカーを融通させるのは相当な無理難題だったらしい。

自分のところに、スツーカーの手配は無理だ、と直接電話を入れてきたぐらいだ。

ところが、自分が西部方面統合軍司令部よりうけた作戦内容を聞くと、すぐに手のひらを返し、二つ返事で引き受けてきた。

どうやらあの基地の上層部は、506に関する情報に近いところにいるらしい。

「それから、こちらはジークリンデ少尉からのプレゼントです」

菓子の小箱を差し出してくる。

はて。

既に彼女からは御礼の銃をもらったのだが、と首を傾げながら受け取る。

「では、作戦の成功をお祈りしております」

「ご厚意は無駄に致しません」

引き取りが終わると、すぐに整備兵がやってきて荷下ろしと整備を開始する。

さてはて。

ジークリンデからのプレゼントか。

鬼が出るか蛇が出るか。くわばらくわばら。

自分の部屋に戻り、小箱を開封するとカールスラント製のクッキーがあつた。高級品ではないが、そこそこに名の知れたところのもので、一度食べてみたいと思っていたものだ。

そして、その小箱の蓋の裏には、折り畳まれたペーパーが一枚貼り付けられていた。

「これは……」

それを手に取り広げると、それには506についての人選が現在行われていること、ただし、爵位持ちのウィッチのみとなっていて人選が難航していることが書かれていた。

具体的な人名はあげられていなかったが、ホルダー持ちのウィッチなどたかが知れている。それぐらいは自力で調べろ、ということだろうか。

「それにしても……どういうことだこれは」

足の引つ張り合いがおきていて、そこに扶桑を入れて力を削ぐようとしているということか？

それに、こうなると今回の作戦も途端にきな臭くなる。

おまけに、統合総司令部内での派閥争いはもちろん、戦後の欧州における主導権にも関わってくるだろう。

本当にくノ一人に任せる任務じゃなくなってきたな。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その二

自分は、スツーカーの整備が終わったことを整備兵からの連絡で知ると、すぐさま整備室にむかった。そして、整備兵からいくつかの注意事項を受け、テスト飛行を兼ねて何度か急降下爆撃のマニューバの再確認をした。

背面飛行から急降下、爆弾を投下しつつ水平飛行に移り空域を離れる、一連のマニューバだ。

スツーカーは鈍重なユニットと聞いていたが、噂以上に遅く、重い代物だった。これで空戦ネウロイの追撃を振り切るだの被撃墜率が2%以下だの、不可能としか思えないが現実に行っているウィッチがいるのだから言葉が出ない。

ともかく、そうやって訓練飛行を繰り返した後整備兵にメンテナンスを依頼すると、作戦要項をまとめて基地司令官へ提出をするために、司令の執務室に向かった。

「で、あきらは本気でこの作戦を単独で遂行するつもり?」

司令は、本作戰概要を一読すると、机の上に放り投げて、ため息とともにそう言った。普段から険しい顔つきだが、この作戦要項を読んだとき、それはさらにきつくなった。

名を坂井光子といい、階級は少佐。なんでも足柄山の魔女で有名な坂田金時の子孫に当たるといふ。

遣欧部隊の一員として活躍したが、二十歳を迎える直前に撃墜され、そのまま退役。前線基地に残り、主計科へ転属。ウィッチ達の精神面でのサポートなどでも活躍し、基地司令に着くと同時に少佐へと昇進した。

「それが自分に与えられた役割です」

「それはわかるのだけど、先のカールスラントのウィッチ救出作戦といい、あきらは単独での作戦行動が多すぎない? 部隊の所属は違うけど、あきらはこの基地の一員。少しはこの基地のウィッチを頼って

も構わないのに」

おそらく、すでに基地のウィッチ達には、何かあれば自分に協力するようお願いしているのだろう。そういう根回しが本当にうまいのがこの人だ。

「光子さん、自分の固有魔法は、単独でなければ意味がないものです。それに、今回の任務には、506統合戦闘航空団に関する情報の調査も含まれています。余計な情報に触れて、何かの問題に巻き込まれるかもしれません。申し出は大変ありがたいのですが……」

「まったく、不便なものね。ねえ、あきら。本作戦が終了したら、この基地本隊に転属してはどう？ 所属のウィッチ達も、歓迎すると思う。武術の師範が正式に着任してくれば、みんなも喜ぶんだけど」
「個人だからできることがあって、その為に自分は今ノ一をやっています。申し出は大変ありがたいんですが」

それを聞いて、坂井少佐はため息をつき、
「残念ね。でも、気が変わったらいつでも言っちゃようだい。歓迎するから」

少し寂しそうな微笑みを浮かべる。

「了解しました」

「では、初美少尉」

椅子から立ち上がり、基地司令の顔になる。

「はっ！」

「川股少将に代わり、本作戦を受理する。作戦開始時刻は明日一三〇〇時とする。速やかに作戦準備に当たれ」

「了解しました」

自分は、自室に戻ると作戦に必要なものを、扶桑から持ち込んだ忍び道具から見繕っていた。

ちなみに、作戦は二段階よりなっている。

正確には、二つに分けられている、だろうか。

最初は、セダン周辺並びにセダン以东の高高度からの調査と爆撃。

その後、バ・ド・カレー周辺基地への転属、調査活動へと移る算段だ。

さしあたっては、501の活躍も華やかなピエレッツァアンリエツト・クロステルマン中尉と接触するのが早いだろう。

彼女が506の隊長、あるいは戦闘隊長に選ばれる筆頭候補と考えられる。

最初の統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズに所属し、ネウロイの巢の破壊に多大なる貢献をしたという彼女なら、506の隊長をつとめるための箔も十分だし、広告塔としても相応の働きをしてくれる。

今は、領地の復興に忙しいはずだが、場合によっては彼女がその役目を引き受けることも考えられる。

ともかく、現状彼女は復興に忙しいのだから、ウィッチなら誰でもいいから手を貸して欲しいはずだ。そこにつけ入れれば、潜入、調査は容易い。

しかし、謎なのは、なぜ506について探りを入れると依頼してきたかだ。

扶桑皇国は、すでにその情報を掴んでいるはずだ。

統合戦闘航空団というのは世界各国のウィッチが必要だ。各国政府に協力を要請するため、つまびらかにならざるを得ない。

なのに、自分にこんな情報を探れということとは、506周りで欧州でなにが起きているのかわからない、情報が届いていないということだ。

とするならば、西部方面統合軍総司令部、あるいは欧州全体の中になにかしらの思惑が働いているのは確実に言える。

まさか、あのちよび髭はこの思惑まで探れと言っているのか？ いやいや、そんな馬鹿な事はないだろう。

自分は、嫌な予感を振り払うように首をふると、まとめた忍び道具を背負い袋に入れて、部屋を出るのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その三

軍用リリーとMP43を肩から下げ、腰に小太刀を携えたと、発進促進装置におさめられたスツーカーをはいた。使い魔であるムササビの尻尾と耳が出てきて、周囲が魔法陣からでる青い光に包まれている。

最初は高高度からの周辺調査。航空写真で何があるのか調査を行うが、それは解析担当に任せて、自分はその後、発見したブラウシユテルマーの爆撃。

ただし、あまりに数が多いなら遠距離からの長距離砲の集中砲火が行なわれる事になる。

その偵察へとこれから向かうのだが、目的地となるセダンはいささか遠く、何度か基地を経由していく。

野太いスツーカーのエンジン音が格納庫に響き、その振動が体をビリビリと震わせる。

「オン・マリシエイ・ソワカ」

口の中でそう呟くと、装置からストライカーユニットを解き放とうとした瞬間、格納庫に何人かのウィッチがやってきた。

エンジンを停止させる。

「これからセダンの調査に向かうんですね、初美少尉」

糸目でほっそりとした女の子が入ってきた。大川真子といい、階級は自分と同じ少尉。大物食いとして腕を鳴らすウィッチで、鍾馗を駆り、カールスラントより輸入したフリーガーハマーで大型ネウロイを落としてきた。

物腰が柔らかいのに、その実誰よりも敢闘精神に溢れたウィッチだ。

「坂井、少佐から、話は、聞き、ました」

はあ、はあ、と肩で息をしている濡れたボブカット（海軍では、軍神の影響からかポニーテールが多く見られるのに対し、陸軍では退役

した江藤さんの影響でこの髪型が多く見られる)が佐々勇准尉。

大川少尉と同じく鍾馗で大物食いを得意とするウィッチだが、戦闘スタイルは正反対で、ズームアンドダイブで果敢に接近戦を挑み、扶桑刀で断ち切るものだ。欧州に来てまだ日が浅いが腕は確かで、扶桑でも夜襲に来た大型ネウロイを撃墜してきたらしい。

今は確か定期偵察の後で、シャワーを浴びに行っていたはずだったのだが、その様子だと慌ててきたのだろう。

他にも4名の空戦ウィッチがこの基地に籍を置いているが、偵察中が2名、夜間ウィッチが2名でこちらには来られない。

しかし、どうしてこんなタイミングに?と思うも、すぐに坂井少佐の差し金と思いついた。あの人は、あんなきつい顔つきの癖して、こういう事で手を回すのは、本当にうまいし早い。

「坂井少佐にきいたな? そうだ。これからセダンの偵察だ。撮影したフィルムは担当に任せて、自分はブラウシユテルマーの破壊に入る。そして本作戦終了後、しばらく後方の基地に転属になる予定だ」
「急な転任ですね」

大川少尉が、一言痛いところを突いてくる。

「まあ、西部方面がらみでな。これ以上は守秘義務で言えんのだ。すまん」

「さびしいです、初美少尉」

と、佐々准尉。

ありがたいことに、彼女は特に自分を慕ってくれている。

「なにも、これつきりでここをおさらばするわけじゃない。今回の任務絡みでの転属だ。任務が完了次第、また戻ってくるさ。ではな」

スツーカーのエンジンを始動し、発進準備を整える。

「こちら初美あきら少尉。坂井少佐、これより発進する」

インカムで坂井司令に連絡。

『了解した。健闘と作戦の成功を祈る』

「感謝します。初美あきら、出る!」

ばしん!と音を立てて、ユニットを抑えていたストッパーが外れ、一気に加速する。格納庫から飛び出すと同時にふわりと空中へと舞

上がった。

自分は、幾度か基地に立ち寄り燃料補給を受けて、セダンにほど近いル・ジエンヌの最前線基地までやってきた。

なにしろスツーカーは足が短い。隼ならひとつ飛びの距離も、スツーカーでは何度も補給しなければならない。

航続距離が千キロにみたないというのだから驚きだ。隼が鳥とすなるなら、スツーカーは蚤みたいなものだ。飛行ではなく、ぴんぴんと跳ねてるだけでしかない。

それでも扶桑陸軍の基地まで持つて来させたのは、ここまでの飛行で、スツーカーの癖を完全に掴んでおきたかったからだ。

おかげで熟達したとはいわないが、基地でマニューバの訓練をやった時よりはスムーズにスツーカーを操れるようになった。

「こちら扶桑陸軍東部第33部隊所属、初耳あきら少尉。ル・ジエンヌ基地、着陸の許可をこう」

『こちらル・ジエンヌ。西部方面統合軍総司令部より報告は受けている。ル・ジエンヌへようこそ、初美少尉。当基地は貴君を歓迎する』
「感謝する。以上」

上空を一回りして基地の外観を上空より軽く確認すると、滑るように着陸した。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その四

「いきなり押しかけてすまん」

自分はスツーカーを発進促進装置におさめ、ユニットを脱ぐと駆け寄ってきたカールスラントの整備兵に声をかける。

「いえ、お構いなく。忍者が使ったユニットの整備ができる機会なんて、めったにありませんから。それに、扶桑の整備兵の腕前をおがませていただきたいですし」

整備兵の一人がそう答えて、一気に整備室へと移動していく。

この基地の整備兵は、今まで見てきた整備兵の中でも、特に士気が高いようだ。

もちろん、派遣基地の整備兵も士気は高いのだが、あちらがゆつくり確実に仕事をしていくのに対して、こちらは最前線だからだろうか、素早く仕上げるという感じだ。

「了解した。よろしく頼む」

そうして、格納庫の壁にあった案内図から基地の司令室の位置を確認する。

自分が、当基地に来たことはすでに司令にまで伝わっているはずだ。

カールスラントやガリアの軍人が往来する廊下を歩み、司令室までむかう。そしてノックを四回。

「入りましたえ」

中から妙齢の女性の声が聞こえてきた。

さて、確かこの司令はもうじき退役になる男性の将官と聞いたことがあるのだが、これはどういうことか。

「扶桑陸軍少尉、初美あきら、はいります！」

がちやり、大きなドアノブの音を響かせて入室する。重々しい音だ。

中に入り、ドアを閉めたその瞬間である。

「ようこそ、初美少尉。ああ、いやいや、いいなおそうか。中野学校、
武術師範にして、戸隠流忍術時期宗家、初美あきらくん」

基地司令とおぼしき人物は、窓に向かい自分に背を向けながら、いきなり耳を疑うようなことを言ってきた。

思わず、脇差の柄に手をかける。

「いやあ、凄いな。殺気で喉がかき切れそうだな。まいった、降参だ」
その女性将官——否、女性士官は、両手を上げてこちらに振り向いた。

見たことがある。

いや、忘れてはいけない顔だ。

オテイーリア・スコルツェニー中佐。通称、《欧州一危険な
元魔女》。

ヒスパニア内乱の時にはすでに上がりを迎えていたため、悲願だった航空ウィッチにはなれなかったが、その才覚と元とはいえウィッチとしての身体能力を認められ、コマンド部隊隊長として皇帝から直々に選ばれた傑物だ。

幾度もネウロイの裏をかき、人類に勝利をもたらしてきた。配下の陸戦ウィッチ隊も優秀で、彼女の立案する困難な作戦を達成するだけの統率力と能力がある。

左頬に走る刃物傷は、大学在籍中にフェンシングの試合で傷ついたものだ。その逸話がまた振るっていて、十人目を相手にした時についてたという。すなわち、彼女は相応の武闘派でもある。

「そう身構えないでくれないか。ともにネウロイを駆逐し、世界を存亡の危機から救おうとするウィッチじゃないか。ああ、私はエクスウィッチか」

大きさに手を広げながら自分に訴えかける。軽薄なことこの上ないが、本質はそこにはない。

「取り調べなら、口を割るつもりはありませんが」

「んん、初美くんはどうやら自分が諜報活動の件で呼ばれたと勘違いしているようだけど、違うよ、違う違う。キミが調べていることは、現地にいなければわからないような欧州の政情、経済、市場の調査だろ

う。その程度でキミを糾弾なんてしないよ。それぐらいなら、どの国もやっていることだ」

自分は沈黙をもって答えた。

「仕方ない、本題といこうか。今回のセダン周辺地域の調査に關してだが、西部方面統合軍総司令部からの依頼を受けていただき、感謝している。初美君がこの作戦に起用されたのも、実のところカールスラントのゴリ押しがあつたからなんだがね」

「は……？」

自分は、中佐のいきなりのセリフに、ただただあつけにとられるしかなかつた。

「はつきり言わせてもらおう、初美くん。今回の任務は、M I 6との化かし合いになる」

「……自分が、一人で、でありますか？」

「そういうことになる。なるが、まあ、問題ないだろうと我々は考えている。というのも、カールスラントとしては、初美くんに時間稼ぎをしてほしいだけなのだ」

「時間稼ぎ。カールスラントがなにか仕掛けを打つための時間を作つて欲しいということではありませんか」

「そういうことだ。紳士面した二枚舌にガリアの処遇を任せては、戦後、欧州が混乱に満ちるのは必然だからね。ノイエ・カールスラントとしては、それでは困る。」

我が皇帝陛下が欧州の祖国に戻ったとき、ヨーロッパが二枚舌にいろいろなされた状態では、きやつらの言いなりになりかねない。それだけはなんとしても避ける必要がある」

「それはわかるのですが……」

「もちろん、タダとは言わないよ。この作戦がうまくいった暁には、カールスラントは扶桑のウィッチを一人、506に招き入れるよう働きかけるつもりだ。その事は、既に非公式にだが扶桑皇国政府に打電している。扶桑は、すでにウィッチの選定作業に当たっていることだろう」

あのちよび髭少将め。

これではいやもおうもないではないか。

いいように詰められた負け将棋をうたされたようなもので、気分が悪い。

「了解いたしました、スコルツェニー中佐。それで、具体的にはどうすればよろしいのでしょうか」

「初美くんが提出した作戦要綱に従い、セダンの状況をクリアしたのち、パ・ド・カレーに向かってペリーヌ・クロステルマンの復興事業に協力するだけでいい。その時は、初美くんの騎士の称号が役にたつだろう」

「一応は。ただ、あまりいい印象は持っていないものと思われれます」

そう答えて、はあ、とため息をついてしまう。

「何か気になることもあるのかい？」

「いえ……その、正直、今の自分にこの任務を務めるのは難しいのは、と思いますはじめています」

本音を打ち明ける。

確かに自分なくノ一だしスパイとしての教育もうけた。戸隠流忍術の時期宗家でもある。それでもできないことは多々あるのだ。くわえて、十八にも満たない。そんな小娘がやっていい任務ではない。「そうかい？ 私には立派に職務を果たしているように見えるけどね。期待しているよ、初美くん」

「出来る限り、期待には応えようと思っております。では、失礼いたします」

そう言つて扶桑陸軍式の敬礼すると、自分は司令室を後にしたのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その五

ル・ジエンヌという基地は、戦時基地として緊急で作られたため、実のところそれほど大きくはない。

ストライカーユニットの補給基地といった意味合いが強く、陸戦、空戦問わずストライカーユニットがまるでアリのかハチのように出入りしているような基地だ。

つまり、ここはまだ破壊された巢の影響が色濃く残っている場所なのだ、ここまでネウロイ一機も見つけずにやってこれたのは、案外運が良かったのかもしれない。

そんな中、自分は一日の休暇で溜まっていた疲れを取り、ル・ジエンヌ基地より飛び立とうとしていた。今日一日で可能な限り地上の様子を写真に移し、一日休暇を入れて爆撃へと向かうことになっている。

いくら自分の固有魔法である《迷彩》が、魔力の消耗が低いとはいえ、セダン上空にいる間はずっと使えばなしなのだからさすがに持たない。

さらにブラウシユテルマーの爆撃も行わなければならないというのだから、休暇をいれなければ身がもたない。

「管制室。こちら初美少尉。只今よりセダン周辺の調査に向かう。発信許可を送られたし」

カメラを肩から下げ、腰にはMP43を携えた自分は、スツーカーを履き発進許可を求めた。

『こちら管制室。了解した。五分後の発進だ。準備されたし』
「こちら初美少尉。了解した」

肩から下げた軍用リリーや交換用フィルムを収めたポーチなどを再確認し、発進準備を進めていく。

『初美少尉、発進されたし』

「了解した。発進する。オン、マリシエイ・ソワカ」

摩利支天の真言を唱え、発進促成装置のストッパーを外すと、スツーカーは装置から解放される。庫内から出るとゆつたりとした速度で空へと上がっていく。

ネウロイの巣がなくなり、人間の支配圏が大幅に広がってきたとはいえども、巣が破壊されてからまだ一ヶ月とたっていない。

だから、まだ陸戦、空戦問わずにネウロイが潜んでいることに変わりはなく、偵察目標地点はさらに危険だ。

ル・ジエンヌ基地上空を過ぎると、

「初美少尉より管制室。これより固有魔法《迷彩》を使用する。無線の使用が不可能になるため、偵察終了まで連絡は取れない。それから、五分以内に基地上空を離脱するが、それまでは注意されたし」

『了解した』

と、一応連絡を入れて《迷彩》を使用する。

うん……と、小さな空気のうちなりがおきる。これで、出力にもよるが電波の類は結界がほぼ吸収することになり、体が迷彩色に覆われる。エンジン音も多少だが抑えられるはずだ。

確認のため無線で基地を呼び出してみるが、電波障害の雑音が聞こえるだけだ。

「よし」

頷くと、スツーカーを五千メートルまで上昇させ、予定空域まで到達するととりあえず周囲を確認した。目視する限り、周囲にネウロイは確認できない。

そうしてカメラを持ち出した。一応中判なので、それなりの拡大にも耐えられるだろう。

高度を保ったまま撮影を続けていき、一通り撮影を終了したら基地へと戻る。

途中、何度かネウロイを視認したが、自分に気づくことはなく、時々あの耳障りな声をあげながらあたりを周回しているだけだった。

もちろん自分から手を出すことはせず、懐中時計を取り出して時間を確認し、場所を含めて記憶すると、報告書にまとめるために写真を一枚撮って後にする。

ともかく、これを何度か繰り返した。
結局、自分は陽がかげる寸前まで粘って偵察を終了したのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その六

「初美少尉、偵察任務お疲れ様です！」

自分が基地に戻ると、まだ軍に入隊して間もないだろう、初々しさの残る一等兵がやってきてカールスラント式の敬礼をしてきた。

どうやら、フィルム受け渡しを誰が行うかくじ引きか何かで決めるらしく、何度かフィルムの補充のために戻ってきたが、その度に受け渡しの兵士は違っていった。

「ご苦労様です。これが最後の空撮になります」

ポーチから、撮影したフィルムを出して手渡す。新人君を緊張させないよう、つとめて柔らかい言葉遣いで話した。

以前、新人の兵士にいつも通りの対応をしたとき、怖がられた経験があるからだ。特に怒っていたわけでもなくいつも通りだったのだが、普通の人には怒っているように聞こえたらしい。

「はい、確かに受領いたしました！」

手渡したフィルムは、これから大至急で現像され、オティーリアが連れてきたカールスラント軍情報部アプヴェーアの分析官が、写真を精査するという。

オティーリアいわく、その結果によつて、自分が単騎で爆撃に行くか、スツーカー大隊を呼ぶかが決まってくるそうだ。

「は、初美少尉！」

「なに？」

「お願いがあるのですが、よろしいでしょうか」

妙に決死の覚悟を感じさせる顔で訴えてくる。

「すぐにできることなら構わないけど」

さすがにそこまでの覚悟を無碍にはできない。

「じゃ、写真を一緒に一緒に願えないでしょうか！」

そのセリフと同時に、あたりにいた兵士達もざわ、とどよめいた。

同時に、ああ、そういうことかと納得する。

ちよつと考えて、

「今はもう暗くなってるから露出足りないし、わざわざフラッシュをたくのももつたいない。だから、明日の朝なら構わないけど」

「は、はい！かまいません！ありがとうございますー！」

「ああ、お名前は？」

「は、はい！ザシャであります！」

「では、ザシャ一等兵、明日〇九〇〇時に中庭で」

「感謝致します！初美少尉！」

「うん。それじゃ、フィルム、よろしくね？」

「……はい！」

ザシャ一等兵は、一拍おいて返事をする。

あ、こいつ自分がなんのために来たのか忘れてたな。

「ん、朝か」

備え付けの目覚まし時計が自分を起こしたのは、朝の七時のことだった。

結局昨日は、長時間飛行しつづけた疲労と魔力を使い果たしていたことが重なり、シャワーを浴びると早々にベッドへと倒れこんでいた。

いつ眠りに入ったのかもわからない疲れっぷりだった。

幸い、写真の精査には数日の時間がかかるとのことで、その間は休養に充てられる。一晩寝れば魔力はそれなりに快復するが、さすがに体力はそうもいかない。十全の状態に戻して、爆撃にのぞみたかった。

ともかく自分は、大きく伸びをすると洗面所に向かつて顔を洗い歯を磨いて朝食をとり、新聞を眺めて情報収集をすると、時間は九時前になっていて、自分は木刀片手に急ぎ気味で中庭にでていた。

それはもちろん、ザシャ一等兵との約束を守るためだ。

しかし、ある程度予想していたが、さすがにこれには言葉を失った。

「自分は、ザシャ一等兵と写真を撮ると約束はしたが、貴君らはなんだね？」

中庭には、十名ほどの新兵が集まっていたのだ。

「噂のくノ一ウィッチである初美少尉との記念撮影に、ザシヤ一人だけとは無体な話です！」

一人が声をあげ、つづいてそうだそうだ、とザシヤを除く新兵がそれに続いた。

いや、自分は貴君らの上官なのだが、そこは分かっているのかね、まったく。

やれやれとあきれながら、

「はあ。わかったわかった。全員ならべ。これ一枚きりだぞ？」

そう言つて、自分を中心にして記念写真を撮らされたのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その七

記念撮影も終わり、新人達が中庭をはなれると、自分は持つて来ていた木刀を片手に、一人稽古を始めた。

こここのところ任務続きで錆付いていた腕をみがこうというわけだ。時間をかけて、ゆっくり幾つか基本の型稽古をなぞっていくと、汗がじつとりとにじんでくる。

ストライカーユニットで飛行したり戦闘では流すことのない、稽古の汗だ。自分はこの汗を書くのが実に好ましい。

そうこうしていると、手すきのカールスラントの兵士がばらばらに集まり始め、自分の稽古の様子を物珍しげに見物しだした。ここ欧州では、よくあることだ。

「見学は構わんが邪魔はするなよ。上官命令だ」

そう言つて見物人達の口を黙らせると、あいつらは弟子だと自分に言い聞かせ、木刀を振るうことに専心しようとする。

だが、どうやら今日はそういう日ではないらしい。

あいつは誰だなんだと、観衆たちが声をあげはじめたのだ。

その原因が何かと辺りを視線だけで確認すると、視界のすみにはツヴァイハンダーを片手に携えた女性が兵舎からやってきたのが見えた。軍装を見るに、カールスラント空軍所属か。

あれが原因か、と改めて視線を移すと、その女性の素肌が見えるあちこちに細かな傷跡があるのが確認できた。容姿は、端正な中にも野性味を感じさせるしなやかなケモノのようだ。

髪はダークグレーで、襟足を短く切りそろえている。

持つていた剣のガードの中央に、一級鉄十字章が飾られているのも視認できた。

そして象徴的とも言えるその剣を見て、彼女が何者かを思い出した。

アントーニア・レッシユ少尉だ。

カールスラントの古流剣術を学び、果敢な接近戦でネウロイを屠ってきた空戦ウィッチで、幾度も戦傷を負いながらも最前線を渡り歩いてきたという。

「アントーニア・レッシユ少尉。何か用かな。自分はただいま稽古中なのだが」

自分は稽古の手を止めて、今にも飛びかからんとする彼女の機先を制してそう告げた。すでに彼女は、自分を一刀の元に斬り伏せれる間合いに足を踏み入れていた。

「私の名前を知ってるとは光栄ね、くノ一の魔女。貴女がこの基地に來ていると聞いて、取るものもとりあえずきたってわけ。用件は、この剣を見れば言わなくてもわかるでしょう」

実に楽しい声だ。

「一手ご所望、と」

レッシユ少尉に向き直る。木刀を、右肩に乗せて、

「無用な体力の消耗は避けたいのだが、そういうわけにはいかないだろうな」

「ええ。初美あきら少尉は私からの勝負から逃げたと、喧伝させていただくわ」

「そこまで脅されてはな。女王陛下に戴いた騎士の称号も泣くだろう」

騎士の叙勲など受けねばよかったと軽い後悔が頭をよぎる。

「では」

レッシユ少尉は左半身になり剣を肩に預けるように乗せた。

「いざ」

それを見て、こちらも左半身になり、正眼に構える。

す、と流れるように剣が振り下ろされ、自分は極端な左半身になって木刀をレッシユ少尉の剣に合わせ、擦り上げる。

彼女の持つ剣が扶桑刀なら、そのまま自分の右に流れていき、頭をかち割って終わるところだったが、そうはいかなかった。

そのまま彼女は自分に身を寄せ、ガードを木刀に押し付け、そのまま擦り上がり上段になろうとするのを防いでしまう。

同時に、木刀と剣の接点を軸として彼女はさらに踏み込み、剣で自分の首を狩りにくる。

「ぞわ、と背中の中産毛が総毛立つ。」

反射的に身をかがめ、こちらにも接点を軸にして木刀を肩に担ぎ、地面を蹴ってレッシユを跳ね飛ばし、一旦距離を取る。

見物人達も、これにはさすがにざわめいた。

「肝が冷えたよ」

「凄いわね、ガードがないその棒であれをかわせるなんて」

「物心ついた頃からこいつを握ってきた。今じゃ手足の如くだ。では、今度はこちらから参ろうか」

木刀を脇構えに、ぐつと体を落とし頭の位置を腰のあたりにまで下げた。

「貴女、そんな姿勢で動けるの？」

言葉は小馬鹿にしているが、声色には緊張の色が濃い。

レッシユ少尉は剣を頭上に掲げ、切っ先を自分に向ける構えになる。不用意に近づいたところを串刺しにする腹つもりなのだろうが、果たしてそううまくいくものか。

「何、心配無用。走るより早く歩いてみせるよ」

なにぶんこの技は、師匠にも秘密の自分の工夫だ。ここが扶桑であつたら絶対に使わないだろう。使うときは相手を殺すか半殺す時だ。

脱力すると同時に、するすると足音立てずに歩み寄る。

「！」

まさか、本当に走るより早く歩いてくるとは思わなかったのだろう。慌てて剣を突き立ててくるが遅い。

剣先が自分の背中を掠め、空振りしそうになる。が、またもやガードをうまく使ってきた。

ガードを自分の左肩にかけ、歩みをワンテンポ遅らせてきたのだ。

「くっー」

左肩を鈍痛が襲い、足が止まりそうになる。

この技は、本来なら懐に入って柄で腹をつき、怯んだところを逆風

で股間から切り上げる技なのだが、これではそれもかなわない。

止むを得ず、不十分な距離だがそのまま切り上げようとする。

木刀は体に隠れて見えない。これをかわすことはできぬーはずだった。

レッシユ少尉は、自分の歩みをとめたときの衝撃を体で吸収せず、そのまま後ろに転がって距離をとったのだ。やはり初手で体の動きを封じられなかったのが失敗の原因か。

切り上げた木刀は相手を失い空を切る。

ふう、と息をついて立ち上がると、

「これは……扶桑でこれを見た輩は、全て玉を一つ潰されたものだが、どうしようか」

「貴女！私を殺す気だったでしょ！」

怒りの声を上げるレッシユ少尉。

「師匠にも見せていない、自分独自の秘中の秘だからな。使う以上は殺す気でいくさ。それにお主とて、自分の首を落としにきただろう。お互い様だ。」

で、まだやるか？」

「いえ、もういいわ。もう満足。こんな経験なんて金輪際真つ平御免よ。死ぬより怖いわ」

自分に斬られたときのことでも想像したのだろうか。ぶるつと背筋を震わせた。

「だろいな。自分も、あれなら素直に首を落としてくれた方がまだマシだ」

「そう。じゃあ次からはその首を落とすわね」

「そうしてくれ」

わりと本気でそう言った。

「さてと。そういうわけで、今日はこれにて終了だ！見物人達はとつとと自分の仕事に戻れ！」

見物人達のほうに体を向けて怒鳴る。

すると、今日の前で起きたことを理解できてないのだろうか。茫然自失となっていた兵士達は、蜘蛛の子でも散らしたかのように、自身

の仕事場へと戻っていく。そんな彼らを視線で見送っていると、
「初美少尉、何かあったらウィッチとして協力するわ。居場所はグンドユラ・ラル大尉に逐一報告してるから、そこに連絡して。私の名前を出せば通じるようにしておくから」
「了解した。自分は扶桑皇国陸軍遣欧部隊基地に所属している。何かあったらそこに連絡するといい」
そういって、自分は思わぬ仕合でかいた冷や汗を洗い落とすため、シャワー室へと向かうのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の巻 その八

「うちのウィッチが手間をかけさせたようだね。見ていたよ」

昼下がりに。

オティーリアは、執務室の窓から覗ける中庭を指差しながら言った。

そこは、今朝方レッシユ少尉と仕合った場所だ。

「見られていたのですか」

よりによって、一番見られたくない人物に見られていたとは。少しは場所を考えるべきだったな。

雨が降っていないければ、稽古は気持ちのいい外でやりたいものなのだが。

「堪能させていただいたよ。レッシユは、一応うちでもかなり剣の腕が立つウィッチだったのだけどね。さすがはくノ一といったところかな」

「恐縮です」

「ふむ、では本題に移ろう。アプヴェーアによると、ブラウシユテルマーは残念ながら一基だけではなかったそうだし」

ため息が漏れてしまう。

予想はしていたが、やはりそうなるか。

「初美少尉が撮ってくれた写真からは、大型のブラウシユテルマーが五基確認された。小型のものは、さらにその倍はある」

「その数は、自分一人ではどうにもなりませんね」

自分一人ではどうにかできるのは、どうやっても一基だ。

それ以上は警戒されて《迷彩》も効果が期待できないかもしれない。今までそんなことはなかったが、十分に想定される事態だ。

「もちろん、こちらにもウィッチ一人にそこまでの無理を強制させるつもりはない。通常ならば、自走砲による遠隔攻撃なのだが、生憎と森のせいではまならない。たとえ攻撃できたとしても、大型のはともか

く、小型のものは森のせいでもならない。そこはわかるだろう？」

「はい。だからこそ、スツーカー隊を始めとした爆撃ウィッチは、陸戦ネウロイだけではなくブラウシユテルマー爆撃も行なっていました」

「よろしい。勿論我がカールスラントは、こんな時のことも考えて大口径の列車砲も用意はしていたのだが、今、グスタフとドローラは生憎と使用出来ない」

「白海上に出現した巢——グリゴリーの破壊、ですか」

「そういうことだ。フレイアー作戦は、現在実施のための佳境に入りつつあり、列車砲は白海に向けて輸送中で、その護衛に502部隊があたることになる。」

というわけで、陸戦ウィッチと空戦ウィッチ、それにスツーカー隊による電撃作戦が実施されることとなった。作戦名は《ぎつくり腰》^{ヘクセシユス}だ」

オテイリア中佐曰く、《ぎつくり腰》作戦はかねてより計画されていた反攻作戦の一つで、いずれ行わなければならないものだったらしい。他にもいくつかの作戦を立案、実行中との事だったが、それについては秘密だと教えてはくれなかった。まあ、当然だろうな。

ともかく、自分に課せられたここに至るまでの任務は、彼女が当初より計画していた本作戦の一部であったことになる。

たかだか自分の陽動作戦だけで、506部隊に扶桑の柁を一つ用意するとか豪勢にすぎるとは思っていたが、こういうことか。

すでに、本作戦に当たっての人員の配置は完了段階にあり、その中には自分も含まれていて、レッシユ少尉や自分の同僚もその作戦に駆り出されるといふ。

まさに一大作戦の始まりだ。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その九

「そこを開けろ！ 扶桑陸軍のウィッチが降りてくるんだぞ！」

「陸戦ウィッチ部隊がきたぞ、戦闘脚輸送車はユニットを降車させるな！ 整備はすでに終わってるんだ！」

「ウィッチ達はすぐに休ませろ！ 明日には作戦開始されるんだ！」

「急げ急げ急げ！ リベリオンからの補給物資は格納庫横だ！」

基地は怒号であふれていた。

自分が偵察に出てから3日たち、《ぎっくり腰》作戦は明日決行される。

自分の爆撃計画とは別に、本作戦の計画書は提出、秘密裏に本作戦は関係部署に通達していたという。

なんともはや、用意周到という他はなく、生き馬の目を抜くとはまさにこのことだった。ますます《欧州一危険な元魔女》エクスウィッチは信用できなくなっていく。

しかも506に関する作戦は他にもいくつか走っているらしいが、それについては明かすことはできないと笑われてしまった。506が設立する頃にはその結果も見えているのだろうか。

ともかく、自分もその慌ただしい基地の空気に飲まれ、細々とした雑用で駆け回っていたのだった。

その日の夕方、基地の作戦会議室。

《ぎっくり腰》作戦の概要を説明するため、当作戦に参加するウィッチ、総勢三六名が集められていた。作戦指揮がカールスラント人であるためか、構成要員の大部分があるカールスラント人だったが、他にも自分を始めとした扶桑人が何名かとガリアやブリタニア、おまけにリベリオンまで含まれていた。

驚いたのが、《クバンの獅子》こと、ヨハンナ・ウィーゼ少佐がいたことだ。ガリア解放後、前線に復帰したとは聞いていたが、よもやこの作戦に駆り出されているとは思わなかった。おそらく、本作戦の戦

闘隊長を勤めるのだろう。

もはや、臨時の統合戦闘航空団といってもいい様相だ。

ともかく、作戦自体がガリア解放という、大きなくりの中の一つなので、一人でもここにガリアのウィッチがいなければならぬ、ということとは分かる。扶桑が入っているのは、おそらく506に関連することだろう。とするならば、ブリタニアやリベリオンまで混ざっているのはー

などと思案していると、オテイリア中佐とその副官らしきウィッチが作戦会議室に入ってきた。

その副官が、壇上で声を発する。

アハトウツク
「傾注！」

全員が起立し、それぞれの国の敬礼をした。

「ご苦労。座ってくれ。さて、既に通達されているとは思いますが、本作戦《ぎつくり腰》は、ガリアの真の解放のために行われる、一大作戦である」

《ぎつくり腰》作戦と聞いて、ウィッチ達が笑い声を漏らす。

その様子を見たオテイリアは、薄く笑みを浮かべ、

「作戦名、気に入ってもらえたようだな。では、概要はこうだ」

照明が落とされ、プロジェクターから壇上の壁に自分が撮影してきた写真が投影される。

赤い丸が描かれたフィルムが5枚、切り替わりで表示される。

「以上、大型のブラウシユテルマーは五基。それぞれを北から順にアントン、バーサ、カエサル、ドーサ、エミルとする」

続いて、フィルムが切り替わり、作戦区域全景になる。

中佐は、指示棒で北から三番目、中央の赤丸を指し、

「本作戦は、明日、1000時より開始とする。まず、ウィッチの諸君には空陸両方の戦力でカエサルを叩いてもらう。空戦ウィッチは制空権確保、陸戦ウィッチがカエサル破壊に注力する。スツーカ隊はこの時点では基地上空で待機。その後、陸戦ウィッチの諸君は周辺に点在する小型のブラウシユテルマーの破壊と対空型ネウロイの撃破。優先目標はネウロイだ。」

空戦ウィッチの諸君はそのまま二隊に別れてバーサとドーラの制空権を確保する。激戦になるだろうが、各国より集まってくれた優秀な諸君ならば、この難敵を排除してくれるものと確信している。

さて、空戦ウィッチの諸君の奮闘の後、こちらの制空権の優位が確定したら、いよいよスツーカー隊のお出ましだ。バーサとドーラを速やかに撃破。そのまま、外側のアントンとエミルもやってもらおうが、手順はバーサとドーラと同じだ。

スツーカー隊には、諸君の活躍を聞いたスカーフェイスのロートルウィッチが悔しくて歯ぎしりして寝付けなくなるほどの活躍を見せてほしい」

プロジェクターの電源が落とされ、照明が戻る。

「途中、弾薬や燃料の補給が必要になるだろうが、基地まで戻らずセダに設営される補給ポイントで行うこと。本作戦は陸空合同の電撃戦である。速さが何より肝要だと思え。

ただし、担当区域の作戦遂行が困難と判断したら、即座に放棄。他の隊と合流してくれ。細かい作戦指示は、これより配布する作戦指示書を確認すること。

なお、作戦の成功は重要だが、ウィッチの命はさらに重要だ。諸君の命は消費される時間より貴重だということを肝に銘じてほしい。最後に、命知らずな諸君へ、扶桑のある海軍少将の言葉を授ける。

『帰ろう、帰ればまた来られるから』

以上だ。健闘を祈る」

全員が起立し、敬礼をした。

それで、作戦会議室は終了だった。作戦指示書が副官より配られ、ウィッチ達はそれぞれの待機部屋に向かう。

自分もこれからどうしようかと考えていると、大川真子少尉と佐々勇准尉が寄ってきた。そういえば、自分の同僚と呼ぶと言っていたな。

「お久しぶりです。とは言っても、まだ1週間も経っていませんが」

と、大川が挨拶をしてきた。

「ああ、よもやこんな大ごとになるとは思わなかったからな。佐々准

尉も元気そうだな」

「当然です。初美少尉の技を教えてもらうまでは、死んでも死に切れません」

満面の笑顔で佐々は答えた。

「まあ、この戦争が終わったらだな。教えてやるよ」

前々から弟子にしてくれ、とは言われていたのだが、自分は一度命令を受けると、中々一つとどころにとどまれないので、今の今まで曖昧にしてきた。だが、《ぎっくり腰》作戦は、規模も桁違いだが、命の危険も桁違いだ。

戦況が泥沼になれば、扶桑海事変さながらの消耗戦になりかねない。そうなれば、ウィッチとしての寿命どころか、命すら失ってしまうこともある。

せめて、生きる希望を持たせてやれば、それを命の綱に生き延びることもできるだろう。

「ほ、本当ですか？」

「ああ、嘘は言わないよ。本当だ。ただし、キツイぞ。覚悟しておけよ」

「なんの！ 戸隠流を学べるなら、それぐらい覚悟の上です！」

「よく言った。吐いた言葉は飲み込めないぞ」

にや、と笑うと、佐々もさすがに引きつった笑いになる。

「ふふ、ようやく教える気になったのね」

この台詞を聞いて、大川は笑みをこぼして言った。多分、この意図をわかっているのだろう。笑顔になっただけはいるが、表情はかたかった。

「まあな」

「へ？ なんです？ なにか変なこと言いました？」

雰囲気だけはおかしいと感じたものの、自分の意図を汲み取れない佐々だけが、不思議そうに自分と大川の顔を交互に見やるのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その十

翌日、早朝八時。食堂に空戦ウィッチ二〇名、陸戦ウィッチ一〇名、スツーカ隊六名の計三六名が集められた。

国ごとにウィッチは固められているが、この大作戦の前には国同士の確執などは意味を持たず、軽い挨拶だけで十分に仲間意識を共有できていた。

さて、こうして食堂に集められたのは、作戦開始前の訓示の後、朝食を一緒にとることで少しでも連携を高めようとしてのことだろう。

ウィーゼ少佐が全員の前に立ち、咳払いを一つ。

「みなさん、初めまして。本作战の戦闘隊長を務めます、ヨハンナ・ウィーゼ少佐です。昨日、オティーリアさんが丁寧に作戦概要について説明していたので、私からはなにも言うことはありません。作戦指示書に書かれている通り、空戦ウィッチはA班とB班に分かれてください。」

それから初美少尉

「はっー！」

立ち上がって返答した。

「少尉の固有魔法はオティーリアさんから聞いてます。貴女は戦闘には参加せず、偵察に回ってください」

「少佐、《迷彩》を使っている間は、無線通信ができませんが」

「分かっています。ですから、ネウロイの戦力を確認したのち、それを紙に書いて伝書鳩で作戦本部へ送ってください」

正直なところ、自分も戦闘に参加する気満々だったので、これには承服しかねた。

「失礼ながらその命令には従い難くあります」

「気持ちわかるわ。でも、貴女の《迷彩》はネウロイに知られずに偵察が可能な稀有な固有魔法なの。わかるでしょう?」

「しかしー！」

「お初美少尉にしかできないことなのです。作戦の成功確率を少しでもあげるために、お願いします」

たかが少尉に対して、少佐という立場の人間にここまで言わせることがどれだけ異例なこととはよくわかつている。

ぐつと拳を握り締め、目をつむる。何度か深呼吸して、

「了解しました」

「ありがとう、少尉。それじゃあ、作戦成功の前祝いをいたしましょう！」

全員が、水の注がれたグラスを持って立ち上がり、

「乾杯 Prost！」

「初美少尉」

ガヤガヤと立ち話で賑やかな食堂の中、自分一人壁の花になっていると、レムケ少尉が話しかけて来た。

扶桑の同僚は、自分がかかなり頭にきているのがわかっているのだから、触らないでいるのだろう。かっかきっている頭の片隅で、それも仕方ないと冷静に思う。

だが、カールスラントのこの少尉は、自分のそんな事情を知らないものだから、ほいほいと気軽に話しかけてくる。

「……」

答えず、水を飲む。

「不満なんですネ」

「当たり前だ」

「初美少尉のおかげで、セダン以西のブラウシュテルマーの位置全てが発見できました。それがなきや、この作戦は成立できませんでした」

「そうだな」

「この作戦の偵察も同じです。道のないところに道を作る。他の誰にもできません。凄く凄いことだと思います」

「戦さ場の先陣を切る。これは武士の誉れじゃないの？そうじゃなくても、騎士にとっては誉れね。違うかな、デイルム初美」

レツシュ少尉が水を飲み干し、フォークに刺したソーセージを食

ちぎりながらやってきた。

「ブリタニアの女王陛下より承った騎士の称号が邪魔に感じる。こんな時は特にな」

「やるなら何事も前向きにやったほうがいい。師匠レクターにはそう教わった」

「はあ……」

自分は、大きいため息をついた。

他国の人間にここまで気を遣わせるとは、何をやっているのだろうか、自分は。

師匠がこの様子を見たらどう思うだろうか。怒るだろうか、笑うだろうか。それとも、呆れられるだろうか。

「ありがとう、二人とも。自分は忍びである前に兵士のつもりだったが、偵察兵というものもあるしな。騎士に斥候をやらせるなどは思うが」

「適材適所だ、デイル初美」

「私たちが優位に戦えるよう、よろしくお願いします、初美少尉」

0930。作戦開始30分前。

陸戦ウィッチは既に前線の所定位置にて待機している。

ずらりと倉庫内に並べられた10機の発進促成装置には、集められた各国のウィッチ達が発進の時を今か今かと待ち構えていた。自分もその中に混ざり、発進の時を待つ。

「総員、エンジン始動！」

一番機、ウィーゼ少佐の号令一下、一斉にエンジンの点火プラグに火を灯す。自分も、キ106―通称木製疾風の誉45魔道エンジンを始動した。

倉庫内が、耳を弄するほどのエンジンの轟音に満たされた。

倉庫の扉が、整備兵達の手によって全開に開け放たれ、二月間近の寒風が庫内に吹き込んでくる。

『オティーリアだ』館内放送が倉庫に響く。『何も言う必要はあるまい。ただ一言だ。私は、諸君の勝利を確信している。A隊、発進せよ！』

「A隊、発進！」

ウィーゼ少佐から、次々と促成装置より解き放たれ、飛び立っている。最後、自分の順番になり、声をあげた。

「10番機、初美あきら少尉、発進する！」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その十一

「1000時、作戦行動を開始します」

ウィーゼ少佐の一言で、《ぎっくり腰》作戦の戦端は開かれた。

大川ともう一人いるフリーガーハマー持ちが一斉射撃の後、自分とウィーゼ少佐を除く一八名が一気に突っ込んでいき、同時に五号戦闘脚パンターを中心とした十人の陸戦ウィッチ達、苛烈とも言える勢いでブラウシユテルマーに榴弾の雨を降らせる。

「少佐、それではこれからドーサとエミルの偵察に向かう」

自分は、空中に停止して戦況を見ている少佐のそばについて、許可を求める。

「私は、貴女がこの作戦の成功のカギを握っていると考えてます。不本意なのはわかっていますが、どうか宜しくお願いします」

「距離が近いドーサとエミルを偵察後、いったん補給に戻り続いてバーサ、アントンの偵察を行うつもりだが、それで構わないか？」

「ええ。それで構いません」

「了解した。これよりドーサに向かう」

そう告げると、木製疾風のエンジンを全開にして、ドーサへ向けて南下する。

同時に固有魔法を発動。

さて、ドーサ周辺はどうなっているか……

二十分程度で、ドーサ上空に差し掛かるはずだったが、十分程で自分たちの目論見が崩れ去ろうとしているのを理解した。眼下に広がるその状況は、一目見ただけでは認識できなかつたし、したくもなかつた。

ネウロイ達が北上していたのだ。数は、大型ネウロイが十、小型多数。

エンジンのケツを叩き、できる限り上昇し、固有魔法を解除した。

「こちら初美、緊急事態発生。繰り返す、緊急事態発生」

自分は、努めて冷静に報告する。

『初美少尉、固有魔法……』

「現在、カエサルとドーサの中間地点、高度五千。高度三千にて大型ネウロイ十、小型多数発見。偵察時にもこんな数のネウロイは見たことがありません」

少佐の言葉を遮って報告を続ける。

『そんな……本当なの？』

「事実です。私見ですがドーサとエミルのネウロイが合流、北上中と考えられます。アントンとバーサのネウロイも南下していると考えた方がいいでしょう」

『そう……そうね。ちょうど今、カエサルの破壊に成功したわ。陸戦ウィッチは撤退！ B隊は北上し、ネウロイを迎撃。A隊は私と一緒に南下、北上中のネウロイを撃破します』

「スツーカー隊を半数に分け、アントンとエミルの爆撃にむかわせることを進言します」

『そうね。ハンナはアントン、ミンナはエミルのスツーカー隊の護衛について』

『了解』

『初美少尉は、そのまま南下。こちらの攻撃と同時に奴らの最後尾に食らいついて、挟撃をしてちょうだい』

幾条ものビームが、こちらにむけて発射され出した。奴らの索敵距離外なのに何故！

「そうもいつていられなくなりました。ネウロイの攻撃を受けてます。通信、切ります」

そう告げて、《迷彩》を発動する。攻撃対象を見失ったのだろう。自分に集中していたビームが、あちこちへの乱射に変化した。

が、ビームが当たれば居場所は知られ、集中砲火で一巻の終わりだ。「さてはて、これからどうするか。言われた通り、背後に回るか。それとも……」眼下のネウロイを見下ろして「ここから奇襲するか。どちらにしても、このままではいずれジリ貧か。A隊がくるまで早く五分。どうする」

幾筋もの赤い光が、青い空を切り裂く。この長距離だ。当たるはずもないが、警戒はしておいたほうがいいだろう。

そうやって、念のため太陽の中に隠れようとした瞬間だった。

多数の小型ネウロイが急上昇してきて、手当たり次第にビームを掃射し始めたのだ。

これはまずいと、空中に作り出されるビームの網目を潜り抜け、空域を逃れようとする。

下から切り上げるように伸びてくるビームをなんとか縦になって回避すれば、背後から数本のビーム。バレルロールでかわしつつおつてくるネウロイを追い越させた。

これで安心していている暇はなく、上空より急速で接近するネウロイが正面に出てきて、それをコブラでなんとかしのぐ。

しかし、努力もそれまでだった。その矢先、直上から一閃のビームが直撃したからだ。

「くっー！」
シールドを使つてはじくと、それでおしまいだった。完全に居場所はバレてしまった。

《迷彩》を使つていても、集中砲火を食らつては避けられるはずもない。

背中の伝書鳩を全部解放し、ホ103機関銃を構えて《迷彩》を解除しながら近間のネウロイを撃破する。

「こちら初美！ ネウロイに発見された！ こちらでネウロイは引き受けるから、すぐにドーサ撃破に向かつてくれ！」

この状態で生き残れるほど、自分に技術はない。

そして作戦の成功率を考えたら、このまま自分が囷となってネウロイを引き寄せ、本体がスツーカ隊と合同でブラウシユテルマーを破壊したほうがいいだろう。

自分は冷静に決断を下し、ウィーゼ少佐に伝達した。

『ふざけるな！ 回避に努めろ！』

ウィーゼ少佐の怒声がイヤホンから鼓膜を貫く勢いで飛んでくる。どうやら、自分の意見具申は彼女の逆鱗に触れてしまったらしい。

『A隊全ウイッチ、全速！ 初美少尉、絶対に生き残れ！ これは絶対命令だ！』

『了解！』

無茶だ。作戦の成功を優先すべきだ。

「しかし少佐！」

『うるさい！ 我々は兵士である前にウイッチだ！ ウイッチとして生き残れ！』

この状況で生き残れとは中々に無茶を言うが、これも命令だ。

「了解しました、隊長殿」

急上昇しながら、自分を追いかける小型ネウロイに、ホ一〇三機関銃の一二・七ミリ弾を浴びせる。

一団となって追いかけてきたネウロイの三分の一をそれで撃破するが、その返礼としてビームの矢襲が自分を焼き尽くさんと飛んでくる。

「くうっ！」

硬質な金属音が幾度も響き、ネウロイのビームを弾いていく。その度にぐんぐん押されて飛行姿勢を崩される。

「う、ああっ！」

シールドで一連の斉射はなんとか防げたが、姿勢を完全に崩され、失速してしまった。

逆らわずに落下速度を利用して速度を稼ぐと、そのまま引き起こして上昇する。瞬間、上空の小型ネウロイと下方の大型ネウロイから挟まれる格好になった。

「くっ！」

まさしく万事休す、だ。

すぐに撃たれるだろう上下からのビームから耐えようと、魔力配分を可能な限りシールドに全て回した。

その刹那、青空に赤い灯火がゆっくり、ぽつぽつと浮かび始める。これはもうダメだな。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 二の 巻 その十二

自分を焼き尽くそうとしていた小型ネウロイが一瞬のうちに全滅したのは、最初のビームが自分のシールドに弾かれた時だった。

噴煙たなびかせたフリーガーハマーのロケットがその爆風で大多数を破壊し、残った小型ネウロイは銃弾の雨がとどめを刺した。

『初美さん！無事ですか！』

『私に戸隠流剣術教えてくれるって言ったじゃないですか！』

鍾馗より優速のストライカーユニットを差し置いて一番に来るなんて、ずいぶん無茶したじゃないか。

自分は、死ななかつたことに安堵する暇もなく、半ひねりして下を向くと扶桑刀を抜きはなち、

「いやああああああっ！」

気合いととも大型ネウロイの先頭に行くX-4型へ向けて急降下し、ビームをかくぐりながら切り裂く。そして、その抵抗を借りてX-4の表面を撫で斬りにしていき、露出したコアに手裏剣を打つ。

「無茶したな、二人とも」

上昇し、二人と合流する。二人の鍾馗のマフラーは、咳き込むように煙を吐き出していた。

「雰囲気だして自己犠牲なんて、初美さんらしくないです」

「いや、わりと自分は簡単に命を張るがな」

佐々の誤解を一言で切って捨てる。

「ええっ！」

「ああ、佐々は初美さんと作戦行動をとったことが、あまりないから知らないんですね。この人、割と簡単に命を投げだします。生きるつもりがないのかなんなのか」

はあ、と大川はため息まじりに言った。

「おかげで、この人とロツテを組むウィッチは苦勞し通しです」

「自分の命一つで勝てるなら、安いものだと思うのだがな」

「まったく、そんな人だとは思いませんでした。扶桑陸軍からあなたを借りて、少し教育する必要があるかもしれないですね」

上空から、ウィーゼ少佐の声が聞こえてきた。

ストライカーユニットを見事に操り、ふわりと私たちの側にやってくる。

「うぐ」

言葉が詰まる。

何も言い返すことができない。

「私達ウィッチは、人間の盾であり剣です。その私達が自ら死を選ぶというのは、世界の死を意味します。よく覚えておきなさい、初美少尉」

「了解しました」

「少佐、A隊全員到着しました」

レッシユ少尉が、残りのA隊全員を引き連れてやってきた。

「よし。総員、攻撃開始！」

少佐の号令一下、全員が一つの弾丸となって 大型ネウロイへと突入する。

ネウロイの攻撃も同時に開始された。

ウィッチそれぞれが奴らの攻撃を回避し、シールドで防ぐ。

レムケ少尉が、ビームをシールドで受け止めるのではなく、シールドを手のひらに載せるように作り出し、斜めにして受け流していた。

なるほど、面白い。傾斜装甲と同じ原理か。ぜひ参考にさせてもらおう。

大川がフリーガーハマーの斉射を行い、ロケットを追いかけて佐々が突っ込んでいく。ロケットはネウロイの装甲を叩き割り、コアを露出させて、そこを佐々が扶桑刀で叩き斬る。

自分は、レッシユ少尉と視線を合わせ、うなづきあつて二人が撃破したその向こうにいるネウロイへ向けて、彼女とともに加速、左右に分かれて両側から斬りつけ、コア諸共両断した。

他のウィッチたちも、空に航跡雲をたなびかせながらネウロイへと

挑みかかり、撃破していく。

もちろん、無傷というわけにはいかなかった。

何人かがビームを受け止めきれずに吹き飛ばされ、ユニットに変調をきたして戦線から退くよう命令されるウィッチはいた。

それでも、《クバンの獅子》の指揮のもと戦い抜く。そして、

「これでお終いです」

少佐が、最後のネウロイの表面に立ち、MG42を突きつけて弾丸よ尽きよと言わんばかりに撃ちまくった。

弾丸が当たるたびに装甲が砕け、剥げ、ルビーのような輝きを放つ正二十面体のコアが露出する。そして最後の一発がコアに突き刺さり、崩壊した。

その後、少佐に入った連絡によると、B隊もA隊と同じく合流したネウロイをなんとか撃滅に成功したという。そして、スツーカー隊と陸戦ウィッチ隊は隊長の指揮の元、各々の役割を果たした。

これにより、セダンに点在するブラウシュテルマーは全て破壊され、《ぎっくり腰》作戦は成功したことになる。

もちろん、無傷とは言わない。B隊はもちろん、スツーカー隊にも陸戦ウィッチにも、ストライカーが破壊されたり、シールドを貫かれて負傷したウィッチはでてしまった。

この作戦を最後に、引退するウィッチもいるだろう。それは、陸戦ウィッチはもちろん、ただでさえ少ない航空魔女にとって大きな痛みだ。

それでもだ。

この地は人類がネウロイから奪還した初の土地であり、記念すべき場所だ。

そして、この地に作られることになる第506統合戦闘航空団は、この場所を守護するという、なにより重要な役割を持つ。

政治的、外交的な綱引きの綱となり、困難な道のりを歩むことになるのは仕方ないことだろう。

自分も、これからその綱を引っ張る任務をおってパ・ド・カレーに向かう。その事に対して個人的に思うことはあるが、これが忍びとい

うものだ。割り切らなければならない。

ああ、それから。

扶桑に帰ったら、自分の雇い主であるちよび髭メガネの川股少将は、個人的に問い詰める必要がある。

自分をここまでいいように使ったあいつには、それだけの代償を支払わせるのだ。

覚えてろよ、あの野郎。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その一

パ・ド・カレーは行政区分としてはノールⅡパ・ド・カレーに属し、ガリアの最北部にある地域である。

ノールⅡパ・ド・カレーは、本来工業によって立つ地域だが、パ・ド・カレー自体は、例外的に農業、とくにワインの産地として著名であり、同時にカレー港は重要な旅客港であった。

その現領主であるピエレッテⅡアンリエット・クロステルマン――ペリーヌ・クロステルマン中尉の爵位は侯爵^{タイトル}。

領地さえネウロイに奪われなければ、あの肥沃な土地がもたらす富と港湾施設の収益は莫大なものであり、ウィッチとしての彼女のありようも今とは大きく異なっていたのではないだろうか。

今は、復興のために身を粉にして働いているとのことだが、とにかく被害が甚大で、人手はいくらあっても足りたものではない。

そんな事情もあり、なんであれウィッチの力は必要で、自分はそこへ義勇兵として向かうことになっている。軍籍などの問題は上の方で解決していて、自分は一時的に扶桑陸軍を離れ、現地へ赴く手筈だ。

こういう事情もあり、本来ならストライカーユニットの貸与はありえないのだが、自分の場合、木製疾風という誰も使いたがらないユニットなので、ありがたいことにそのまま自分が利用していいことになっている。

まあ、義勇兵に來ました、ユニットありませんでは格好がつかないしな。このあたりは扶桑陸軍の面子もあるのだろう。

ともかく、《ぎっくり腰》作戦の報告書をしたため、昼を迎えた今、こうしてパ・ド・カレーに向かっている最中だった。

それにしてもだ。

作戦後は、多少の休暇をもらう予定だったが、ウィーゼ少佐が握りつぶし、自分に徹底的な地獄の訓練を叩き込んできたのには苛立ちを抑えきれなかった。そんな自分の考えなど無視して訓練を強いてき

たあたり、どうやらそうとう彼女を怒らせてしまったようだった。それはとにかく徹底していて、基本マニユーバやロツテ戦術の一から十まで叩き込まれる始末だ。

大川少尉も日頃から自分に言いたいことがあつたのだろう。模擬戦の際には、ウィーゼ少佐と一緒に自分が追い立てにきたのだからたまらない。

「まったく。あのクソツタレども、覚えていろよ」

つまり、クロステルマン侯の居城間近、眼下に広がるワイン用の葡萄畑が見え始めた場所まできても、そんな悪態をついてしまうのも仕方ないことだと思ふのだ。

『なにがクソツタレなんですの、デイルム初美』

一瞬のノイズの後に、しつとりと柔らかかみのある声がイヤホンから流れてきた。

しまった。チャンネルを開いていたか。

「なんでもありません、そしてお久しぶりです。クロステルマン侯。デイルム初美、騎士の勤めとして侯のもとに馳せ参じました」

『どうだか。まあいいでしょう。堅苦しい挨拶はぬきにして、今はネウロイの撃破です。ついて早々申し訳ないですけど、そのままその位置から北上して下さい。偵察型ネウロイが二体やってきています。敵ネウロイの高度は4000』

「了解。これより《迷彩》を発動します」

固有魔法により無線が使えなくなり、ホワイトノイズが走る。

「ついて早々これとは、なかなか大変な状況じゃないか」

太陽を背に高度を上げつつ、上昇を開始した。

指示通り高度4000まであげてしばらくすると、高速で飛来する二機の小型ネウロイが確認できた。同高度に調節して真正面に位置どり、狙いを定める。

普通ならできないことだか、《迷彩》のお陰でこんなことも可能だ。照準一杯に左側のネウロイが迫る瞬間、引き金を引いた。

12.6ミリ弾が奴らに降り注ぎ撃破、そのまま右のネウロイに狙いを移し、これも破壊する。

コアのない小型ネウロイならば、『迷彩』があればこんなものだ。
「クロステルマン侯、偵察型ネウロイの撃破に成功した」
『了解しましたわ、デイルム初美。ご苦労様です。それでは、こちらにいらして下さいな』

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その二

「まずは、《ぎっくり腰》作戦で重要な任務を見事こなし、作戦を成功に導いたこと、ガリア貴族を代表して、感謝しますわ」

執務室。クロステルマン侯爵は、大きなマホガニー製の机の前に、事務的にこう言った。ブリタニアにいた時のような棘はないが、それにしても信用されていないようだ。

「はっ。騎士は、民を守る盾であるならば、当然のことです」

自分は騎士としてこの場に馳せ参じたのだから、軍人としてではなく、侯爵として自分に対応するのも当然だろう。

それにしても、威厳はまだ足りないが、立派なものだと言葉に出さずに嘆息した。501で戦い続けたその経験が重みとなって、重い机に負けぬ風格を醸し出している。

始めて見かけたあの時に比べたら、なんと人間として成長したことだろう。

それは、まさしく瞠目に値した。

「おやめなさい、初美少尉。白々しいですわ」

腹芸は勘弁だ、と言わんばかりにそれを制した。

「どうせ貴女の事です。なんの腹づもりもなしに、無償でここにきたわけでもないのでしょうか？」

「そんな。これでも騎士の端くれ。本心にございます」

年若いなれどさすがは侯爵といったところか。腹の読み合い探り合いに関しては先達の教えがあるのだろうか。あるいは自分の素行の悪さが招いた結果か？

いずれにしても欧州の社交界も、京都のようになかなか魑魅魍魎が跋扈する魔窟のようだ。

自分としては、ここで本来の目的を話してもいいのだが、今回の任務は欺瞞行動だ。クロステルマン侯のことだから、こちらの事情を含めた上で、自分を受け入れてはくれるのだろうか。

「そこが白々しいといっているのです、まったくもう。初美少尉、よほどのことがない限り、処罰を下すことはしませんし、口外も致しません。その為に、私一人で会うことにしたのです。さ、お話なさい」
こうまで言われては、答えざるを得まい。

「……委細は申せませんが、裏はあります」

それを聞いてやはり、と頷く中尉。

「それは、クロステルマン中尉にも関わりがある事で、今自分が帯びている任務は、ガリアの為に成ると信じております。少なくとも、二枚舌の好きにさせるよりはましではないかと」

自分は、軍人としてのクロステルマン中尉ではなく、クロステルマン侯の才覚に期待する。これでわかってくれるなら、あとはもうこの地での復興作業にのみ注力すればよく、暇を見つけては港に出向き、意味ありげな行動をしていればそれですむ。

「なるほど。506について、ですわね。確かに、いくつかの国がきな臭い動きをしているのはわかっていましたが」

疲れたようにため息をつく。想像するに、西部方面統合軍総司令部から、隊長になってくれと矢の催促なのだろう。

「……」

自分は沈黙をもって答える。

「わかりました、初美少尉。クロステルマン侯爵の名において、貴女を受け入れます。どのみち人手はいくらあっても足りないのです。しのごの言っている暇はありません。ブリタニアで見せてくれたくノ一の知恵、貸していただきますわ」

「もちろんです。それに、騎士が駆けつけたとなれば、色々な面で宣伝にもなります。自分の名前によければ、存分にお使い下さい」

そこで、中尉はこぼんと咳払いを一つ。

「ところで、初美少尉はその、確か扶桑陸軍でしたわよね」

「確かに自分は扶桑陸軍に所属していますが」

「で、では、海軍の坂本美緒少佐のことは、その、ご存知ありません、よね」

やはり聞かれたか。ブリタニアにいた頃は、最初は突っかって

いったものの、紆余曲折の末に彼女は坂本少佐を信頼し、501に入隊することになるのだが、その頃から彼女の心酔っぷりは傍目にもそうとわかるほどだった。

内心苦笑しつつも、

「ブリタニアで一度顔を合わせただけで面識らしい面識はありませんが、一応は。風聞ですが、今は扶桑で後進の指導にあたっておられると聞いております」

念のため、元501の部隊員の動向は頭に入れておいたが、役に立つこともあるのだな。

それを聞いた彼女は、ほうとため息をついて、

「よかった。ご無事なのですね、坂本少佐……」

このまま放置していたら、坂本少佐にうわその空で自分のことなどすっかり忘れてしまうだろう。

「それで、クロステルマン中尉。自分はどうしたらいいでしょう」

「え？ああ、そ、そうね。まずはアメリカやリネットさんを紹介しますわ」

忘れていたようだ。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その三

クロステルマン侯は、自分とのやりとりを終えてから直ぐに二人を招き入れた。どうやら、二人を外で待たせていたらしい。

「こちらがアメリカ・プランシヤール軍曹で、こちらがリネット・ビショップ曹長」

招き入れた二人を自分に紹介する。

「アメリカ・プランシヤールです。よろしくお願いします」

「初めまして、初美少尉。リネット・ビショップです」

二人は、クロステルマン侯と違っておしが強いわけではないらしい。

階級はこちらのほうが上だが、自分は侯爵のところに押しかけてきた立場であり、今は軍籍を一時的に離れ、客文として訪れている状態なので、立場としては二人の方が自分より上になる。

自分は、左足を後ろに引き、右手を心臓の上に置いて、

「扶桑皇国陸軍少尉、初美あきらです。少しの間ですが、お世話になります」

と、いわゆるカーテシーという作法で挨拶を返した。

「見事なカーテシーですね、初美さん」

クロステルマン侯にしては珍しく、他人を褒めた。少しばかり自分を見直したのだろうか。それとも、ブリタニアにいた時の彼女とは違う、ということだろうか。

「ありがとうございます。騎士を叙勲してから、マナーはそれなりに学びましたが、その甲斐もあったというものです」

自分が答えると、クロステルマン侯は自分を二人に紹介し始めた。

「彼女には、本日より義勇兵としてパ・ド・カレー復興をお手伝いしていただきます。初美はブリタニアにいた頃、ブリタニアに撤退したウィッチ達にサバイバル技術と扶桑武術を教練した功績で、ブリタニアの女王陛下より騎士の称号を賜りました」

「凄い、本当なんですか？ 初美さん」

と、リネットが感嘆する。

続いてアメリーも、

「騎士ですか、初めて見ました……」

目を丸くしていた。

今が中世の時代ならともかく、現代において騎士の叙勲はそれなりに珍しい事なのだ。しかも自分の場合、名誉叙勲としての騎士ではなく、軍事的な功績による、武官としての騎士の叙勲の側面もあるのだからなおのこと珍しいだろう。

そのこともあって、ブリタニアから扶桑へ、自分のHMW、通称グローリアスウィッチーズへの編入を要請されたとも聞く。

ただ、扶桑としても忍びの技術を持ち、わずかながらでも扶桑皇国の機密情報に関わる仕事をしていたウィッチを手放すのは、国防上の大問題であったようだ。

これが統合戦闘航空団への編入であったならともかく、HMWへの編入はブリタニアの独断運用が前提のため扶桑皇国の意思が介入することは困難だ。そんな部隊へ、自分を派遣するというのは、なんとかしてとも避けたい事態だったに違いない。

ともあれ、他人に自分が騎士などと名乗ることは滅多にないし、そう紹介されることもほとんどない。だから、二人の感嘆は少しばかりの自分の顕示欲を満たしてくれたわけだが。

「ま、騎士とは言っても、中身は扶桑のウィッチなんですけど」

人がいい気分であったのに、一言多いな、この侯爵は。

彼女の台詞を聞くと、二人はああ、と異口同音に納得した。

そして、騎士を見る時の憧れめいた視線を、無理無茶無謀の三無さんないウィッチを見る時の、あの何か哀れむようなそれに変えていた。

「はは……偉大な先達に負けないよう頑張っているつもりではありませんが」

これには流石に苦笑をこらえる事が出来ない。

両名とも、坂本少佐や宮藤軍曹、あるいは角丸さんをそばで見ているからなんだろうが、あの人たちと自分を一緒にしては向こうに失礼

だ。

あと、自分はそんな無理なことはしていない。

「ともかく、お二人とも自分のことは、階級や騎士のことなど気にせず、初美でもあきらんでも、好きにお呼びください」

「私のことはリーネって呼んでください。あきらちゃん、よろしくお願ひしますね」

「アメリカって呼んでください、初美さん」

「よろしく、リーネ、アメリカ」

自分は、そうやってお互い同士挨拶と自己紹介を握手とともに交わすが、

「うわ、どうしたんですか、その手」

その時、リーネが自分の指が女の子なのに節くれだつてしまつていたのを見て、声色を変えて驚いた。ウィッチは基本的に眉目秀麗であるし、それは指先にも同じことが言えるわけだが、自分の指は例外的にゴツゴツしている。

「あ、ああ、これですか。自分はウィッチの力が発現する以前から武術の修行をしていました。その結果、と思つて下さい」

自分は、ウィッチである前にくノ一としての修行を始めていたの
で、指はもとより膝や肘なども普通のウィッチと違い、醜く黒んだり
変形したりしていた。

ウィッチの力が発現してから武術の修行を始めていたなら、それによつて得られる基礎体力や身体能力の向上、あるいはシールドの存在によつて、武術の修行程度でこのように体を変形させてしまうことはなかつたのだが。

「顔合わせはその辺でいいでしょう。初美さん、屋敷を案内しますわ。とはいえ、まだ半壊状態ですけど。リーネさんとアメリカは、予定通り哨戒を」

「はい」

二人はそう返事をして執務室を出て行く。

「では、ついてきて下さい、初美さん」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その四

「それで、《ぎっくり腰》作戦はどの様な内容でしたの？」

クロステルマン侯は、自分を連れて執務室を離れ、最初の案内先に連れていく途中の廊下でそう尋ねてきた。

外では、職人達が館の補修や改築を少しずつ進めておりー自分の館よりも、領民達の家屋や畠の復旧を優先させているのだそうだー石を削るノミの音や、木材の加工の音が響いている。

作戦内容まで機密情報になっているわけではない。自分は、彼女の質問に答えることにした。

「セダンより東に存在したブラウシユテルマー5基の破壊と、ネウロイの殲滅です。空戦ウィッチは自分を含めて20、陸戦ウィッチ10、スツーカー隊6、合計36名のウィッチによる一大奪還作戦でした。総指揮官は、《欧州一危険なエクスイッチ》ことオティーリア・スכולツエニー中佐、戦闘隊長は《クバンの獅子》ヨハンナ・ウィーゼ」それを聞いて、クロステルマン侯は足を止めた。自分も立ち止まって、

「スכולツエニー中佐に《クバンの獅子》まで引っぱり出してくるなんて、総司令部もかなりこの作戦を重要視していたのね。いえ、この場合はカールスラントが、というべきかしら」

腕を組んで考え始めるクロステルマン侯。うつむき加減に右こめかみをトントンと、人差し指でつつきながら思考をまとめていく。

「ええ。ウィッチの国籍も、ブリタニア、ガリア、カールスラント、リベリオン、ロマーニヤ、扶桑と多様で、空戦ウィッチの陣容を見ると、さながら大規模な統合戦闘航空団の様相を呈していましたね」
「カールスラントとしては、戦後の欧州での事も考えると506での立場を強いものにしておきたい。ということは、《ぎっくり腰》作戦は506でのカールスラントの立場を強くするため、ということかしら。でも、そうなるとブリタニアはこの事をどう思うのでしょうかね」

「ごころよくは思わないでしょう」

「……デイル初美、あなた！」

侯爵は、そこまで思い至るとはつとして自分の顔を見た。自分がここまでできた理由の一端に、おそらく気づいたのだろう。

さすが！

自分は思わず心の中で喝采した。

それでこそその侯爵だと感嘆した。

ブリタニアに逃れていた頃の、荒んでいた彼女とは大違いだ。

今のクロステルマン侯ならば、扶桑皇国よりも自分をうまく扱えるのではないかと、そう期待させてくれる。ガリア救国の英雄とも言われるだけのことはあったわけだ。

501での経験は、そこまで彼女を育てたということなのか。

「さすがは侯爵閣下。恐らく、侯爵がたどり着いた答えは、ほぼ正解でしょう。騎士として忍びとして、この初美あきら、侯爵にお仕えしたくなりました」

騎士として、扶桑撫子として、深く頭を下げる。

「およしなさい、デイル初美」

「しかし、その慧眼。ブリタニアの頃の侯からは考えられないほどです。この初美、ほんと感服つかまつりました」

「では初美。あなたの目的は」

再度確認をせまる侯爵だが、たとえそれが正解だとしても、自分はそれを教えることはできない。

「それは教えられません。ですが、自分は侯爵閣下のお役に立ちたいと本気で思っております。それを証明しろとおっしゃられるのなら、ケルトの風習にならない、侯爵に誓約ケツシユを捧げても構いません」

「そう。まあ、いいでしょう。貴女がそこまで言い切るのなら、そういう事なのだとな納得することにしましょう。答えは、506が結成された時にわかることでしょうから。さ、まずは食堂に案内いたしますわ」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その五

「ひどいものですね……部屋としてまともに機能しているのは、台所と食堂、それにこの執務室に、いくつかの客間だけですか」

自分は、館を案内され、二人でまた執務室に戻ると館の惨状に言葉をなくしていた。

ここを訪れる際、ストライカーユニットで上空を一通り偵察したわけだが、その時に、館がどうなっているのか上空から確認はしていた。だが、こうやって改めて中を案内されると、印象や抱く思いはその時とはまた違ったものになっていた。

「それでも、領民達にくらべたらよほどましですわ。葡萄畑や自宅、子供のよう大切に育ててきたワイン、ましてや家族を失った方達もいるのです。領主である私が泣き言など言っていられませんわ」

肉親を失ったのは侯爵も同じでは、と言いそうになるのをぐつと堪える。自分の事よりも領民達の事を、ということなのだろう。侯爵なりの高貴なる義務、というものなのかもしれない。

しかし、いくらなんでもこの現状は対外的にいろいろとまずいだらう。

「それでもです。領民が大事なのもわかりますが……」

「タイム初美、確かにその通りですけど、私は貴族であると同時に軍属です。野宿をいとうなどあり得ませんわ。ましてや、雨風をしのげる寝所があるのです。お風呂も、ドラム缶風呂があります。戦災に追われた領民達のことを思えば、贅沢など言えるはずありません」

ドラム缶風呂か。扶桑人の知恵が、よもやガリア人の方侯爵の口から出てくるとは思わなかった。

おそらく、501創設時、基地に風呂がなかった時に坂本少佐がやっていたのを見ていたのだろう。

統合戦闘航空団で交わされた異文化交流は、こうした生活の知恵の部分でも役立つているらしい。

「……わかりました。侯爵、無線か電話をお借りしてもよろしいでしょうか」

意識せずのため息が漏れた。多分、この侯爵は、自分がなにを言っても今の生活を変えるつもりはないのだろう。たとえそれが、結果的に領民のためにならないとしても、だ。

「無線でしたらそちらにあるものをお使いになって構いませんわ」
「ありがとうございます」

自分は、部屋の隅に置かれている無線機の受話器を手に取ると、扶桑陸軍で使われている周波数に合わせて、扶桑語でコールを始める。

「こちら扶桑皇国陸軍東部第33部隊所属、初美あきら少尉であります。扶桑皇国陸軍欧州派遣部隊本部、応答されたし。繰り返すー」
しばしの空電ののち、返答がやってくる。

『こちら派遣部隊本部。どうしましたか、初美少尉』

「こちら初美少尉。現在、パ・ド・カレーのクロステルマン侯爵邸に到着するも、ネウロイにより破壊された邸宅の状況は予想以上にひどく、物資も圧倒的に不足している。予定通り、日持ちのする食料と小麦、それと扶桑のもので構わないので、調味料、弾薬や衣類、天幕、その他必要と思しき物資の補給を乞うが可能か」

『物資に関しては、可能な限りそちらへ輸送する準備は整えています。少尉の直属の上官である川俣少将の許可も貰いました。連絡がなくても、明日一番にそちらへ空輸する手筈になっていましたよ』

「ありがたい。自分の部屋に、秋田の新政が三升ほどある。本輸送作戦が終わったら基地のみんなですべて全部呑んでいいぞ」

『本当ですか少尉！』

「もちろんだ。そのかわり、しっかりと頼むぞ」

『もちろんです。今、佐東の姐さんがユニット履きに走って格納庫に向かいました』

佐東健子准尉か……やれやれだ。

あの人、飲兵衛の輸送機パイロットと一緒に一〇〇式輸送機飛ばすつもりだな。で、佐東准尉はその護衛をやるということか。

そこまでして酒を飲みたいかね、あの女は。

「了解した。今、一五〇〇時をこえるあたりだから、その様子だと夜中にはこちらに到着しそうだな。仕方ない。ビーコンはないが、物資投下の目印に焚き火の一つでも焚いておくか」

『お手数ですが、そのようにお願いします』

「通信、終わる」

通信を終了し、周波数を元の値に戻すと、おそらくはしゃいでるだろう佐東准尉の様子が頭をよぎり、軽い頭痛を感じると同時に大川少尉の苦労に同情して、

「侯爵、只今、扶桑陸軍より、わずかばかりですが補給物資の要請をしました。恐らく、今晚零時あたりに空輸されるものと思われます」

と、侯爵にむかって言った。

「デイル初美……」

なにが起きたのか、状況を把握できていないのか、口をぽかんと開けていた。

「物資が圧倒的に不足していることは予想済みでした。よもや自分の住む場所の修繕すら後にして、領民の家屋や農地の復旧に資材を回しているとは思いませんでした。それから、一つだけ、自分の話を聞いて下さい」

「なんですの？」

自分は一度、深呼吸をして、言葉を紡ぎ出す。

「扶桑には、武士は食わねど高楊枝、という言葉があります。貧しくて飯が食べられなくても、さも食べているかのように楊枝を使う、という意味で、要はやせ我慢なのですが、体面を保つということでもあります。それは、外交においてとても重要なことです。そこはおわかりですか？」

「そ、それぐらいわかってますわ。でも、私はパ・ド・カレーの領主です。領民達を救うという高貴なる義務があるのです」

「それはわかります。ですが、邸宅がこの有様では、貴女が愛する領民達もその程度と思われるのも確かです。領民が馬鹿にされるのも、さげねばならないことではないのですか？」

噛んで含めるように言った。

先ほどはあれほどの頭の冴えを見せておきながら、今は領民達を愛するあまり視野狭窄におちいつている。まだ年相応といったところなのだろう。そんな侯爵を見て、なんとなくほっとしている自分だった。

まあ、自分も彼女のこととは言えないのだが。

「確かに、そうですね」

ぶいと横を向いて答える。

「ですからせめて、来客用の部屋をもう数部屋と、応接室ぐらいは早急に元に戻して下さい」

「わ、わかりましたわ」

「では、自分はこれから森へ狩に向かいます。リーネさんやアメリカさんの分も狩れるとは思いますが、あまり期待はしないようにして下さい」

自分はそう告げて一礼すると、執務室を後にするのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その六

パ・ド・カレーの葡萄畑をこえたところに、鹿やウサギがいるという大きめの森はあった。そこは、地下鉱物の貧弱な土地らしく、ネウロイに荒らされずにいた場所で、そのおかげで動物達も生き残っていたのだという。

ストライカーユニットならば、そこに行くまでに30分とかからないのだが、途中、葡萄畑の上空を飛んだ時には胸が痛んだ。

領民達の家は、ペリーヌの出した、素早く的確な復旧指示のおかげで、ところどころ破壊されたままだが、寝るには困らない程度にまで修繕されていた。

問題は畑である。

見るも無残とはあのことだった。

無事な場所は全体の三割程度で、ワイン蔵はそれほど被害にはあつてなかったが、それでも、上空から見ると、ワイン蔵の半数は破壊されていた。家屋は無残なものだ。

領民達の暮らしが楽ではないのは、それだけで痛いほど理解できた。

「これが扶桑だったら、どうなっていただろうな……」

葡萄畑を田畑に、ワイン蔵を穀物蔵に置き換えて見ると、背筋が震えてくる。

扶桑海事変のおり浦塩が壊滅的打撃を受け、その被害は絶後のものだったという。そして、その時の航空写真を見たことがあるが、今自分が見ているパ・ド・カレーの風景は、リアルに見ているぶん圧倒的だった。

？　ともかく、そうやって上空を飛びながら被害状況を確認していると、目的地の上空までやってきていた。

自分の目的となる獲物は、ストライカーユニットで目的の森の上空に差し掛かるとすぐに見つけられた。

眼下に一頭うろついている鹿がそれだ。

季節を問わず、地上をうろついては狩猟に熟練していない限り、なかなか見つけられるものではないが、空からならばそう難しいものではない。

《迷彩》を使って獲物の上までやってくると、目標の鹿の頭を魔力を込めた棒手裏剣で打った。手裏剣は見事首を貫通し、一撃でとどめをさせた。

鹿は、普通なら手裏剣で倒せるような相手ではない。手裏剣でどうにかなるのは、野うさぎがいいところだ。

だが、そこはウィッチならではである。

魔力を込めてやれば、かなりの威力を出せる。

ネウロイのコアが見えている状態ならば破壊も可能なのだから、ましてや鹿程度など、ということである。

「これなら、しばらくは持つか。とはいえ、先々のことを考えると、あと三頭ほどは狩って保存しておかないとまずかろうな……」

そうひとりごちながら着地すると、腰にさした短刀で血抜き処理の後、腑分けをしていく。短刀は陸軍工廠製の数打ちなので、多少欠けても気にする必要もない。

臓器、特に肝臓は、新鮮のうちならば滋養の面から言っても是非とも食べておきたい部位だが、胃や腸は、食べるための下処理がかなり面倒なので、その場に捨ててしまう。どうせすぐに狼や野犬が始末してくれるだろう。

ともかく、そうやって下処理を済ますと、鹿の四肢に綱を結わいてなんとか持ち上げ、クロスステルマン邸まで運んでいく。

途中、木製疾風の誉45魔道エンジンが、不満気に何度か咳き込んで高度を落とすも、なんとかかごまかして館まで運びこめた。

その頃にはすでに夜の帳が下りていて、夜目に慣れていないウィッチならば、戻るのもなかなか難儀したに違いない。

「しかし、これ、あの三人はさばけぬだろうなあ」

と、呟きながら、ストライカーユニットの倉庫前に降りていくと、インカムからクロスステルマン侯爵の声が飛んできた。

エンジン音が、あるいは翼端灯で自分が帰還したのがわかったのだろう。

『デイル初美、お帰りなさい。首尾はいかがでしたの?』

『大きめの鹿を一頭仕留めましたよ。腑分けも済んでます』

『そうですか。心より感謝しますわ、デイル初美』

インカムから聞こえてくる声は、若干上ずり気味になっていた。

恐らく、彼女たちの食事は、保存がきくように焼き締めた固いパンと味の薄いスープのみで、ソーセージなどはもつてのほか。贅沢といえば、たまにスクランブルエッグがつく程度だろう。香辛料もないから、寂しい食卓なのは想像に難くない。

そんな食事情のところに、鹿肉がしばらくの間追加されるのだから、そりやあ嬉しいだろう。自分が料理をする場合、味付けに関しては、ガリア風ではなく扶桑風になってしまうが、そこは我慢してもらうことにする。

自分も経験があるからわかるが、軽い飢餓状態の時のタンパク源は、なんであれ死ぬほどありがたかった。ちんけなハムの一欠片やネズミの肉一切れで、無限の力が湧き出たような気分になったものだ。「食料に関しては、自分のためでもありません。それから、すみませんが探照灯かそれに類するもの、なければ車を一台、大きめの広場に持つていっていただけますか? そろそろ扶桑からの支援物資が届くはずで、物資投下の目印にしたいのです」

そう言いながら、ストラライカーユニットを発進促成装置に収める。『それはこちらで準備させました。先ほど輸送機からも連絡があり、もう三十分もかからないうちに到着、支援物資を投下するとの事でしたが……』

「よつと……侯爵、何かありましたか?」

鹿肉を背負いながら尋ねたが、言いよどむ侯爵の態度になにやら不穏なものを感じてしまう。

『その、輸送機護衛のウィッチのサトウ准尉、ですの? 若干呂律が回っていないようなのですけど……』

あの飲兵衛め! 飛びながらひっかけやがったな!

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その七

輸送機のエンジン音が空から聞こえてきた。どうやら、近場まで来ているらしい。

低出力のインカムでも無線は通るだろうと思い、呼びかけてみる。

「こちら初美少尉。一〇〇式輸送機、応答されたし」

『こちら一〇〇式輸送機機長、建部であります。現在、高度5000にて飛行中。投下目標地点のライトを確認しました。これより、補給物資投下作業に移ります』

酒焼けしたような男のダミ声がかえってきた。こいつなら、酒のためならネウロイの巢にでも物資を配達してくれそうだ。

「了解した。よろしく頼む。それから佐東准尉だが……」

『すっかり出来上がってます。着陸できる場所があれば、一〇〇式を着陸させて准尉を回収したいのですが』

「そんな場所、あるはずもなからう……仕方ない。こちらで面倒を見る。で、佐東は今どこだ」

と、建部に居場所をきいたその瞬間、ずどん、という落下音と同時に絹を切り裂くかのような悲鳴が中庭から聞こえてきた。あの声はアメリカさんだな。

おおかた、ドラム缶風呂に入浴中のところに、あいつが墜落したのだろう。

「あー……もういい、場所はわかった。佐東はこちらでしばらく預かる。それから、あの馬鹿の処分は、そちらから司令に問い合わせさせておいてくれ」

『了解しました。お手数をかけます』

投下地点に物資が落ちてきたのは、それから数分してのことだった。

投下地点には、リーネさんが既に待ち構えている。投下された物資の荷解きと運搬は、彼女の陣頭指揮のもと、領民達が行う手筈になっ

ているからそちらはいいとして、侯爵への事情の説明はどうしたものか。

「それで、この方は？」

侯爵は、思いの外落ち着いた態度で、数少ない客室のベッドにぶん投げられた、扶桑人離れた豪華なブラウンヘアとグラマラスなボディの持ち主のウィッチを指差し、そう尋ねてきた。

ベッドの上で赤ら顔をさらして高いびきをかいているこのウィッチが、佐東准尉だ。

自分は、あれからすぐに中庭に向かい、墜落した佐東准尉を回収。そのままアメリカ軍曹に謝り倒し、二人に怪我がないのを確認して、准尉を侯爵の指示のもとこの客室に運び込んだ。

「佐東准尉です。自分が厄介になっていた扶桑陸軍の駐留基地に所属するウィッチで、夜間航法に習熟した腕利きのはずです」

自分は、そう答えるとすぐに頭を大きく下げた。

「この度は、侯爵やアメリカ軍曹に多大なるご迷惑をおかけしてしまい、面目次第もございません。准尉が目を覚まし次第、なにかしらの処分が下されると同時に、扶桑陸軍より謝罪と補償が行われるかと思えますので、何卒ここは御容赦を願いたく存じます」

軽いため息をついて、

「顔をおあげなさい、デイルム初美」

「しかし」

「いいからかおあげなさい、と言っているのです、初美さん。怒ってはいませんから」

「えっ？ 今なんて……」

自分は、含み笑いしながらのその言葉が聞き間違いかと、思わず顔を上げてしまった。

自分を見る侯爵は、なにか面白いことがあったのか、くすくすと笑って、

「初美さん、貴女は随分と苦労性のようね。いえ、それがくノ一というものなのかしら」

「侯爵……」

「ペリーヌでよろしくてよ、初美さん。ブリタニアではわざと私の反感を買うような言葉遣いでしたけど、あれは演技だったのかしら」

「あれはその……」

言葉に詰まる。ああやって人となりや計っていたなどとは言えない。

「ブリタニアの頃のあなたは、なにかにつけて引つかかる物言いでしたけど、何年振りかで再会したあなたは、すっかりなりをひそめてましたわね。それどころか、私に扶桑の武家のありようを示して蒙をひらかせようとする。そして今はこのありさま。おかしくもなりますわ」

「佐東が墜落したことについては、なにもないのですか？」

「誰も怪我はしてないし、屋敷も無事なら問題なんてありません。ましてや墜落したのが常識はずれの扶桑の魔女ですもの。怒るだけ無駄ですわ」

これはこれは。

さすがは501の元隊員。嫌な方向に扶桑の魔女を理解してくれているようで。

「それはそれとして、扶桑陸軍からの謝罪と補償は受け取りますけど。貸しは作っておくものですわ」

と、底意地の悪い笑みで言った。復興のためにはいらぬものなんてないということだろう。したたかなことだ。

「それがいいでしょう、侯爵」

「ペリーヌ」

「しかし……」

「初美さんは、見えていたけど見えないふりをしていたことを気づかせてくれた。食料事情も一変させてくれた。扶桑陸軍の援助の橋渡しをしてくれたし、おそらく諜報においてもガリアのために尽くしてくれようとしているでしょう。違いますの？」

侯爵は、自分の胸元を人差し指でつつく。

「確かに私は侯爵で、初美さんは騎士ですわ。でも、そこまでしてくれる人を、私はそんな関係にしたいわけではありません。改めて、私と友誼を

「結んでいただけます?」

「はあ、とため息をつく。」

「わかった、わかりました。ペリーヌ。これでいいか?」

「これ以上なにを言っても、侯爵は自分の意思を曲げないだろう。やれやれ、だ。」

「ええ、それで構いませんわ」

ペリーヌは、そうやって年相応の笑顔を浮かべたのだった。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その八

翌朝、リネットさんに昨夜届いた補給物資の状況などを確認するため、キッチンにやってきた。ペリーヌ曰く、朝食は彼女の当番だそう
だ。

普段はパンとちよつとの付け合わせだけなので、わざわざキッチンに立つこともないらしいが、今日からは扶桑の補給もあるので、料理を作ると張り切っていたとは、キッチンにくるまでに見かけた使用人の弁である。

そして、自分がキッチンにやってくると、かつおだしと味噌の香りが漂っていた。扶桑人ならば、毎朝かいでいたい、うるわしき故郷の
かおりだ。

ボールにきのこが水に晒されてるのをみるとどうやらきのこ汁を作
つてゐるらしい。

「失礼します、初美です。リネットさん、支援物資はいかがでした……
か……?」

きのこ汁を作っているリネットさんに尋ね——きのこ汁? ブリ
タニア人のリネットさんが?

「うふふ、びっくりしましたか? 501にいた時、芳佳ちゃんにお味噌
汁の作り方をおしえてもらったんですよ。救援物資のなかにお味噌
と鰹節があつたので、きのこを採ってきて作ってみました」

驚いてる自分の顔を見て、おかしそうにころころと笑ってから説明
してくれた。

詳しい説明ははぶくが、ブリタニア人の料理は、言いたくないが産
業革命の影響で地に落ちるほどにみすぼらしいものになっていたの
で、あまり口にはしたくなかつたのが正直なところだった。

「味見、してみますか?」

小皿にちよつとだけ味噌汁をのせて、差し出してくる。

「ありがとうございます。それでリネットさんは扶桑料理を作れるの

ですね」

小皿を受け取り一口含むと、途端に口に広がる合わせ味噌ときのこの滋味。鼻をぬけるだしの効いた味噌の風味。これは……。

「美味しいです。こんな美味しい味噌汁、扶桑での最後の食事以来です」

考えずに言葉が出てしまった。

「よかった。芳佳ちゃんから肉じゃがも教えてもらったから、今度作りますね」

「肉じゃがまで！自分は料理がてんでダメなので、羨ましい限りです」
自分にはできないことなので、他人、しかも異国の人が扶桑料理を作れると聞いてほとほと感心した。

自分は、とりあえずそこそこに食べれる行軍食は作れるが、台所で作れるものは炊飯と出汁が効いてない味の濃い味噌汁ぐらいで、味の方はブリタニア人のことを笑えないのであった。

「今度、暇があったら教えてあげますね」

「ありがとうございます」

やや、ブリタニア人に扶桑料理を習うのか。扶桑撫子としてはなんとも恥を晒してようで恥ずかしいかぎりだ。

「あ、初美さん。こちらにいたんですね」アメリーさんが、支援物資の帳面片手にキッチンへやってきた。「これ、支援物資の目録です。念のため確認をお願いします」

「ありがとうございます」

帳面を受け取って、物資の一覧を眺める。

弾薬などの軍事物資は当然として、味噌塩醤油に風邪薬や消毒液、包帯やガーゼといった医療品、毛布、衣服、石鹸、洗剤などの日用品に加え、日持ちのする保存食や缶詰もかなりの量だ。

医療品は、どこの基地でも不足気味になりがちだ。そこをこれだけ集めてきたのだから、相当無理をしたのだろうか。あの基地が空っぽになってなきやいいのだが。

それにしても、このあたりはさすが主計課を経験した坂井基地司令、見事な手腕といったところだろうか。

「確認しました。どうか、お役立てください」

「食料はもちろんですが、とにかく医療品が慢性的に足りない状態が続いていたので本当に助かりました。ありがとうございます」

と、アメリカさんは頭を下げた。

「よろこんでいただけただけたようですねによりです。基地司令が、自分一人をてぶらで差し向けたのでは、扶桑皇国の沽券にかかわると、奮発したそうです。それより、アメリカさん。昨晚はうちのウィッチがご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした。どこか怪我はしてありませんか？」

佐東はまだ目を覚ましてないからな。あいつの代わりに謝罪するのは直属ではなくとも、上官の役目だ。

「あ、いえ。ちよつとびつくりしたただけで、怪我とかはしませんでしたよ」

と、くすくす笑いながら言った。

あの悲鳴は、ちよつとどころの騒ぎではなかったように思うのだが、ウィッチが目前に墜落してしたのだから当然だ、穩便に済ませてくれるということだろうな。アメリカさんが優しい人ではなかった。

「それはよかった。では、お忙しい中大変だとは思いますが、当面必要な物資のリストを作っていただけですか？扶桑皇国陸軍は、今回の一件の謝罪も含めて、しばらくは可能な限りの援助を行うとのことでしたので、要望をいただければそれにそつた物資が届くと思われま

そう言うと、リネットさんが、

「そうですね、ペリーヌさんと相談して、今日明日中には作りたいと思います」

と答えてくれた。

「了解しました。どれぐらいの物資が届くのかわかりませんが、微力ながらガリア復興にお役立ていただけたなら幸いです。それでは、失礼します」

自分はそう二人に告げて、キッチンを出ていくのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その九

「ひよつとして中庭に吊るされてる鹿って初美さんか狩ってきたやつなんですか？」

「アメリカさんは、きのこ汁を飲み終わると、そんなことを訪ねてきた。」

パンに味噌汁はあまり合わないが、今までの食事を思うと、出汁の効いたスープというだけで、十分に贅沢なのだろう。アサリやシジミの味噌汁ならパンにもあうのだろうか。

リネットさんはそれなりの量を作っていたはずだが、ほとんど底をついてしまっていたくらいだ。

「そうですよ。これから解体して、燻製なり保存用にしておこうかと思えます。ヒレの部分なんかは、とっとと焼くなりして食べたほうがいいですけどね」

「それじゃあ、今日のお昼ご飯は、鹿肉のステーキですね」

と、リネットさん。心なしか声も弾んでいる。

「ええ、よろしくお願いします。自分は、昼食を終えたら、あたりを哨戒してから荒れた畑の手入れを手伝おうかと思っています」

味噌汁を堪能しているペリーヌへ視線を移すと、彼女は小さくうなずいて、

「よろしくお願いしますわ、初美さん」

微笑みながら答えた。

「わかった。できる範囲でやらせてもらう。陸戦ユニットがあればありがたいのだが、B1はあるだろうか」

「さすがにありませんわ。あっても私達では手に余るものですし」

まあそうだな。八九式中戦闘脚ぐらいならあまつてははずなのだが、さすがに扶桑陸軍に頼むのもおこがましいだろう。

「では、自分はそろそろやることがあるので失礼します」

残りのパンを口に入れて、席を立つ。

「あ、それからリネットさん。味噌汁一杯、いただけますか？」

自分は、味噌汁の入ったマグカップ片手に、食堂を出て佐東が熟睡してるだろう客室へと向かう。

とりあえず、奴を起こして基地に帰らせなければならぬからだ。だん、と勢いよく客室のドアを開けると、部屋は異様に酒臭かった。相当呑んでいたのだろう。

枕元のテーブルにカップを置いて窓を全開に開けると、冬の肌を切り裂く空気が、酒臭い部屋のよどみを消し去っていく。

そして、高いびきをかいて佐東は、ベッドの上で白人めいた栗色のロングヘアを、これまた白人のように豪華な体にかませながら寝乱れていた。

見た目こそ、男どころか女でも放っておけないウィッチだが、ご覧の通り部類の酒好きの上に酒癖がわるい。いわゆる残念なウィッチが彼女だった。体をそつとゆする。下手な起こし方をしては、嘔吐してしまうからな。

本当ならぶん殴って叩き起こしたいのだが。

「おい、佐東。目をさませ」

「うう……」

うめくだけで、起きる気配はない。

「起きんと営倉行きだぞ」

起きなくても営倉行きだろうがな。

ともかく営倉という単語に反応したのか、眉間にしわを寄せて上体を起こした。

「ぬ……う、んあ、少尉？」

寝起きの上に酒にやけ気味なのか、ガサついたダミ声だった。

「起きたか、佐東。きのこの味噌汁だ、飲め」

そう言っつて、彼女にカップをつきつける。

「ありがとう、あきらちゃん」

カップを受け取り、両手で包み込むように持つてず、とすする。

「あきらちゃん、これ……」

目を丸くして、ぐい、と飲んでいく。

ブリタニア人が作ったとは思えないぐらい本格的で美味しいのだよなあ。

「これ、あきらちゃんがつくったの？」

酒で荒れた声落ち着いて、蜂蜜のような甘い声音が戻ってきた。

「まさか。元501のリネット・ビショップ曹長だ。あとでお礼を言っておけよ」

自分は、備え付けの椅子に腰を下ろして足を組む。

「へえ、これをブリタニア人が。たいしたもんだねえ。これだけ美味しく作れるなら、すぐにでも嫁にいけるよお」

「味噌汁の話はいい。佐東、なんで、貴様がここに寝かされていたかわかっているか？」

眉を寄せてうーんと唸り、

「ひよつとしてわたし、やっちゃった？」

記憶がとんでいるらしい。墜落のショックが原因かもしれない。

「やった。盛大にな。ここはクロステルマン邸で、貴様は中庭に墜落した。中庭では、クロステルマン侯爵のご友人のアメリカ殿が風呂に入っていた。これ以上の説明は必要か？」

「ずず、と残りを飲み干して、ため息をつき、

「わたし、また営倉入りかなあ」

酒癖の悪さで、何度かぶちこまれてるからな。次やったら降格だの除隊だの、いろいろ上からいわれているらしい。

「恐らくな。本当にいい加減にしないと、厄介払いついでに最前線に叩き込まれても文句は言えんぞ」

「自由に酒が飲めるなら、いっそそつちの方がいいかも」

最前線で、そう簡単に酒を呑めるものか、と考えたところで、思い出した。

ああ、一箇所だけ呑める場所があったか。

「アフリカのストームウィッチーズになら一筆送ってもいいぞ。あちらのブリタニア軍にはコネがある。おまけにあの辺りは扶桑陸軍の縄張りだ。向こうの隊長もヒガシだし、同じヒガシ同士、存外気があ

うかもしれん」

にや、と笑う。

「あ、さすがにアフリカはちよつと」

「いやいや、遠慮なんて貴様らしくもない。あつちは酒も飲み放題と
きくぞ。おまけに貴様は夜間ウィッチだ。大歓迎間違いなし。太鼓
判を押してやる。黄疸でるまでのんだくれるといい」

「……ごめんなさい」

しおらしく頭を下げる。

「わかればいい。貴様の営倉入りを控えるよう進言はする。ただしそ
れには条件がある」

「なんですか？」

「自分がさる任務でこの地にいるのは知っていると思うが、自分は一
月もしない間に、別の任務につくだろう。その後、貴様が自分の代わ
りにここで復興作業を手伝う。それでどうだ」

「義勇兵としてパ・ド・カレーに着任しろということ？ ネウロイの相
手は？」

「そういうことだ。ネウロイの相手してもらおう。酒とは縁遠いかも
しれんが、アフリカよりはましだろう。悪い話ではないと思うが」

「うん、お酒がないのを除けば悪くないね。あきらちゃん、侯爵のこと
気にいったの？」

「気に入ったのもあるが、ここがもし扶桑だったらと考えるとな」

鹿を狩る時に上空から見た、農地の様子を思い返す。

パ・ド・カレーの葡萄畑が、扶桑の田畑だと思つと。

邸宅や領民達の家が、扶桑の屋敷や家屋だと思つと。

「手前勝手な話だし、ここ以外にも荒れ果てた土地は多い。全てを助
けるのは無理だ。それでも、今日の前にあるものだけでも助けたいと
思うのは罪ではないだろう」

「あきらちゃん……」

「そういうわけだ。その桶の水で顔を洗って、しゃんとした頭にな
ったら付き合ってもらおう。ペリーヌと顔つなぎだ」

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の
巻 その十

「扶桑皇国陸軍欧州義勇兵所属、佐東健子准尉です。昨晩はご迷惑をおかけしました」

執務室に着くなり、佐東が開口一番発した言葉がこれである。珍しく、きびきびとした言葉遣いに驚き、思わず彼女の顔を見てしまう。「怪我はありませんの？」

ペリーヌは、墜落について文句を言うよりもまず先に、無事かどうかを確認した。家屋に被害がないのだからというのもあるのだろう。「はい、もちろんです。ネウロイに撃墜されたわけじゃなくて、ちよつとへまをして墜落したぐらいなら怪我なんてしませんよお」
へらへらと笑いながら答える。

どうやら、真面目だったのは最初の一言だけだったようだ。すぐ普段通りに戻ってしまった。緊張感があるのかないのか……。

「そ、そうです。それで、これからの予定は？」

佐東は、扶桑皇国のウィッチでは珍しい性格なので、ペリーヌは少々面食らってしまったらしい。

彼女の表情は、まさに鳩が豆鉄砲を食ったようだった。

「とりあえず昼まで酒が抜けるのを待って、午後には帰らせるつもりだ。佐東、鹿の解体はできたよな」

と、自分が今後の予定を説明する。

「あきらちゃんにたたき込まれたから、やりたくなくてもできるよお」
ほんと一言多いな、こいつは。肝っ玉の太さでは、あの基地で一番なんじゃないか？

「中庭に下げているから、昼までにやっておけ。それがおわたら基地に帰投。それから、人前ではあきらちゃん禁止だ」

「了解したよ、あきらちゃん。それじゃ、解体してくるねえ」

そういって、まるで蝶のようにふわふわとした歩き方で出ていった。

禁止と言ったそばからこれである。

「すごい方ですね、佐東准尉」

「ああ見えて、哨戒の腕はいいんだがなあ」

腕を組んで、うーんとうなってしまう。

「ペリーヌならわかると思うが、自分は506の隊長が本決まりになる少し前、おそらく一ヶ月後にはここを離れることになる。そのあと、あいつを自分の後釜に据えようとおもっていたんだが、どう思う？」

「あの方、腕は確かですね？」

「哨戒任務においては、昼夜問わずに折り紙つきだ。あいつ一人で二人ぶんの働きはする」

断言した。

佐東は、エーススイッチで戦闘技術も標準以上のものは持っているが、それ以上に哨戒がずば抜けていた。

生来目の良さも一因なのだが、とにかく観察力が常人離れしていた。

目付けのよさが並外れている。

どうやら、固有魔法のおかげでもあるらしいのだが、本人があの子なのでどんな固有魔法をもってるのか、本人もまわりもまったくわからないのだった。

「ただ、酒癖がな。酒乱ではないんだが、妙に気が大きくなりすぎて、色々盛大なポカをやりがちなんだ。で、営倉入りを何度かやらかして、次にやったら厄介払いにどこかのJFWに放り込むとか言われてなあ」

「はあ……JFWを問題児の矯正施設か何かだと勘違いなさってませんこと？」

こめかみを抑えながら言った。

「イエーガー大尉とルツキー二少尉を思い出すか」

つい、喉の奥で笑ってしまう。

「宮藤さんやエイラさんもです！ まったくもう」

「それで、どうする？ 合格なら早々に扶桑陸軍へ所定の手続きを要

請するが。まあ、一度会っただけじゃ判断はできないだろうが」

「合格ですわ」

「は?」

即答に言葉を失う。

「ですから合格と言ったのです。初美さんの眼鏡にかなったのでしよう?」

「確かにそうだが、いくらなんでも即決にすぎないか?」

「性格はその次で構いませんわ。パ・ド・カレーには、復興を手助けしてくれるウィッチが必要ですよ」

そんなことを言っていると、仮にウィッチが集まったとしても502のような愚連隊みたいになるぞ。

まあ、ペリーヌなら存外、まとめられるような気もするが。というより、予定されている506のウィッチに比べたら、大抵のウィッチは御し易いか。

「わかった。ではその旨を連絡しておこう」

自分は、そう答えて所属基地へ無線で連絡を取るのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の
巻 その十一

「ええ、自分の後任を、佐東准尉に任せたいのです」

自分は、執務室の無線で坂井基地司令に連絡をつけ、佐東の今後についての進言をしていた。自分がパ・ド・カレーをはなれた後のことについてだ。

『つまり、あきらがパ・ド・カレーをはなれた後の扶桑の義勇兵を、佐東准尉に任せたいというのね？ それはこちらとしても願ったりかなったりなのだけど』

と、坂井司令は奥歯に物が挟まったような物言いであった。こちらからの提案は、佐東の処遇について渡りに船だったのはそうだろうが、やはりひっかかるものがあるようだ。

そりやそうだろう。問題児を他国へ義勇兵として送り込むのだから、思わない方がおかしい。

「佐東の後任、すぐにでも扶桑から呼べるよう話は通してますよね」
すでにやっている、と確信しているが、念のためにそのあたりをついてみる。

『実は、《死神》あがりのヤツが一人補充される手筈にはなっていたの。で、かわりに佐東を本国に戻す予定だった』

これはなんと！

思わず感嘆の声が出かかってしまった。

「《死神》！ 第四二統合戦闘飛行隊ですか！ よくあの部隊出身のウィッチを捕まえられましたね」

司令が、いくらその手の根回しに長けているとはいえ、まさかあの部隊出身者を引っ張ってくるまでになったのか。まあ、偶然ーいやいや、偶然だとしてもたいがいだ。

さすがにこの人の手腕、化け物じみて来たぞ。

『負傷で扶桑に戻って来てたのが一人いたの。でもそのウィッチ、上がり間近で《死神》に戻るのもむずかしかったから、そこを私が拾い

上げた格好よ。これは運が良かっただけね。しかし初美」

「なんですか？ 坂井司令」

『クロステルマン侯爵は、本当に佐東でもいいって言ってるの？ JFWに放り込むのとはわけが違うのよ』

司令、統合戦闘航空団をなんだと思ってるんだ。

「ええ。構わないと言ってます。なんなら、ご本人から直接聞きますか？」

自分からの進言だけでは納得できないし、決定してはならない。ペリーヌ本人からの言質が必要だ。

『うーん……お願いするわ』

司令にそう言われて、自分はペリーヌに声をかけた。

「ペリーヌ」

「なにかしら」

「扶桑陸軍の坂井少佐が、佐東の件について尋ねたいことがあるそう
だ」

「わかりましたわ」

無線をペリーヌに明け渡した。

「はい、わかりました。こちら自由ガリア空軍、ペリーヌ・クロステルマン中尉ですわ、はじめましてーいえ、こちらこそ、基調なウィッチと支援物資を届けていただき、感謝しておりますーああ、その事ですか。問題ありません。やることをやってさえいただければワインを週に一度、ひと瓶差し上げてでもいいくらいでーはい、それについては今日明日には改めてリストを送らせていただきますーはい、それでは」

司令との話は終わり、佐東准尉の件も収まるべきところに収まったのだろう。無線を切ると、

「初美さん、なんですか？ 《死神》って」

と、ペリーヌがもつともな疑問をなげてきた。

そりや気になるよなあ、などと思いつつ、

「第四二統合戦闘航空隊のことだな。あそこは、扶桑皇国陸海軍とオラーシヤの共同部隊なんだが、四二という数字が扶桑では忌み数で、

死を意味していて、所属する兵士の士気がガタ落ちだったんだ」

「それは五〇一にいた時に、坂本少佐から聞いたことがありますわ。でもそれがどうして《死神》になりますの？」

「当時大尉だった、《魔のクロエ》こと黒江綾香殿が同部隊隊長に着任早々こう喝破したんだそうだ。『我々は死に部隊ではない、ネウロイに死をもたらす死神の部隊だ』とね。その一言で、下がりきっていた士気がいきなり跳ね上がって、今では所属する隊員全員が、胸を張ってエムブレムを掲げている。扶桑軍全体でも有数の士気を誇るエリート部隊だ。今では、扶桑軍では忌み数だった四二も、吉数として好まれてる」

「そんなことがありましたのね」

「で、あの司令、そんな部隊を出身とするウィッチを一名確保したものだから、そりゃあ驚くというものだ」

「支援物資の件といい、随分とやり手なのですね、坂井少佐は」

「航空ウィッチから主計科いって、そこから司令になった変わり種なのだが、おそらくあの基地、司令がいなくなると途端に立ち行かなくなるな」

「そんなに……でも、助かりましたわ、初美」

「何がだ？」

「佐東准尉の件です。私、初美さんがいなくなってからのことをどうしようかと、考えていましたの」

いや、自分もここにきたのは昨日の今日だぞ。いやあ、と頭をかきながら、

「困った時はお互い様、だな。では、そろそろブドウ畑にいつてくる」
そう言って、自分は執務室を後にしたのだった。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その十二

「いやあ、助かったよ魔女さん」

ぶどう畑の管理をやっている初老の男性ーエルマンが、満面の笑顔でそう言った。他の農民たちも、やたらと笑顔でみているこっちにまで笑顔が伝染してしまう。

「これをやりに来たようなものですから、役に立たないと話になりませんよ」

自分はそう返した。

これ、とはぶどう畑の再建であった。

畑の修繕に必要な材木やワイヤーなどの材料、およそ三百キロを一人で軽々と運び、魔力のこもった小太刀の一閃で材木の皮を落とし、ノコギリで常人の数倍の速度で加工し、乾燥させておいた材木を手裏剣で鉋がけまでやるのを見て、農家の人達は目を丸くして驚いていた。

そして、その手際を見て、彼らもやる気を奮起して、年頭の寒い時期にもかかわらず、額に汗して働き出していた。

自分がやった木材加工の技術は、何かにつけて役に立つから覚えろと師匠に叩き込まれたものだ。その当時は、こんな技術なんて役に立つはずがないと決めつけていたのだが、よもやこんな遠き異国の地で役に立つとは思ってもよらなかった。

師匠曰く、忍びはなんでもできなければならぬ、だ。

実は、扶桑を旅立つ時に明かしてくれた事だが、その言葉は半分冗談みたいなもので、自分ほどではないにしろ、なんでもこなそうとする人間はお前が初めてだと言われたものだ。だからこそ、師匠は自分を時期宗家と認めてくれもしたのだろうか。

なんにせよこうやって役に立ったのだから、学んでよかったと思える。師匠には感謝だ。

とはいえ、自分の助力などそう大したものでもない。魔法力を持た

ない人たちよりはよほど仕事ができるが、ウィッチ一人の力などたかが知れているのだ。

こういう事は国の協力があって初めて目に見える形で成果が出てくるし、ウィッチ一人が復興の手伝いをするよりも、この土地に十人でも住むようになればそちらの方がよりパ・ド・カレーのためになる。

それが本当の復興というものだ。

結局、今自分達がやっていることは、自己満足とその場しのぎの励ましでしかない。

「それでも、大したものですよ。正直申しまして、わしら、最初は魔女さんには何の期待もしておらんかったです。ところが、手伝いに来て下さった魔女さんたちは、皆さん土仕事で汚れることも厭わずにやって下さった。今はほとんどが戻ってしまいました。こうして初美さんのように来て下さる魔女さんが、まだいて下さる。それだけでわしら、ありがたいのですわ。なのになら、魔女さんがたには何もお礼ができない。それが口惜しゅうて口惜しゅうて……」

いつの間にか、エルマン氏の後ろに何人もの農民たちが集まっていた。被っていた帽子を脱いで胸に置いたり、胸に手を当てたりしている。

そうか、この人達は自分達がいるこの土地がどういう場所なのかわかってないのか。そして、それが自分達ウィッチにとつてどんな意味を持つのか知らないのか。

自分は、彼らの視線をすべて受け止め、エルマン氏をはじめとした農民たちに向けてこの土地の意味を説明するために口を開く。

「義勇兵としてやってきた理由は、ウィッチそれぞれにあると思いません。それに関しては自分はわかりません。ですが、ここにきて復興の手伝いに来ているウィッチ達は、少なくとも一つだけあなた達からもらっているものがあります。そして、それは私達が戦う理由の一つでもあります」

目をつむって一呼吸おき、

「それは、この土地で営んでいるあなた達の生活です。この土地は、自分達人類が初めてネウロイから取り戻した土地です。そこであなた

達は日常の生活を取り戻そうとしている。それが、自分達がやってきたことの成果です。

明日のこともわからずネウロイとの果てが見えない戦いに身を投じている私達にとつて、ネウロイの支配圏を取り返したその土地がどうなるのかなんて、現地に行かないかぎりわかりません。そんな私達が、義勇兵として復興作業に参加して、自分達がやってきた結果を知り学びます。そして、この土地での経験を何よりえがたい希望と喜びとして心に刻み、また戦場に戻っていきます。この経験は、部隊のみんなに伝えられて戦場のウィッチ達の励みとなります。それはとても大切なことなのです。ですから、どうか気に病まずにいて下さい」自分の言葉で、みんなが果たして納得できたのか疑問ではあるが、何人かが涙ぐみ、目頭を押さえていたのは事実だった。感謝の涙かもしれない。喜びかもしれない。

だが、あなた達が自分の生活を営むだけで、私達ウィッチにとつて戦うことの本動力となる。あなた達の生活は私達の希望なのだ。感謝したいのは自分の方である。

戦争という非日常の生活の中にいる大半のウィッチ達にとつて、日常の生活は守るべきものであり、憧れの一つだ。

「ああ、でも、手土産に出来ない年のワインでいいですから一本ほど頂けたら、私達もなおむくわれると思います。酒は、軍において金銭よりも貴重なものですから」

自分は思い出したように付け足した。せめてこれぐらいは役得がないと可哀想だろう。

それを聞いて、農民達は大声で笑った。

「それはそうですね。ネウロイにやられたとはいえ、戦禍を逃れたワインはやまほどあります。奴ら、ワインに興味はないようですから、今後はワインを一本、お渡しすることをお約束しましょう」と、エルマン氏。

どうやら、これで彼ら農民達の中にあつたわだかまりのようなものは解消できたようだ。

そうしてまた笑いあうと、自分達はまた作業を再開するのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の
巻 その十三

自分が農民達と一緒に畑仕事に精を出している中、佐東准尉は結局昼過ぎまでかかって鹿の解体作業を終え、昼飯をペリーヌ邸でいたのだのち、隼で所属基地へと帰還したという。すこしばかり時間がかかりはしたが、それだけに丁寧な仕事だったらしい。

そんな話をアメリーさんから聞いてどんなものかとキッチンに向かうと、各部位ごとに綺麗に切り分けられて冷蔵庫の中におさめられていたものだから、たいしたものだ。

キッチンでは、ちょうどリネットさんが鹿肉の調理に取り掛かろうとしていたところだった。片手に肉叩きを持っているので、おそらくステーキにするつもりなのだろう。

「ローストしようか、煮込もうか悩んでたんですけど、新鮮ですし、せっかくだからステーキにしようかと。筋張っていて獣臭いですが、柔らかいところを選んで叩けば柔らかくなりますし、ニンニクと香辛料を使えばかなり美味しくなると思うんです」

話を聞いただけで腹の皮と背中がひつつきそうになってくる。

「いいと思います。料理のことはわかりませんが、リネットさんのことですから美味しく作ってくれると期待してます」

そう、自分は料理はからきしなのだ。米を炊くぐらいはできるが、細かな味の調整が必要な料理はからつきしだった。自分が料理をできない理由も、単純に練習してないからだと思うのだが、それにして、忍びはなんでもこなせという師匠も、実は致命的に料理が下手だった。そんな理由だから、料理上手な人は尊敬に値するのだった。

「そんな。あきらちゃんだって、練習すれば上手になるよ」

ううむ、料理するのはうまいにこしたことはないな。

「では、教えてくださいか?」

「うん!」

にっこりと笑んで頷く。

るさしすせそも教わった。ブリタニア人にそんなことを教わるのもどうかと思うが。

というか、煮物に砂糖を使うのか！

そりゃ、すき焼きに砂糖使うのは知っていたけど、まさか肉じゃがなんかにも使っていたとは。

味噌汁にしても煮立たせてはいけないとか聞いたこともなかった。

こうして料理を教わりながらも、他にも色々面白い話を聞かせてもらった。501統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズのこと。

ミーナ隊長をはじめとした、精鋭達の人となりや活躍の話。

そして夕食ー

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その十四

「まあ、初美さんがこの味噌汁を作ったの？」

ペリーヌが、スープ用の皿に盛られたジャガイモと玉ねぎの味噌汁をみて声をあげた。早速とばかりにスプーンですくい、一口。

「美味しいですわ。出汁も初美さんが？」

「いや、さすがにその辺りはリネットさんにやってもらった。出汁の取り方すら、自分は知らないからな」

「でも、初めてなのに包丁の扱いとかとても上手でしたよ。これなら、すぐに上手くなると思います」

「でも、ちよつと風味がとんでますね」

と、アメリカさんが痛いところをついてきた。

「わかりますか。実は煮立たせてはいけないことを知らなくて、ちよつとやってしまいました」

「でも、十分に美味しいですわ。そして、これが……」

ぐびり、とペリーヌが喉を鳴らす。

「初美さんが狩ってきた鹿のステーキですか」

アメリカさんは、口からよだれをたらさんばかりだ。まるで大好物の餌を前にして、お預けをくらってる犬のようであった。

程よく焼けた鹿肉と、ニンニクの芳ばしい香り。ソースはあいにくとものがなかつたので、味は塩胡椒ですませている。シンプルな味付けだ。付け合わせも寂しいもので、キノコと玉ねぎのソテー。

ただ、大ききだけはそこのレストランなんかではでないようなものだった。さらに、肉厚。厚さにして二センチはあるだろうか。焼くのにかなりの時間を必要とした。

「では……」

ペリーヌは、ゆっくりとステーキにナイフをいれた。

自分もナイフを入れる。

すく、とさしたる抵抗もなくナイフはささり、切られていく。完全

に切ってわけると、桜色の肉が見える。そして、そこから肉汁がじんわりと滲み出てきた。思わず自分も喉を鳴らしてしまった。

一口ぶん切り分けてニンニクのスライスと一緒に口へ運ぶ。

ニンニクの香ばしさと肉汁の旨味が、塩胡椒と重なって口の中いっぱいに広がった。

うん、これは美味しい。ただただ旨い。若干の獣臭さはあるが、その風味も肉のうまさをなお引き立てている。

「んんんんんん」

三人とも鹿肉のうまさに感動してうなっている。本当に久しぶりの肉なのだろう。

そして、美味しいとか感想を言う時間も勿体無いと、次々とステーキを口に運び、水を飲み、パンを口に運び、味噌汁を飲む。

まさに一心不乱だった。

ちやき、ちやきと小さな食器の音と吐息だけが食堂を満たす。こんなに喜んでくれるなら、鹿の命も報われるだろう。

出された料理ーとはいえ、ステーキとパン、味噌汁と食事の内容としては質素な部類なのだがー全て四人の胃の中に収まるのに、それほどの時間を必要とはしなかった。

「はあ……」

口々にため息を漏らす。

頭がぼわあつとして、緩やかな幸福感が脳を支配していた。まるで夢の中にいるようだ。自分でさえこうなのだから、久しぶりに肉を腹におさめた三人はもつと凄いのだろう。

「ご馳走様でした」

自分が一言呟くと、釣られたように他の三人も、

「ご馳走様でした」

と、食事が終わったときの挨拶をする。

「ああ、ところでペリーヌ。一つ聞きたいことがあるのだが……」

「なにかありませんか？」

「なにか、と言うわけではないのだが、ネウロイの巢を撃破した時のことを教えてくれないだろうか」

自分が発したこの質問で、食後の和やかな雰囲気が一気に消し飛んだ。どうやら、自分は何かの釜の蓋を開けてしまったようだ。

自分は、興味本位で尋ねた。
本当にそれだけだった。

確かに、ガリアを支配していたネウロイの巢は排除できたが、その方法は501や作戦の関係者以外、誰も知らない。

だから、こうした和やかな空気の中で話す内容ではないかもしれないが、なんの意味もなく、話のネタとしてきいただけに過ぎない。

だが、ことはそう単純な話ではなかった。
いや、気付くべきだったのだ。

普通なら、英雄譚として世間に大々的に発表されるべきことが、どうして仔細詳しく報じられていないのか。

それにはちゃんと理由があつたのだ。

「いつか聞かれることとは思っていましたが、それが今、ですか。油断しておりましたわ」

「ペリーヌさん……」
リネットさんが不安げにペリーヌを見つめ、アメリーさんはうつむいて視線を隠す。

「隊長からは、聞かれたら答えてもいいと許可は出ていますわ。それに、どうせブレイブウィッチーズに情報は渡ってます。全てが知れ渡るのも時間の問題」

「そんな重大な機密なのか？ ひよつとして、その時の戦訓が周知されないのも……」

「ええ、そういうことですわ、初美さん。あのとき何があつたのか、教えてさしあげます」

事の顛末——つまり、ウォーロックに乗っ取られた空軍赤城を撃破する事で完遂された人類初のネウロイの巢の撃破は、マロニー空軍大

将によるストライクウィッチーズ解散命令から説明された。

ネウロイのコアを用いて作られたウォーロックと呼称されるその兵器の到来と同時に、マロニーは基地に現れた。そして直後、彼女たち

ストライクウィッチーズは、解散命令を受ける。そしてその翌日に

は、基地の退去を命じられたという。

それはまさに急転直下の出来事だった。いやもおうもなく、翌日にはウイツチ全員基地から追い出され、ウォーロックによるネウロイの巢の撃滅作戦が実行に移される。

ネウロイの巢自体はウォーロックにより撃破されるが、その直後ウォーロックが暴走。沈没していた扶桑皇国海軍の空母赤城をのつとりネウロイ化。

シールドの強度が高い宮藤軍曹と攻撃魔法を使えるクロステルマン中尉、それにルツキー二少尉が突入。ルツキー二少尉が突破口を開き、途中の障害をクロステルマン中尉が破壊し、最終的には、宮藤軍曹によるコアへのストライカーユニットの投下によりネウロイ化した赤城の破壊に成功。

これにより、ガリアを支配していたネウロイの巢の完全消滅となった。

「というわけですわ。ですから、そもそもネウロイの巢を撃破する、という作戦は我々ウイツチの手で行われたわけではないのです」

「なるほど。それで戦訓として周知されなかったのか」

こうしたことは、普通は戦訓として情報共有され、次にネウロイの巢を破壊するときの参考とするのが普通であった。

だが、東部第三十三部隊がいくら調べても、概要すら流れてこない。自分にもその手の情報を探れ、と指令は出ていたのだが、本国も半ば諦め気味で期待はしていなかったようだ。それについては命令が来ただけで、経過報告の要請すらない。命令を出した本人も、あきらめているらしい。

だから、自分もすっかりその任務のことを忘れてしまい、ペリーヌの口から事の真相を聞いてから、ようやく思い出したぐらいだ。だいたい、こんな何気ない問い掛けで、中野学校が探っても得られなかった情報が漏れてくるとは思いもよらない。

「おまけに、ウォーロック製造のために、マロニーは色々は無茶をやりましたし。おおやけにできないのもそんなところに理由があるからですわ」

「そういうことか。この情報は漏らさない方がいいのか？」

「扶桑皇国に流しても構いません。言ったでしょう、この情報はすでにブレイブウィッチーズに流れてるって。恐らく、マンネルヘイム元帥やマンシュタイン元帥にもすでに知られている事でしょう。そして、各国のトップに知らされるのも時間の問題。もはや、秘匿している意味なんて微塵もありませんわ」

「わかった。では、扶桑には報告させていただく」

そして、この話を聞いて、自分は一呼吸置いてどうしても三人に言いたかった言葉を紡ぎ出す。

「話は急に変わるが、ペリーヌ、リネットさん、アメリカさん。先の作戦、よくぞ成功させてくれた。あの戦いに参加できなかったウィッチとして、心より感謝申し上げる」

そう言つて頭を下げる。

「突然ですわね。ま、自分の故郷を取り戻すためですし、当然ですわ」と言いながらも、ペリーヌは若干照れ気味だ。

「わ、私なんてそんな、ペリーヌさんに比べたら……」

と謙遜するのはリネットさんだった。

「え？ わ、私何もしてませんよ？」

そして、アメリカさんがびっくりして声をあげた。

「ワイト島分遣隊もあの作戦に参加していたのは知ってるんですよ。たしかに、ストライクウィッチーズに比べたら大した戦果ではないかもしれませんが。ですが、ワイト島分遣隊の活躍がなければ、ブリタニア本土がネウロイの攻撃にさらされていた可能性もあったのも事実です。ネウロイの侵攻を水際で止められたのは、ワイト島分遣隊の働きがあつてこそです」

「あ……えと、ありがとうございます」

正面からそう言われたことがないのだろうか。アメリカさんは若干目を潤ませていた。

「ふふ、流石は忍者なのかしら。きちんとその辺りの情報はおさえているのね」

「これが本業だからな。さて、自分はシャワーを浴びて寝るよ。明日

は早いからな」

「初美さん、こちらこそありがとうございます」

と、ペリーヌ。

「なに、自分ができることなどたかが知れてるよ。それより、領民たちが早く戻ってきてくれることの方が重要だ。その為の手立てはもう打っているのだろうか？」

「もちろんですわ」

「それでこそ領主様だ。では」

自分は、そう言って食堂を出たのだった。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その十五

ペリーヌから、ネウロイの巢破壊の顛末を聞いてから二週間の時が過ぎた。

その間に、フレイアー作戦によってグリゴリーの破壊も成功し、501の時とは違い、戦訓として情報共有され、これからのネウロイの巢の撃破に貢献することだろう。各国もネウロイの巢の破壊について具体的な作戦の構築に入っているだろう時期に差し掛かっている最中、自分はいも変わらず、ぶどう畑だの狩猟だのと復興のための農作業や狩猟に汗を流していた。

鹿、猪、兎など、とれるものはできる限りとって、燻製にしたりベーコンにしたりした。普段、リネットさんからは料理を教わっていたが、そんな彼女でもこうした保存食の作り方は知らなかったらしい。なので、自分はリネットさんに保存食の作り方を教えたのだが、教師に勉強を教えるようで、なにやら不思議なおこがましさがあつたものだ。

一応、解体のやり方も三人に教えようとは思ったのだが、あの三人が腹わたを見て食欲を保てるか疑問だったので取りやめることにした。

そして、いつも通りの農作業をやっていたときのことである。

エルマン氏が、自分にこう話しかけてきた。

「屋敷を修繕している職人さんから、初美さんがペリーヌお嬢様と仲がいいと聞いたので、ちよつとお願いというか、相談をさせてほしいんだが……」

ふむ。まあ、元々温厚で人のいいエルマン氏のことだから、悪いことではないだろう。どのような要件なのか聞くだけは聞いておこう。そう思い、

「ペリーヌのことですか？ 自分にできることであればいいのです
が」

それを聞いたエルマン氏は、嬉々としてこう言った。

「初美さんならそう答えてくれるとおもってました。我々領民は、お嬢様には大変良くしていただいているのはご存知かと思いますが、そのお礼をしたいのです。ですが我々にはそのすべがありません。どうかお知恵を拝借させていただけないでしょうか」

あー、そういうことか。ペリーヌのことだから、気にしなくていい、これは貴族の義務だと突っぱねるだろうな。もちろん、言い方は選ぶだろうが、さりとして、善意を突っ返すのはいかなものかとも思う。説他人の好意に弱い彼女のことだから、説得すれば案外簡単に折れるのだろうが、それでは少々面白くない。

となると、一つペリーヌを騙さにやらんわけか。

「なるほど。それなら、ひとついい案があります。そのための手はずは自分が整えておきますが、やってみますか？」

「ええー！是非にー！」

ここは、昨日、ブリタニアから戻ってきたばかりで大変だろうが、執事のあの方ージャンポールさんにも骨をおつてもらおうか。

しかし、ジャンポールさんを説得か。案外、ペリーヌを説得するよりこちらの方が大変かもしれないな。あの人も、領民たちの人のよさはわかっていいるだろうが、なにせ階級社会でずっと生きてきた方だ。

自分が考えているこんな無法に協力してくれる方があやしいが、まあ、とりあえず説得してみるか。

「ジャンポールさん、夜分遅くまでお疲れ様です」

その夜、自分は屋敷の廊下に置かれている調度品の破損状況をチェックしていた執事のジャンポールさんを見つけ、その声をかけた。

「おや、初美さん。どうなさいました」

自分の呼びかけに、ジャンポールさんは花瓶を手にしながら、こちらに向きながら柔らかな口調で言った。慇懃無礼とかそのようなこととはなく、温かみのある優しい声だ。

「ジャンポールさんは、クロスステルマン家に仕えて長いのですか？」

持っていた花瓶を小テーブルへ静かに置いて、何かを思い出すよう

に遠い目をしながら、

「はい。先先代の頃よりお仕えさせていただいております」

そう答える。多分、彼はその当時のことを思い出しているのだろう。

「では、ペリー……クロステルマン侯爵のことも」

侯爵を呼び捨てにしてももう半月も過ぎ、すっかり癖になってしまっていた。言い終わる前にぐつと飲み込んで言い直す。

「はっはっは、ペリーヌお嬢様のことは、お嬢様が許した呼び方で構いませんよ」

慌てて言い直した自分を見ておかしそうに笑い、自分がペリーヌと呼ぶことを許してくれた。長い間、貴族社会に生きてきただろう人の割には、随分と庶民慣れした方だ。

「申し訳ありません」

汗顔のいたりだった。

穴があつたら入りたい。

「ペリーヌお嬢様が赤子の頃からお世話させていただいております」

「では、今のペリーヌは、ジャンポールさんの目から見て、どう思いますか?」

「お嬢様はよく頑張っておられると思いますよ。ただ、ちよつと気を張り詰め過ぎているとお見受けしますが」

自分はしたりと頷いた。

「では、その負担、心労を少しでも和らげる腹案があるとしたら、ジャンポールさんはどうしますか?」

そう自分が切り出すと、それまで優しくかったジャンポールさんの目が真剣なそれにかわった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その十六

ジャンポールさんは、自分の話をバカにせず、熱心に耳を傾けてくれた。

その上でしばし熟考する。

そりやそうだろう、自分が提案し、やろうとしていることは、世が世なら領民達はなにをされても仕方のないことなのだ。

「ふむ、確かに初美さんのおっしゃるプランなら、お嬢様の気もいくらかは晴れるでしょう」

だが、その事を無視して、自分の計画に賛同してくれた。最大にして最難関と思っていた問題があつさりクリアされ、若干の拍子抜け感はあるが、そんなことは些細な話だ。

「しかしそうすると、リネットさんやアメリカさんにも話を通しておかないといけませんね。そちらは明日、私がやっておきましょう。初美さんは、領民の皆さんにご説明をお願いします」

「それでは、ジャンポールさん……」

「ただし、屋敷は今、あまり大人数を招ける状態ではありません。人数は十人ほどにさせて下さい」

「ええ、それは仕方ありません。彼らにもそこは我慢してもらいます。ですが、願いをした身でお尋ねするのも失礼かと思うのですが、こんなことをして本当にいいのですか？」

「かまいません。お嬢様の気が少しでも晴れるなら、その方が重要です」

そう言われて、自分は胸をほつとなでおろした。さて、この計画のためには、できれば一日ほどペリーヌには外出してもらわなければならないわけだがどうするべきか。

やはり、軍務としてしばらく出かけてもらうのが楽なのだが、自由ガリア空軍とは生憎っていうとはない。となると、501になるわけか。こちらにも知り合いのウィッチはいないが、《クバンの獅子》こと

ヨハンナ・ヴィーゼ少佐とは面識があり、彼女はバルクホルン大尉と懇意の仲と聞くし、ヴィルケ中佐とも顔見知りだという。それならば……。

翌日、自分は無線でスコルツェニー中佐に連絡を取った。作戦進行について定時連絡の必要はないため、状況の変化があつたときのみ連絡を入れれば良いことにはなっていた。

だから、今までスコルツェニー中佐には一度も入れていなかった。しかし、今回の一件ではヴィーゼ少佐と話をして伝手を作らなければならぬので、まずスコルツェニー中佐と話をつけて、ヴィーゼ少佐の所在を聞かなければならない。

そのために、自分はペリーヌが哨戒のために邸宅を出計らっているうちに、執務室の無線を使わせてもらうことにした。

なにはともあれ、スコルツェニー中佐に連絡を取るためだ。

現在、中佐は西部方面統合軍作戦司令部直属のはずで、司令部にいると思われるのだがはたして。

「こちら《くノ一の魔女》、西部方面軍作戦司令部、応答されたし。こちら《くノ一の魔女》——」

まったく、あの中佐め。こっぴड़ाかしいコールサインをつけてくれたものだ。おそらく、これで自分のコールサインはここには登録されてしまっているはずで、今後は何かにつけてこう呼ばれるのだ。若干気が重くなる。

呼び出してすぐに、むこうは返してくれた。さすがだな。

『こちら西部方面統合軍作戦司令部。《くノ一の魔女》のコールサインを確認した。スコルツェニー中佐から連絡は受けている。すぐに中佐を呼び出す』

若い男性の声で、若干声ははっている。新人だろうか。

「よろしく頼む」

そうやって呼び出すと、スコルツェニー中佐は数分とかからずに出てきた。

『待たせたな、《くノ一の魔女》』

「スコルツェニー中佐、お久しぶりです。それからこのコールサイン、

「どうにかありませんか」

『ムリダナ』

どこか平坦な発音だ。

JFW・O・Aのエイラの真似だろうか。

「中佐……」

『ごほん、うん、久しぶりだ。そちらの情勢はこちらに流れてきてるよ。初美くんもよくやってくれているようだね』

「たいしたことはしておりません、畑いじりをさせていただいているだけです」

『そういうことにしておこうか。で、わざわざきみのほうから連絡を入れてきたということは、そちらで何か動きがあったのかな？ それとも、何かお願いでも？』

「ありていに言ってしまったえば、後者です。ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐か、それが無理ならヨハンナ・ヴィーゼ少佐に連絡を取りたいのですが、現在の配属先を教えてくださいませんか」

『ほう。西の狼と連絡を取りたいということか。いよいよきみも統合戦闘航空団に入隊を希望する、ということか。いや、感心感心』

「仮に自分が入隊できたとして、あのヒゲメガネが自分を手放すと思えますか？」

『それこそありえないな。彼は君を抱え込んでま手放したくないようだからね。もてる女はつらいものだ』

「あんなのにもとても嬉しくはありません」

『ふ、はははっ！ 君もひどいな』

「ヒゲメガネの相手は中佐にお譲りしますよ」

「だいたいにして、むこうは妻子持ちなんだがな。」

『それは私も御免こうむるかな』

ひと笑いして彼女もひどいことを言った。

『で、どうしてきみがミーナと連絡を取りたいのか、理由を聞いてもいいかね？』

「ペリーヌ……ああ、クロステルマン侯のため、とだけ言っておきます」

『なるほど。彼女に気に入られたというのはどうやら本当のこのようだ。さすがはくノ一といったところかな?』

「最初は胡散臭そうに見られたりしましたけどね。で、どうなんですか?」

『うん、それはこちらで手を打っておこう。この通信が終わり次第、すぐにでも電話でそちらに連絡が入るはずだ。彼女、今は事務仕事に圧殺されそうになっているだろうからね。いい紛らわしにもなるだろう』

「中佐は事務仕事、大丈夫なのですか?」

『無論、私も書類に圧殺されそうだよ。私もいろいろやることがあるからね。君との会話はいい気分転換一つと、わかった。すぐに対応する。すまない、初美くんとの楽しい会話もここまでだ。呼び出しを受けた。ミーナ中佐の件はすぐに対応しよう』

「よろしく願います、スコルツェニー中佐」

『うん。それから最後に、きみ、私のことも階級抜きのファーストネームで呼んでくれないか? どうにも堅苦しくていけない。私の部下にもそう呼ばせているんだ』

つくづく自由人だな、この中佐は。

フォローしているだろう部下はさぞ苦労しているだろうな。

しかし、私の部下にも、か。自分のこともその扱いにしたいのだろうか。

「了解しました、オティーリアさん」

『んん、さん付けか。まあ、今はそれでいいか。では、失礼する』

そうして、スコルツェニー中佐一オティーリアとの無線のやり取りは終了した。

さて、次はあのデートリンデ中佐か。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その十七

電話の呼び鈴が鳴ったのは、オティーリア中佐との通信が終わって五分少し経ってからだだった。

二度、呼び鈴が鳴ってから、緊張を断ち切るつもりでままよと受話器をとる。

「はい、こちらクロステルマンです」

念のため、自分の名ではなくペリーヌの苗字で電話に出ると、

『こんにちわ。貴女が《くノ一の魔女》ね』

柔らかで通りのいい声を受話器の向こうから聞こえてきた。発音や声が明瞭に聞こえるのは、音楽を学んでいたからだろうか。

さすがはヴィルケ中佐といったところか。

「ええ、わざわざの連絡、感謝いたします。ミーナ・ディートリンデ、ヴィルケ中佐。それから、自分の呼び方についてお願いがあるのですが」

『なにかしら』

「苗字でも名前でも呼び捨てで構わないので、コールサインで呼ぶのはやめていただけませんか」

『あら、スコルツェニー中佐からは、貴女はスパイだから本名では呼ばないように、と注意されていたのだけど』

あの女め……。

困り顔の自分を思い起こしてニヤつているスカーフェイスが目に見え、浮かぶようだ。

「スパイはスパイですが、そちらが本業ではありません。自分は斥候、偵察を主にするくノ一です。その、へんな勘違いが一人歩きされるのは困るので訂正させていただきます」

『ふふ、わかったわ。では、初美さんでいいわね』

「ええ、もちろんです。これからもぜひそう呼んでください」

やれやれ、これからはコールサインで呼ばれるたびに訂正しなければ

ばならないのか。

仏罰にでもあたってしまえ。

『まずは、先の《ぎっくり腰》作戦についての話をさせてちょうだい。初美少尉、本作戰ではよくやってくれました。聞くところによると、貴君がいなければ、ブラウシユテルマーの位置さえわからなかったと聞きます。本作戰の大役をよく勤めてくれました。欧州の人間として、心より感謝します』

「ウィッチとしてやらなければならない事をしたまです。ですが、何故自分があのだ作戦に参加していた事をご存知なのですか？」

そう尋ねると、彼女はふふつと笑って、

『ヨハンナに聞いたのよ』

ああっ！ ヴィーゼ少佐か！

『たつぷり絞られたみたいね』

「汗顔の至りです」

『はあ……美緒もそうだけど、どうして扶桑の魔女はそうなのかしら。ふらふらふらふら、あっちにいたりこっちにいたりで、全く連絡よこさないし』

む、唐突に愚痴が始まったか。

「あの、ヴィルケ中佐」

深みにはまる前に声をかける。

『あっ！ ああ、そうね。ごめんなさい、初美さん。それで、ペリーヌさんの事よね』

慌てて取り繕うように本来の要件について話を振ってくる。

「はい。彼女のことについて、少々骨を折っていただきたいのです」

『どんなことかしら。506に関する事なら力にはなれないわ』

最初にそっちに話が振れるか。

中佐もよほどその件については悩まされているようだ。

「中佐、今回のことはその件ではないのです。」

単刀直入に言わせていただくと、ペリーヌをそちらに呼んで、一日でいいから邸宅を留守にさせてほしいのです」

『こちらって、ペリーヌさんをサントロンまで呼び出すの？ それは

構わないけど、理由を聞かせてくれる?』

まあ、そうなるよな。

「はい。只今、自分は義勇兵としてパ・ド・カレーの復興の手伝いをしているのですが、領民たちがペリーヌへの感謝を示したいがどうしてもいいだろうかと、そう相談してきたところから話は始まりますー」

『わかったわ、初美さん。でもどうして貴女がそこまでするの?』

もつともな質問だった。

ヴィルケ中佐は自分とペリーヌの出会いも今までのやり取りも知らないわけだから、当然だろう。

「いくつか理由はありますがそれはとるにたらない事。唯一にして最大の目的は、ペリーヌに心からの笑顔を浮かべてほしいからです」

『ふふっ、そういうことね。わかったわ、初美さん。貴女の要望をかなえます。スコルツエニー中佐の面目も潰しちやいけないし』

「感謝いたします」

『でも、これは覚えておいて。このことは貸しにしておくから』

「当然ですね。それでは」

『ええ、今度は顔を合わせて話をしたいわね』

「機会があれば、ぜひに」

そう答えて、受話器を静かに戻す。

さて、これで手はずは整った。

あとは、材料を手に入れるだけだが、それはカレー港まで出向かないと話にならない。

そして、それを手に入れる軍資金だが、これについてはあらかじめ陸軍より軍資金を渡されているので、それをあてるとしよう。もし足りなかったら……大道芸でもやって稼ぐか?

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の 巻 その十八

カレー港。

自分は、なぜか大道芸をやっていた。

飛んできた薪を一刀の元に切り、返す刀で割る。腕自慢の大男を柔でもって制する。手裏剣で缶を打つなど。

扶桑刀を使った芸が観客をわかせ、それがまた観客を呼ぶ。

そして、飛んでくる投げ銭、やんやんやの喝采とリクエスト、腕自慢の挑戦。

おかしい。

軍資金はあるのに。

ただ、食料を買いに来ただけなのに。

本当に、どうしてこうなった。

事の起こりは一時間前、遅めにとった昼食後の午後二時にさかのぼる。

「ブリタニアのフィッシュ&チップスは本当に不味いな」

自分は、ブリタニア流の不味いフィッシュ&チップスを無理やり水で流し込み、胃もたれしそうな腹具合のまま食堂を後にした。手頃な食堂が、あいにくとブリタニア人用のそこしかあいてなかったのだ。

「げっぶ」

抑えようとしたがげっぶが漏れてしまう。

そうして、食料関連の卸と市の場所は教えてもらったわけだし、そっちに向かうかと、人混みの中、腹を撫でながら歩こうとしたその時である。

「おら、とつとと乗れ！」

「うるせえ、わかってんだよボケ！」

明らかに事件性を感じさせる声が聞こえてくる。

食堂の左隣の路地からだ。

周囲の人間は厄介ごとに関わりたくないのだろう。知らぬ存ぜぬ

で無視を決め込んでいた。

死ぬかもしれないしな。当然だろう。

だが、自分はウィッチである。

力ある人間がやらなければならぬ義務がある。

「不味い飯の腹ごなしにゴミ掃除と行くか」

自分は、散歩でもするかのように気軽な足取りで声が聞こえた路地へと入って行く。通行人が、さすがに自分のような女の子が関わりに行くのはまずいと思ったのだろうか。

「やめろ、君みたいな女の子が係わり合っちゃあいけない」

と、背後から、いかにも港で仕事をしてます、という風体の大男が声をかけて止めに入ってくれた。

「大丈夫だ。こう見えても、自分はウィッチなんだ」

後ろを振り向いて、ニコツと笑い、周囲を魔法陣の青い輝きで照らしながら、使い魔であるムササビの耳と尻尾を出した。

「あ、ああ、ウィッチのお嬢さんだったか」

まあ、扶桑皇国陸軍の軍装は着ているか

今は階級章なんかは外してるしな。

「うむ。止めてくれたこと、感謝するよ」

耳と尻尾を戻して後ろ手に手を振りながら、路地へと足を進める。すると、ものの十メートルほど先が右への三叉路になっていて、そこでなにやらやっているようだ。

「なにをしているか！」

自分は、三叉路の入り口に立つと同時に、誰何の声を上げた。

そこでは、二人組の男がどうやら鍵をかけていなかっただろう倉庫に入り込み、でかい麻袋をふた抱えして逃げ出そうとしていたところだった。

一瞬あつけにとられた彼らだが、すぐに我を取り戻して持っていた麻袋を自分に投げ出してくるが、片手でそれを受け流して、

「やめておけ、ウィッチに見つかったのだ。大人しく捕まったほうが得策というものだ」

「うるせえ！ 耳も尻尾も生やしてないウィッチがどこにいる！」

二人が一緒になって襲ってくるが、自分は彼らのテレホンパンチを捕らえて、そのまま後ろへ投げ飛ばす。

派手に吹っ飛び、建物の壁に背を打ち付けてそのまま気絶してしまった。

相手がネウロイではなく、ましてや人間ならば、ざっとこんなものだ。

「お前たちごときなぞ、魔力を使うまでもないよ」

そう言っつて、路地から表通りに出たら、驚いたことに人だかりができていた。

「な、なんなんだこれは」

それから、自分は彼らに根掘り葉掘り問いただされ、忍者だということと鼻で笑われたのでそれを証明するために手裏剣を打って見せたらさらに人だかりができて、気づいたらこうなってしまった。

気絶した泥棒は、自分が色々人だかりに揉まれている間に警察が連れていったらしい。

そして、この投げ銭である。

本当に、これからどうすればいいんだ。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の
巻 その十九

どう見ても、投げ銭に少し足せば、買うべきものが買えるほどにまで大道芸じみたことをやらされ、ひいこらしているところに、見たこともない男性が人混みを掻き分けながら話しかけてくる。

グレーのスーツに身を包み、ネクタイはこげ茶地。モスグリーンのソフトハットを目深にかぶっていて表情は読み取れない。

「やあ、待たせたね。ちよつと遅れてしまったよ。まさかこんなところで芸を披露していたとはねえ。さあ、神秘のオリエンタルウィッチの大道芸はこれにて終了だ。散った散った！」

手を叩きながら集まっていた群衆に言い放つ。

出てきた言葉は綺麗なブリタニア語か。

見たことはないはずだ。少なくとも記憶にはない。

客たちは、口々に不平を言いながらも散っていった。

「あ、待ってたんですよ、中佐。まったく、こんなところで三時間も待たせるなんて、カールスラントの軍人が見たら驚きますよ」

投げ銭を適当に手持ちの袋に入れながら言った。

中佐と言ったのは、男がブリタニア語を操ること、それに、ちよつどこれぐらいの年かきの男性を噂で耳にしていたからだ。

その男はヒスパニア戦役時、ネウロイの監視を主とする任務に就いていたという。ブリタニア陸軍の士官学校を卒業したのち、海軍で諜報活動をおこなっているという人物だ。

「すまなかつたね、でもこうして約束通りにやってきたんだ。許してくれないか、初美あきら少尉」

言いながら、彼も小銭拾いをやり始めた。

自分の素性は先刻ご承知と言いうわけか。

「勘弁してあげますよ、イアン・フレミング中佐」

このまま、相手のいいようにされるのも癪だ。冗談交じりにそう言う

「ほう。いつ気づいた」

「当たり前だったか。どうして大物がこんなところをうろちよろしているかね。」

「まさか。当てずっぽうでしたよ。それで、NIDの大物が扶桑の末端諜報員に何の用ですか?」

「君に一言でも文句を言いたくてね。君のおかげで、506への工作が思うようにいかなかったよ。スコルツエニーにうまいことやられてしまった」

「自分は、ただパ・ド・カレーで鹿を狩って畑仕事をしていただけですよ。特別なことはなにもしていない」

「それは初耳だ。では、スコルツエニーは君をだしにして我々を翻弄したというわけか」

最後の一枚を自分の手提げ袋に入れて、立ち上がる。

「あの人がなにをしてくしたかは知りませんが、正直申し上げまして、統合戦闘航空団で国家間の綱引きは勘弁してほしいですね。彼女たちは、全員が我々ウィッチの代表であり希望だ。それを愚弄するような真似だけはしていただきたくない」

「やれやれ、これは手厳しいな」

と、中佐は苦笑を隠さずに言った。

「自国の利益を優先したいのはわかる。扶桑皇国もそうだし、その傀儡をやっている自分が言っても説得力はないが、ウィッチとしての誇りはここにある」

自分も立ち上がって心臓の上に手を置き、中佐の顔をにらみながら言う。

「個人的には、君の言わんとするところはわかるよ。だが、我々は諜報員だ。国のために動くのが誇りだ。が、まあ、こんな話をしても埒があかないな」

「終わりが無い論議ですからね。で、何の用ですか? 貴方ほどの地位の方が、自分の顔をただ見に来たとは考えられないのですが」

「君がここに来ているのをスコルツエニーから聞いてね。帰郷のついでにどんな人物かと顔を見にきた。実のところそれだけなのだ。自

分に苦杯を飲ませた人間がどんな人物なのか、この目で確かめたくないのが人情というものだ」

NIDの切り札も暇なんだな。

「それから君に朗報だ。506に扶桑皇国の枠が一つ用意されることになった。これはまだ、扶桑皇国にも伝えられていない情報だ。苦勞が報われたな」

中佐はぼん、と自分の肩に手を置いてどこかへ歩いていく。

「フレミング中佐……」

自分は、ただ彼の背中を見送るだけだった。

結局、自分はその後、問屋や商店を巡り、片っ端から必要な物資を購入していった。ずだ袋一杯に買ったものを詰め込むとぼんぼんになった。

買った物資は、豆やチーズなどを始めとして結構な量だがいつぞやの鹿よりは軽い。

ともかく、そうやって手に入れた荷物を抱え、木製疾風でクロステルマン邸へ戻った時には、夜の帳が下りていた。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 三の
巻 その二十

「アメリー、リーネさん、初美さん。昨日お話しした通り、私、今日明日はサントロンに行つてまいります。帰つてくるのは明日の夕刻ごろになると思いますが、その間、この事はよろしくお願いいたしますね」

そう言つてペリーヌが邸宅を飛び立ったのは日が出てかしばらくした頃だった。ヴィルケ中佐は、自分の願いを聞き届け、ペリーヌを邸宅から離してくれた。

個人的には、あの人への貸しで何を要求されるのか、想像もできないのでいささか不安ではあるのだが、ひとまず一日という時間は作れたわけだ。

自分たち三人はペリーヌが飛び立つのを見送ると、すぐに活動を開始した。

「男性の方達は、職人さんの指示に従つての作業をお願いします！」

アメリーさんが、中庭に集まった農園の男たちにそう声をかける。とはいえ、彼らも出来不出来の差はあれど、自力で石造りの家一つなら作れるのが大半だ。

今頃、キツチンでは女性たちと一緒にリネットさんが手の込んだ料理を作っているはずだ。

そして自分はー

「わざわざすまないな、佐東。今日明日はこの空域の偵察を密に行いたいのだ」

「事情はきいてるよ、あきらちゃん頼みなら断らないよお。恩返し恩返し」

呼び寄せた佐東と共に、パ・ド・カレーの上空の哨戒任務にあたっていた。まずはこの辺りの空に不慣れな佐東に、哨戒ルートを教えながらの飛行だ。

事前に聞いた話だと、偵察型ネウロイは数日に一度あらわれるとい

い、今日明日がそのタイミングなのだという。そして、出現する方向は、だいたいパ・ド・カレーの北側という話だったので、自分たちもその情報にならない、パ・ド・カレーの北を偵察する。

まあ、相手は偵察型だから、撃破するのもそれほど困難な話ではないのだが、何かあつてからでは遅いのも確かだ。したがって、自分たち二人はペリーヌやりネットさん、アメリカさんの分まできばらにやならんことになる。

もつとも、これも506が設立されたらあまり必要ではない行為になるのだろうか。

「そういえば聞いたよお、506、扶桑の枠ができたんだって?」

耳が早いな。坂井司令から聞いたのか?

「ああ、秘密裏だがな。今、本国では華族のウィッチの選定に大わらわだそうだ」

「でも、華族にウィッチっていたっけ?」

もつともな疑問だ。

確か明治初期、松平か徳川に一人ウィッチがいたのは覚えているが、その方はもう当然ながら上がりを迎えているしなあ。

「松平に一人、明治か大正にいたはずだが、もうくたばってるか上がりを迎えて久しいだろうな」

さりとて、皇女殿下にお出ましただくわけにもいくまい。

皇女殿下の御気性なら、むしろ喜び勇んで飛び出しそうな気もするが、さすがに周りが許さないだろう。それにそもそも、皇女殿下の魔力を受け止めるだけのユニットがあるかどうかとも怪しい。

海軍には、外交官の娘で優秀な艦載ウィッチがいるというが、扶桑皇国は外交官に華族をあてがっているわけではない。指揮官としても優秀な彼女は、むしろ508に呼ばれる可能性の方がまだある。

もつとも、その彼女は現在《死神》の隊長をやっているわけだが。「……あきらちゃん、十一時方向。仰角10度あたりかな。点が三つ、見えない?」

言われた方向を見ると、なんとなくそれっぽいなものが見えなくもない。

「む……ん、たしかにらしきものが見えるな。しかしあれを見つかるって、貴様、どういう目をしてるんだ」

たしかに三つの点を確認できなくもないが、それにしても全部針の穴よりも小さな点だぞ。

「んー、普通だと思うよお」

「あんなのが見えるなんて普通なものか」

自分はきつぱり言い切ってスロットルをあける。

「まってよあきらちゃん」

「相手は恐らく偵察型だが、万が一ということもある」

そう言って、耳のインカムを押さえる。

「こちら扶桑陸軍少尉初美あきら。パ・ド・カレー上空にて偵察型ネウロイ三機と遭遇、付近の航空機は注意されたし。繰り返す、付近の航空機は注意されたし」

少ししてノイズが入り、

『了解だ。連絡を感謝する。こちらヴァイス・フュンフ。サン・トロからは大型ネウロイを確認している。そちらの小型ネウロイは、どうやらこちらのネウロイから分離したものらしい』

これはこれは。確かにサン・トロとパ・ド・カレーは極端には離れていないが……。

「あきらちゃん、ヴァイス・フュンフってなあに？」

ああ、知らんだろうなあ、佐東なら。

一応世界二位の撃墜数を誇るウィッチのことなんだが。

「ゲルトルート・バルクホルン大尉。元501のエースだ。ついでに、相棒は四強の一人、エーリカ・ハルトマン。覚えておけ」

と言っではみるものの、これ以上関わりがなければ明日にでも忘れてしまいかねない。

こいつはそういう奴だ。

「了解した。こちらは自分ともう一人だ。これよりそちらの指揮下に入る」

『了解。そちらの位置を確認した。そちらは少し東に流れて、小型ネウロイを西へ誘導してくれ。それで、こちら的大型ネウロイ共々挟撃

にできる』

「了解、以上。佐東、回り込むぞ」

「わかったよ、あきらちゃん」

自分は、佐東を連れて東へと回り込みつつ近づいていく。

目標が針の穴から蝶ぐらいの大きさになった時、むこうもこちらに気づいた。

北へ動こうとするネウロイの機先を制して、砂糖が威嚇射撃を行う。この辺りのセンスはさすがだな。自分もあわせて威嚇射撃を行った。

「さて、バルクホルン大尉の命令だとこれでいいはずだが」

「あきらちゃん、あれ、あれが大型ネウロイだよ」

佐東は自分の軌道の内側に来て指差した。

その方向には、確かに大型ネウロイがビームを無造作に撒き散らしていた。

ビームが何かに当たって散らばっていないところを見ると、ネウロイは二人を捉えきれないのだろう。流石だな。

「こちら初美、そちらを視認した。偵察型を撃墜次第、そちらに救援に向かう」

「あきらちゃん、偵察機なら私一人で十分だから、あきらちゃんはむこうにいったって」

「了解したが、危なくなったらすぐに離脱しろよ」

「逃げ足は、あきらちゃんより早いんだよお」

「そうだったな」

まあ、佐東もあれで夜間哨戒の熟達者で、なおかつエースなのだから、言う通りたかが偵察型三機を相手にして遅れを取るはずもないか。

自分は、エンジンをぶん回して大型ネウロイ上空に移動し、「こちら初美。只今より上空から大型ネウロイにむけて急降下攻撃を行う」

こんなことを言わなくても、501のメンバーならアドリブにもついてきてくれるだろうが。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 三の
巻 その二十一

バルクホルン大尉にネウロイ撃墜の感謝を伝えるため、空中で停止している二人のそばに飛んでいく。

「バルクホルン大尉」

自分の呼びかけに、バルクホルンはすぐに反応して、隣でぼやいているハルトマン中尉を放っておいて自分をみる。

「ん、貴君が初美少尉か。協力を感謝する」

「いえ、こちらこそ感謝いたします。ペリーヌのいぬ間にパ・ド・カレーに被害を出しては騎士の名折れですからね」

「ペリーヌから話は聞いてるよお、ネウロイを攻撃した時、あきらの姿がはつきり見えなかったけど、あれが固有魔法の《迷彩》ってやつ？」

いきなりフランクにハルトマン中尉がきいてくるが、悪い気がしないのは人柄があつてのことだろうか。

「はい。これを使っている限り、そう簡単にはネウロイに発見されません。まあ、欠点として通信もできなくなりますが」

「電波の類いを特殊なシールドで遮断しているのか。だからネウロイに見つからずに攻撃できたわけか」

と、バルクホルン大尉。理解が早いな。

「そういうことです」

「あきらちゃん、そつちは大丈夫？」

佐東は随分のんびりと飛びながら言ってきた。

「准尉のおかげで無傷だ。准尉は無傷か？」

「当たり前だよ、あんなの相手に怪我してたら夜間哨戒なんてできないよお」

自分の隣にホバリングする。

ま、そういえばそうだよな。無事なのか訊くのは失礼か。

「そういえばそうだったな、すまない。バルクホルン大尉、彼女は扶桑

陸軍の佐東健子准尉で、パ・ド・カレーにおける自分の後任になります」

簡単に佐東の紹介をすませてしまおう。

「佐東健子准尉です」

陸軍式の敬礼をする。まあ、流石にそれぐらいはやるか。

「彼女が、パ・ド・カレーにおける自分の後任になります。いささか長く勤めることになるかと思われまますので、何かあった時にはよろしくお願ひします」

「了解した。ペリーヌのことはよろしく頼む。戻るぞ、ハルトマン」

「ほーい、んじゃ、またねー」

バルクホルン大尉とハルトマン中尉は、早々に基地へと帰投する。まあ、足が短いからな。早々無駄な飛行はしていられないんだろう。

「では、自分たちも戻ろうか」

「はーい」

案外、ハルトマン中尉と性格が合うのではなからうか、と思ひながら自分たちもこの空域を後にするのだった。

自分と佐東は、あれからすぐに邸宅にもどり、領民たちの手料理による、ささやかなながら日頃の感謝を込めたパーティの準備を手伝った。屋敷の修繕もわずかながらでも進み、応接室も数日あれば使えるようになるまでできた。

ペリーヌがサントロンから戻ってきたのは翌日の昼ごろで、領民達は多少慌てはしたものの、ジャンポールさんと一緒に彼女を出迎える。

ペリーヌは、唐突な彼らの出迎えと宴に驚き、どういうことかと執事に尋ねたり自分に詰め寄ったりしたが、それもエルマン氏の日頃の感謝の言葉で解決した。

というより、ペリーヌが大泣きして、話が出来ない状態になってしまった。

ペリーヌが落ち着いたところで宴は始まった。酒の入らないものではあったが、宴は賑やかに進み二時間ほどで幕を閉じた。

翌日、自分はペリーヌに八つ当たりじみた説教を小一時間ほどさ

れ、その後で自分のここでの役割が終えたことを報告。そのまま佐東に引き継ぎをしてパ・ド・カレーを離れる。

葡萄畑の上空を飛行した時、領民達は木製疾風で後にする自分を大声で見送ってくれた。

自分は、大きく宙返りをして返答の代わりとすると、加速して次の任地へと飛んで行ったのだった。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 外伝 1の巻

「それで、例の《くノ一の魔女》はどうだったのかしら？」

サントロン基地司令室、ヴィルケは、迎撃任務から戻ってきたバルクホルンとハルトマンにそう尋ねた。初美の願いも虚しく、旧501のカールスラント組の間ではコールサインの呼び方が定着してしまっていた。

「空戦の技量に関しての評価は、ヨハンナの報告通りで間違いはないと思う。おそらく、501でもやっていけるだろう。それと、特筆すべきは固有魔法だな」

と、バルクホルンは答える。

「《迷彩》、だっけ？ 凄かったよ。急降下してくる音は聞こえたけど、初美がネウロイとすれ違うまでどこにいるかわからなかったもん。多分あれ、エンジン音もある程度は軽減してるね」

ハルトマンが、身振り手振りで初美とネウロイの交差する瞬間を表現しながら、少しばかり興奮気味に後をついだ。

「戦力としてはどうかしら」

「典型的な扶桑の魔女だな。扶桑刀での戦闘を好むようだ。あてにはなる」

「でも、固有魔法を活かすためにはロツテ戦法は使えないよ。気にしないでいたら、僚機が初美のこと見失っちゃうもん。あれ使ってる間、通信できないし」

「基本、一人での運用を考えないとだめなのね。わかったわ、ありがとう、二人とも」

「再設立するときの501に入れるつもりか？」

「その方向も含めて考えてみるわ。周辺の統合戦闘飛行隊に配属させる線も含めてね」

「ということがあったんだよ、どう思う？ ペリーヌ」

食堂、ハルトマンは皿いっぱいフライドポテトを突きながら、隊

長から渡された書類に目を通して、ペリーヌに尋ねた。

ペリーヌは、先日ヴィルケ中佐よりサントロン基地への召喚命令があり、こうしてやってきていた。パ・ド・カレーには、リネットやアメリー、初美がいる。彼女たちになら安心して屋敷を任せてもらえる。

ハルトマン自身は、別に501に新規の隊員が増えようがどうでもいいー楽になるのなら大歓迎ではあるーのだが、チームの和が崩れるような面倒ごとは避けて欲しいとは思っていた。

トラブルメーカーなのに、トラブルを嫌うのが彼女だ。いや、トラブルメーカーだからこそ、と言った方が正しいか。

「そうですね……技術的に問題はないとは思いますが。人格的には、ちよつと問題あるかもしれないですけど、ルツキー二少尉に比べれば可愛いものです。私も、できることなら入って欲しいとも思います」

ペリーヌは、目を伏せ、書類を読みながら自分の感想を述べた。

「じゃあ、入った方が楽できそうだね、やったー!」

呑気に喜ぶハルトマンだが、それに水を差すようにペリーヌが付け加える。

「ただ、初美さんの編入は厳しいでしょうね」

書類を読む手を止めて、顔を上げながら言った。

「どうして?」

「実は私、初美さんにパ・ド・カレーと一緒にいて欲しくて、今回の任務が終わっても、継続して義勇兵として派遣してくれないかと扶桑陸軍に依頼したことがあります」

「それでそれで?」

「答えは、許可できない、でしたわ。初美さん、あれでも、私が想像していたよりも扶桑皇国陸軍の重要な位置にいるようで、直属の上官が彼女を手放したくないようなのです」

「そうなんだあ、ニンジャもきたら賑やかになると思ったんだけどなあ」

「扶桑陸軍、初美さんへのH M Wの招聘も断ったようですよ、あの方を

スカウトするのは502のラル隊長ぐらいのアクロバットを使わないと無理なんじゃないかしら。ま、それでも許可されるかは怪しいものですけど」

ブレイブウィッチーズ隊長、グンドユラ・ラルの強引なやり口はそれなりに有名だ。宮藤が501にくる前の年の暮れ、某所で501から503までの隊長（503は戦闘隊長だったが）が集まって、そのことについての会議があったぐらいだ。しかもそのとき、関わったものが後言しなかったため明るみにこそならなかったが、随伴としてヴィルケと一緒にやってきていたバルクホルン、ハルトマン兩名を、502の隊員がスカウトするという事件まで起こしている。

「で、どうなの？ あきらまって。どんな人なの？」

「ん、そうですねえ。責任感があって、気が利いて、何かにつけて尽くしてくれる方でしたわね。いささか短慮なところはありますけど、私、あの方のことは嫌いではありませんわ。ま、第一印象は最悪でしたけど」

「どんなことがあったの？」

「レイピアの指導をしてきたのですわ」

ペリーヌは、初美との出会いを思い出しながら、その時のことを語り始めた。

「なんですの、貴女！ やってくるなり、言う言葉が筋が悪いとか！」

ペリーヌは、同じガリア空軍所属のウィッチが居並ぶ訓練場で、侮辱にも等しい物言いの扶桑人に腹を立てて怒鳴り声をあげた。

ガリア空軍のウィッチたちは、彼女の突然の雷に驚いて、首をすくめたりその場を離れたりする。

ガリアをネウロイに占領されてからというものの、ペリーヌはまともに笑ったことはなく、毎日を怒りで満たして過ごしていた。

それ故、彼女はガリア空軍の中でも浮き気味で、遠ざける者もいた。「貴女を怖がって誰も言わないから、自分が事実を言ったのですよ、ピエレッタお嬢様」

「貴女、しかも私をその名前です！」

ペリーヌは歯を食いしばり、爆発しそうな感情を抑え込む。いつも

なら、すぐに手袋を相手の顔面に投げつけるところだが、今日の彼女は我慢強かった。

そう、にやけた顔で言った扶桑人。彼女が初美あきらであった。鬻のようなポニーテールの髪の毛と典型的な扶桑人顔。背は一六〇程度といったところか。きている服は扶桑陸軍の軍装で、腰には扶桑刀が下げられていた。

その扶桑人は続ける。

「レイピアに関しては門外漢ですが、試合は何度も見ているからわかります。顎が下がってます。顎を上げて、視線を地平線に投げるような感じにしないと、相手の全てを見られませんよ、ピエレッタお嬢様。敵の全てを視界に入れる。これは空戦においても重要なことではないのですか？」

ニヤニヤとバカにした風で長広舌を見せる。

「くうぬおー！ 一度ならず二度もその名で！ もう許しませんわ！

貴女！ 決闘ですー！」

「とまあ、こん感じでしたの。ほんと、最悪でしたわ」

その時のことを思い返し、ペリーヌは少しばかり気分が悪くなる。今でこそ初美は彼女に親身になって接してくれるが、あの時は本当にひどかった。

「それで、その決闘はどうなったの？」

「完敗でしたわ。勝負以前の問題でしたもの。いいようにあしらわれました。払われ、投げられ、持ち上げられ。しかも、私もあの人も怪我ひとつなし。後で知ったのですけど、あの人、ブリタニアに避難してきた軍人たちに、自分の武術やサバイバル技術を教える教官役だったんですの」

「え、あの人、そんなに強かったんだ」

「初美さん、何でも扶桑に帰ったら、ブシンリュウ、とかいう武術の後継者になるらしいですわ。そんなの、勝てるはずありません。結局そのあと、毎日のように突っかかっては破れ、その度に泥塗れにされました。ああまで私をコテンパンにしたのは、後にも先にも初美さんと坂本少佐だけですわ」

「それからどうしたの?」

「どうしたも何もありませんわ。その後、初美さんはそれまでの功績を認められて、ブリタニアの女王陛下から騎士の称号を賜り、私は坂本少佐と出会って501に参加」

「え、騎士だったの?」

さしものハルトマンもこれには目を丸くして驚いた。爵位を持つ貴族よりも、騎士の方が少ないかもしれないのだから、当然といえば当然なのだが。

「そうですね。あの時はどうしてあんな人が騎士の叙勲をうけるんだー、なんて思ったものですけど。なんでも初美さんはその後、ブリタニアの陸戦ウィッチの教官として士官学校に教官として招かれ、しばらくそこで武術を教えて欧州本土に向かったそうですわ」

「そんなことがあったんだ……」

「で、去年の終わり頃、《フレイアー作戦》より少し前に《ぎっくり腰》作戦が発令、初美さんはそのためにブラウシュテルマーの偵察任務、そのまま同作戦に参加して、パ・ド・カレーに義勇兵として私の元にやってきた、とまあ、こんなところかしら」

その後の顛末を大雑把に説明した。

「そんなに嫌いだったのに、どうしてあきらのこと認めるようになったの?」

「それはまあ、色々ですわ」

初美に教えられたことがきっかけで、とか屋敷の一件を説明する気にはなれない。

「色々あったんだねえ。んじゃ、お芋たくさん食べたし、昼寝するよ〜」

そういつて食堂を離れるハルトマン。皿いっぱいフライドポテトは、いつの間にか全て無くなっていった、
「あんなにあったのに、いつの間に……」

呆然として呟くペリーヌ。

「それにしても、ストライカーユニットの整備基地の変更の確認書類なんて、いつものように郵送していただければいいのに。なんで今日

に限ってサントロンまでこなきやならなかつたのかしら」
彼女が、初美の企てに乗せられたと気がつくのは翌日、屋敷に帰っ
てからのことである。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 四の 巻 その一

第四二統合戦闘航空隊。

自分は今、そこにいた。

憧れがなかったかと言ったら嘘になる。このエリート部隊に所属するというのはそれだけで名誉なことであり、魔女としても得難い経験をするようになるだろう。

そして自分は、戸隠流剣術とサバイバル技術の教練に加えて、推測航法の習得のためにこの部隊にやってきていた。

推測航法習熟のために与えられた期間は二週間。元々は戸隠流剣術の教授をするためだけに来るはずだったのだが、ある事情により推測航法を習得しなくてはならなくなった。

というのも、アフリカで行われるスエズ奪還作戦の前段階の作戦に自分が参加することになったのだが、その作戦の自分の役目が敵情視察なのだ。

スフィンクスを相手にした時にも加東さんが偵察をしていたらしいが、あくまで前線観測員としてであって事前の航空偵察は行わなかったらしい。そんな時、自分の《ぎっくり腰》作戦での成果がはるばるアフリカまで届き、中野へ自分の派遣を依頼してきた。

任務としては、スエズ運河奪還作戦の前段階の偵察がそれだった。スエズまでの航空写真の撮影で、可能なら巢の偵察と撮影もやって欲しいとのことだった。その任務を受けるのはやぶさかではないが、砂漠は目印も何も無い。

まさに砂の海原だ。

それ故に、敵情視察を行うためには、海上を飛行するための技術である推測航法を習得せねばならなかった。

しかしながら、その時すでに自分は第四二統合戦闘飛行隊への教練任務を受けており、ならばそこにいる海軍ウィッチに推測航法を習えとなったわけだ。

とはいえ、第四二統合戦闘飛行隊はJFWほどではないにしろ日々ネウロイとの戦闘が行われている空域を担当しているわけで……

『初美！ そつちに中型が一機行ったわ！』

インカムから鈴の音のような美声が飛んで来る。海軍少佐にして《死神》現隊長の白浜美奈代海軍少佐だ。

「了解！ 迎撃に向かう！ 空いた空域のカバーは！」

体を右に傾け、彼女がいる方向へ舵を切り迎撃に向かう。

『俺が行くぜ！』

オラーシヤ語訛りの共通語がとんでくる。ヴィクトーリヤ・ポプコフ空軍大尉。通称、トーシヤ。

「頼む、トーシヤ！」

『任せな！』

すぐに白浜海軍少佐の言うネウロイが視界に入る。扶桑刀を右手で抜き、懐から棒手裏剣を一本抜いてそのネウロイへ向かう。途端に飛んでくるビームをローリングでかわしつつ、接近していく。

捉えられぬ自分に苛立ったのか、乱射してくる。

その攻撃の一発が自分を捉えたが、ジークリンデ・レムケ少尉が見せてくれた技一すなわち、シールドを斜めにはって弾いてビームの圧力を利用して機動を変え、さらに接近、ネウロイを斬り裂き、露出したコアへ手裏剣を打ち込み、撃破する。

彼女のように掌に作り出し、盾のように操って受け流すことはできないが、シールドを斜めに張ることぐらいならできる。

「白浜、ネウロイ撃破！」

『了解、戻って！ アーラ！ そつちに中型がいきました！』

『今確認したわ、いただきですわ！』

『上川、サポートに！』

『了解であります！』

アリーサ・アレリユーヒン空軍曹長ー通称、アーラが意気軒昂に答えて銃撃を開始した。近くにいた上川幸陸軍曹長が指示通りにアーラのロットテについたようだ。

『初美、《迷彩》を使ってそのまま小型ネウロイ群の中央突破、反対側

の射撃点に到着次第、全隊で攻撃です』

無茶振りにもほどがあるが、今のところ白浜少佐の采配に間違いはない。否応もなく、自分は《迷彩》を使用した後、指示された小型ネウロイ群の中央へ突っ込んでいった。

第四二統合戦闘飛行隊の戦闘は他の部隊のようにロツテで行われてはいない。《空間把握》の固有魔法を持つ白浜隊長の指揮の元、各隊員が一定の空域を担当、そこにやってくるネウロイを撃破するものだった。状況により、近くのウィッチがロツテの二番機になったり、テツケを組んだりする。

それだけに、各員が一番機、二番機、状況によっては三番機も担当できる極めて高い技量を要求されるが、徹底した防衛戦を行うなら最適な方法だろう。

そう、第四二統合戦闘飛行隊は本来ならば、扶桑陸海軍とオラーシャ合同の空戦技術、戦術研究部隊であるのと同時に、第505統合戦闘航空団、通称ミラージュウィッチーズと同じく東へと勢力を伸ばそうとするネウロイを押しとどめ、侵略を阻害する極めて防性の高い航空団であった。

ただ、この部隊がそうだった時代は、忌み数故に隊員たちは士気がガタ落ちで、オラーシャの派遣するウィッチは三流ばかりという有様だった。

自分たちは死に部隊だ、死んで当然という空気はウィッチたちだけにとどまらず、整備兵に至るまで広がることになる。落ちきった士気はひどいもので、扶桑としては解散させて別部隊を創設したほうがマシという意見まで出ていた。だが、後釜の部隊も結局42というナンバリングから逃れることはできず、たとえ別部隊を創設したとしても、早晚士気の低下がおきるのは目に見えていた。

そして、いつときでもこの部隊を解散させるということは、防衛線に大穴が開くことになる。この穴から滲み出るネウロイは、オラーシャ防衛戦の結界を意味し、戦線崩壊も確実だ。

さすがにこのままではまずいと焦る扶桑陸海軍は、窮余の策として黒江彩香陸軍大尉を同隊隊長へと派遣した。

彼女のその驚くべき機転と手腕は以前話した通りだが、同時期、近隣に設立した第505統合戦闘航空団、通称ミラージュウィッチーズ隊長のグレート・M・ゴロプ少佐が彼女の手腕を認め、半ば強引に505へと引き抜いた一件があるが、それはまた別の話である。

ともかく、そうした部隊の激変があつてからというもの、《死神》は防衛部隊ではなく、502部隊のような極めて攻撃性の強い部隊へと生まれ変わった。同時に懸案であつた防衛戦闘の戦訓は勿論、戦術も編み出され、それは広く扶桑陸海軍に広まることになる。

そして、《死神》は現在でも今回のような防衛戦を行うことはあるが、普段は倒すべきネウロイを求めて彷徨う軍隊アリになつていた。その戦う様は、整備兵も含めて、黒江殿が行つた通りネウロイにとつての《死神》そのもの。即ち彼女たちは、505が撃ち漏らした、あるいは505の担当範囲外のネウロイを求めて彷徨う死神たちだ。

士気の高さは扶桑軍に身を置いている以上聞き及んではいたが、よもやJFWなみの戦果を叩き出しているとは思ひもよらなかつた。現在は、オラーシヤもこの部隊を戦術開発、ならびにウィッチの養成隊として捉えているようで、積極的に装備の供与や人員の補給を行うようになっていいる。

それだけ、両国がこの部隊に期待しているということなのはわかる。わかるのだが、厄介な部隊にやってきてしまったようだ、という認識をしたのは、《死神》にやってきたその当日であつた。

確かに自分は、再教育としてあの《クバンの獅子》の指導を受けてはいた事もあつてか、一通りの戦術を実行できるだけの技術はある。それでもだ。

激戦に次ぐ激戦が待っているとは聞いていなかったぞ。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の 巻 その二

時間は幾分巻き戻る。自分、すなわち初美あきら扶桑皇国陸軍少尉はそもそも、死神には彼らに剣術やサバイバル技術の教練のためにやってきたその時点にだ。

航空隊なので、規模はそれほどでもないとは聞いていたのだが、基地そのものは数百人規模の人員で動いていて、言われるほど小さいものではなかった。

これだけの規模になったのは、おそらく、ミラージュウィッチーズとの連携も考慮してのことだろう。

自分は、そんな基地の司令官室に訪れていた。

司令官兼《死神》隊長の名前は白浜美奈代。扶桑海軍少佐で、部隊指揮においては相当の技量をもってならしていた。扶桑海事変の頃はまだ年若く、ウィッチとして前線に出るのは早すぎたらしい。

艦載ウィッチの指揮をやらせたらかなりのものな上に、外務省高官の娘、さらにウィッチの中でも特に眉目秀麗にして才女でもあるという。

そんな彼女は、左にオラーシャ空軍のウィッチを従えながら事務机に腰掛けていた。

白浜少佐に付き従うように立つ彼女は、部隊の副隊長と戦闘隊長を兼任する名うてのウィッチだ。名をヴィクトーリヤ・ポプコフ、通称トーシャといい、階級は大尉。

固有魔法は《思考加速》。

何かを感じた時や状況判断の速度が加速され、次に起こす行動、動作の速度が格段に速くなるのだという。魔法力消費が激しく滅多に使わないが、使うや否や未来予知にも見える速度で攻撃を避け、攻撃をくわえる。

オラーシャの魔女らしくなく、感情の起伏が激しくアグレッシブな性格だと聞いている。

二人は、自分の入室と同時に、熱意に満ちた視線を投げかけてきていた。

《死神》は502ほどではないにしろ被撃墜数の多い部隊でもあり、いくら欧州の狭い戦場とはいえども、サバイバル技術が必要であり重要なのは事実だ。それ故の熱意なのだろうか。

「本日より、戸隠流剣術、並びにサバイバル技術についての教練をするために参りました。遣欧義勇隊所属、初美あきら陸軍少尉であります」

自分は、扶桑陸軍式の敬礼で持って名を告げた。

「ようこそ第四二統合戦闘飛行隊へ。お待ちしてましたよ、《くノ一の魔女》」

なんでそのコールサインを知ってるんだ。

驚いた自分を見た少佐がくすりと笑った。

「西部方面総司令部発で、全総司令部に通達され確定してしまってる。嫌がるのはわかるが、諦めたほうがいいぜ」

トーシヤ大尉がニヤニヤ笑いながら言う。

誰だ、そんなものを広めたのは、などと思いを巡らせてしまいそうになるが、今はコールサインにこだわっている場合ではない。

「着任早々ですが、初美さん。ストームウィッチーズよりある作戦への参加要請があり、川股少将はこれを許可しました」

は？ すとーむういつちーず？ ストームウィッチーズだって？
自分があの激戦区に？

「くくくつ。あきら、今のお前の顔、写真に撮っておきてえよ」

このバーバヤーガめ。人ごとだと思つてよくもまあ笑いやがって。「そのために、初美さんはこの部隊で推測航法を習得してもらうことになります。私たちへの教練も含めた期限は二週間。激務でしょうが、坂井陸軍少佐や、スコルツエニー中佐のレポートを読む限り、あなたにはそれだけの学習能力があると確信しています」

「白浜少佐、申し訳有りませんがアフリカ行きは承伏しかねます。自分があの場所で役に立てると思えません」

いくら何でも無茶苦茶だ。というより、このところこんな任務が続

いてやしないか？ いや、これが軍属というものだと言われればそれまでなのだが。

「《迷彩》を持つあなただから選ばれたのです。ストームウィッチーズは、近くスエズ奪還作戦を執行します」

ははん、そういうことか。

「先行して空撮を行えということですか」

「《ぎっくり腰》作戦の時と同じです。それだけあなたは期待されているということですね」

「自分のように高高度からの偵察ができるウィッチがいればいいのですが」

自分のような《迷彩》を使えるウィッチが他にいるとは聞いたこともないが。

「確かに、何人かあなたのように高高度からの偵察が可能なウィッチはいますが、あなたほど強行偵察にむいたウィッチは存在しません」
「スエズ運河の奪還ができれば、欧州と東洋をつなぐ補給航路が大幅に短縮される。そうなれば、俺たちはネウロイとの戦争においてより優位になる。それぐらいわかるだろ、くノ一」

「それはわかるんだが……」

「羨ましいことだぜ、まったく。俺が《迷彩》を使えたら、お前のかわりにやりたいぐらいなのによ」

ばちん、と右拳で左の手の平を叩きつける。さすが戦意旺盛な《死神》部隊の戦闘隊長だ。

「自分にしかできない、か……せめて、もう少し自分がウィッチとしての才能があつたならと思いますよ」

四強並みとは言わない。せめてペリーヌほどの技量があれば、自信を持って任務を引き受けることができるのだろうか。

「あなたは、自分の技量を信じられないのですね。ご存知ないようですから告げておきます。あなたにはグローリアスウィッチーズ、フリーデンタール駆逐戦隊へのスカウトが打診されました。そしてペリーヌ・クロステルマン侯からは義勇兵としてパ・ド・カレーへの長期駐在要請と501への参加要請です。扶桑陸軍はそれら全て

を拒否しました」

自分は、その言葉にまさしく呆然とした。ペリーヌはわかる気がするが、それ以外はどれもこれもエリート部隊じゃないか。

グローリアスウィッチーズは、以前スカウトの話があったとは聞いたことがある。ブリタニア防衛の要となる部隊で、規模はJFW相当のものだという。隊長は《足なし》バーター。

フリーデンタル駆逐戦隊はオティーリア・スコルツエニーを隊長とするウィッチの特殊部隊で、オティーリアの作戦を次々と成功させてきたエリート部隊だ。

501は今更語るべきこともないだろう。ウィッチで知らぬ者などいない、超エリート部隊。我々打撃魔女の総意にして最強の部隊。

それら全てからの招聘があったなど、聞いたこともない。

「……聞いておりません」

「でしょうね。川股少将は初美さんを決して手放したくないようですから、この手の情報をあなたの耳に入れたくなかったのでしょう。それはともかく、初美さんには少しウィッチとしての自分に自信を持っていたかなくてはなりませんね。ヴィーテニカ」

「わかった。初美、名誉なことだぞ。貴様を《死神》に所属させる。ヒゲメガネの威光なんぞ糞食らえだ。ここにいる間、貴様は《死神》の部隊員としてネウロイを殺す死神になるんだ」

事態の展開に思考が追いつかない。自分が《死神》所属になるって？

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の 巻 その三

「そうだ。お前はこれから死神になる。そして、『死神』で行われている戦術も実践できるようになってもらおう」

話が急展開すぎて頭がついていかなくなってきた。

「申し訳ありません。状況に理解力がついていかないのですが」

「早い話が、あなたを『死神』にいれてしごき倒す、ということです。これは、坂井少佐からの願いでもありません。あなたにウィッチとしての自信をつけさせてほしいと言われました」

「『死神』はウィッチの更生施設ではないのだがな。坂井少佐には世話になつたから特別に引き受けたわけだ。前隊長の檜少佐の行き先を世話してくれた恩義もあるしな」

怪我を負って退いたウィッチを引き受けたとは聞いていたが、隊長だったのか。

「もちろん、私たちもお人好しの集団ではありません。あなたには私たちが試している戦術がどれだけの難しいのかその評価をしていただきます。それが、私たちが坂井少佐に出した条件です」

「俺たちが運用している戦術は、ロット戦術やテツケ戦術を組み合わせた複雑なものだ。誰もが一番機であり二番機、三番機でもある。そのためには各員が一定以上の技量を必要とするが、防衛のための戦術としてはかなりの効果を期待できる。この戦術を煮詰め、すべての部隊ができるようにまで落とし込むのが、今、我々『死神』がやろうとしていることだ」

と、トーシャ大尉。

「そんな戦術を自分が簡単にこなせるようになるとは思えないのですが」

「できます。基本としてロットやテツケがこなせてホバリングができるなら可能な戦術なんです」

そんな夢のような戦術があるなら、何故今まで誰もやらなかったん

だ、とは思いますが、単純に誰も思いつかなかっただけなのだろう。世の中だいたいそんなものだ。

「逆にいえば、これらができなければ不可能な戦術と言えます。そして、現状において防衛戦術はこれ以上のものは考えられないでしょう。戦術名はクロエ戦術。魔のクロエが、505への転任直前に閃いて、戦術の草案を残したことからそう呼ばれています」

「この戦術をやるにはお互いの連携をきっちり取れないと話にならねえ。具体的にはこうだ。ウィッチは一人一人、担当する空域が与えられる。その空域は必ず二人が担当するよう範囲が重ねられてるわけだ。ここまでは理解できるか？」

「まあ、わからなくはないです。要はウィッチが移動可能な空中砲臺になるのですよね」

「飛行戦車でもいいな。で、担当空域に侵入してきたネウロイを、ウィッチが迎撃する形になる。この時、よりネウロイに近いウィッチが一番機、遠いのが二番機になる。そして、あいた空域は近くのウィッチがカバーにはいる、というわけだ」

なるほど、空中で機動防御戦術をやるうっていうわけか。確かにこれなら、数機の中型ネウロイや小型ネウロイの迎撃にはむいているだろうな。

「大型ネウロイの迎撃向きではありませんね」

「大型は、未だロットやケツテで対応できる相手ではありません。501の戦訓に従い、遠距離からの狙撃やフリーガーハマーによる打撃の後にシールドの強いウィッチが先導し、コアを狙うのが正攻法でしょうね。クロエ戦術についての質問はありませんか？」

「おおよそのイメージはつかめました。ですがこの方法だと、指揮官は《空間把握》の固有魔法持ちが必要な上、指揮官には相当の負担がかかると思うのですが、違いますか？」

「そこに気がつくか。なるほど、スコルツエニーが欲しがるのもわかるぞ。俺もお前を欲しくなってきた。今現在はお前のいう通り、指揮官頼りの戦術だ。だが、行く行くは指揮官抜きでも可能になるようにしたいと思っている。誰もが指揮官であり、一番機であり二番機、三

番機になる。これがクロエ戦術の完成形だ」

「カールスラントの訓令戦術ですか」

訓令戦術とは、小隊の隊長それぞれが独自の判断で動き、他の部隊や兵士と協調して戦う戦術で、これが可能になると戦いの幅が大きく広がることになる。寡兵でも部隊の数を増やすことで有利に運ぶことも可能になるし、指揮官がなんらかの理由で指示を出せなくなっても、即座に対応することができるとかく欠点がないように思われがちだが、見込みのありそうな兵士に時間をかけて教育しなければならなかったため、速やかな戦力増強が必要な時には有効な戦術ではない。

「なあ白浜、ちよつと確認しておきたいんだが」

眉を寄せて難しい顔をしながら、トーシャ大尉は白浜少佐を見た。

「なんででしょう」

質問を受けた白浜少佐は、淡々と返事する。

「こいつ、尉官だよな」

「そうですね」

「扶桑陸軍は尉官には士官教育をしてないんだよな」

「よくご存知ですね」

「クロエから教わったからな。って、そうじゃなくてだな。士官教育を受けてもいないのに、どうして他国の戦術に明るいんだ？」

「それが、スコルツエニーが彼女を欲しがった理由でしょうね。私も欲しくなりました。502のラル少佐に目をつけられる前にどうにかした方がいいかもしれません」

「なるほどな」

多分、ヒゲメガネを説き伏せるのは不可能だと思うぞ。あれでも諜報機関のトップだ。いざとなれば何をしでかすかわからん。

まあ、自分にそこまでの価値があるのかと問われたら疑問符が浮かぶのだが。

「少しばかり話がとんだな、悪かった。ともかくクロエ戦術とはそういう戦術だ。お前なら二週間あれば曲りなりでも形にはなる。まあ、今日のところは移動の疲れもあるだろう。明日から推測航法とともにクロエ戦術も叩き込むぞ」

「はぁ……拒否権はないようですね」

どうやら、いやもおうもないらしく、この日、うやむやのうちに《死神》に身を預けることになった自分だった。

地獄への片道切符を渡されたような気分になってきた。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の 巻 その四

その後、自分は一日の休暇を過ごし、朝を迎えて早々のネウロイ襲撃を知らせるサイレンで目を覚ました。

裸の上にホワイトシャツを羽織っただけという姿だった自分は、取るものもとりにあえず、ハンガーにかけてあった扶桑陸軍軍装を羽織って雑に禪を腰に巻くと、ストライカーユニット格納庫へとすっ飛んで行った。

途中、何人かの兵卒にはだけた胸を見られたような気がするが、気にする暇などない。まずは何よりネウロイだ。

自分がハンガーに到着すると、《死神》部隊の隊員も集まりつつあった。

「初美、ずいぶん勇ましい格好だな、おい」

トーシャ大尉が自身のユニットであるMiG1225に飛び乗りながら言った。

「今はそれどころじゃないだろう!」

「扶桑人はあまり大きくないのが一般的って聞いたけど、隊長といいあなたといい、意外とあるのね」

屋根下の鉄骨から飛び降りて、自分の右隣にあったMiG60を履いたオラーシャウィッチが言った。

「アリーサ・アレリユーヒン空軍曹長よ、よろしく」

「初美あきら陸軍少尉だ」

「アールでいいわ」

「自分のことは初美だろうがあきらだろうが好きに呼ぶといい」

「少尉、少しは恥じらいを持っていただきたいであります」

扶桑陸軍のウィッチではよく見られるおかつぱ頭が、左隣の疾風を履きつつ、藪睨みして言った。

「ネウロイは待ってくれないからな。恥じらいなんて捨ててしまえ。どうせ空では誰も見ていない。で、貴君は?」

「上川幸（さち） 陸軍曹長であります」

「全員揃ったようですね。本当なら朝食前に顔合わせをしたかったのですが。しかし初美さん、あなた、ほとんど裸ではありませんか？」
白浜隊長は、やれやれと嘆息しながらハンガーのストライカーユニット出入り口から登場した。かくいう彼女も、自分と同じく半裸で、その美麗な容器に負けぬプロポーションを惜しげもなく披露していた。

しかし、外務省高官の娘がやっていい格好ではないと思うのだが。
「出撃前のハンガーで初顔合わせも、実に《死神》らしくていいと思いますわ、隊長」

アーラの言葉はどこか楽しげだ。

「ついでに隊長の格好もな。実に《死神》らしいぞ。な、с ч а с т ь e（シシアーチシイ）」

「その呼び方の方が長くて面倒だと思っております、大尉殿」

「可愛いじゃないか、シシアーチシイ」

言外に、その呼び方はやめろと言われているのに、まるで意に介せず繰り返すトーシヤ大尉。

「しかし、白浜隊長殿。その格好、父上の竹夫さんが見られたら嘆かれると思います」

誰も注意しないので、あえて自分が指摘した。

「！ち、父の名は出さないでいただけますか」

隊長は素に戻ったのか、途端に顔を赤らめた。そして、襟元のボタンだけをつけて胸元を隠す。

いや、その方が扇情的だと思うのだが、まさか扇情と戦場を掛け合わせてるのか？ そんなわけはないか。

目を伏せながらつま先だけで跳躍すると、紫電改を履いた。

「《死神》、全機発進！」

全員が一斉にエンジンを動かした。

ゴツ、とハンガーに風が巻き起こった。ストライカーユニットが巻き起こす暴風だ。死神たちが巻き起こした、ネウロイへの死をもたらす風だ。

「オラーシヤ一番、トーシヤ、出る！」

トーシヤの一言と同時に、彼女が発進促進装置から解き放たれ、外へと飛んでいき舞い上がる。

先頭隊長が離陸すると、彼女を追うように次々と離陸してき、最後に少佐が離陸した。

木製疾風は、力強く自分を上昇させていく。

しかし、一昨日聞いた感じだと、この人数ではクロエ戦術は十全な威力を発揮できないんじゃないのか？ しかも、相手がこちらのカバーできない範囲での攻撃を仕掛けてきたなら、討ち漏らしも発生するだろう。その漏らしたネウロイはどうする。

不安を伴った疑問がよぎって止まらない。

「白浜隊長、おそらくクロエ戦術で対応するんだろうが、今のうちに聞いておきたいことがある」

インカムをオンにして隊長に言った。

『なんででしょう』

「クロエ戦術、欠点がいくつかあるんじゃないのか？」

『……いつ気がついたのですか？』

「今、だ。正確には何か引つかかるものは昨日休んでいる間に感じていた。今、寸前になってその違和感に気づいた、といった方が正しいな」

『そうだ、初美。お前の想像通りの欠点があるが、まあいい。答え合わせだ。お前の感じた違和感を聞かせてみな』

「まず、『死神』程度の少人数で行う戦術ではないのではないか、ということ。もう一つが、カバーしきれない範囲でネウロイが押し寄せた場合、対応できず塵殺されてしまう。これはまあ、どんな戦術だろうと同じだが、恐らくロットテ戦術より対応力に乏しいんじゃないかと考えられる。最後に、これは少人数での欠点だと思うが、撃ち漏らした時のカバーをできる人間が、現状、隊長一人しかない。以上だ」

答えると、しばらく沈黙が続く。

『正解です、初美さん。この戦術は十人以上の部隊で行うことを念頭に置かれた戦術です。隊長旗下のロットテが一組必要で、この部隊と、

最悪の場合隊長がカバーに入ります』

『どうやって気づいたのかしら。聞かせていただけ？』

アーラ軍曹だ。

「兵法、だな。自分が学んだ兵法の知識が元になった。これが陸地なら、地形が行動を限定して、少人数でもなんとかなるのだろうが、空中にはそれがない。それがきつかけだった」

『おい、隊長、こいつをなんとしてもうちの部隊にねじ込め』

自分の、アーラ軍曹への返答を聞くや否や、トーシャ大尉は有無を言わさぬ口調で隊長に迫った。

『勿論です。可能な限り努力しましょう』

やれやれ。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 四の 巻 その五

「初美さん、あなたはひとまず私の直属の指揮下に入っていたいただきます。クロエ戦術が実際にどのように運用されるのか、見学してください」

「了解した」

ま、当然だな。

「全員、所定の位置へ。敵は小型ネウロイが六機です」

『いつも通りに』

『了解であります』

『任せとけ』

各機が所定の位置へと到着すると、白浜の目が青く輝き、全身がぼんやりと青い魔法光に包まれた。

「アーラ、前方仰角二十度に注視して下さい」

『確認しましたわ、トーシヤ、ついてきて下さいまし』

『おうさ』

なるほど……こうやってロットテ戦術で迎撃するわけか。

「人数がいるなら、トーシヤの位置にフォローとして別のウィッチが入ると。なるほど」

自分は、魔導エンジンの回転数を上げて、トーシヤがいた場所に飛んでいく。

『初美さん！』

白浜少佐が制止しようとして声をかけてくるが、

「習うより慣れろと言うだろう、隊長殿」

『なにも知らないウィッチがそこに入っても邪魔になるだけです。戻りなさい！』

「武術をやっていたおかげか、呼吸や間合いを合わせるのだけは自信がある。ロットテ戦術で及第点をもらってるのもそれが一因だね」

そう言っただけ空いたスペースに滑り込み、

「トーシヤ、初美だ。お前の位置についた」

『！ 隊長！』

『仕方ありません。トーシヤはそのままアールの僚機を。撃破後、フォーマーションをホ番に変更です』

『無茶にもほどがあるであります、初美少尉！』

上川曹長が、無線越しにでも噛み付かんばかりの怒声で非難する。簡単な話だ。道理を引つ込ませればいいだろう。なあ、トーシヤ大尉殿」

『お前もつと慎重な奴だと思っていたよ！』

無線越しにMG42の銃声が飛んできた。

『郷に入れば郷に従え、でしたかしら！』

「その通りだ、アール曹長。このまま状況に流されるのも面白くない。それなら好きにさせてもらうさ。これが《死神》流だろう？ 隊長殿」

『撃墜されても、フォローはできませんよ』

『それも《死神》流か？』

『人の手が足りないだけです！ 幸さん直上です！ 初美さんは僚機に！』

「了解！」

その後、自分と《死神》の連中との間に多少の連携の乱れはあったものの、白浜隊長の指揮のもと無事全ネウロイを撃破することに成功し、自分達は基地へと帰還した。

帰りざまその足で食堂へと向かう。何しろ朝飯を食ってないんだからな、自分達は。

「うへえ、腹減ったあ」

食堂に着くなり、トーシヤは直ぐに食卓テーブルについて、並べられた扶桑料理を箸でかつ喰らいはじめた。扶桑が補給してるだけあって、基本が扶桑式なんだな。

で、朝食の内容はというと、銀シャリと鮭の塩焼き、大根の味噌汁、たくあんか。お茶は番茶と。悪くない。

「大尉は行儀が悪いであります」

と、上川。多分、こいつがこの部隊の良心なんだろうな。一癖あり

そうではあるが。

「うっせ、腹減りすぎてめまいしてんだ、ほっとけ」

悪態をつけて一心不乱に食いまくる。

「トーシヤは本当に下品ですわね」

無然とした表情でトーシヤに向かつて非難の視線を投げるアーラは、箸ではなくフォークとナイフで食べようとしていた。

おいおい、ご飯茶碗でフォークかよ、とツツコミを入れそうになるが、皿に盛られた鮭の塩焼きを横にずらしてスペースを作り、そこにとぼつと茶碗の銀シヤリをのせてしまった。

なるほどそうきたか。トーシヤを下品呼ばわりしたアーラも大概下品だな。

ため息をついた上川は、上品な所作で食事を始める。

そんな中、白浜隊長が遅れてやってくる、席に着くなり鼻歌交じりで鮭の塩焼きをほぐし、銀シヤリにのせて茶漬けにしやがった。

外務省高官の娘がそれかよ！

「隊長、他の国の人間ならともかく、扶桑人がそれは如何なものかと」
自分はさすがに耐えきれず訴える。いくらなんでもそれはなからう。まだトーシヤの方が上品だ。

「……家で躰けられた反動ですね。こういう庶民の食べ方が好きなのです」

照れた風に言いながら、トーシヤのようにかつ喰らい始める。しかもこちらは音付きだ。ちらりと上川を見ると、何かを言いたそうだった彼女は自分を見返して頷き、深いため息をついた。

ああ、わかる。わかるぞ、お前の気持ち。痛いほど理解できた。

恐らく、彼女は隊長に食事マナーについて何度か注意したのだろう。そして、その頑張りの結果がこれだ。

きつと、以前はもつとひどい食べ方で食事していたに違いない。そんな食べ方など想像もできないのだが

黒江殿はこの部隊の隊員に、どんな教育をやったんだ？

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 四の 巻 その六

せつかくの故郷の味も、まわりのろくでもない食事マナーのせいでロクな味も感じなかったわけだが、とりあえずうんざりしそうな朝食が終わると、正式に自分を他の隊員への紹介となった。

とはいっても、共同で迎撃任務をこなした後だ。語ることはすくない。

白浜隊長は、全員の食事が終わったのを確認すると立ち上がって口を開いた。

「皆さん。私たちは、これまで墜落されても戦場が基地の近くだったので歩いて帰ることが可能でした。ですが今後、505との共同作戦も計画されており、ピクニック気分で帰って帰ることが困難になるでしょう。そこで、サバイバル技術の教練をしてもらうために、初美あきら少尉を招聘しました。彼女には、諸事情により推測航法とクロエ戦術も学んでいただくことになりました。二週間と短い時間ですが、互いに協力しあい、ネウロイに死神の鎌の鋭さを教えてやりましょう。では初美さんからも挨拶を」

やれやれ、あまり挨拶は得意ではないのだがな。仕方ない。

自分は立ち上がると、全隊員の顔を見回すと、部隊員三名の視線が突き刺さる。

「えー、先ほどの戦闘では皆さんの協力のもと、クロエ戦術を学ばせていただきました。初美あきら少尉であります。アフリカでの作戦行動のため、急遽推測航法を学ばせていただくことになり、いささか慌ただしくはなりますが。今日から二週間、よろしくお願いします」

そう告げて、自分は頭を下げた。

クロエ戦術に関しては、もう何回か実地で経験して、細かい決まりごとを座学で学べば大体は習得できるだろうか。

そんなに簡単なものではないとは思いますが、概要ぐらいならそれで十分だ。なにも完璧にできるようになれ、とは言わないだろう。

問題は推測航法であるわけだが、恐らく隊長自らが教鞭をとることになる。

そんな事情もあり、自分は今――

小型ネウロイの群れの中を、《迷彩》を使つての敵中突破に挑んでいた。

確かにネウロイには発見されないだろうが、これはさすがに肝が冷える。

ネウロイの狭間を上下左右に潜り抜け、隊長の指示通り反対側へと抜け出ると、さらに少しばかり飛んで距離を取り、《迷彩》を解除した。

「こちら初美！ 目標座標に到達！ 攻撃許可を！」

インカムをオンにして隊長へ伝える。

『了解しました。総員、攻撃開始！』

自分と死神の全員が、同時にネウロイへ攻撃開始する。

突然の挟撃に、奴等は一瞬攻撃を中止した。

それは混乱したようにも見えた。単純に優先攻撃目標の選定に手間取ったともとれるが、実際はネウロイならぬわが身には見当もつかない。

だが、そんなことは今はどうでもいい。ひねり出したこのスキを手放すアホなど、《死神》にはいない。

そして、自分も手放すつもりなどない。

引き金を絞り、銃弾の雨を降らせていく。

『こいつは楽しいカモ撃ちだなあ！』

『カモ撃ちとは、カモに失礼であります』

『雲霞を蹴散らすようなものですわね』

次々とネウロイは撃破されていった。当たれば破壊、そしてその破片がまた他のネウロイに当たればさらに撃破だ。楽しくないわけではない。

が、さすがにこれはうまくいきすぎているな。

「白浜隊長、きついでしょうがもう一度周辺空域の探査をお願いします。自分ならこのスキに、直上か直下から自分たちを襲撃します」

『今、やっています。直上、一機……いえ、これは……』

「どうしたんですか、隊長」

インカム越しに躊躇う隊長の声を聞いた自分は、何事かと隊長に問うが、彼女は沈黙で答えるのみだった。

「隊長？」

再度、返答を求めると、今度は、

『いえ、なんでもありません。ウイツチらしき影を確認しましたが、私が見える範囲のギリギリでした。この辺りを飛ぶウイツチは私たちが505しかいませんから、きつとなにかの見間違いでしょう。それより、下方に中型ネウロイが一機。初美さん、私と合流して迎撃を。残りは小型ネウロイの掃討を継続して下さい』

『『了解！』』』』

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の 巻 その七

推測航法とは、大雑把に言ってしまうえば時速何キロでこの方角に何分飛んだから現在地はここ、と計算で現在地と目的地の位置を割り出す航法だ。

もちろん、そのためには現在地の緯度、経度の割り出しや星の見方も必要になる。だから、実際は言葉で言うほど簡単なものではないし、そもそも二週間で学べるわけもない。本来ならそれなりの時間をかけて座学を行い、実地訓練を経て身につける代物なのだ、

だから、こんなふうにいきなり実地訓練から始めるものではないのである。

『そうです。時計、地図と六分儀、方位磁石で現在地を割り出すのが基本です。飛行機の場合ですと、移動しながらなのでかなり複雑な計算をやらなければならないのですが、幸い私たちはウィッチでホバリングが可能です。極端に難しいものではありません』

インカムから、白浜隊長の呑気な声が聞こえてきた。気楽に言ってくれる。これが冬だったらいかなウィッチでも凍死してしまう。

だが、今は春だ。

雪解けも終わり、春の芽吹きも本格的になったオラーシャの大地はまだ土臭いが、身を切るような寒さはなりを潜め、確実に冬の去る足音は遠ざかっているのがわかる。

これなら、防寒さえすれば野宿も無理ではないだろう。

「そりゃあ自分も忍びだ。現在地の割り出しや地図の見方は人より長じている自負はある。しかし、いきなり実地研修はなからう」

自分は、流石にこれはやりすぎだと抗議した。

横目に、トーシャが食べられる野草のそばを歩いていたのを見たので声をかける。

「む、トーシャ、その足元の草、灰汁が少なくて食べやすいぞ。若けれ

ば生でもいける」

「お、おう」

トーシヤはしゃかんでその野草を摘み始めた。

「アール、足を止めて5メートル前方の地面を注視しろ。飢え死にしたいくないならな」

「なにがいますの？ 見えませんわ」

「蛇だ」

「え？ どこにいますの？」

びつくりしてあちこちを見回す。

「自分で見つけろ。蛇は大事なタンパク源だ。さっちゃん、右手の木は胡桃だ。秋口には大事なカロリー源だ、覚えとけ」

「どうして少尉まで私をそんな呼び方で」『ぶつ、さっちゃんですか、いいですね。私も今度からはそう呼ぶことにしましょう』

「隊長！」

さっちゃんは非難の声をあげた。

可哀想に。

会った時からそこはかたなく感じていたんだが、さっちゃん、名前に反して幸が薄いんだな。

と、それはともかく自分達は今、どこにいるかわからなかった。

《死神》の隊員全員が、目隠しで数時間車にて運ばれ、地図と六分儀、方位磁石と簡単な狩猟道具を持たされて森の中に放り出されたのだ。

自分には座標の割り出しを学ばせ、隊員には自分から実地でサバイバル技術を学ばせる算段なのは明らかなのだが……

「それで隊長、自分たちがいない間、防衛はどうするんですか？」

『505に頑張ってもらっています。普段は私たちが頑張ってるのですから、多少は甘えてもいいでしょう。それから初美さん、ゴロプ少佐にはキ106は全損してしまい、《迷彩》も望む効果が発揮出来ず役立たずになったと伝えてあります』

「どうしてそんなことを」

隊長の不可思議な処置に首をかしげる。

『あの人、あれで結構手癖が悪くて強引なんですよ。ラル少佐は手に

入るならなんにでも手を出しますが、ゴロプ少佐は、獲物を厳選します。それ故これと決めたらその執拗さはラル少佐以上です』

「つまり隊長は、ゴロプ少佐なら自分をあのヒゲからかつさらえらと睨んでるわけですか」

『やりかねません。そして、貴女をゴロプ少佐に渡さぬためなら、私も多少の強引さは持ち合わせていますよ。加えて、貴女を必要とする部隊や作戦は、これからも沢山あるでしょう。それを考えれば、ゴロプ少佐ごときに独占させていいものではありません』

ほう、なるほど。会った当初は自分を独占しようと考えていたが、あれから一週間たってそれを変えたか。

『私たちが独占すべきです』

変わってない。

「相変わらずか。さっちゃん、そこで止まれ。前をよく見ろ、ウサギがいるぞ。スリングの使い方は教えたな」

「だからさっちゃん呼びわりするなであります」

文句を言いながらも、足元の小石を拾ってスリングを構え、放つが、小石はウサギの耳をかすめて飛んで行ってしまった。

うさぎは慌てて逃げていき、すぐに草むらの中に紛れてしまった。

「おしかったな。ご馳走を獲れなかったか」

「それで、この蛇、どうするんですの？」

アーラは蛇の頭を掴み、腕に蛇を絡ませながら尋ねてくる。

「全員注目！ 一度だけやるぞ。覚えておけよ」

顎を掴み、噛んで切れ込みを入れると思いい切り引き裂く。腑のついた腹が裂けて、皮もめくれていく。

「ひゃっ」「へえく」「うっ」

トーシャが可愛らしい？ 悲鳴をあげ、アーラが感心して、さっちゃんが口元をおさえる。

まさに三者三様だな。

「よく覚えておけよ。蛇は腑分けに刃物がいらぬ。簡単なんだ。それがどれだけ重要か今はわからないだろうが、これから撃墜されて自分の足で逃げ帰らなきやならなくなつた時、それでどれだけ助かるか

身をもって知ることになる。あと、蛇の肉は意外といけるしな」

そう言つて、未だ暴れる蛇の体を結んで動けないようにしてやると、自分はバッグの中の地図やコンパス、六分儀を取り出して、経度、緯度の観測を始めた。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四 の巻 その八

計測の結果、どうやら自分たちは東に百キロの森に捨てられたことがわかった。もちろん、真西ではない。北にもズレている。

自分はとりあえず方位磁針で方向を測ると、三人を連れて基地へと向かうことにした。

一応、全員腰に大きめの水筒をぶら下げているから水分については補給の必要はないだろう。

食料に関しても問題ない。アーラが、蛇の捕獲のコツを覚えたのか、短時間で五匹ほど見つけて皮まではいいでいたからだ。

「さてと、そろそろ基地に戻るか」

と、呟いて何の気なしに上空を見上げた。春を迎え、どんよりとした雲も縁遠いものになった。薄い色合いの青空が頭上にはあり、地平線と空の境目には雲が浮かぶ。

平和な空だ。この時がずっと続けばいいのと思ったその時だ。
黒い点一つ直上に現れた。

「全員隠れろー!」

自分はそう叫び、全員が木の陰に隠れるのを確認して、自分も彼女たちのように身を隠すと、インカムをオンにして声を上げる。

「隊長!」

『確認したわ! 私か迎撃に向かう!』

ほぼ同時に、隊長の返答がある。

505基地より東方の位置ならば、人類圏で一応の安全地域だが、こういう状況も考慮して、隊長は万全の準備を整えていた。位置は不明だが、なにかあればすぐに駆けつけられる距離で待機している。

そして隊長の腕ならば、中型ネウロイぐらい一人で処理できるだろう。普段は指揮に集中しているが、士官になるだけの腕はある。

ザザツ……と、一瞬のノイズが無線に走り、

『白浜、ここが前線である事を失念したな』

暗いトーンの声が無線に割り込んできた。その言葉のイントネーションには若干だが侮蔑の色が混ざっている、

『ゴロプ少佐、ここは我々《死神》の領分です。引き退り願いたいのですが』

なるほど、この声が音に聞こえしミラージュウイッチーズの隊長か。

『我らは共にオラーシヤの空を守るウイッチだ。気兼ねする必要などない。フォーメーションユリウス。いけ』

『了解！』

その声と同時に、黒い点、つまりはネウロイに絡みつくように何人かのウイッチが攻撃を仕掛けていく。瞬く間に白く輝く破片が飛び散り、黒い点は砕けた。

『それから、白浜少佐、貴様のブラフはすでにバレてるぞ。《死神》へのキ106の部品の動きは皆無だし、その他必要な書類の提出もない。下手を打ったな』

『やはり慣れないことはするものではありませんね』

『そして本題だ。《くノ一の魔女》、貴様に用がある』

またか。

「そのコールサインで呼ぶのはやめていただけますか、ゴロプ少佐殿。自分には初美あきらという名前があります」

このやり取り、これから何度繰り返さなければならぬだろうか。

『ごだわるな、《くノ一の魔女》。なるほど、ヴィルケの言う通りか。で、こちらの要件だが、貴様の505への配属を命じる』

「断ります」

即答する。

「自分はもう少しでアフリカに向かいますし、他にもやらねばならぬことがあります。それに、自分の所属は川股少将からの辞令を持つてのみ変更されます。ゴロプ少佐殿、少将からの辞令はお持ちですか？」

ゴロプ少佐は、食えない奴だ、と呟いてふん、とつまらなさげに鼻

を鳴らした。

「それはともかく、助けていただいたことには感謝します」

『感謝するぐらいなら、505への転属届けを出せと言いたいがな。さて白浜隊長、楽しいピクニックはここで終了だ。履帯付きの大型陸戦ネウロイが、時速十キロでやってくる。明後日にはここまでくるだろう。貴様らの手も借りなければ打破できん。ついて来てもらうぞ』

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の 巻 その九

第505統合戦闘航空団、通称ミラージュウィッチーズの基地は、カスピ海に面したアブシェロン半島にあるバクーから北に少し離れたところにあった。元々そこは飛行場として輸送などのハブとして活用されてきたのだが、ネウロイとの戦争が始まってからはサンプトペテルブルグと同様にバクーからも人が消え、現在は505の直営地となっている。

505といえば、トランシルバニアのシビウより始まった最も長い撤退戦で、多くの一般人や兵士を助け、ボロボロになりながらも戦い抜いた、生え抜きの部隊として有名で、当時東欧で戦っていた兵士達の希望の光であったという。

すなわち、彼女たち505部隊は、ある意味において501以上にウィッチとしての有り様を体現した部隊と言えるだろう。

そして、その部隊の隊長は、恐怖を持った辣腕で崩れ落ちそうな士気を叩き上げ、死中の活を作り出してきた小さな女傑、グレーテ・マクシミリアーネ・ゴロプ少佐である。

東欧のオストマルク空軍出身で、リヴオフ方面の防衛の要として活躍していた。

最も長い撤退戦の口火をモエシアにて切り、それ以来バクーまでの四五〇〇キロの撤退戦を指揮し続けた。年齢的にはそろそろ引退のはずなのだが、後任が決まっていなかったのか未だに空を飛び続けている。一説には、部下との約束を守るため飛び続けているというが、それは定かではない。

傲慢にして尊大、鉄の規律を持つて部隊を指揮し続け、事をなすためならばあるいは502のラル少佐よりも際どい手段も取ると聞く。有名なウィッチの士官としてはかなり珍しいタイプだった。

さて、自分は《死神》と共に、そんな505、ミラージュウィッチーズの基地にまでなかば拉致のように連れてこられてきた。

表面上は、ネウロイに襲われていた《死神》をバクーまで避難させた、という体をとってはいるのだが、彼女の強引さは生半可なものではない。

つまりはそれだけ来るべき陸戦ネウロイの戦力が強大で、505だけでは対応しきれないという事なのだろうか。

「お前を呼んだ理由、言われずともわかってるな」

自分は一人、小さな執務室に連れてこられ、机のむこうのゴロプ少佐にそう言われた。

「強行偵察、ですか？」

自分は、直立不動で尋ねる。やらせるとしたらおそらくこれだろう。

ところが、ゴロプ少佐はため息をついた。

違うのか？

「お前はなにを言っている。お前とうちの犬房で低空から接近し待機。合図と共に砲身から内部へ侵入、コアを爆破せよ。これが命令だ」

絶句した。

たった二人で超大型陸戦ネウロイを撃破しろだって？

「驚くことではないだろう。少数で大物を食らうのは、お前たち扶桑人の得意とするところだ。古くはいらん子の穴吹がルーデルと共に大型陸戦ネウロイを撃破しただろう。それに、最近では501の宮藤しかり、502の菅野と雁淵しかり。幸い、貴様は犬房の教官だったそうじゃないか。なおさら適任だろう。何の問題もない」

問題だらけだ。

どうしてこう、自分に無茶振りをする。いい加減にしてくれ。

「冗談じゃない。自分と犬房の二人でなんて、どうやっても不可能だ！」

やって当然、できて当然というゴロプ少佐の態度に、自分は声を荒げた。

確かに犬房とは、陸軍兵学校で教鞭をとったときに顔を合わせ、遊戯を結んだ仲だ。

あいにく、犬房に武術の才はなかったものの、生き残ろうとする意志は人並み外れていたのを覚えている。恐らく彼女の鋭敏なその嗅覚が幾度も彼女の、ひいては505の隊員たちの命を救ってきたのだろう。

犬房が505にて自分が教えたそのサバイバル技術でかかる困難を乗り越えたと聞いた時は、教えた甲斐があったと感じたものだ。

だが、それとこれとは話が違う。自分は犬房が陸戦ウィッチだった頃までしか知らないし、彼女の力量もわからない。

もちろん、505で活躍しているのだから自分よりも腕が上なのはわかるのだが。

「お前、自分の固有魔法がどれほどのものか、まるで理解してないのだな。扶桑陸軍はなにをお前に叩き込んだのだ。ピクニツクごっこか？」

深いため息をついた。心底呆れた、と言わんばかりだ。

自分は、流石に抑えきれなくなり、ゴロプ少佐の皮肉を殺意で返した。

「殺気だけは一人前だな。よく覚えておけ。お前の固有魔法の《迷彩》は、ネウロイの目をごまかすだけじゃない。お前の後ろを遮蔽し、隠匿する。つまり、お前の陰に隠れば、ネウロイの目を誤魔化すことも可能ということだ。そんなこともしらんのか」

自分は言葉を失う。

そんなことなど想像したこともない。

果たしてそんなことがあるのか。

「どういう仕組みかは知らんが、貴様の固有魔法はレーダー波はもちろん、魔導波すら吸収してしまう。すなわち、そうした電波などは反射しないということだ」

そうか、そういうことか。なるほど。

自分は、少佐の言うことに理があると思われるや、沸点限界まで到達していた怒りが一気に冷却されていくのを感じた。

「気づいたか。どうやら馬鹿ではないようだな」

「少佐の言いたいことはわかりました。ですが、自分の作り出す影の

中に隠れるのは容易いことではないと思いますが。自分が《迷彩》を使用する時は、視認しづらくなっていると聞きます」

「一直線だ」

「は？」

「お前はネウロイの砲身へ一直線に飛ぶ。犬房はその真後ろを飛ぶ。それで解決だ」

目が点になる。

この人はなんてことを言いだすんだ……が、攻撃が分散してくれば、おそらく問題はない。何しろ、505と《死神》の腕利きが制空するのだ。やってできないことではないだろう。

なるほど。これがゴロプ少佐か。

その人間をもっとも活かせる場所で、的確に運用する。彼女ができると言ったことは全てが可能だからこそ言っているのだという。そんな噂はかねてより聞き及んでいたが、信じられるものではなかった。彼女がそこまでの人間だとはとても理解できない。

だが、やろうとした作戦が、一見無謀のように見えてその実考え抜かれていたように思える。

そして、使い手の自分ですら気がつかなかった《迷彩》の別の使い方まで指し示した。

抜群にうまいな、この人は。

いままで自分が会った誰よりも、人を使うのがうまい。

確かに鉄の規律をもって部隊を統括、指揮しているのだろう。だが、ゴロプ少佐の部下達は、自分たちを殺さず、生かして活かす事を理解している。

よりよく自分を使ってくれる。それは、死を前にして戦っている部下にとつて得難い上官だ。

厳しいが、やり甲斐がある。

最も長い撤退戦を落伍者なしでここまで連れてきたのは、彼女のこういう特質故か。

「なにをニヤついている。気持ち悪いな」

無然とした表情で、彼女は吐き捨てるように言った。

「いえ、お気になさらず。ゴロプ少佐という人間をいささか見誤っております」

少佐は、つまらなさそうにふん、と鼻を鳴らす。

「作戦概要は理解しました。これから全員に作戦概要の説明をされるのでしよう。急ぎましよう。ネウロイは待つてはくれません」

「お前が余計な時間をとらせるからだ。全員待つている。ついてこい」

椅子から立ち上がり、するりと自分の脇を通って廊下へ出る。

「了解しました」

さてはて、どうなることやら。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 四の 巻 その十

バクーより西に百キロにある黒い森。そこが、超大型陸戦ネウロイとミラージウィッチーズと《死神》の合同部隊の決戦場だった。時は正午。森の中でも充分に視界が通る時間だ。

ここに来るまでの間、ゴロプ少佐は太平洋統合参謀本部に所属する全軍にかのネウロイとの交戦を禁止し、退避するように命じた。

攻撃対象のネウロイは、どこから拾ってきたのか人間が建造した戦艦の砲塔を利用したものに戦車の車体をつけたようなものらしい。すなわち、よく見られる多脚式ではなく、履帯で移動するタイプだというのだ。形状や砲塔はともかく、砲身は一門のみなのでそれほど大きくはないのだが、それにしたところで火力は脅威であることに変わりはない。

どうしてここまで手を出させなかったのかを考えてみると、おそらく下手な損害を出したくなかったのと、なによりこちらの余計な動きで望んだ場所とタイミングで作戦を開始したかったのだろう。

しかし、自分に果たして木の間を縫うように飛ぶことが、そして、犬房に自分の真後ろを飛ばせることができるのだろうか。

ゴロプ少佐曰く、

『できるできないではない、やれ』

なのだそうだが。まったく無茶苦茶なことを言ってくれる。

「ほんと、無理難題いいますよね、うちの大将」

作戦室で作戦の概要を言い渡され、解散した直後に自分に向かって言った犬房の台詞がこれだった。

「でも大丈夫。隊長がやれって言ったことは、不思議とできることなんです。だから初美さんも不安にならず、気にしないでください」と、頭をかいて苦笑いを浮かべながら付け足したものだ。

ともかく、自分と犬房は、地上すれすれをホバリングしながら、ゴロプ隊長の命令を待っていた。

「犬房、恐らく自分が《迷彩》を使ったらかなり視認しづらくなると思う。しかも夕暮れの森の中だ。もし視認できないなら構わない。自分が一人で砲身の中に飛び込むから、犬房は上に行ってくれ」

犬房は、自分が何を言ってるのかわからないようで、キョトンとして自分の顔を見る。

「初美さん、何を言ってるんですか？」

「いや、だからだな」

「見失うなてありえませんかよ、やだなあ、初美さんは。隼は、軽戦ユニットですよ、小回りは疾風よりききます」

「自分の《迷彩》も気にならない、ということか？」

自分の言葉を受けて、犬房はにやりと笑い、

「簡単な話ですよ」

『作戦開始だ』

インカムから、ゴロブ少佐の声が聞こえてきた。

風邪を着る轟音の中、自分は大声で

「無茶苦茶だぞ犬房！」

彼女の無茶を非難した。

触れていれば問題はない、それが彼女の理屈であり答えだった。具体的にはこうだ。

犬房は自分のすぐ後を飛ぶわけだが、手を伸ばしてストライカーユニットのつま先を軽く掴むのだ。そうすれば、真後ろにいても方向転換も簡単にわかるし、自分の影の中にも入れる、というわけらしいのだが。

「無茶は初美さんほどじゃないっすよ！」

「ああもう！ どうなっても知らんぞ！」

自分はそう叫んで木々の狭間をぬって飛んでいく。犬房が掴む右側の爪先が若干重い。そのため、わずかながら旋回がやりづらいが、まあ、許容範囲としておこう。

ともかく、自分は《迷彩》を使いながら森の木の間を縫うように飛んでいく。

右、左、左、右。

高度を落とす、枝をよけ、左にシフトしつつ上昇し、また枝を避ける。

自分一人ならローリングで躲すところなのだがそうもいかない。おそらく上空では激しい戦闘が繰り広げられているのだろうが、自分と犬房は作戦終了まで自分たちからの無線の発信を禁止されている。おまけに自分は《迷彩》を発動中なので上空の通信すら聞くこともできない。

そして急ごうにも森の中だから巡航速度の四分の一も出せやしない。時速にして百キロ近くの速度を出せている今の方が奇跡に近い。目標のネウロイまで時間にして後十分と言ったところだろうか。

森の中、若干ひらけたところに巨木が一本だけ立っていたので、自分は《迷彩》を解除して犬房にハンドサインでその巨木の陰に隠れることを伝えた。すると、犬房は自分のストライカーユニットから手を離して、自分と一緒に巨木の陰に隠れる。

「さて、上は、どうなってる？」

自分は、わずかに息を切らせながら、犬房に尋ねた。

「かなりキツイみたいですね。陸戦ネウロイ、盛大に子供を吐き出してみたいですよ」

その様子が見れないかと上を見るが、生憎巨木の枝に隠れて何も見えない。

「でも、初美さん、大したもんですよ」

「何がだ？」

「この森の中をあの速度で飛べるなら、十分ウィッチとしても一流ですよ」

「必死なだけだ」

「んー、そんなことないと思うんですけどねえ」

腕を組んで口をへの字にする。

「はつきり言って、この森をロール機動なしで進むなんて、ちよつとやそつとの技量じゃできないはずなんですよねえ」

「自分にもできるんだから、普通だと思いがな」と自分が答えたところで、木が何者かに踏み潰される音が聞こえて来た。「さて、そろそろ

だ。準備はいいか？」

自分は懐から手裏剣を取り出し、犬房はホ103機関銃を構える。「ここからは斜め上に上昇する。疾風のはさ先つちよを掴むなんて真似はできないぞ？」

「分かってます。今までの飛行で、初美さんの癖もだいたいつかめました。大丈夫、ちゃんと初美さんの陰に隠れていきますよ」

口角が上がるのを感じた。まったく、言ってくれるものだ。

《迷彩》を発動、スロットをあけて上昇を開始する。後ろを見て犬房が付いてきているか確認している暇などない。

森の木々よりも高いネウロイはたしかにいた。

だが、事前に聞いていた情報とはまるで違う姿をしていた。

履帯式で戦車か何かのような胴体だったはずなのに、さながら団子虫かワラジ虫のような姿で、多数の足で移動し、その背に乗せているのは二門の砲身を持つ砲塔だ。

ネウロイの前方に着くとホバリングしてその異様を見る。

くそ、どうする。

陸戦ネウロイは、胴体から間断なく小型ネウロイを吐き出ししている。

装甲からは、対空機銃のような砲身を生やして、パルス状にビームを放つ。

が、この状況をどうにかする案はあるにはあった。支援物資を抱えて飛んだ時、一度やったことがあるが、人をかかえてはやったことがない。

が、やらなきゃいけないだろう。

自分は振り返って、なんとか自分の背後にか付いてきていた犬房の首根つこに腕を回して引き寄せる。

「う、うわっ！ 何するんですか！ 初美さん！」

「うるさい、見ただろう、あの砲身。過去、あの手の大口径の砲身の根元にはコアがあった。あのネウロイには砲身が二つある」

「コアが二つってことですか？」

「その可能性が高い。だからこれから、自分はやったことのない無茶

をやる」

二門の砲身から同時にビームが放たれる。

「いいか、貴様は自分の背に抱きつけ。自分は右の砲身めがけて飛ぶ。自分は隣のコアまでの隔壁をぶった切ってそのまま左に飛び込み、同時にコアを破壊する」

「そのどこが無茶なんですか？」

「抱きついてる間、犬房も《迷彩》の結界内に入れるんだ。人間相手、ウィッチ相手にはやったことがない。いいか、しっかり抱きつけよ！」

「え、ちよつと！」

慌てて自分の背中に抱きつく犬房を待たずに、木製疾風のエンジンをフルスロットルでぶん回した。同時に、犬房が自分の背中に抱きつき、

「大丈夫なんですか！」

「しらん！」

行き当たりばったりだ。だが、ゴロプ少佐がやれと言ったんだからできるんだろう。そんな頼りないものにもすがるしかない。

そして砲身の正面に來ると、そのまま直進を開始する。砲身の奥にコアが見える。

やはりか。

そのコアが、赤い光をにじませ始めた。

いいタイミングだ！

「しっかり捕まれよ！」

犬房に叫ぶと同時に、コアからビームが放たれる！

「うひゃあああつ！」

自分は、犬房がビームに触れさせないように背面でバレルロールを先行回避して、そのまま砲身に突っ込み、コアの浮かぶ空間に辿り着く。

「まだ離れるなよ、犬房」

「了解！」

自分は、腰に差した忍者刀を抜き放ち、

「オン・マリシエイ・ソワカ」

呟いて、渾身の魔力を込める。刀身が極限まで青く輝くと、左側の砲身の根本にあるだろう空間めがけ、隔壁をぶった斬る！

バキバキと音を立てて壁にヒビが入り、隣の空間までの穴が空いた。

その穴の向こうに、もう一つのコアが確かにあった。

瞬間、貧血のような感覚と同時に意識が途切れそうになる。魔力切れが近いらしい。残された時間はもう十秒もないだろう。

唇を噛みきって痛みでなんとか意識を繋ぐと、

「犬房、貴様は左のコアを撃て！ 自分は目の前のコアをこのままぶった斬る！」

「了解！」

「いくぞ！」

自分は、ネウロイのコアを斬り、破壊したのと同時に、魔力を使い切ってそのまま意識を失った。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 四の巻 その十一

自分が暗闇から戻った場所は、見たことがない病室だった。ここには自分以外に誰もおらず、無表情な白い壁や天井がそこにあつた。体を起こそうとすると、そこで初めて体のそこかしこに包帯が巻かれているのに気づいた。着衣は着慣れた陸軍のものではなく、入院患者用の白い肌着だ。

まあ、あの中で生き残つたのだから、それだけで僥倖だろうな。さて、と呟きながら自分の体の異常を観察していく。

身体中に痛みはあるが我慢できないほどではない。おそらく打撲だろうが、痛みから推察するに骨折の類ではないようだ。骨折は、捻挫のような痛みと鈍痛、それに疼きが伴うものだが、それが感じられないからだ。所々に、皮膚がひきつる痛みがある。これは擦傷によるものだろう。

どうやら、自分は打撲と擦傷だけで済んだようだ。これなら、今日明日にでも動けるようになるだろう。

ゆつくりと体を起こして、改めて体全体の様子を内観する。腹式呼吸で深呼吸して、肺や肋骨の痛みを調べ、腹部に手を当てて内臓を探るが、どこにも異常はない。

ベッドに腰掛け、ひた、と素足で床に立つ。

大腿骨の骨の痛みもなく、腰も問題ない。膝下は、ストライカーユニットの異空間にて保護されているため、異常はありえない。

健康体からは程遠いが、作戦に従事できぬほどでもない。体全体に魔力を込めれば、あたりは自分の魔法力の輝きによって青く照らされ、ムササビの丸い耳や平たく大きな尻尾が現れる。

底を尽きたかとも思ったが、魔法力に関しても問題はないらしい。丈夫に産んでくれた両親に感謝だな。

さて問題は、自分がどれぐらいの間意識をや失っていたかだが。状況によっては、スエズ運河奪還作戦に間に合わないかもしれない。

これからどうするか、と思案しながらこきこきとあちこちの関節を鳴らして、固まった体をほぐしていると、四回、扉がノックされる。「どうぞ」

と、入室をうながせば、

「生きていたか」

そんな台詞と共にゴロプ少佐が一人で入ってきた。

自分は彼女に向き直り、

「犬房はどうしましたか？」

「無事だ。貴様があの犬もろともシールドを張ったおかげでな」

自分はそんなことをしたのか。魔力切れを起こした直後から、意識を失って何をしたのか覚えていない。

「無茶をしたな」

「少佐の出した作戦ほどではありません」

口答えだ。でも、あのネウロイの変化は、それぐらいは言ってもいいアクシデントだろう。

それをわかっているのか、少佐は自分の減らず口に何も答えず、

「喜べ。スエズ運河奪還作戦までまだ十二分に日がある。それで、貴様はどうする」

「は？ どうする、とは？」

「どうやら貴様は、普通の軍務規定にはない命令系統で動いてるようだな。貴様を505に引き入れようと手を打ったがどうにもできなかった。ただ、貴様が望むなら505に所属することを赦すという言葉尻を得ただけだ」

自分をミラーージュウィッチーズに、か。

彼女なら、自分の力を十全に引き出し、有用に使うだろう。魅力的といえれば魅力的なのだが……。

「申し訳ありませんが、自分にはやる必要があります。ありがたくはありますが、断らせていただきます」

そう、自分にはやるべきことがあって、それはあの方の願いでもあるのだ。

「だろうな。505に縛られては、貴様のやるべきこともできんのだら

う。腹立たしいことだがな」

「そこまで自分を買っていただき、有難うございます」

「ふん。貴様を一番有用に使えるのが私だから使おうと思ったまでだ。自惚れるなよ」

「わかっております」

ゴロプ少佐は、すつと息を吸って自分を睨むと、

「さて、扶桑皇国陸軍、初美あきら少尉。白浜少佐にかわり、本日をもって《死神》部隊の教練任務の任を解く。これより急ぎ扶桑に戻り、アフリカに向かえ」

「了解しました！」

自分は背筋を伸ばし、扶桑陸軍式の敬礼を行った。

その後、自分は丁寧な修理された木製疾風を履いて、ミラージユウイツチーズの基地を後にした。

最後に《死神》の連中や犬房と一言別れの挨拶をしたかったが、犬房は任務で基地にはおらず、《死神》は本拠地へと帰還していた。こればかりはしかたあるまい。

まあ、命があればまたいつか、彼女たちと会うこともあるだろう。その時に交わす言葉でもじつくりと考えておくとするか。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 外伝 2

川股少将は、部屋の奥、御簾の中に隠れている女性に対し、深く頭を下げながら持ってきた書類の束が入った紙包みを両手で差し出した。

隣にいる、扶桑海軍水練着の上には扶桑陸軍軍装を着た少女（推測するまでもなくウィッチだろう）が、その女性の代わりに受け取りに出る。

女性は、御簾の奥で少女からそれを渡されると、紅を引いたよりも鮮やかな赤の唇で微笑み、少女に一言二言告げ、代わりに少女が声を上げる。

「初美少尉は来られないのか、との仰せだ」

「はっ。少尉は、この書類をしたためると直ぐに海軍の二式大艇でアフリカに向かいました。もう時期行われるストームウィッチーズを中心とした、スエズ運河奪還作戦の前段階の作戦に従事するためでございます」

女性は、やや残念な顔をしつつまた少女に耳打ちする。

「川股少将には苦勞をかけた。引き続き、初美少尉については良き計らいをするように」

「十全な用意をしております」

こうべを垂れながら、少将は慎重に言葉を選ぶ。女性の気性ならば、多少の無礼は笑って済ませてくれるだろうが、その周辺の間人が許さない。

「期待しておるぞ。初美共々、少将にも苦勞をかけたな、下がってよい」

少将が部屋に来てから始めて、女性は彼に届く声を出した。落ち着いていて聞き心地の良い声音だ。

「はっ、では皇女殿下、失礼いたします」

「しかし殿下、どうして初美を使うのですか。私の方が初美よりうま

くやれます」

川股少将が部屋を出てから、少女は敬愛して止まないかの人に訴えた。自分の方があんな乱波などよりよほど交渉上手だし、戦闘力もあるのにどうして自分ではないのかと。

「初美は事実上、わらわの名代だ。口がすぎるな、春原」

「も、申し訳ありません、殿下」

女性、すなわち扶桑皇国を滑る皇の娘である皇女は、ため息をついて頭を振り、

「わらわは出来るなら、この身自ら欧州に向かい、民草の為に戦い、民草とともに復興を行い、そして民草のためにネウロイを撃破したかった。だがわらわにはこの国の守護という役目がある。それ故に、わらわは初美に名代を頼んだのだ」

「では、どうして初美なのですか」

「さて、どうしてだろうか。あいつに散々投げられたから、かもしれないな」

皇女は、その時のことを思い出して、楽しそうにからからと笑う。

「で、殿下を投げた!?!」

少女は裏声になるほどの動揺を隠せず、目を白黒させながら声を上げる。

「ああ、そうだ。あやつ、投げたよ。魔女の力を発現させたわらわを、普通の状態でな。あやつの師匠が言っていたぞ。武術の才にかけては自分を凌ぐ、とな」

「いや、しかしそうであっても殿下を投げるなどと」

「わらわが望んだのだ。最初はわらわも普通に挑みかかったのだが、何度も痛くないよう、手心を加えて投げられてな。頭にきたわらわは魔女の力を使って挑みかかったんだが、思い切り投げ捨てられたものだ」

その時の様子を思い出して、喉の奥で笑う皇女。

「しかし、それでもです。殿下を投げるなど言語道」「くどいぞ春原」

言い終わる前に、皇女は春原の言葉を遮った。

「わらわはあの時、騎士の称号を得て扶桑に戻ってきたあの時に、自ら

望んで稽古をつけてもらったのだ。そしてその後で、初美はこう言ったぞ。『殿下、魔女としては確かに才覚はありましようが、武術の才覚は魔女ほどではありませんね。でも初心者はそんなものです。自分もそうでした。どうですか。皇女が本気で習おうというなら、自分がお教えしましょう』とな。結局諸々の事情が重なって習うことはなかったが、代わりに友誼を結ばせてもらった。いや、ああまできつぱりわらわに物申す輩など、あの初美以外にはおらんのだぞ」

楽しそうに語る皇女とは対照的に、春原は顔色を真つ青にしていた。なんたる事をしでかしていたのだ、あの武術馬鹿は。疾く任務を中止させ、扶桑に呼び戻してしかるべき沙汰を下さねばなるまい。

彼女が心に決めていると、皇女は、

「よもや呼び戻して任務を解いて処罰しようなどとは考えておるまいな」

「当然で御座います陛下。不敬にも程があります。彼奴めには自分の立場をしつけてやらねばなりません」

それを聞いた皇女は、流石にため息をついた。ここまで杓子定規な奴だったかと思いを巡らせ、

「よいか、わらわが望んだのだ。全てな。初美を裁くなら、それをさせたらわらわも裁かれねば間尺に合わぬだろう。違うか？」

噛んで含めるように言った。

「そ、それはそうですが」

言葉ではそういうのが、春原の表情を見れば不満を持っているのは明らかであった。

「わらわがお前ではなく初美を選んだのがそんなに不満か」

などと質問すれば、

「い、いえ、そういうわけでは……」

と、このように途端に狼狽するのだから凶星としか言いようがない。

「そういうことにおこうか。さて、わらわはこれより初美の報告書を読む。春原は自分の仕事に戻るがよい」

そう言って、春原に退室を促し、自分は封筒から書簡を取り出した。

本来なら執務室に移るべきなのだろうが、とにかく早く読みたくて仕方なかったのだ。

初美が、自分の代わりに欧州で体験したことを。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の巻 その一

現在、ストームウィッチーズを中核部隊とするアフリカ軍は、スフィンクスが居たとされる大釜（カルドロン）にまで勢力圏を拡大していた。補給路の確保や維持に莫大な戦力が必要と思われたが実のところそこまで大変ではなかったようだ。というのも、地中海で西部方面統合総司令部がなにやらきな臭い動きを起こしつつあるようで、それに連動してネウロイもそちらに戦力を移動しているためだという。

西部方面が、またぞろおかしな事でも考えてるのかとカルドロンの駐屯地で念の為本国に問い合わせをしたら、川股少将から直接秘密回線で情報が漏れてきた。西部方面統合総司令部がやろうとしていることはトラヤヌス作戦といい、なんでも特殊なネウロイとの接触実験が行われるのだという。

特殊なネウロイってなんだと問い合わせたら、これまた簡単に人型ネウロイだとゲロってきた。

人型ネウロイ。

詳しい資料は後日こちらに送るとのことだが、1939年のスオムスではつきりとその存在を確認できたらしい。その時は、第507統合戦闘航空団、通称サイレントウィッチーズの前身であるスオムス義勇独立中隊が撃墜。その後、ブレイブウィッチーズと同中隊の共同作戦の折にも出現、これもなんとか撃墜したという。

初耳の情報だった。

今回、その人型ネウロイとのコミュニケーション作戦を行う関係上、西部方面統合総司令部がなにやら企んでいるらしい。今回の作戦でネウロイの反抗がすくないのも、トラヤヌス作戦への対応なのかもしれない。

とするならば、たしかにスエズ運河奪還作戦はタイミング的に今しかないということになる。偶然とはいえ、いい潮時に決行を決定した

ものだ。そんなことを考えながら、スエズ運河に向かう途中の進路を航空撮影していた。もちろん、《迷彩》を使用しながらだ。今日偵察する場所の北端に来たので、いつもより重いユニットを操って基地へと帰投する航路に移る。

重いものにも理由はある。自分の専用ユニットである木製疾風は、自分より先にこの地に送られ、砂漠仕様の改造を受けていたからだ。吸気部には砂が入らないよう、フィルターを取り付け、装甲の塗装も入念に施されたのだという。木製ゆえに感想で簡単に反り返ったりしかねないから、当然の処置だろう。他にも、あちこちに耐熱処理を施しているらしい。お陰でユニットは重量が増えてしまったがこれもやむをえない。何より生き残ることの方が重要だからな。

兎にも角にも、今のところはネウロイの姿一つ見えないのはいいことだ。できれば、スエズ運河のネウロイもこのまま大人しくしてくれていればいいのだが。

カルドロンに作られた簡易飛行場に着陸すると、タキシングで簡易発進促進装置まで移動していく。

「少尉、お疲れ様です！」

途中、バイクにまたがり追いかけて来た少年兵が並走する位置に来て声をかけてくる。

「貴君こそご苦労。現像を頼む」

「了解です！」

自分は、首から下げていたカメラとフィルムの入った腰袋を手渡すと、彼はそのまま現像室が設えられてるだろうテントへと走っていく。他の基地なら、促進装置にユニットを戻して降りた時点でカメラやフィルムを回収、ともすれば自力で現像室まで持っていくのだが、ここは違った。

とにかく急いでいるのだろう。

これぞまさに最前線ならではの慌ただしさだ。

簡易促進装置に木製疾風を戻し、ユニットから足を引き抜いていると、巫女装束を着て頭に砂防メガネを載せている短髪の女性が近づいてくる。もともと髪の毛は茶色だったのだろうが、砂漠の強い日差し

でそれがさらに強調され、ピンク色に近い色合いになっていた。

扶桑海事変の隠れた英雄、加東圭子少佐その人だ。

「ご苦労様ね、《くノ一の魔女》」

と言つて、キンキンに冷えた水の入ったコップを差し出してくる。

「少佐、それはやめてください」

と、苦情を言つてコップを受け取り一気に飲み干す。冷たい水が喉を落ちて胃にズドンと突き刺さるのがたまらない。

「それで、所見を聞きたいのだけどどう？」

自分の苦情を柳に風と受け流して、そう尋ねてくる。

「昨日と同じく、足跡一つなし。敵影も見当たらず、ですね。やはり件の作戦にあちらさんも対応してるのでは？」

件の作戦、すなわちトラヤヌス作戦のことだ。

「だとするならありがたいけど」

「そうもいかないでしょうね。今手薄な場所は？」

情報があれば、多少は状況判断ができるかもしれない。

「そりゃあトブルクでしょうけど、あそこはKAKとノイマン少佐が守備を固めてるわ。補給線を狙われたらおしまいだけど」

やはりそうだよな。

「ふーむ、そうなると自分なら地中海の制海権を取りに行きますね」

「やっぱりそうなるわね」

同じことを考えていたか。ただ、マルタは何年か前にネウロイより奪還して以来、守備隊が常駐している上に、第504統合戦闘航空団、アルダーウィッチーズの守備範囲でもある。

「でも、マルタ島は守備隊が常駐しているし、アルダーウィッチーズもいます」

「手を出す隙はない、とは思いたいわね。まあ、面倒な話はここまでにして、夕食にしましょうか」

「了解です」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の 巻 その二

「お疲れ、《くノ一の魔女》」

ウィッチ用の食堂天幕へ、加東少佐と一緒に入るなり、カチンとくる一言が自分を出迎えた。

食卓テーブルの一番奥で、琥珀色の液体をたたえたグラスを傾けている彼女の名はハンナ・ユステイーナ・ヴァーリア・ロザリンド・ジークリンデ・マルセイユ大尉。

通称、テイナ、あるいはマルセイユ。

アフリカの星、砂漠の鷲、黄の14等と呼ばれ、エーリカ・ハルトマン、ハンナ・ウルリーケ・ルーデル、ハイデマリー・ヴァルプルガ・シュナウハーと共にカールスラント四強の一人に数えられている、おそるべき人物だ。

「しつこいですね、大尉。そのコールサインで呼ぶのはやめて下さい」
この地にたどり着いてかれこれ三日。顔を合わすなりくノ一の魔女呼ばわりで止める様子もない。ここまでしつこく言い続けるこの人の悪さが、彼女の意地の悪さを表しているように見えるが。

「それで、偵察はどうだったんだアキラ」

聞こえてないふりをして訊いてくる。

加東少佐は、我関せずと自分の席に座り、置いてあった書類に目を通し始める。

「ネウロイの機影、まるでなし。陸戦ウィッチの足跡も視認はできませんでした。これならむしろ《死神》にいた時の方が騒々しかったですよ。本当にここは噂に伝え聞く激戦のアフリカですか？」

「そうだ。ここが砂の都のアフリカだ。暇な時は暇で忙しい時は息つく暇もない」

やれやれ、と肩をすくめる。

「このスエズ奪還作戦、エジプトに居座るネウロイの巢の撃滅が絶対条件ですが、なにかしらの方策はあるんですか？」

「ない」

大尉は悪びれずに言い放つ。

「……」

絶句してしまう。

「だが、そこで《くノ一の魔女》の出番だ。スエズ運河の偵察はもちろん、エジプトのネウロイの巢の偵察もやってもらおう」

「……」

さらに言葉を失ってしまう。

「自分をここに呼んだ理由はそつちが本命でしたか、加東少佐」

「ケイでいいわよ、初美少尉。ここでは階級なんて意味がないから」

「そうですか。自分のことは好きに呼んでください。ああ、コールサインは無しで」

「わかったわ、アキラ」

「ではケイ。自分がやるべきことは、スエズ運河の偵察もそうですが、それよりエジプトのネウロイの巢の偵察の方が」

「そうよ、アキラ。そちらの方を優先してもらおう。できる?」

ぐびり、と喉を鳴らす。

なるほど。なるほどなるほど。いずれはやると思っていた巢の偵察を、この激戦区のアフリカでやれということか。

自然と唇が笑みの形を作る。

「わかりました。では、相応の準備が必要です。できますか?」

マルセイユとケイは、目を丸くして自分を見た。

「できますか?」

もう一度、自分は若干語気を強めて尋ねた。

「え、ええ、成功させるためならなんだってやるわ。その準備は?」

自分は、天幕全体を見渡せる席に腰を落ち着けて、

「増槽です。木製疾風の航続距離はおよそ二千キロ。増槽次第で足は伸びますが、木製疾風は試作機。増槽がないのです。ですから、木製疾風に増槽をつけられるよう改造を施してください。もちろん、増槽も木製で作ってください。恐らく、疾風と同じ仕組みで取り付けが可能なはずです」

ここは砂漠で、材料調達も難しかろう。木製疾風の装甲とほぼ同じ構造で作ってもらわないと意味がないが、果たしてそれができるのか。もし作れたなら、その時は全力を持って任務に当たるが。

ともかくその絶対条件を告げると、少佐……ケイは、慌てて席を立ち天幕を出て行つた。入れ替わりに、マルセイユの相棒のライーサ・ペットゲン少尉と稲垣真美曹長が全員分の夕食を持ってやってきた。「今、ケイさんが慌てて整備場所に走って行きましたけど、何かあったんですか？」

ライーサは、首を傾げながらテーブルに食事を並べていく。補給の関係上扶桑食が中心だ。梅干しと、なにやら見たことのない肉と野菜を醤油で炒めたものが出てきた。まあ、醤油ならどんなのだろうと大体は食べれる。

「いただきます」

自分はそういつて食事を開始する。

稲垣は天幕の入り口を開けながら、突っ走っていったケイの後ろ姿を眺めている。

「さてな。そのくノ一がいらんこと言ったからだだろうな」

そういつて、マルセイユは器用に箸を使って食事を始める。ここは、《死神》や505と同じく、基本的に扶桑が補給の役割をになつてから、食事も扶桑料理が中心になるんだよな。

「あきらさんがですか？」

外を覗き見ていた稲垣が、首を引つ込めて自分を見る。

「木製疾風の増槽を作つて、取り付けられるようにしてくれと頼んだだけだ」

自分はそういつて肩をすくめる。

「ああ、それでですか」

自分の答えに納得したのか、彼女もそれきり気にしないで、席について食事を始める。

さてはて、増槽、作れるのかねえ。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 五の巻 その三

増槽は、結局稲垣の三式の予備増槽を無理やり使うことになったらしい。新しく作るよりはそちらの方がよほど手早くすむし、メンテも楽だから、とのことでユニットの改造のみ行われることになった。

当たり前の話といえば当たり前の話で、大きさはさほど変わらない、増槽の取り付け位置もほとんどかわらないのならば、そりゃあ飛燕の予備増槽を使うのは当たり前で悩む必要などないのだ。そして、ご丁寧に自分の使用してる木製疾風は、増槽の取り付け位置のガイドがユニットの装甲裏側に示されていて、改造もそう手間のかかるものではなかったのだとか。

いやはや至れり尽くせりだが、誰がそんな手回しをしたんだと疑問が残るのも確かだ。自分が使っている木製疾風は、黒江さんがテストに使ったユニットなので、まさかの黒江さんの手配りなのだろうか。だとしたらなんといい気遣いの人、なのだがそんな訳はないだろう。

おそらく扶桑に戻った時に、徹底的なオーバーホールをやった長島飛行機のエンジニア達がもしものためにやったと思われる。

ともかくあっさり増槽の諸問題は解決され、改造も数日で終了。念のためテスト飛行を何度か行い問題がないことをチェックして、いよいよ自分はネウロイの巣への単独調査へと向かうことになる。

簡易発進促成装置にセットされた、増槽付きの木製疾風に脚を入れる。手持ちの武装は扶桑刀と棒手裏剣を五本だけ。銃火器は持たない。それにカメラと水筒、簡易食料、その他推測航法に必要な機材が装備品だ。

自分がユニットを履くと同時に、呼応するように魔法陣が青い輝きとともに発生し、使い魔のモモンガの耳と尻尾が生えてくる。

「昨日、偵察に出てもらったコースを基本的には辿ってもらうわ。その先に、ネウロイの巣が確認されている。いい？ 無理だと感じたら迷わずにすぐ戻ってきて」

ケイは、促進装置の上に立って地図を見せながらインカムを使用し
て言った。

「わかってる。死にたくないからな。ただ、やれるところまでは無茶
はする。問題ないか？」

「川股少将からも聞いているわ。貴女が無茶なことをやるのは日常茶飯
事だって。だから止めない。いい？ 無理だけはしないように。こ
れだけは守ってもらおうわ」

「了解した」

小さく頷く。

ケイはそれを確認して発進装置から離れた。

同時に魔導エンジンの出力を上げる。呪符プロペラが砂埃を舞い
上げた。

「オン・マリシエイ・ソワカ。アキラ一番、発進する」

《くノ一の魔女》なんて誰が使ってるものか。

ガシャ！ と音を立ててユニットを押さえつけていたロックが外
れ、勢いよく飛び出した。

さまざまな改装で重くなったユニットに、さらに増槽もつけている
ものだから、いくら促成装置を使っても発進とはいえども、離陸距離
は通常よりも長くかかり、舵も重い。

「よつと」

離陸可能な速度まで上がると、ぐいと体を起こして空に舞い上が
る。まあ、スツーカーよりはましだろうな。

「こちらアキラ一番。自分はこのまま昨日と同じコースを使って巢に
向かうが、他に何か命令はないか」

とびあがればこちらのものだ。上昇しながら無線を飛ばす。

『特にない。期待してるわ、《くノ一の魔女》』

ザツとノイズが入り、ケイが答える。

くそ、まだ使ってるやがる。が、いい加減訂正するのも疲れしてくる
な。

「《迷彩》がどこまで有効かのテストにもなる。できるなら巢の中にま
で入ってみる」

『それが無茶だつていうの。巢の周辺の状況と、ネウロイの総数の確認だけでいいわ。その奥のスエズ運河まではいかないで』

「わかった」

『まったく、本当にわかってるのか疑問ね。だいたいね……』

小言か。

ため息ついて、一言。

「《迷彩》を使用する」

『え、ちよっ』

ノイズとともに、ケイの言葉が遮断された。さして。

飛びながら、懐中時計を引っ張り出して時間を、そして太陽の位置を確認して、ポーチからメモ帳を取り出し時間と位置を記録する。

これが命綱となるのだ。

《死神》で叩き込まれた推測航法。間違いはないだろうが、目隠しで飛んでるようなものなのでやはり不安がある。よく海軍の連中はこんな航法で海を飛べるものだとはとほとほと感心する。

速度を巡航に固定して、自分は一路ネウロイの巢へと舵を取った。

鬼が出るか蛇が出るか。

いずれにしてもただでは済むまい。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 五の 巻 その四

エジプトにあるというネウロイの巣は、以前見たことのあるネウロイの巣のように、黒い積乱雲のような形で上空を蓋のように覆っていた。

雷雲のように稲光が走り、一帯を支配するその姿は、写真で見ると実際にこうして肉眼で見るとでは大違いだった。

ここにくるまで、いくつかの小型ネウロイを引き連れた大型ネウロイを発見したが、それを除けばいたって静かなものだった。ネウロイの支配地域は大抵がそうだった。

「静かなものだな」

辺りを見回しながら独りごちる。

人類の支配地域は空を飛んでいても、どことなく賑やかな雰囲気か漂っているものだが、ネウロイの支配地域にはそれが全く無い。静寂が漂い、時よりどこからかネウロイの鳴き声が聞こえてくるぐらいだったが、ここでもそれは同じだった。

「やてと……」

カメラを取り出し、遠間からのネウロイの巣を何枚か撮影する。そして、横に回りながら撮影を繰り返し、ネウロイの巣の影になっている街と巣が一緒になっている構図もとってシャッターを切る。

巣から、たまに地面に向かって落雷が落ちている。その度に、すでにボロボロになっていた街の建物が土埃とともに破壊されていく。

これは、ウィッチが直接巣への襲撃をするのに邪魔になるな。

さて、ここまでは鳩による偵察は何度も成功を収めている。資料性はあるだろうが、戦略に必要な情報はこれだけでは足りない。問題はこれからだ。

自分は、意を決してネウロイの巣の真下へと進み始める。もちろん、固有魔法の《迷彩》も、いつも以上に出力を上げる。少しずつ、影の中へと入っていく。

鼓動が耳にうるさく聞こえてくる。緊張で胸がはりさけそうだ。

だが、あの時。《死神》にいた時、サイレントウィッチーズの犬房と共に大型ネウロイを撃破した時のあの時に比べれば、まだプレツシヤーは感じられない。あの時、必死で任務を達成すること以外に何も考えられなかったが、後になって考えれば犬房を連れてネウロイの中に飛び込むなんてとんでもないことをしたのだ。

それに比べれば、何ほどのものか。

完全にネウロイの巣の下へと移動、同時にゆつくりと背面飛行に移行する。

雨雲よりも黒い雲が丸天井のように空を隠していた。ゆつくりと黒雲が渦を巻きながら中央へと集まっていく。雷光がフラッシュ光を放ち、巣のおどろおどろしさを演出しているかのようだ。

501や502が撃破したというネウロイの巣は、この中に無数の大型ネウロイが存在していたという。当然、この中にも大型ネウロイが無数に漂っているに違いない。

緊張で喉がひりつくほどに乾く。

腰に下げている水筒から、水を一口。潤った感じはするが、するだけで本当に飲めたのか疑わしく感じる。

さて、まだ自分の《迷彩》は有効に働いているようだ。巣の下を漂うネウロイは一機もないのがその証拠だ。

さらに速度を上げて中央部へと飛んでいく。もちろん、その間もネウロイの巣やその下の街をフィルムに収めている。

そして、中央部の直下。

そこは、さながら鳴門海峡の渦潮を空に貼り付けたかのような光景だった。

緊張が過ぎて、呼吸が小刻みになりそうになる。手が震えてシャツターが切れない。

このままでは過呼吸になる可能性があるかと悟るや、すぐに腹部をへこませながら息を吸い、吐きながら膨らませ（所謂息吹という呼吸法だ）て、息を整える。

そうして緊張を意識下へと押し込めると、慎重にネウロイの巣の中

中央部やその直下の街並み、そして中央部からの外周部の様子をカメラで撮影していく。何枚も、何枚も。フィルムが無くなれば、体が勝手にフィルムを外し、新しいフィルムをセットして撮影を続ける。

そうしてフィルムを二つほど消費した時、異変が起きた。中央部から、一筋の雲がねじれを伴って落ちてきたのだ。竜巻が空から落ちてくるようなものだ。

もちろん、その様子もフィルムに収めていくが、その筋の先端にあるものが何なのか理解した時、自分はそのものを何枚か撮影した後、木製疾風の魔導エンジンを全開にした。

人型ネウロイだ。

奴とは距離を取れ、交戦するな、が川股少将経由で降りてきた、殿下の命令だ。これだけは絶対に守らねばならない。

巢の外縁まで到達すると、増槽タンクを切り離す。木製にしてしまったのが悔やまれる。金属製ならネウロイの気を引けたのだが。

増槽がなくなったことにより、ストライカーユニットは軽くなり、さらに加速される。木製疾風の最高速度は時速にしておよそ600キロ。疾風より遅いとはいえ、扶桑の戦闘機の中でもトップクラスだ。これに追いつけるのはリベリオンの最新ユニットか、カールスラントのユニットぐらいしか……なんだと？

念のため、背後を確認したその自分の目を疑った。

人型ネウロイ……奴が、自分を捕捉し、追いかけてきた？

くそっ！ まずい、このままではまずい！

奴をカルドロロンまで連れていくわけにはいかない。

だが、交戦は許されない。絶対命令だ。

さらに速度を出すことは可能だ。《迷彩》に注いでる魔力をカットして、魔導エンジンに叩き込めばいい。だが、そうなればネウロイの巢の中にあるあいつらが目を覚まして自分を撃破してくるだろう。

どうする、どうするどうするどうする。考えろ、交戦せず、カルドロロンまで追跡させず、やり過ぎす方法を考えろ。

人型ネウロイは、さらに距離を詰めてくる。

現在位置は巢の外縁を離れ、ネウロイの巢の下の大型ネウロイの視

認範囲外にでたはずだ。

だが、それでも追ってくる。なんだ、なぜバレた。

瞬間、魔導エンジンが、むせた。

頭の中で何かが閃く！

それか！

エンジンの排熱を追ってきたか！

ということは、自分が直接追われてるわけではないということだ。

熱を拡散する方法を考えろ。

雲海に紛れるか？ 砂漠だから雲海はない。オアシスは……この

辺りにはない。

くそ、それしかないか！

自分は、シールドを可能な限り最大限にはり、地表すれすれまで降りて、砂塵を舞い上げながら飛行する。エンジンに砂が食い込もうが関係ない。これによって《迷彩》の効果がどれだけ落ちるかなんて考えらな。

とにかく、排熱を誤魔化すんだ。

そう言い聞かせて、砂防メガネをかけ、手を伸ばせば砂に触れそうなくらいの低高度を最高速で飛行する。

砂丘を乗り越え、岩を避け、背後を確認する余裕もなくとにかく飛んだ。

ぼふっ！

右足のエンジンが煙を吐き、停止しようとする。

くそ、これが限度か。

自分は《迷彩》の使用も中止して、シールドを最大出力ではり、そのまま墜落した。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の巻 その五

「う……あ、あ……」

異空間にあったはずの足が砂の熱さを感じていた。鋭い陽光がまぶた越しに突き刺さる。

どうやら、仰向けに倒れてるらしい。あれから果たしてどれ程の間が経過しただろうかと疑問がよぎる。

「あ、うあ」

呻きながら、なんとか体を起こす。左肩がずきりと痛み、右脛に鈍痛が走る。

左肩が脱臼し、脛骨折したか。濡れた感覚はないから、脛骨は解放骨折ではないようだ。

ゆっくり、右腕だけで体を起こし、所持品の確認をする。幸運か、ほぼ全てが失われていなかった。直ぐに水筒を開けて水を少し口に含み、ユニットがどこにあるのかと辺りを見回す。

すると、自分が相当の砂をえぐって墜落したのがわかった。まるでゴルフのバンカーのように砂をえぐっていた。それが幸いしたのだろう。直射日光を浴びずにいたようだ。

そして、若干涼しくもある。

木製疾風は、装甲を大破させた状態で転がっているのが確認できた。

まあ、それも当然か。

砂の壁に体を預けながら、右手だけで六分儀を使い、角度を図り時刻を確認。十五時を少し回っていたわネウロイの巣に到着してから二時間ほど経過していたようだ。砂を指でなぞり、おおよその位置を割り出し、インカムをオンにして、

「こちらくノ一の魔女」、応答されたし、こちらくノ一の魔女……」
痛みを意識の外に追い出して、声を上げる。

受信状態にして応答を待つが、空電が続く。まあ、当然か。

「さて、と……」

ポーチの中身を出して、ポーチを噛み、魔力を解放し左上腕部を右手で握りしめ、

「ぎっ……」

思い切り引っぱり、関節をはめる。

続いて、右脛を引っ張る。

「いっ……」

綺麗な単純骨折だったようで、一度で正しく折れた骨がかみ合わさってくれた。木製疾風の装甲の破片を拾い脛にあてがってぶちまけたポーチの中身にあった包帯を巻く。

一通りの応急処置は終わったわけだが。まあ、これでは歩くのは無理だな。非常食として、ショカコーラを携帯させられていたっけな。あれがあればまあ、多少は持つか。

夜は寒くなる。今、睡眠をとった方が賢明だな。ポーチを顔に乗せて、目を閉じる。

直ぐに睡魔がまどろみへと誘った。

脳天を突き抜けるような左足の鈍痛で、目が覚めた。そして肌寒い。

見上げれば、空は星で満ちていた。

夜、か。

また、水筒から水を一口。そして、ショカコーラを一欠片口に含み、唾液で溶かしていく。

あの人型ネウロイ、何をするつもりだったのか。

統合作戦本部は、あわよくばネウロイと講和を結べたら、とでも考えているのだろうか。

ネウロイとの和解、か。そんなことが果たして可能なのか。

「殖生の宿も 我が宿 玉の装い 羨まじ

のどかなりや 春の花 花はあるじ 鳥は友……」

何とは無しに口ずさむ。

『リベリオンの歌だったか？ 《くノ一の魔女》も、そんな湿っぽい歌を歌うんだな！』

突然インカムから、マルセイユの声が飛んでくる。

インカムは切っておいたはずだぞ！

『ケイ！ アキラの歌を受信したぞ！ 生きてるぞあいつ！』

『よくやったわ、ティナ！』

『あきらさん、無事ですか？ 怪我はありませんか！』

『よかった……アキラ。聞こえてますか？』

やれやれ、砂漠の夜をゆったり過ごそうと思ったらこれだ。

「はあ……《くノ一の魔女》、負傷すれど任務は完了。繰り返す、負傷すれど任務は完了。木製疾風はスクラップ同然だろうがな」

砂漠を走るコマンドカーの音が聞こえてくる。

LRDGまで動かしたのか。

『どこを負傷したの？』

「左肩脱臼、ならびに右脛骨骨折だ、ケイ。両方とも応急処置済み。ほか細かい傷はあるが、直ぐに治るだろう。カメラとフィルムは無事だ」

『よかった。歌も歌えるようだし、意識はしっかりしてるみたいね』
「ああ。それから、ケイ。これだけは今伝えなきゃならん。エジプトの巣、人型ネウロイがいた。そして、《迷彩》を使用した自分が追跡された」

それを説明したら、しばらく無線が帰ってこない。よほどのことなのだろうな。

『了解した。LRDGが救援に向かうわ』

「コマンドカーのエンジン音が聞こえてるよ。彩光弾を上げる。ネウロイの反応はないんだろう？」

『だから搜索に来たのよ』

「だろうな」

十年式信号拳銃を、夜空に向けて放った。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 五の 巻 その六

自分は、あれからすぐにトブルクまで搬送され、X線撮影までして骨折や脱臼の検査をされた。

自分の経験上、骨折も脱臼も治療は完璧と自負できるものだったので、何もそこまで拒否しようとしたのだが、ロンメル将軍が頑なに拒否、精密検査と治療をするよう厳命してきた。

というわけで、ネウロイの巢の偵察を残念なたちで終えた自分は、既に骨が繋がりがかけている足を釣らされ、関節周りの腱の伸びも治っているにもかかわらず左腕は三角巾でぶら下げられながら、個室のベッドに寝かされていた。

ルーデル大佐は、怪我を無視して出撃したというが、その気持ちも分からなくはないと感じる。スツーカー大佐に倣って自分も病室を抜け出そうと企んだが、抜け出したところで木製疾風が大破した状態では何もできるわけもない。

できることといえば、読書や書類作成、それに退屈しのぎに、こうして爪楊枝を、

「ふん」

手裏剣がわりに投げて、飛んでる蠅を撃墜することぐらいである。お陰で、自分の部屋は蠅がまったくない。

「初美さん、失礼するわ」

看護婦を連れたウィッチ専門の女医（ヘルウエティア出身の、医療に長けたウィッチだそうだ。なんでもX線のように骨や内臓を見通せる魔眼の持ち主らしい）が、自分の病室に入ってきた。名前をララという。ひつつめ頭で白衣が似合う、すらりとした長身の持ち主。

部屋に散らばる爪楊枝と蠅の死骸を見て、

「今日は何機撃墜したの？」

と、ため息をついた。

「わからん」

窓からまたもや蠅が入ってきたので、爪楊枝を投げて撃墜する。

「なあ、もうほとんど骨はついてるし、肩まわりはほぼ完治したはずだ。いつまでこの軟禁状態が続くんか？」

「ロンメル將軍が許すまで、かしら。医者としては、もう退院してもいいのだけど。カミール、血圧と体温の計測を」

「はい」

そう言つて、看護婦に自分の血圧を計らせる。看護婦は、色々な医療用具を乗せた台車から血圧計を取り出して自分の血圧を測り始める。

「それならせめてギプスを取つてくれないか？ かゆくて仕方ない」

「用意はしてきた」

ララは台車からハサミのような刀のような道具を取り出し、作業を始めた。

本来ならギプスを外すのはそれなりの時間がかかるそうなのだが（石膏を切るのだから当然だ）、そこはウィッチ故に簡単なものだった。いつそ自分でハンマー使つて砕いてやろうかと言つたが、骨折を悪化させるつもりかと怒られた。

ともかく、そうやってギプスを外し、肩の三角巾もとれたところで、部屋が忙しない勢いでノックされる。

「どうぞ」

と、ララが許可を出した。

「アキラ、無事かね？」

ロンメルだった。今は作戦前の大事な時期じゃないのか？

この駄狐付きの文官の気苦労を思うと怒鳴りたくなってくるな。まだマルセイユの方がほつき歩かないだけましじゃないのか？

「ほぼ完治しますよ。で、奪還作戦はどうなってるんですか？」

「それについてなんだがね。君のハイホウシャとしての知恵を借りたい」

兵法者ときたか。おそらく、軍略についてだろう。やれやれ、そっちは専門ではないんだがな。

「専門ではないのですが、何が起きてるのか説明していただけますか

？」

「エジプトのネウロイの巣が、昨晚のうちに消えた」

は？

巣が消えた？

状況が把握できない。情報が圧倒的に足りなさすぎる。巣が消えるなんてことが実際にあるのか？ いや、あるからこうやってこの狐がわざわざここまでやってきたのだろう。

「すみません、情報が足りなさすぎます。アフリカの周辺状況を教えてくださいますか？ あと、アフリカ、地中海方面の作戦スケジュールも。極秘作戦も含めてです。あ、それからララさん。会議室、どこか空いてませんか？ 緊急です」

とはいえ、扶桑は砂隊をここに送り出してるだけに、情報の収集はほぼ完璧だ。この辺で行われる大規模な作戦は二つしかない。

目眩がした。

さあ、と血の気が引く音が聞こえてくるようだ。

「今、トラヤヌス作戦が進行中だ……エジプトの巣の強襲作戦も行われる予定だった」

ロンメル将軍の顔も青ざめた。

「すぐに、トラヤヌス作戦本部に連絡を入れる」

兎を追う狐のように、素早く静かに病室を出て行く。

トラヤヌス作戦失敗、ならびに504壊滅の報せが入ったのは、その日の夕暮れだった。

数日後、自分は修理された木製疾風とともに次の任地へと向かうことになった。

せめて、スエズ運河の偵察だけでもやらせてくれといったのだが、ネウロイの巣の偵察だけで十分だと、ロンメル将軍とケイが言って聞かなかったのだ。

あの時、自分が命令を無視してでもあの人型ネウロイを倒していたら、或いはこの惨劇も防げたのかもしれない。その後悔の念が、自分をアフリカにとどめて起きたい衝動の源だった。

だが、それも過ぎたことだ。

自分にやれることをやるしかない。
そう言い聞かせながら、自分はアフリカを後にした。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 外伝

3

初美が新たな任地であるスオムスに旅立って三日がたった。カルドロンの仮設基地。エジプトの厄介がなくなったにもかかわらず、ストームウィッチーズのメンツの表情は暗かった。

もちろん、マルセイユはどこ吹く風と気にした様子はないし、ケイは隊長としておくびにも出さない。パットンなどは戦争狂らしく、むしろ巢がなくなったことを苦々しく思っているくらいだ。ただ、ライーサや真美は違ったし、食事前の二人との会話や笑顔を楽しみにしているロンメルなども表情を曇らせていた。

原因は一つ。

第504統合戦闘航空団、アルダーウィッチーズが壊滅的打撃を受けたからだ。これは、まだ歴史は浅いものの、JFWが発足して初めての事態であり、その衝撃は少なからず世界のウィッチ達に影響をあたえた。

そして、スエズにも巢と呼べるほどではないが、大規模なネウロイの拠点がある。あれをなんとかするのが今のストームウィッチーズの役目だが、ところがその奪還作戦も、実施が困難になりつつあった。収まっていたネウロイの襲撃が、活発さを取り戻し、奴らとの戦闘がまた激しくなってきたのだから。

マルセイユは、自分の天幕でシースルーのネグリジェ姿で扶桑からの慰問袋に入っていた芋焼酎をロックで傾けていた。

本日、彼女はゴブレットを7機撃破した。コアなしとはいえアフリカのネウロイである。小さい硬いすばしっこいの三点セットなものだから、撃墜するのは普通のウィッチなら一苦労だ。

それを撫で斬りするように鮮やかに撃墜していくのだから、このマルセイユは心胆を寒からしめるほどの天才なのだ。撃墜数ではハルトマンに大きく水を開けられてこそいるが、カールスラント四強に入っているにはそれなりの理由がある。

「テイナ、邪魔するわよ」

そんなところに、事務仕事を終えたケイがやってきた。

「どうしたんだ、ケイ」

「さっきまでロンメル將軍と話してたのだけど、このままだと正直ジリ貧ね。撤退も考慮するらしいわ」

からん、とグラスを鳴らしながら、

「それも仕方ないだろうな」

憂いを秘めた眼差しでつぶやくように答える。

「元気がないわね」

「いや、アキラ、どうしてるかなってな」

「珍しいわね、感傷に浸るなんて」

「なかなかからかい甲斐がある奴だったからな。暇つぶしのおもちやに最適だった」

ぐい、とグラスに残った焼酎を飲み干し、テーブルに置く。

「で、どうなるんだ？」

「撤退するわ。無理はさせられない」

ケイは、つとめて感情を押し殺し言った。

「だろうな」

と、話している所に、ストライカーユニットの飛行音が聞こえてくる。

「なんだ？」

マルセイユは慌ててジャケットを羽織りながら、ケイは、急いで外の様子を見に天幕の外へと出る。

他の天幕からも、何人も人が出てきていた。

「ケイさあくん」

真美とライーサが駆け寄ってくる。

「この音、疾風の誉45の音です。初美さんですよね」

星空を見上げながら彼女を探す

「ええ、そのはずだけど翼端灯も見えないわ」

「《迷彩》を使ってるな、あいつ。なんのつもりだ」

と、マルセイユが呟くと同時に、彼女たちの前にずどんとポーチが

結わえつけられた手裏剣が落ちてきた。

「ティナ、これは……」

ライーサが砂に埋もれかけたそれを手にする。ポーチの中身は軽く、カチカチと金属音がした。

「貸してみろ」

そう言つてライーサの手からポーチを譲り受けると、紐を解いて中身を出してみる。

そこには、撮影済みのカメラのフィルムが8本と手紙が入っている。書いている文字が扶桑語なので彼女には読めない。

「ケイ、読んでくれ」

「はいはい。えーと……『スエズ運河上空、ゴブレット多数、中型少数、大型は皆無。カルドロンの現有戦力、並びに陸戦ウィッチ、ストームウィッチーズの連携でもってあたれば、撃滅も可能かと思われる。フィルムは、スエズ運河周辺の空撮也。スエズ運河攻略作戦の一助とされたし。《くノ一の魔女》……」

そこにいたウィッチどころか、いつのまにか集まってきた兵隊全員がざわ、とどよめく。

「やるなど厳命したはずなのに、アキラは……」

と言いながらも、唇に笑みを浮かべる。

「どうしたのかね、加東少佐」

ロンメルが人混みを掻き分けながら慌ててやってきた。着衣の乱れがないあたりはさすがだ。

「アキラが、スエズ運河の航空写真を持ってきました。今から現像に回します」

それを聞いてなるほど、と頷く。

「詳しい話は明日だな。総員休め！ 明日から忙しくなるぞ！」

と、集まった兵士に命令する。その言葉の前に、全員が意気軒昂と駆け足で自分の天幕へ戻っていった。

「やってくれたな、ケイ」

マルセイユは、すっかり酔いの覚めた顔で言う。

「ええ。ティナも明日から忙しくなるわ。もう休んでちょうだい」

ケイは、手紙とポーチを持って、現像室のある天幕へと歩き出したのだった。

それからしばらくして、スエズ運河攻略作戦の一報が世界に飛んだ。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その一

北欧の国、スオムスはカウハバ。

そこは、ウィッチにとつてある種聖地のような場所であり、同時に滅多なことでは立ち寄りたくない基地でもあった。

何故ならそこは統合戦闘航空団の元となった、スオムス義勇飛行中隊の生まれた国であり、そして、現在はサイレントウィッチーズとなつている部隊の戦闘隊長である、迫水ハルカがいるのだから。

自分は余程の距離がない限り木製疾風で移動するのだが、今回はアフリカの時と同様に海軍さんの補給便に同乗させていただいている。陸軍もそれなりに補給便は出しているのだが、何分海軍さんの二式大艇の航続距離には遠く及ばないのが実情だ。そんなことだから、今回も自分は海軍さんのお世話になっていた。

カウハバ基地に到着したのは昼を少し過ぎたあたり。夏場なので雪はないが、それでも扶桑に比べると気温は低く過ごしやすいと言える。

そんな土地へ、自分が二式の降り口から飛び降りると、いきなりおかつぱ頭、二種軍装の女性が飛びついて来た。

「ようこそいらつしやいました初美さああああああん！」

流星の武術達人な自分でも、着地の体勢から立ち上がったその瞬間にやられては受け止めるだけで精一杯であった。

そう、彼女こそ、かの悪名高き迫水ハルカである。

迫水ハルカ。

義勇独立飛行中隊、すなわちいらん子中隊創設メンバーの一人だ。創設メンバーの中で唯一の現役ウィッチでもある。創設当時はいらん子扱いされても仕方ない腕だったというが、今ではサイレントウィッチーズの戦闘隊長という重要な立場にいる。

だが、問題はそこではない。

このウィッチ、真性のガチレズであり、さらに年中発情期というど

うにもならないでしょうもなさなのだ。

「ええい、噂は本当だったか！」

抱きついてきたハルカの右手首にある急所へ思い切り親指を突き立てる。

「つぎやあああああつ！」

絶叫を上げて自分を抱きしめる腕から力が抜けた瞬間、右手に順関節技を仕掛けて制圧し、地面にうつ伏せにして、動けないよう彼女の背中に腰を下ろす。

「上官に失礼ですが、貞操の危機ですのでご容赦を」

ストライカーユニットの整備場らしき施設から何人かのウィッチ達が駆け出てきた。黒人に白人、地黒のアジア人に扶桑人か。資料の通り人種も多種多様だな、サイレントウィッチーズは。

しかし、駆けつけてきた面子には隊長のハンナ少佐はいないようだ。

まあ、当然か。

「あ、隊長が組み伏されてる！」

地黒のアジア人、恐らくクラマース・ブレンガーム曹長が驚きの声をあげた。

「大したもんだ。美也、あれが扶桑のニンジャというやつなの？」

と、黒人のリー・アンドレア・アーチャー中尉がとりのおさげの扶桑人に尋ねた。なるほど、彼女が美隅美也軍曹だろう。

「忍者なんてもういませんよ。おおっぴらに公言してるのなんて、それこそ初美少尉ぐらいです」

確かにな。自分以外にくノ一のウィッチがいるなんて聞いたことがないし、師匠以外に忍者を公言してる武術家も見ることがない。中野にいるにしているのかも知れないが、見たことはない。

「昨夜から姿を見せなかったんですけど、こういうことだったんですね」

ヴェスナ・ミコヴィッチ曹長だろう。白人が呆れ半ばで言う。手には縄を持っている。

「た、隊長命令ですう！早くわたしの上からどきなさい」

自分の尻の下でなにやら騒いでいるが聞こえないことにしよう。

「すまない、その縄を貸してくれないか。尻の下の色ボケを縛り上げたいんだ」

と、ミコヴィツチ曹長に訴えると、

「最近はどうなに縛ってもすぐに抜け出すんですよ」

と、言いながら渡してくれたので、縄術をもってして手早く縛り上げていく。

「ちよ、初美さんっ」

捕縛から逃れようとすることを、今度は肩甲骨にある痛点をぐりつと押すことで邪魔をする。

「ぎゃあああっ！」

触れるだけで猛烈な痛みが走る場所だ。これで暴れることをやめて沈黙する。

「大人しくしててください」

そうして作業を再開し、雁字搦めにした。暴れば暴れるほど、解こうとすればするほどきつくなるような特殊な縛り方だ。足は胡座の状態で縛り上げているので、歩くこともままならないだろう。

「初美さんっ！ いきなりなにすんぐぐ」

なにやら喚き出そうとした迫水隊長を、猿轡で黙らせるアーチャー中尉。なるほど、やはりこう言う扱いなんだな。

まあ、当然か。

うーうーやかましい迫水隊長を無視して、

「自分は、扶桑陸軍遣欧義勇隊所属、初美あきら少尉であります」

自分は背筋を伸ばし、扶桑陸軍式の敬礼で挨拶する。

「ようこそ、いらん子中隊へ。少尉、隊長をそこまで綺麗に縛り上げた人は初めてです。縛り方、教えてくださいますか？」

「もちろんですよ、アーチャー中尉」

自分は右手を差し出し、彼女はそれに答えた。流石に身長が170を越えていると手も大きいな。自分の手が小さく感じてしまう。

「司令官がお待ちです。案内します」

ヴェスナ軍曹が、先導するように自分の前に立つ。

「はい、お願いします」

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 六の
巻 その二

「ヴェスナです。初美少尉をお連れしました」

ノックの後、ヴェスナは簡素な作りの木の扉を開けた。ぎい、と軋み音が大きい。建て付けが悪い様子はないから、単に古くて油もさしていないだけなのだろう。

「ありがとう、ヴェスナ。そして、サイレントウィッチーズへようこそ。噂は聞いていますよ、《くノ一の魔女》」

シヨートヘアに水色のセーターのウィッチが、書類山積みの安い事務机から立ち上がってヴェスナと自分を出迎えた。

しかし、その呼び名、どこもかしこもか。もうどうしようもないな、こりやあ。

ため息が出そうになるのをぐっとこらえる。

「初美あきら少尉です。よろしくお願いします、ウインド少佐」

敬礼しようとする自分を手で押しとどめて、自分の右肩を叩きながら握手を求めてくる。

「わたしのことはハンナでいいよ。君のような腕利きが短い期間とはいえこうして補充兵としてやってきてくれるのは、こちらとしても大変有り難いや」

「微力ながらお手伝いに参りました。それから、連絡していましたが……」

「ああ、人型ネウロイのことだよ。聞いてるよ、エジプトの巢に出ただってね。人型の戦訓を学びに来たんでしょ？」

「はい。よろしければ、是非」

自分は力強く頷く。もしこれからもアレと出会うことがあるなら、可能ならば撃破、無理でもアフリカの時のような醜態を晒すわけにはいかない。そのためには、複数回彼らと戦闘をし生き残ってきたサイレントウィッチーズに戦訓を学ぶ必要がある。

死ぬのは嫌だからな。

だからこうしてわざわざ世界の果てまでやってきたし、この後、ブレイブウィッチーズに向かい、同じく戦訓を学ぶ。扶桑に戻って穴拭大尉にも話を聞く必要もあるだろう。

「わかったよ。でも、よくあいつから逃げられたね」

「自分には、『迷彩』という固有魔法があります。これを使えばリーダー波や魔導波などを吸収し、リーダーから隠れることができます。まあ、排熱までは隠せませんが」

アフリカでのあの時のことを思い出す。なんとか排熱も消せないものか。

「なるほど。それで逃れることができたんだね」

「奴には排熱を見られて、追いかけられました」

「撃破はできたわけではないんだね？」

「ええ。どうしても撤退して、ネウロイの巢の情報を持ち帰る必要がありましたから、危険はおかせませんでした」

「いい判断だよ。あいつらはウィッチの意識を奪い、自分の支配下に組み入れるからね。どれぐらいの距離まで近づけたの？」

「は？」

「ネウロイが人間を支配下に組み入れて何の益があるんだ？」

「……いや、まてよ。」

人間はネウロイのコアを利用してウォーロックを作り、巢を破壊した。向こうも同じことをしようとしていると考えられはしないか。

とするならば、ネウロイは人間の思考についても学んでることになりえる。そして、だからこそネウロイは人間の嫌がることをやっているかと推測できる。

自分は、ハンナ少佐の言葉に引っ掛かりを覚え、思考を巡らせた。「どうしたんだい？ 何か思い当たる節でもあった？」

「あ、いえ、ちよつと気になることがあったので。自分はとにかく逃げることで精一杯でしたから。しかし、それは本当なのですか？ 追跡されてる時は、特に何も起きなかったんですが」

「本当だよ。いらん子時代のチュイン二准尉と迫水戦闘隊長が支配下に置かれた。ブレイブ隊との共同作戦では、ルマール少尉が囚われそ

うになったが、何とか無事に生還したんだ」

「ふむ……貴重な情報、ありがとうございます」

「司令」

ヴェスナ軍曹が声をかける。

「つと、少し長く話しすぎたね。すまなかつた、ヴェスナ。とりあえず彼女を部屋に案内してくれないかな」

「了解しました。こちらです」

彼女の先導に従って、割り当てられた部屋に歩いていく。随分淡々としてるな。下手に馴れ馴れしくされるよりは付き合やすいが。

ともかく彼女に案内されたそこは、士官室としてはあまり大きくはないが、小さな机と作り付けの本棚があり、そして暖炉が設えられていて、いかにも雪国という感じだ。

「こちらが少尉の部屋になります」

「ありがとうございます、ヴェスナ軍曹」

案内された部屋に入ると、ごろりベッドに寝転がる。大の字になりたいところだが、あいにくベッドはそんなに大きくない。

「さて、これからどうするか」

ぼんやりと天井を眺める。

人型ネウロイか。

懐から写真を一葉取り出した。

そこには、ネウロイの巢の黒い雲。その雲が作り出した竜巻の根元にいる人型ネウロイが写っていた。

黒い人型のネウロイだ。

なぜこいつは、自分を狙ってきた。

自分がバレたのは恐らく排熱を捕えられたのが原因だろう。だが、なぜ自分を執拗に追いかけてきた。自分を洗脳するためか。それとも単に排熱を追いかけてきただけなのか。

あれやこれやと考えれば考えるほど、理由は溢れてはこぼれ落ちていく。思考の迷路に迷い込んだかのようなうだ。

「あれこれ考えても仕方ないか」

自分はベッドから起きて部屋を出るのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の
巻 その三

自分は、あのままのんびり休養してるのも嫌なので、資料室の利用許可をもらうため、司令官室に戻ることにした。

資料室に行く理由は、人型ネウロイとの戦闘記録を参照するためだ。あいつとやりあうために何をやるべきか。それには人型ネウロイとの戦闘記録が重要で、打倒の手立てもそこから生まれる。

もちろん、もう一度人型ネウロイと遭遇する可能性などゼロに等しいのだが、ああ言う敵がいるということは、自分以外のウィッチが遭遇し、交戦するかも知れない。その時のために、何らかの戦訓なり戦術なりを作るのは無駄ではない。

自分は、司令室の前に立ち、ノックをする。

「どうぞ」

中から、ハンナ少佐の声が聞こえる。

「初美です。失礼します」

「どうしたの？ 部屋が気に食わなかったかな」

少佐は事務仕事の手を止めず、書類にサインしながら言った。

「あ、いえ、そういうことではありません。無理を承知でお願いしたいことがあります」

「それは、人型ネウロイに関係することだね？」

「はい。恐らく、最重要機密で、自分の閲覧にはマンネル Heim 将軍の許可が必要だとは思いますが、できるならばすぐに」

ハンナ少佐は、手を止めて肩をぐりぐりとまわす。

「人型ネウロイの情報に関しては、アルダー隊の壊滅に伴って情報開示許可が出たから大丈夫だよ。ただ、すぐには無理だね」

まあそうだよな。

しかし、ハンナ少佐の肩の動き、やたらと鈍いな。

「肩、こっっているようですね」

ふむ、見た目随分と張っているようだ。

「ん？ ああ、まあね。507の司令になってからほとんど空を飛べず事務仕事ばかりだからね。ブレイブ隊のラル司令の苦労がわかるよ。せめて文官があと一人でもいてくれればまだましなんだろうけど」

「では、文官の仕事はできませんが肩なら休憩がてらほぐして差し上げられますよ」

「できるのかい？」

「ええ。そういう事は得意ですよ、自分は。失礼します」

微笑んで頷くと背もたれの低い椅子に座っている司令の背後に回り、肩の様子を探るために首筋を按摩した。なるほど、かなり凝っているようだ。筋肉が硬直し、柔軟さを失っていた。

首回りの筋肉がここまで硬直してるという事は、相当に肩が張り詰めているだろう。

「かなりこっつてますね」

「わかるの？」

「それはもう。扶桑武術をやっていると、そのあたりに詳しくなるんですよ」

そう言いながら、僧帽筋をほぐすために肘をあてがい、圧迫するようにマッサージしていく。

稽古中、怪我をした時の治療術の応用なのだが、そこまでは説明する必要はないだろう。

「んっ、そんなところまではってるのかい？」

「ええ。肩のコリは、このあたりからほぐさないと解消されないんですよ。ここは僧帽筋といって、首回りの筋肉とは一体の筋肉なので首回りや肩だけほぐしても意味がないんです」

揉み返しがおきないように、軽めに揉みほぐしていくと、すぐに血行が良くなりほのかに暖かくなっていく。普通の人間ならありえないが、この辺りの回復力は流石のウィッチだ。

「そうなんだ……んっ、しかしこれは……気持ちがいいね……」

ほう、とため息をつく。

ある程度ほぐれたところで、首回りの筋肉もほぐしていく。ここは

肘ではなく手でじっくりと揉む。

「む……うん。ああ……凄く気持ちがいいよ……これだけのために、少尉を引き抜きたいぐらいだ」

「ははは……」

流石に苦笑が漏れてしまう。

スカウトの理由がウィッチの腕としてではなく、按摩の腕を買われてというのは斬新だった。

首の根元のあたりのほぐしを終えると、鎖骨の下あたりの筋肉をほぐす。

「あ、すごいね……こんな気持ちいいの初めてだよ」

「そう言われると、こちらとしても揉みがいがあります」

「う……はあ……ああ、ほんと気持ちいい……」

そんなところに、ドアが勢いよく開かれ、迫水ハルカが飛び込んできた。

自分とハンナ少佐が呆然と見ると、

「何昼間からふしだらなことやってるんですか二人とも！　そういうことをやるなら私も混ぜてください！」

と、鼻息荒く誤解とともに怒鳴り込んできた。

「自分はただ、司令の肩を揉んでいただけです。おかしな誤解は注意の頭の中だけに止め置いて下さい」

「でも、私は聞きました！　ハンナ司令の、凄く気持ちいいとか、切なそうな喘ぎ声とかそんな声を確かに聞きました！」

「アキラ、やってくれるかな」

若干声が刺々しいのは、按摩の邪魔をされたからか。

「勿論です」

自分は魔女の力を解放して、ジャンプしながら半回転した。そして、天井に着地と同時に迫水へ向けて跳躍し、扶桑海軍きつての恥さらしの足元に着地すると、水面蹴りでなぎ払う。

「ぎゃっー」

声だけは可愛らしい悲鳴をあげて尻餅をつく。その隙に彼女の背後に回り裸絞めをやりながらうつ伏せにする。

「動く絞めますよ、中尉」

と、忠告したにもかかわらず、

「きゃっ！」

自分の太ももをさすり始めた。思わず短い悲鳴が漏れる。

「スベスベでいい肌触りの太ももですう」

ぬけぬけと言い放つ。

「いい根性だ」

そう囁いて、完璧に絞めた。

呻く声もあげる暇も与えずに、数秒で気絶させると、そのままにして立ち上がった。

脳の酸欠による気絶だから寝かせておけば勝手に回復する。

「凄いね……少尉。本気でいらん子に来るつもりはない？」

と、少佐が感嘆とともに言った。

「迫水中尉対策としてですか？」

「はは、それもあるけどね。体術があまりに見事だからさ。戦闘機ならともかく、ウィッチには重要だ。だから、あんなのを見せつけられたら、声もかけるよ」

あんなの、とは天井から床への三角飛びのことだろう。

「ハンナ少佐、わかってて言っているのでしょうか？」

「ダメで元々だよ。ラル少佐じゃないけど、前線、特にJFWは優秀な人材が常に不足してるからさ。万一でも手にできるなら声をかけるのは当然だよね」

「無理ですね。自分にもやることはありませんから」

「やっぱりね。まあ、肩を軽くしてくれたお礼だ、すぐに閲覧許可書を発行しよう」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その四

司令より頂いた閲覧許可書は、スオムス語で書かれていたため、何が何やらよく分からなかった。ただ、そこに書かれてる文章はそんなに長いものではなく、最後にハンナ少佐のサインが入っているのが確認できるだけだ。

しかしながら、許可書の上には、top secretの印鑑と司令のサインの後に507部隊司令を意味する印が捺されているため、これが正式な書類であることはわかる。文字を覚えて、あとでどんな内容なのか調べてみようか、それともそこらを歩いているスオムス人に聞いてみようか、などと考えてしまった。

『資料室は、ここから南に向かって三棟間に挟んだ建物の三階が全部そうだよ。建物の入口に軍警がいたらそれを見せれば通してくれる。なに、アキラなら顔パスだよ』

との、軽口めいたハンナ少佐の言葉を思い出す。

そんな事に思いを巡らせながら歩いていると、向かいの棟の入り口にたどり着いたわけだが、警備担当の軍警がいないのだが。

顔パスするための相手がいないじゃないか。

これはどうということかな、司令官殿。

いれば書類を見せれば顔パスらしいが、いない場合はつまりそういうことか？

というか、どうにも怪しいのだよな。この手の施設はたいがい嚴重な警備の元管理されてるのが普通のはずだ。胡散臭く感じるのも当然だろう。

さてはて、中に入らねば欲しい情報は手に入らぬし、このまま手をこまねいているの自分もらしくくない。

ここは女は度胸といくか。

腹を決めて、雑にニスを塗られた木製のドアの前に立った。そしてその安普請の真鍮製のドアノブに手をかけ、ぎい、と軋んだ音を立て

ながらゆつくりと開けていく。

ぱつと見人の気配はないが、なにがあるかわかったものではない。慎重な行動をするのにこしたことはないだろう。

「ざりとてここは初めて踏み入れる建物だ。鬼が出るか蛇が出るか……」

まあ、ハンナ少佐がやろうとしてることは大体予想できる。

隊員たちに自分を襲わせて、力量を図るかあるいは隊員たちがいい経験させせるかのどちらかだろう。あるいはどちらに転んでもかまわないというところか。

あにはからんや、おとなしそうな顔をしてずいぶんと豪胆なことをするじゃないかあの司令官殿は。だてに50ナンバーをしょってないということだろうか。

楽しくなってきたぞ。

左側はガラス張りで外の様子が確認できる。右側はコンクリの壁が続いていて、おそらくその向こう側が資料室になっているのだろう。二十メートルほど先は曲がり角になっていた。

自分は、正中を立ててひたひたと木製の廊下を歩きだす。足音などたてない。ましてや床をきしませるなどという出来ない真似などは決して。足が床に触れたときに、どの程度の力加減までなら床がならないかぐらいはわかる。

「freeze!!」

背後から声が聞こえ、自分は言われたとおりに立ち止まる。声の大ききさや反響具合からしておよそ十メートル。リー・アンドレア・アーチャー少尉だ。

おそらく外で待ち伏せし、自分が建物に入ったところでタイミングを見計らってやってきたのだろうな。

「アーチャー少尉、いい判断だ」

自分はわざとらしく両手を挙げて後ろを向いた。

当然ながら手にしている銃はM1911。通称ハンドキャノン。

なるほどいい拳銃だ。そして彼女ぐらいの体軀であれば、魔法力を開放しなくても十分に扱いきれるだろう。彼女は右手で構え、自分に

狙いを定めていた。銃口を見る限りブレはない。

だが、この距離で自分相手にはどうか。に

「負けを認めるべきです、初美少尉」

「そちらの勝利条件をきいてみようか」

「あなたにまいったと言わせること」

「発砲許可は出ているか？」

「イエス」

ははは、これはこれは。

「アーチャー少尉。撃つてもいい。いいが、その時は覚悟してくれないか。無傷で済ませる自信がない」

は？ と首をかしげるアーチャー少尉。そりやそうだろうな。むこうはウィッチの魔法力を開放すると考えてるのだろうか。

自分は、開放するつもりはない。

この程度のことと開放するなど、戸隠流を受け継ぐ人間としてはなはだ不本意だ。師匠なら遠慮なく開放しろ、というところだろうが自分とは違う。

プライドというものがある。

ぴく、と肩が震えた瞬間、自分は床に這いつくばるように伏せて床を蹴り、飛び込み前転で彼女の足元まで至る。拳銃は、横方向、それも内から外への動きには対応がたやすいが、上下、特に下方向への対応は難しい。

これは体や目の構造上の問題で、これを克服するにはそれなりの修練が必要だ。さらに下方をいきなり飛んでくる対象を狙うのは、よほどの熟達者ならようやくやくというレベルになる。

すなわち――

二発、発砲音が響いたが、床に穴をあけただけだった。

自分はすつと立ち上がって、目前で自分の動きに唾然としているアーチャー少尉のハンドキャノンを持つ手を取り、

「さて。アーチャー少尉はこれからどうするかな」

「OK、私の負けでいい」

苦笑して先ほどの自分のように両手をあげた。

「これで負けを宣言してくれなかつたら、アーチャー少尉を床に這いつくばらせることになっただろうな」

「あらためて、初美が武術の達人だと理解したよ」

「で、これはどういうことなのかな？ 自分を試しているのか、サイレント隊の教練なのか。教えてほしいものだが」

「教練、だそうです。実地で武術の達人の動きを見て体験するのは、ウィッチとしても悪いことではないだろう、と司令官の判断です」

「了解した。資料閲覧の料金代わりに教官をしてやろう」

自分は、そう言ってアーチャー少尉に背を向けて歩き出した。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の
巻 その五

さて、事情を理解できたのはいいのだが、よもやこんなことになるとはな。

自分は角を右に曲がる前に足を止めた。誰かが角の向こうで待ち構えているのが感じられたからだ。正確には、かすかな足音が聞こえたからなのだが、それはそれとしてどうしてやろうか。

まあ、こうするしかないだろうな。

いったん止めた足をまた進めて、構えることなく堂々と待ち構えているヤツの前に出る。

壁際でナイフを持って待ち構えていたのはブレンガーム曹長だ。

「シッ！」

左手で逆手に持ったナイフをカマキリの鎌のように扱い、自分の首を狙おうとしているのがわかった。自分は一步踏み込んでブレンガーム曹長の懐に入るが、

「シッ！」

膝で下腹部をけり上げてくる。

ずん、と芯に響くいい膝蹴りだ。

反射的に腹部の筋肉をしめて、打撃を受け止める。

ナイフはおとりというわけか、なるほど。

後ろに跳んで離れようとする、首相撲で上半身を抑え込んでくる。

これがムエタイというやつか。

ということは、さらに膝蹴りをくわえてくるということだ。

覚悟を決めてもう一撃受け止めながら、こちらも体重を相手に預け、ブレンガーム曹長とともに床に転がる。

「わわっ！」

「つつ……やれやれ、ここまで腹をけられたのは久方ぶりだぞ。首相撲からの膝蹴り、ムエタイというやつだな」

そのまま彼女の馬乗りになりながら、蹴られた下腹部を撫でた。この状態になったら、もうほぼこちらの勝ちだ。

「さて、曹長。どうするかな？ 負けを認めるなら何もしないが。もちろん、二回自分の腹を蹴ったことも不問にしよう」

「えーっ！ これ訓練じゃないの？」

ブレンガーム曹長は不満の声を漏らした。まあ、だよな。

「ははっ、そうだな、そうだった。それで、どうする？ 負けを認めるか」

「ここからなんとかできる技術、ボクにはないよ。降参」

「そうか、では第二関門突破というわけだ」

自分はゆっくりと彼女から離れて立ち上がり、彼女に手を差し出して体を起こすのを手伝った。

「ありがと」

自分の手を取って、すっと立つ曹長。

「しかし、ここの司令はこういうのが好きなのかね」

「というより、いらん子中隊が好きなんだよ。502ともたまたま合同訓練やってるしね」

「なるほどな。不意を打たれたとはいえ、あの膝蹴りはよかったぞ。今度やり方を教えていたきたいぐらいだ」

この申し出を聞いたシャム王国のウィッチは目を丸くして驚いた。ふむ、どうということだ。自分はなにかおかしなことでも言っただろうか。

「え？ 初美少尉が？ 少尉って武術の達人なんだよね」

ああ、そう考えるか。なるほどな。

「達人かどうかはともかく、いや、むしろ達人だからこそ、と言えるかもな。自分が知らない技は知りたいのだ。知ればそれだけ強くなれるからな。それに、シャム王国に伝わるムエタイは以前からどのような武術なのか気になっていた」

「そういうことかあ。ボクにはそういうのよくわからないけど、少しぐらいなら教えられるよ」

「そうか。その時はよろしく頼む」

自分はそういつて、さらに歩き始める。先には二階へと上がる階段があった。階段の途中には踊り場があり、折り返して二階へと上がる構造になっている。二階が一回と同じ構造だとするのなら、上り口がそのまま廊下とつながって直線になっているはずだ。

とするなら、ほぼほぼ廊下での待ち伏せの可能性はない。

自分なら、踊り場の折り返し口、死角になっているところに待ち構えて、上がってくる相手を襲うだろう。

さて、それならばと、何が起きても対応できるよう心構えをして階段を昇ることとしよう。おそらく、そこには二人、自分がくるのを今か今かと待ち構えているはずだ。なぜ二人なのか、そして彼女たちが誰なのか想像できているし、理由もあるのだがそれはともかく。

わざと、自分がここにいることを知らせるように足音を立てて階段のステップを踏み、踊り場に立った瞬間、三隅軍曹が木刀代わりの木の枝、ミコヴィツチ曹長が大型ナイフを持って挑みかかってきた。

ナイフを持つ手をつかみ、ひねってその場に投げ落として尻もちをつかせ、三隅軍曹の木刀を持つ手を手刀で叩き、木刀を落とさせる。

「つつー！」

「いたっ！」

ミコヴィツチ曹長と三隅軍曹は、それぞれに声を上げてその場に崩れ落ちる。

うん、今の自分の対応は、教練としてはあまりよろしくないかな。けどまあ、自分に投げられたり対応された経験はどこかで役に立つかもしれない。

「残念だったな、二人とも。二人がここで待ち構えていることは気配を探るまでもなくわかることだったぞ。さて、まだやるなら相手になるかどうか？」

尻もちをついている二人の前にしゃがんで視線を合わせ、そう尋ねた。

「い、いえ……」

曹長は、自分がどうやって投げられたのかわからなかったのだろう。呆然と宙を見つめていたが、自分の問いに己を取り戻し、うつつ

の中でそう答えた。

「三隅軍曹は？」

「質問していいですか？」

軍曹がそう尋ねてくる。

「答えられることならな」

「どうして、わたしと曹長がここで待っているとわかったのですか？」

「きまつてるだろう。残ったのはハルカ中尉と曹長、軍曹だ。これ以上の説明が必要か？」

「……あ、そういうことですか」

三隅はそれを聞いてポンと手を打った。打てば響くとはこのことか。

ウィッチなら、誰しもあの危険が危ない中尉と肌が触れ合うような距離にはいたくないだろう。

「そういうことだ」

彼女は基本的に頭よく理解も早いようだ。

そして、最後の相手がアレか……気が重いものだ。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その六

閲覧室前までやってきた。

薄めの木のドアではあるが、簡素ながらも彫刻が施されていて、この部屋がそれなりに重要であることを示している。

推測するまでもなく、迫水中尉はこの中にいる。

深呼吸を一度したあと、覚悟を決めてドアノブに手をかけ、回した。使い込まれているのか、かなりのあそびの後にドアノブはその役目をはたし、ドアが開く。

さてはて、あの女には一度ガツンとやって思い知らせてやらねばならないだろうなあ。しかし、どうする。

「すぎありですうううううっ！」

あのままほっといっておくのは致命的に隊のためにはならぬだろうし。

「ぎゃんっ！」

かといって、やりすぎてしまつては戦力低下につながる。それは避けたい。

「あ、あきらさん、あ、あし、あし！ 膝がいたあああああっ！」
うるさいな、人が考えている最中だというのに。

ではどうする。ぐうの音も出ぬほどになげまくるか。

「ぐはっ！」

それとも、痛点を丹念にいじめ倒すか。

「そこは肘がびりびりすぎいいいいっ！」

気絶させるのもなんだしなあ。とはいえ、一度おとしたか。

「く、くび、くび……」

……ん？

涙目になった迫水中尉が、三角締めで自分の太ももに締め上げられ、もがき苦しんでいた。

慌てて三角締めを解き、立ち上がる。

「おおおおおにですか！ ぐほっ、あ、あきらさんはっ！」

関節技と絞めの複合技から解放された中尉は、喉をさすりながら涙目になって訴えてくる。

「鬼も何も、考え事をしている達人に不用意に近づくとこうなるといういい経験ができたではありませんか、迫水中尉殿。得難い経験というやつですよ」

「どうやら、体が勝手に彼女を制圧していたらしい。」

普段、無意識に技をかけてしまうときは手加減など忘れて最後まできめてしまうのだが、偶然手心を加えていたようで、見た目骨折や筋を伸ばしてしまうといったような、重篤なケガをしている様子はなかった。

「それで、まだやりますか？」

「もちろん。この続きはベッドの中でへへへへへへ」

自分は深くため息をついた。

ここで彼女を脅しつけて乳首をひねりちぎったとしても、変わることはないだろう。彼女の性癖は、そもそもそういう脅しで屈するものではないのだ。

しかし、ウィッチになってからそれなりにこういう性癖の人間は見てきたつもりだが、ここまでキテるウィッチを見るのは初めてだ。

「はあ……とりあえず、全員の教練がおわったということでもいいんでしょうかね、迫水ハルカ海軍中尉殿」

自分は、こめかみを抑えながら問うた。

「でゆへ、そんな、恥ずかしがらなくてもいふあ？」

妄想の世界で羽ばたいていた中尉は、自分の呼び掛けて現実に戻ったらしい。

「え？ あ、ああ、かまいませんよ。お目当ての資料のある場所まで案内します」

この人、多分だが頭の中がお花畑にならない限りは有能なんだろうなあ。

そんなことを思いながら、中尉にその場所まで案内されていく。

「でも、少尉はどうして人型ネウロイの資料を見たいのですか？ 人

型ネウロイは、きわめて希少です。そうそう出会うこともないでしょう。戦訓と言えるほどのものもありません」

む、そこを聞いてくるかこの人は。

「自分は、ネウロイからケツまくって逃げたことは何度もあります。ですが、どんな時でも命の危険など一度も感じませんでしたし、《迷彩》があればおよそどんなネウロイでも倒す自信がありました」

「人型ネウロイは違ったのですか？」

「はい。自分の《迷彩》を見破ったのは、おそらくあの人型が初めてです」

「なるほど。では少尉はその人型に負けた、と思っているのかもしれないね」

「負け、た？ 負けた……ああ、そうかもしれません。自分を恐怖させたネウロイは、これまですべて打倒してきました。ですが、あいつだけは倒せなかった。初めてです」

ぎりり、と奥歯をかみしめる。

迫水中尉の言葉で、どうしてわざわざスオムスまでやってきて資料を探そうとしたのか、ようやく理解した。

悔しいのだ。

憎いのだ。

「そうでしたか。では、人型ネウロイと実戦経験のある私からの忠告です。もしあのネウロイとであったなら、手の内は絶対に見せないこと。奥の手で倒してはいけません。すぐに学習されてまいります。固有魔法まで盗むことはありませんが、初美さんの得意なマニユーバは、二度目には通用しないと思って構いません。彼らはそれだけ学習能力が高いのです」

自分は、唐突に真剣な表情で語りだした迫水中尉の横顔を見た。

その表情は、先ほどまで見せていたスオムスの魔窟の主たる扶桑の恥さらしではなく、限りない戦闘を潜り抜けてきたベテランウィッチのそれであった。

「ではどうやって戦えばいいのですか」

「簡単ですよ。基本です。空戦技術の基本だけで戦えばいいのです」

「相手の見えない角度から、当たる距離まで近づいて、必中の一撃でコアを打ち貫く、ですか」

「その通りです。打てば響くとはこのことですね。教え甲斐があるというものです。打てば響くと言えば、どうです？ これから私とお互いのきもちいいところをうちあつて快感の声を響かせあいましょう！」

どこからでももってくるな、この女は。

「冗談はさておき、人型ネウロイの資料はこれですか？」

もう止めても無駄なのはわかつたので、はあはあ息の荒い中尉を無視して案内されてたどり着いた書類の束を指さして尋ねる。

「もう、つまらないですねえ。ええ、それですよ。一応、スオムス語とブリタニア語で書かれています。どちらかは読めますよね。読めないなら、私が夜、ゆっくりとかわりに読んで」

「結構です。それでは、閲覧させていただきます」

自分は、荒い息の中尉を無視して、閲覧室へと向かったのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その七

戦闘記録によると、人型ネウロイとの戦いは、一九三九年に行われたヴォクシ川にかかる一番大きな鉄橋であるサツコラ鉄橋を破壊する作戦にまでさかのぼることができた。

この時、人型ネウロイ——もどき、と呼称されていたようだ——と邂逅、ハルカ中尉は連れ去られ、義勇独立飛行中隊と戦闘になったのだという。

その後、しばらく現れることはなかったが、一九四四年四月、ブレイウィッチーズとスオムス義勇独立飛行中隊との共同作戦であるシリンダー撃滅作戦の時に、二機出現したと記録にある。詳細な戦闘記録はないが、どのように戦い撃破したかおおよそではあるが記されていたが、詳細が書かれているわけではなかった。申し訳程度に何が起きたのかわかる、程度のものだ。

というのも、人型を撃墜したのが、五〇二隊の戦闘隊長であるポクルイーシキン大尉とクルピンスキー中尉だからだ。

なるほど、五〇二隊の隊員が撃破したならこの程度の情報であるのも納得だ。

これではブレイブ隊の本拠地であるサンクトペテルブルクまで足を運んで調べないことには話にならないな。そして、可能なら五〇一隊での人型ネウロイとの交戦記録もみる必要があるだろう。

その場合は、統合総司令部にいけばいいのだろうか。

自分は、一通り目を通して資料室を後にする。

迫水中尉は、自分が資料を読んでいる間にどこかにいつてしまったらしい。

下手に自分が集中しているところにちよっかいを出せば、ひどく痛めつけられるということを体験したからだろう。

記録の中身を頭に叩き込んで、そのまま五〇七隊司令、ハンナ・ウインド少佐のところへと戻った。

「司令、初美です」

自分は、いつまでも背後を追跡してくるウィッチの気配を感じながら、執務室のドアをノックして、

「失礼します」

と言いながら、中へと入る。

「やあ、お帰り。無傷で戻ってこれたようだね」

「ハンドキャノンで狙われたときにはどうしようかと思いましたがね」

当たらないのはわかっていても、あの轟音は今思い返してみれば肝が冷える。

「顔にはそう書いてないようだけどね。聞いたよ、軽くあしらったそうじゃないか。少尉の体術にはアーチャー中尉も舌を巻いていたよ」
「拳銃の欠点をついただけです。教えればウィッチなら誰でもできます」

「そういうことにはしておこうか。なあ、本当に、しばらく五〇七にいてくれないかい？ 別に一年とは言わないよ。せめて一か月だけでも」
武芸者として乞われるのは珍しいので、いささかうれしくはあるが、そうもいかないのだよなあ。

「そこまで自分を買ってくれるのは大変ありがたいのですが、自分にはどうしてもやらねばならないことがあるのです」

そう言って、ちらりとドアのほうに視線を向ける。

まだ、彼女はドアの外にいるようだ。

「そのことは、オティーリア中佐より聞いてるよ。扶桑の御姫様からお願いなんだろう？ それなら、ここにいるても十分叶えられると思うけどね」

あいつ、そこまで探っていたか。よくもまあ、そこまで調べ上げたものだ。

「そうはいきませんよ、少佐」

「やっぱだめかあ。それで、すぐにでもでるのかい？」

自分は、軽くかぶりを振って、

「ここにきたばかりですよ。まだやるべきことをやってません。それ

に、自分から剣術を学びたがっているウィッチもいるようですからね。せめて一週間は稽古をつけてやらないと」

「そんな殊勝なウィッチがいるのかい？」

「ドアのむこうにいますよ」

「外に誰がいるのかわかるのかい？」

「これぐらい気づけないようなら、師範代なんてできませんよ。入ってきたらどうだ、三隅軍曹」

そうすると、ばつが悪そうにみつあみおさげのそばかすウィッチが入ってきた。

「私が付いてきてるって、いつから気づいてたんですか？」

「最初からだ。正確には、資料室を出てからだな」

「そ、そんな前から」

三隅の顔は驚きに染まる。

「武術の達人がどういう存在か、見たことがない人間にとってはそうだろうな。」

「ついてきたのも、剣術を習いたいからだだろう？ 師範学校では、滑空

標的機に剣をあてるのがやっとだったようじゃないか」

「どうして知ってるんですか？」

「扶桑に戻った時に、君が出演してる映画を見てね」

「み、みたんですか？ あれを」

三隅の顔は、今度は羞恥に支配される。やれやれ、せわしないものだ。

「へえ、ミヤは映画にでたのかい？」

「佐世保航空予備学校の宣伝映画です。三隅を中心に撮影した記録映像が上映されました。自分はアフリカに行く前に戻ったときに、たまにそれを見かけて映画館へ足を運んだのです」

三隅はどうせ答えないだろうから、自分が彼女の代わりに返答した。

「し、少尉！」

「ここで答えないと、あとでもっと大変なことになっておもちやにされるぞ。それでよかったのか？」

「い、いえ……それは勘弁してほしいです」

そう言われて恥ずかしげに顔をうつむかせた。

「へえ、今度、扶桑に問い合わせてフィルムを取り寄せようかな」

「やめてください司令っ！」

軍曹は、当然顔を赤らめさせながら訴える。

「まあ、そうだろうな。自分の未熟な部分をおおっぴらに見られるのは恥ずかしいもんだ」

「少尉も、ですか？」

「半年前の自分の言動を思い出したらそれだけでだな」

《ぎっくり腰》作戦の頃だね。そのときになにかやったのかな？」

「まあ、いろいろとな。作戦の後、《クバンの獅子》に徹底的にしごかれた」

あの時のことは、脳裏をよぎるだけでうんざりしてくる。ああまで絞られたのは戸隠流に入門して、初稽古をしたその時以来だな。

「少佐ー！」

そんな中、アーチャー中尉が大きな音を立てて開けざま執務室へ飛び込んできた。

「ヴアラモ島がネウロイに取られたっ！」

「なんだって！」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の
巻 その八

ヴァラモ島（オラーシャ語ではヴァーラム）は、ラドガ湖の北に位置する島である。一九三九年、ネウロイの侵攻激しいころにはやっらの一拠点として使われていたようだが、グリゴリーの破壊により開放され、復興作業が進んでいるはずだった。

位置的には、五〇七隊の防衛地だったのだが、該当地域は五〇二の直轄地であるサントペテルブルグも近いため、ネウロイの侵入もないだろうと二日に一度の定期巡回としていたのがあだになったらしい。

巢ではないが、大型の陸戦ウィッチが呼気の空戦ネウロイを吐き出して、ラドガ湖北部を制圧している状態になっている。

おまけに、現在ブレイブ隊はグリゴリー撃破時に損耗した戦力回復のために、大規模な作戦行動はできない。

よって、五〇七隊だけでどうにかしなければならぬわけだ。会議室には、ゲストの自分も含めて五〇七の隊員全員が集められていた。

状況は最悪に等しく、初動を間違えればグリゴリーの再来となりかねないだけに、全員の表情は緊張に覆われていた。

ラドガ湖のスオムス側湖畔から見えるヴァラモ島の様子が映された偵察写真が、三隅軍曹の手によって黒板に張り出される。

ハンナ少佐は教壇に立ち、

「現状はこうなっている」

その写真に写されている様子をざっくりと黒板に描き写す。

「航空写真はないのですか？」

アーチャー中尉が拳手をして尋ねる。

「残念ながらない。これが発見されたのも、ついさっきだ。」

現在、ヴァラモ島は全体が球状の外殻に覆われ、内部を確認することはできずにいる。加えて奴らが何を企てているのかわからない状

況だ。我々ができる作戦行動は外殻部への攻撃による、奴らのリアクションを計ること以外にはない。よつて、我々はこれより外殻に対して攻撃を加える。奴らに庭先でいようにされるほど、我々が間拔けな集団ではないことをたたき込んでやらないとな」

自分を含めた全員が起立し、

『了解しました!』

声をそろえて返答し、そのまま会議室を出ていこうとするが、

「初見少尉」

自分だけがハンナ少佐に呼び止められた。

「は、なんでしょう」

廊下に出ようとしたところで、自分は立ち止まる。ヴェスナと三隅が自分を追い越して駆け出ていった。

「少尉は今日は休んでくれないかい?」

「どうしてですか?」

今は自分は客分とはいえ五〇七隊に協力する立場だ。なぜ止められなければならないのか。

「少尉にとつては毎度のことなのかもしれないけど、君はまだここに来たばかりなのいろいろと働かせてしまった。せめて明後日までは休んでもらいたいんだが」

そういえば確かにそうか。

このまま働き通しでもいいのだが、何かあるとまずいし基地防衛も必要だろう。

「了解しました。少佐の指示通りに明後日まで休ませてもらいます」

休むのも仕事のうちだ、といったのは誰だったか。

そんな愚にもつかないことを考えながら、自分は少佐の指示通りに休息をとろうと決めた。

とはいうものの、自分も扶桑人だったのだろうか。

日も暮れて翌日の昼過ぎ部屋でだらだらするのも性に合わないの
で、基地がどういう規模なのかを散策ついでに調べておこうとあたり
を散策することにした。五〇七隊の連中は司令を残した全員が出計
らつていて、残されているのはスオムス第一中隊のみになっている。

空つぽとは言わないが、心許ない戦力であるのは確かだ。

カウハバ基地は、スオムスでも重要拠点であるだけにかかなりの設備が整っていた。スオムス第一中隊との共同基地でもあるのだから、そのためでもあるだろう。

季節は春を過ぎて初夏に足をかけているこの時期、スオミの木々は緑に覆われ芽吹きの時季を迎えていた。

松も散見されるところから推測するに、季節によつては松茸もとれるのだろうか。松茸の炊き込みご飯、久しく食べてないよなあ……。などと郷里の食事を思い描きながら、木々の間になにか獲物がいないかさがしてしまうのは貧乏性だからだろうか。

とはいえこの時期の鹿は痩せていてうまくないと思うが。

そうこうしていると、上空を三名のウィッチが当基地へと飛来してきた。スオムスの飛行第一中隊かあるいは第二四部隊だろうか。しかし、丸みがあるユニットのシルエットはカールスラント製のものではない。

スオムス空軍はカールスラントからの支援を受け入れており、メツサーシャルフ系のストライカーユニットを使用しているが、確認したあの機影は明らかに扶桑皇国のそれだ。

それも陸軍ではなく海軍。

そして、この近辺で扶桑皇国のユニットを使っているのは、サイレントウィッチーズ以外ではブレイブウィッチーズ以外に存在しない。ということ、五〇二隊の扶桑皇国のウィッチが三人、こつちにきたということだろうか。

「ふむ、一応出迎えてみるか」

自分は駆け足でストライカーユニットのサイレントウィッチーズ隊用の格納庫まで向かった。

走つて十分とかからない場所に格納庫はあり、そこはもしもの時も考えて十二機のユニットが格納できるよう発進速成装置が十二機並べられていて、自分もその中の一つを使用させてもらっている。

格納庫の出入口は五〇七隊が出撃したときそのまま開放されていて、そこへタキシングで三人のウィッチがやってきた。

五〇二隊の扶桑ウィッチだろう。

「なあ、あの三人、五〇二のウィッチか？」

近くを歩いていた整備兵に声をかける。

「あ、はい。なんでも昨日、急にこちらに派遣するとなりました」

「そうか、ありがとう」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その九

ちよつとしたいはずら心がむくむくと起き上がってきた。

扶桑のウィッチ三名がそれぞれ発進速成装置にユニットを収めて銘々がユニットを脱いでいるところへハンナ司令の従兵が出迎えようとしていたので、自分は彼女の肩をたたいてウイソクをする。

「アキラ少尉」

「司令のところに案内するんだろう？ 自分にやらせてくれないか」

「しかし」

「まあまあ。責任は自分が持つから、君はその辺でのんびりしてくるといいよ」

そう言つて、そこらでちよつと一杯ひっかけられそうなコインとあめ玉を一つ握らせた。そして、扶桑陸軍の軍装を脱いでワイシャツ姿になって鬚を解き、髪の毛をざつと落ち着かせ、前髪を目にかぶせて視線を悟られないようにすると、自分のユニットが収納されている促進装置のバーに軍装をひっかけて、彼女たちの前に姿を現した。

「ブレイブウィッチーズの管野直枝中尉、下原定子少尉、雁淵ひかり軍曹ですね。お待ちしておりました」

と言つて出迎える。

「ご存知かと思いますが、ただいまサイレントウィッチーズ隊員はヴアラモ島攻略のために出計らつております。司令がお待ちです」

左ほほにばんそうこうをはったウィッチが、三白眼で自分の顔を見る。彼女がかの有名な管野デストロイヤーか。

「なんだてめえ」

ふむ、簡単な変装だが存外ばれないものだな。それとも自分のことを知らされていないか？

「新しくハンナ司令の従兵になりましたアイラです。お三方を案内するよう命じられました」

「下原さん、聞いたことありますか？」

先のウィッチよりも若干背が高い、ふんわりとした感じのウィッチが一番背が高いウィッチに尋ねた。仏の雁淵こと雁淵孝美中尉の妹である雁淵ひかりだろうか。

「いえ、ありません」

ということは、残る彼女が下原定子少尉、と。自分とほとんど同じ身長とは、扶桑人のウィッチとしてはそこそこ珍しいな。

「おいてめえ、共通語に扶桑のなまりがあるな。扶桑人か？」

へえ、わかるのか。

「スオムスと扶桑の混血ですよ。実家では、扶桑語で生活していたんです。ダカラ、ワタシ、フソウゴ、チョットハマセマス。さ、案内しましょう。こちらです」

自分は、微笑みながら言つて、三人を司令官の執務室へと案内するため歩を進めた。自分を疑っている管野中尉も、なんだかんだ言つてついてきてくれる。

「後ろから見たら扶桑人に見えますね、下原さん」

扶桑人だからな。

「本当にそうですね。アイラさんはウィッチなんですか？」

「元ですよ。上がりを迎えたらすぐに地上勤務に移りました」

といつてはぐらかす。

「ブレイブウィッチーズの皆さんは、《フレイアー作戦》でかなり損耗したと聞きましたが、大丈夫でしたか？」

「ユニットの故障がすごかっただけで、みんなは元気ですよ」

雁淵軍曹がハキハキと答えてくれる。

なるほどな、彼女が五〇二のムードメーカーなんだろう。

「ひかり、余計なこと答えるんじゃないわねえっ」

「これぐらいいいじゃないですか、管野さん」

「そうですよ、管野中尉」

と、二人が管野をなだめにかかる。

なるほど。管野中尉は、噂通りかなり短気な人物のようだ。

対して下原少尉と雁淵軍曹は気長な性格なのか、あるいは暢気なのか。どちらでもかまわないが、むこうの司令がこの三人をこつちによ

こしたのがなんとはなしにわかるな。

菅野中尉は短気だが感の付け所のよさは、元々の素性がそうさせているのかもしれないな。

あるいは地頭がいいと言い換えてもかまわない。

菅野直枝という少女は、ウィッチになる以前はガリア文学に耽溺し、原本をたしなむほどの英才であつたらしい。

そのあたり、彼女の勘の良さは、毛並みの色は隠せないことの証明といえるだろう。

「お三方は仲がいいんですね」

自分の後をついてくる三人に声をかける。

「やっぱりそう見えますか?」

やたらと笑顔な雁淵軍曹が何かを言いそうになつた菅野を制して答える。あいつに何か喋らせていらぬ火種を振りまいても意味がないしな。

「私と菅野さんは相棒なんですよ、相棒」

どうやらそんな打算で機先を制したわけではないらしい。

自分はいささか汚れているな、と苦笑が浮かんでしまう。

単純に、雁淵軍曹は菅野という人物が好きなのだ。そして、その人物と彼女がそういう間柄であることが誇らしくて自慢したいんだろう。

「グリゴリー壊滅の時も、二人で巢のコアを破壊したんですよね」

と、下原少尉。

「はい! 菅野さんが《剣一闪》で外殻を壊して、私がリベレーターでコアを破壊したんです!」

思わず吹き出しそうになり、なんとかそれを飲み込んで押さえた。

「どうしたんですか、アイラさん」

咳払いをしてみかまして、

「い、いえ、気にしないで下さい。ちよつとくしゃみが出そうになつただけです」

り、リベレーターで? コアを? どういう状況の上でリベレーターでコアを破壊できるんだ。どういう方法でネウロイの巢を破壊

したかという概要は知っているが、詳細はレポートを読んでないからわからなかったぞ。

菅野中尉の固有魔法である《圧縮式超硬度防御魔方陣》、通称超硬シールドによって、単の本体である超巨大ネウロイの外殻を破壊、その後リベレーターで露出したコアを破壊した、ということなのは理解できるのだが、リベレーターでそんな離れ業ができるのか？

くそ、もつとしっかり情報を収集すべきだったな。

「あんときはどうなるかと思ったな」

菅野が思い出すように呟いた。

「そうですね。あのときは、菅野さんも魔法力使い切ってどうしようかって思ったんです。そうしたら、クルピンスキーさんからもらったリベレーターがポケットから目の前に落ちてきたんです。私、あわててそれをつかんで。先生から教えられたとおりに魔力を込めてコアに押しつけて撃ったんです」

ふむ、すでに菅野中尉が放った《剣一閃》でコアにそれなりにダメージは与えていて、そこにコアを突き崩す致命の一発を撃ったということか。

それなら確かにリベレーターでも可能になるのか？

「でも結局、五〇二のストライカーユニットは、あの一戦が原因で全部調子が悪くなって、ほとんど稼働できなくなっちゃったんです」

と、下原少尉が付け加えた。

「それなら、どうして扶桑の方々がちちらに来られるようになったんですか？」

ただでさえ五〇二隊はユニットの損耗率が激しい。

ろくな修理部品も残っていないはずだ。

「私とお姉ちゃん迎えに来た扶桑海軍が、私たちのユニットの修理部品を届けてくれて、それで私たちだけ動けるようになったんです。今は、ロスマン先生とジョゼさん、サーシャさんのユニットの修理が終わったんですけど、規格統一がはつきりしてる扶桑組で応援にいったほうがいいって、ラル隊長の命令がありました」

「なるほど、そういうことでしたか」

そうこう話してる間に、司令の執務室までやってきた。
自分は四度ノックをして、
「アイナです。ブレイブウィッチーズのお三方を案内しました」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の
巻 その十

自分は少佐の返答を待たずにドアをあけて、彼女に視線を送り自分の唇に人差し指を立ててウインクする。

ハンナ少佐は、自分が雑とはいえ変装しているのを見て納得したのか、小さく微笑んでうないた。

「アイナ、案内をありがとう。きみは引き続き所定の作業をしてほしい。作業が終わったらまた戻って、書類の手伝いを頼むよ。ちよつと面倒な書類をまとめなきゃならないんだ」

あー、何やら厄介ごとでもおきたか。

「了解しました。ではお三方、どうぞお入りください」

司令に一礼してドアを大きく開き、三人を部屋の中へと招き入れる。

「ありがとうございます」

と、元気な声で雁淵軍曹は自分に礼を言って中へと入っていく。その後を二人が続いて入室する。一応、すれ違いざまに下原は会釈をしてくれる。

執務室のドアを閉めて、自分は執務室を離れる。

「んだと、あいつが初美だつてののか！ 野郎っ、どこいきやがった！」

怒鳴り声と同時に菅野中尉が部屋のドアを開け、廊下に飛び出す音が聞こえてきた。

「ぶっ……はは、あははははははっ！」

思わず漏れてしまう笑い声を押さえることができなかった。

少し間を置いて少佐に会いに行くと、彼女はすいぶん深刻な顔で自分を迎えた。

従兵には席を外させていたため、部屋には少佐と自分の二人しかない。

迫水中尉が聞き耳を立てているかもしれないと思って気配を探ってみるが、ドアの外に人がいるような雰囲気は感じられなかったのだ。

それはないだろう。

「それで、何の用なんですか?」

自分は、従兵の机に寄りかかりながら尋ねる。

「ヴァアラモ島攻略がちよつと面倒なことになってね。きみじゃないとどうしようもなさそうなんだ」

自分じゃないと、か。

「具体的に教えていただけますか?」

「外殻が半球体になっているのはすでに知っていることと思う。隊員が試しにこの外殻に向けて総攻撃をおこなったんだけど、途端に大量のネウロイが現れて反撃に転じ、数に押されて撤退したんだ」

「それで、近づいてどういう状況なのかを調べてきてほしい、ということですか」

「その通り。そしてこれは命令ではなくお願いなんだ。五〇七隊に正式に所属してるわけではないからね。うけてくれるかい?」

「自分でなければできない任務なのならば、受ける以外の選択肢はありませんね。プランはできてるんですか?」

「潜水して直接覗いてきてほしい」

「覗く、ですか」

「わかるとは思うけど、あれだけ巨大なネウロイだと中身はスカスカのはずなんだ。可能なら、中がどうなっているのか写真に撮ってきてほしい。もし中がどうなっているのかわかるなら、そこからなにかしら打開策を見いだせるかもしれない」

「酸素ボンベはありますか?」

「海軍の倉庫に一本だけあるそうだ」

「了解しました。初美あきら、偵察任務を受領いたします」

少佐の前で直立し、敬礼した。

「よろしく頼むよ」

翌日、自分はストライカーユニットの格納庫ではなく、フィンランド海軍の倉庫に足を向けていた。

小さな倉庫で、荷物が雑然と置かれている。

「少尉、本気ですか?」

スオムスの海軍下士官がうさんくさげに自分を見ていた。

「本気だ。というより、ヴァラモ島の内部の偵察は自分以外にできないだろうからな。しかたないだろう」

そうは言ったが、実際はかなり乗り気だった。ウィッチとしてではなく、斥候としての任務につくからだ。

前哨戦として、五〇七隊が外殻へ攻撃を仕掛けてみたらしいのだが銃弾を簡単にはじくほどに堅く、手持ちの火器ではヒビをいれるのがやっとだったらしい。

状況が許せば、雁淵軍曹の《接触魔眼》でコアの位置を把握したいのだが、そのための手勢が少なすぎる。それに、使用にはラル司令の許可が必要とのことだが今回は許可されなかったとハンナ少佐より聞かされた。

それで、自分の出番ということになったわけだ。

「しかし、ユニットなしで接近するのは無茶ではないのですか?」

「無茶なものか。基本水の中を移動するのだからネウロイの認識範囲外だろうし、なにより自分がいくのだ。普通のウィッチがいくより自分がいったほうが様々な面で確実だ。ハンナ少佐の許可も得ている」
「わかりました。でも、ほとんど使われてないですよ、こいつ」

木箱に収まっていたそれをえんやこらと持ち出した。

「いいんだよ、使えればそれでいいんだ。点検はしているんだろう?」

「もちろんです」

「それなら十分だ。木製の手こぎ船もあるんだろう?」

「はい」

「OKだ。コンプレッサーを借りるぞ」

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 六の
巻 その十一

木製の手こぎボートでヴァラモ島のそばまでやってきたのは翌日の早朝だった。

あれからは、念のためにボンベのチェックをして不備がないか確認して、久方ぶりの水練のために体の準備を整え、もっていくべき小物を選別するなど、やることをやっていたらあつというまに昨日は夜を迎えてしまった。

ともかく、湖畔に浮かべられた木製の手こぎボートに荷物を放り込んで扶桑海軍の水練着に着替えると、ヴァラモ島を包み込むドーム状のネウロイを見る。

今は、何かあると困るので自分以外のウィッチによる哨戒行動は行われておらず、そのためか小型の空戦ネウロイ一匹すら空を飛んではない。

「いくか」

呟いて《迷彩》を発動し、櫂をこいでネウロイへと近づいていく。

ぎし、ぎし、とボートをきしませながら、ゆつくりとヴァラモ島へ進む。

「ネウロイの巢の調査に続いてネウロイか。まったく、やりがいがある任務が続くな」

ある程度近づくと錨代わりの岩に綱を結わえたものを落として荷物が入った防水袋とボンベを背負い、湖へと身を投じた。

春の湖は冷たいが、ウィッチであるならば耐えられない水温でもない。

しばらく水の中を泳いでいくと、日の光が陰っていく。

それはネウロイの甲殻の下に移動したことを意味している。

なるべく波を立てないように、静かに湖面へと顔を上げると、空には見たこともない光景が広がっていた。

島全体を覆う外殻の内側、その中空に大きめのコアが浮遊し、それ

を守るように正方立方体のネウロイが多数漂っていた。そのため、甲殻内は太陽光が完全に遮られているのにもかかわず、コアからの赤い光によって視界は保たれている。

コアの光があつてようやく調査、撮影ができるとは皮肉めいたものを感じるな。

特に動きを見せないネウロイを視認するに、自分の《迷彩》が有効に働いているのがわかる。

それを確認して、また水の中へと潜って島の湖畔へと向かつて泳いでいき、小石の浜辺にたどり着く。

ボンベを背負ったままその場所にあつた小屋へと入ると、ボンベを下ろしてカメラとフィルムを防水袋から取り出して《迷彩》を使用したまま外へと出る。

なるべく物陰に隠れつつ、島の状態やネウロイのコア、あるいは小型ネウロイをフィルムに焼き付けていく。

今自分が撮影しているものは、このネウロイが倒されても何かにつけて役立つはずだ。

だから、無意味と思われそうなものもすべて写真に撮っていく。

とはいえ、島内の建築物といえるものは中央の祭祀場とその周辺の神官たちが住まう住居のみなのだが。

そうやってしばらくヴァラモ島の状態の調査を行っている、瞬間的に外殻に穴が開き、外界の日差しがフラッシュのように殻内に届いた。

外からネウロイが入ってきたか、あるいは攻撃でもされたか？

そんな疑問をよそに、体は勝手に穴があいたと思われる方向へカメラをむけて、ファインダーを覗き、ピントをあわせ、リリースボタンでシャッターをきり、巻き上げレバーでフィルム巻き、そしてシャッターを切る。

何度その動作を繰り返しただろうか。

ファインダーの中に、アレが収まった。

人型ネウロイだ。

ぐび、と喉がなり、怒りが体に乗っ取ろうとする。

あの時、アフリカでのあの時の人型ではないだろうが、やはり自分を追い詰めたあいつを叩きのめしたい欲求にかられる。

だが、そのための武器が今手元にはない。

できることは、奴の行動をフィルムの中に閉じ込め、何をしたのか記憶することだけだ。

だから自分は、慎重に慎重を重ねてあいつを一度、二度とフィルムに収めた。おそらく、鮮明な人型ネウロイの写真はこれが初めてだろう。

そうやって撮影していると、あれは空中を漂い、コアへと近づき接触する。奴は、コアとともに脈動する赤い光に包まれた。

何をやっているのかわからない。理解できるはずもないが、だからといって記録しなくていいわけではない。とにかく、その様子も余さず撮影していく。

そうやって一通り写真を撮り終わると建物の物陰に隠れてしゃがみ込み、フィルムの残り枚数を確認した。

残りの枚数は三枚。無駄にしまいが、フィルムの交換はこの夕イミング以外にないだろう。巻き上げレバーを起こして、フィルムを巻き上げて裏蓋をあけ、フィルムを取り出して防水袋に入れる。

そうしていると、風が頬を撫でた。

風？

外殻に覆われて風の通り道が少ないこの場所に風？

思わず動作や息を止めて顔を上げた。

人型が自分のそばにきていたのだ。

くそ、どうする。迷彩はきいているはずだ。

視認はされてない。

現にキューブ型ネウロイはまったく反応していない。

忍び刀で切り付ける——太刀で切り伏せられなかったら殺される。

人型ならば組み伏せて——ビームで焼き殺される。

打撃は、管野中尉のような固有魔法でもない限り、無意味だ。打つ手がない。

皆無だ。

できることはただ一つ。

息をひそめて動かずにいる。

人型は、自分を見下ろす位置で静止し、不思議そうに自分をみているだけだった。

自分を熱原体として認識しているが、見ている対象がなんなのか判別付けられずにいる、と考えていいだろう。

しかし、ウィッチを洗脳して連れ帰る、とは言われているが、その気配がまるでないな。

そうして自分が石のように動かずにいると、ネウロイは数分でその場を離れてコアへと飛んで行った。

さらに数分動かずにいたが、何も起きないことを知ると、自分はため息とともにその場に崩れ落ちたのだった。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その十二

ヴァラモ島の調査を終了して、自分はカウハバへと戻っていった。アフリカでの失態を再び演じることはなかったが、今度もまた人型ネウロイの撃破は状況が許さなかった。あの時は交戦許可が下りてなかったのと、ネウロイの巢の直下であったのが理由にあったが、今回は、武装を所持していない上にネウロイ内での対峙である。アフリカの時以上に手を出すことは危険だ。

よって、自分は人型ネウロイをやり過ぎすほかに手立てが存在していない。今回の一件で人型ネウロイの洗脳が、自分には効果がないとはつきりしたのだけは確かだ。

原因こそわからないが、これは有益な情報だろう。

カウハバに戻ると、自分はネウロイ内部の状況を撮影したフィルムを情報課の人間に渡して、司令に簡単に状況報告を行い、そのまま許可を得てサウナへと飛び込み、即座にサウナストーンへ水をかけ、蒸気を出す。

落ち気味だった湿度が一気に高くなって、全身まるごと湯船に沈んでるような感じになる。

いくらウィッチとはいえ、まだ冬も開けて間もない湖へと潜ったのだから、体温は冷え切っていて当然だ。

普段ならサウナは自分にとって熱すぎるからあまり利用することはなかった。

しかし今の自分にはこのサウナこそが必要だ。

「あー……」

温泉につかったときの師匠のような声が漏れてしまう。

冷えと緊張で堅くなっていた筋肉が、一気にほどけて柔らかくなるのを実感する。

「これは生き返るな……」

ヴィヒタで背中や肩の辺りをぱさぱさとたたくと、じんわりとその

場所の血行がよくなる。

たまらんなあ、これはたまらん。

ああ、と思い出したようにサウナルームに置かれている大きな砂時計を逆さにした。

これ一回でおよそ十分計測できる。

砂時計が落ちきったら野外の水風呂にはいって体の熱をとり、しばらく休憩して体を洗って終了な訳だ。休憩を挟まないと、どんな年齢の人間でも死ぬ可能性があるからな。

扶桑人が、長風呂してから脱衣所でのんびり体をおちつけるのと同じだ。

「だいたいなんだってんだ、あいつの作戦をそこまで優先させる必要なんてないだろ。オレとひかりが突っ込んでひかりがコア見つけてオレがぶつたたきやそれですむ話だ。違うか？ ひかり」
「それはそうですけど……」

脱衣所のほうから、そんなやりとりが聞こえてきた。

ふむ、どうするか。菅野中尉は自分に相当お冠のようだが、ここで逃げては関係がこじれるしな。

どたどたと足音やかましく、中尉が雁淵軍曹を連れて入ってくる。蒸気が逃げるので、改めてサウナストーンに水をかけてやると、むわつと白い煙が広がった。

この水蒸気に乗じてトンズラするのもくノ一らしくはあるのだがな。

「お、誰だかわかんねえけどすまねえな」

「アイナですよ。その節はお世話になりました」

自分はあるていど偽名で答える。

「アイナって……あきら、てめえっ！」

本当に短気なんだな、こいつ。

「まあまあ、落ち着いてください」

まるで馬か何かかのように中尉をなだめようとするが、

「うるせえっ！」

「菅野さんっ！」

雁淵軍曹の制止も訊かずに殴りかかってくるので、自衛としてやむなく中尉の手を取ってひねり、投げ転がす。

ずだん、とサウナの床に転がるように倒して、

「落ち着きなさいと言っておりますっ！」

暴れられるのも厄介なのでそのまま腕を順関節に極め、中尉の背筋に膝を乗せて動けなくさせてしまう。

どんな怪力でも、要所を押さえられては身動き一つかなわない。

「ぐっ、このっ！」

「貴女たちをからかったのは謝罪します。しかしいきなり殴りかかれるほどのことはしていない」

膝の下で、どうにか自分に押さえつけられた状況から逃れようともがいているが、たとえ魔力を使って筋力を底上げしようと思えばかりは無理なのだ。

「それに、今あのネウロイへの攻撃はやめた方がいい。あそこには人型が居る」

「なんだと？」

この一言で中尉の体から、抵抗しようとする力がなくなったのがわかったから、拘束を解いて彼女から離れて腰掛ける。

「痛くねえ……」

菅野中尉は関節を極められた肩と肘を回して、全く痛みがないことに驚いていた。

「アイラさん……じゃなくて、初美少尉。その、人型っていうのはなんですか？」

「雁淵軍曹は知らない情報だったか。人型とは人型ネウロイのことだ。戦闘にはかなりの注意を必要としている。菅野中尉も、何度か交戦経験があるはずですよ」

「ああ、そうだ。一度意識を奪われそうになった。あきら、てめえは無事だったのか？」

「原因は不明ですが無事でした。おそらく自分の固有魔法の《迷彩》が原因だとは考えられませんが」

「おめえの固有魔法についてはラル隊長からきいてる。電波的に透明

になるんだったか」

「すごく簡単に言えばそうなります。そしてそれは、ネウロイの目から自分の姿を隠すということでもあります」

あの人型には通用していかないがな。

「それでてめえがネウロイの偵察にいったわけか」

「はい、交戦状態ではないネウロイの状態を写真で保存しておく必要もありますから。今は自分が撮影してきたフィルムの現像を行って
いるはずです」

「今はその結果待ちなわけですね」

「その通りだ、雁淵軍曹。まだ確定ではないが、自分が人型の相手をすることになると思われる」

「《迷彩》で人型の洗脳が効果を及ぼさないからか？」

「はい、菅野中尉」

「オレのことは菅野でいい。それで、勝つための算段はあるのか」

「なければ対人型戦に立候補しませんよ。それでは、自分はそろそろ時間ですので失礼します」

ちようど砂時計が落ちきったところで、自分は二人にそう告げて水風呂に向かうのだった。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その十三

自分は、サウナルームを出て身支度を調べると三隅軍曹の居室に向かうことにした。

扶桑に戻ったとき、彼女が出演する記録映画で、苦勞して空戦ネウロイを模したグライダーに格闘戦を挑んでいたのを見たのだが、接近してもなかなか木刀を当てられずに難儀していたのを覚えている。

そして、あの分だとまだまだ彼女はまともに空戦ネウロイを扶桑刀で相手にできないだろうと思えた。

そこで、自分が稽古をつけることで、その一助となればと考えただ。

銀幕の中にいた軍曹は必死だった。元々才能はあつたのだろうがそれに驕らず、できないからと腐らず技量をあげるため訓練に邁進していた。自分はそういう人間が大好きだし、無性に応援したくもなる。

それなら、多少なりとも彼女の手助けをできれば、と感じた。
だから、

「三隅軍曹、初美だ。少し用があるのだが、かまわないか？」

自分は、彼女の部屋のドアをノックした。

「はい、なんででしょうか」

三つ編みお下げの彼女は、すぐに反応してドアをあけた。

「剣術の稽古をつけようと思ったのだが、やる気はあるか？」

「本当ですか？」

「武芸武術に関しては嘘は言わない」

自分がそう言うと、三隅は破顔してすぐに部屋の奥に引つ込み、ドタバタと物音を立てて木刀を持ちやってきた。

「お、お願いしますー！」

自分は満面に笑みを浮かべて首肯し、外へ向けて歩き出す。

「まあ、海軍の学校でならつたことのおさらいにしかならないかもし

れないがな。とりあえず外に出るか」

「はいっ」

元気がいいのはいい傾向だ。

「貴様は空中での斬り合いをどう捉えている？」

木刀を持った三隅軍曹を連れ立って、自分は兵舎の脇の芝生にやってきて、そう尋ねた。

「どう、とは？」

ふむ、やはり彼女は空戦における文字通りの格闘戦がどういうものなのか理解していないか。

「そうだな……では、こう尋ねよう。佐世保では空戦ネウロイを扶桑刀で斬ることについては、どう教わった？」

「えーと、据え物切りと心得よ、と、そう教わりました」

「それは空戦原則だな。まあ、似たような物だが。実のところ、空戦でネウロイを切るのは、おおまかにわけて二種類の交差機動しかあり得ず、対象は大型ネウロイのみとすべきなのだ」

「二種類の交差機動で対象は大型、ですか」

「そうだ。それ以外ではほとんど成功しないと思ってかまわない。そうだな……自分はこうやって貴様の前を歩いて横切るから、その木刀で斬りかかってみるといい」

「い、いいんですか？」

「かまわん」

自分は、三隅の前をゆっくりと歩く。

「いやあああつー！」

声を上げて斬りかかってくると、半歩体を横にずらしてよけた。

三隅は空振りに終わった木刀の勢いを殺しきれず、とととつ、と転びそうになったので、地面に倒れそうになった彼女の胴をさつと抱えて助け起こす。

「大丈夫か？」

「あ、ああ、ありがとうございます」

「いや、無事ならかまわない。つまりはこういうことなのだ。後ろや横から相手を捉えようとする場合、加速するか横に振られるとそれだ

けで回避されてしまう。その動きを追う側は捉えきれない。つまり、ウィッチとネウロイの航跡が交わらないわけだな。ここまでではわかるか？」

「はい、わかります」

実演を交えての説明だからな。これでわからないとこちらが困る。「よろしい。では、どうすればネウロイとの航跡を重ねやすくできるかだ。その一つがヘッドオンだ。こちらに突っ込んでくるネウロイにむかって自分もつつこんでいく。これがが一つ目の交差機動になる。では、もう一つがどういう状況か考えてみる」

眉を寄せて腕を組み、うーんと考え込み、

「えーと……上下からの攻撃、ですか？」

いいところをついてくるな。さすがは五〇七隊に配属されるだけはあるということか。

「おしいな。正確には上からの交差機動だ。相手を俯瞰した状態で視認し、相手が下降による加速の利点が生かしづらい上空からの急降下攻撃が有効だ」

自分は、右手をネウロイ、左手をウィッチに見立てて仕草でその様子を教える。

三隅は、ふむふむと頷きながらその状況を見て頭に入れていく。

「そりゃあ、黒江大尉や坂本少佐のような空戦の達人ならば中型や小型のネウロイを扶桑刀で撃墜することも可能だろう。ただ、貴様はそうじゃない。それならば、やることはみえてくるんじゃないのか？」

天啓でも得たかのように、三隅は表情を明るくさせる。

「わかりました、初美少尉！　ありがとうございます！」

「しばらくはヴァラモ島の攻略作戦も実行されないだろう。なんなら訓練飛行も付き合うぞ」

と、自分が提案すると、

「お願いします！」

目を輝かせながらうなずいたのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その十四

自分と三隅軍曹は、戦闘訓練のために格納庫へと足を向けていた。ストライカーユニットはすでに整備を終えており、いつ発進してもいいよう、発進速成装置にセットされている。

自分は、腰に吹き流しをつけて、三隅は木刀を手にしていた。

「吹き流しをつけて飛ぶから、軍曹は吹き流しに斬りかかれ」

「ありがとうございます、少尉」

「では、自分が先発する」

三隅にそう告げてユニットを履くと、発進速成装置を中心として梵字の魔方陣が広がり、格納庫内を青い光で染め、使い魔であるモモンガの尻尾と耳が生える。大きめの尻尾がふるんとふるえた。

同時にストライカーユニットのエンジンが始動し、呪符プロペラが発生、回転し始める。魔道エンジンが十分なパワーを発揮するのを確認して、

「《くノ一の魔女》、発進する」

速成装置のストッパーを開放すれば即座に勢いよく前進し、すぐに離陸速度に到達し、ふわりと空に舞い上がる。

三隅も上がってくる。

零式艦上戦闘機ならではの軽さと運動性、それに離陸性能だな。

「三隅、まずはおさらいだ。自分は適時回避運動をとるから、貴様は吹き流しをねらって木刀できりかかってみる」

「了解しました！」

自分はスロットルをあけて、一気に加速する。重戦ユニットならではの加速性能でもって三隅を突き放し、ある程度距離を取ると速度を落とす。

「やってみろ、三隅」

『はいっ！』

後ろを確認する。

三隅が追いかけてきて、構えていた木刀を振りかぶろうとしていたので、即座にバレルロールを行い避けつつ彼女の後ろにまわりながら上体を起こして急上昇した。

軍曹は即座に自分を視界にいれたのか、インメルマン旋回で追跡する。

視界に収めていれば即座に相手に対応できるのはさすが軽戦ユニットだな。

上昇してきた彼女の出鼻をくじくように、自分は緩やかに下降する。

『くっ！』

「さすがは五〇七の隊員だな、よく食らいつく」

『はあ……はあ……いやあああつ！』

さらに追跡しつつ斬りかかってきたので、上体をさげて急降下へと切り替えれば、三隅の木刀は空を切っていた。

そうして、何度か彼女の斬撃を回避して追いかけてつつ斬りつけることの困難さを体験させると、

「よし、一端終了だ」

『は、はい』

「息が上がっているな。巴戦をやりながらの格闘戦はきついだろう」

『相手の回避機動、を、よみながら、接近するのが、これほど大変だと、は……』

「息を吸いながら腹をひっこめて、息を吐きながら腹を膨らませろ、数回やれば息も整う」

『は、はい』

自分に言われたとおり、素直に何度か呼吸するとインカムから聞こえてくる荒れた息づかいもなくなっていく。

「どうだ、楽になったか」

『はい、ありがとうございます』

「では次だ。軍曹は自分の上空に位置しろ。太陽を背にするのを忘れるな」

ネウロイが太陽の影響を受けるのかわからないが、やれることはや

るべきだ。

『了解です』

彼女が所定の位置につくと、自分は前に進み出す。

「いつでもいいぞ、こい」

そう言つて、大型ネウロイの動きを再現してゆらゆら左右にゆれながら飛行を開始する。アグレッサーとして大型ネウロイを模倣するのだから当然だ。

さて、軍曹はどう動くのか。

零式艦上戦闘脚のエンジン音が耳に入ってきたと同時に、ぐん、と吹き流しが引つ張られてバランスを崩しそうになった。

何度か練習しないと無理だと思つていたが、一度で当ててくるとはさすが佐世保が送り出したウィッチだけはあるな。

いやはやたいした物だ。

『あ、あたった？ やった、あたったあつ！』

インカムを通じて三隅の喜びの声が飛んでくる。

「こちらが攻撃してはいえ、一度で当ててくるとはたいしたものだな。驚いたぞ。さすがは軍神北郷の学び舎で学を修めてきただけはあるな」

『初めてです、初めてこんなきれいにできました初美さんっ！』

はは、まさに欣喜雀躍だな。

自分がホバリング状態にはいると、そばに軍曹が飛んでくる。

「言われてすぐにできると言うことは、貴様がそれだけ優秀だという証明だな、誇つていいぞ」

「はいっ！」

「今のでわかったと思うが、扶桑刀による攻撃の基本は一撃離脱だ。斬つたら撃墜したしないに関わらず離脱することを考えろ。ほかにも細かな戦技規則はあるが、肝要なのは相手が回避困難であり、なおかつ表面積を最大に視認できる位置から高速で接近し攻撃、離脱することだ。さあ、もう一度だ。次は少し動きを加えるぞ」

「わかりました、お願いします！」

自分はその後彼女のアグレッサー役をしばらく続け、ある程度形に

なつたところで基地に帰投したのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その十五

偵察写真が現像後、作戦が発令されたのは自分が教導役をやってからさらに数日たってからだだった。

ネウロイに対しての対策は未だできておらず、かつ、ドーム状のネウロイから人型がでていったという観測がされてない以上、あの中にいると考えるのが普通だ。それ故に、作戦立案もかなり難航したのだろう。

三隅軍曹が基地にいたことに疑問を持たなかった自分に緊張感がないな、と思うが、それなら彼女が戻ってきていたことも理解できる。なにしろ、人型への対処法は未だに見つけられていないのだから、ウィッチとかのネウロイとの接触をなんとしても避けねばならない。つまり、作戦がとりあえず形をなしたということは、何かしらの打開策が見つけられたということでもある。

そして、それは自分が望んでいたことでもあった。太陽が中天にさしかかろうとしていたそのとき、ヴァラモ島攻略作戦は実行に移された。

作戦は三段階からなっている。

第一段階は、自分と雁淵、菅野組、それに下原少尉以外の全員でヴァラモ島のドーム状ネウロイから可能な限りネウロイを排出させ、撃墜することにある。

『小型の群れが出てきました。すべてこちらに向かっています。雁淵、菅野組、ならびに初美少尉には気づいていないようです』

下原少尉には《魔眼》でネウロイの出現状況を逐一確認、報告する役割が与えられた。出てくるネウロイが小型から中型へと変化したときや人型ネウロイが現れた場合に、ハンナ司令へと伝達するのだ。『下原少尉はそのまま継続して対象の監視を続けて。他は、ネウロイの撃破を。作戦開始だ！』

『了解っ！』

眼下では、ヴァラモ島のネウロイから排出されていく小型ネウロイとの交戦が始まった。

島の南方には雁淵軍曹と菅野中尉の二人が待機していて、自分は上空で奴が現れるのを待っていた。

奴、すなわち人型ネウロイが現れたときが自分の出番だ。

今のところ、人型ネウロイの洗脳に対して抵抗が確認できている《迷彩》を使用した状態で、奴を撃破、あるいは釘付けして動けなくなるのが今の自分の役割になる。

これが第二段階になる。

そうやって人型の脅威がなくなったところで、作戦は第三段階へと移行する。

すなわち、雁淵軍曹が《接触魔眼》でコアへの最短距離の場所を確認、菅野中尉が《剣一闪》でこれを撃破するのだ。

『きやあああああつ！ 危ないですうううつ！』

『メガネかけろメガネ！』

『こつちくん！』

『最初からメガネをかけたらどうです』

『だってかけたら不細工になりますからっ！』

『空ではネウロイ以外みてないから気にしなくていいよ』

銃声とともに、どうしようもない内容の会話が飛び交う。おそらく一番緊張感がないJFWだろうな、この部隊は。

ともかく、彼女たちはなんだかんだと言い争いをしながらも、湧き出すように現れる小型ネウロイを撃破していく。さすがは幾度もの戦いを経験してきた、最古にして歴戦の統合戦闘航空団といったところだろうか。

『司令、人型の出現を確認しましたっ！ 場所は頂点部ですっ！』

そんなところに、下原少尉の無線がとんできた。

『初美少尉っ！』

ハンナ司令の声が届くと同時に、

「了解したっ！」

そう叫んで《迷彩》を発動し、頂点部へと急降下を開始する。

「オン・マリシエイ・ソワカっ！」

ホ一〇三機関銃を構え、頂点から出てきた人型を視認すると引き金を絞り、銃弾の雨を降らせる。

何発かはかすめるが、コアを貫くことはできなかったようだ。顔らしき部分を自分の方に向けると、独特の飛行音を響かせて飛んでくるが、自分がどういう存在か認識しきれていないようで、攻撃する気配を感じられない。

ならば、とさらに銃弾を浴びせるが、相手もヘッドオンでこちらに向かつてくるので標的としてはかなり小さく、なかなか命中弾を与えられなかった。

そのまま交差する。

扶桑刀を抜いていれば一撃で撃破できたが仕方ない。

ぐん、と体を反らせて上昇機動に移り、体を返して人型を視界内に収める。

「アフリカの時は、手を出すなどの指令があった」

照準し、撃つ。何発かかすったようで右肩と左足が削れるが、すぐに修復された。

「先日は偵察任務だから手を出せなかった」

がちん、と音を立てて弾倉が底をついた。

弾倉交換する暇が惜しい。

扶桑刀を抜き放つ。

「だが、今は違う」

脇構えで、矢のように奴へと飛んでいく。

「戸隠流初美あきら、参るっ！」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 六の 巻 その十六

魔道エンジンをフルスロットルで回して、人型めがけて突っ込んでいく。

すれ違いざま脇構えにした扶桑刀で切り抜ければ、腕を切り落とすことに成功した。

痛覚でもあるのだろうか、悲鳴のような金切り声をあげて腕を再生させる。

「コアは胸元と聞いたが、易々とは斬らせぬか」

振り向いて旋回をかけると、むこうも自分を追いかけるように飛んでくる。

バレルロールで人型をオーバーシュートして増速、斬りつけようとするが、宙返りでよけられたので後を追うように宙返りをしつつ納刀、空になった機関銃のマガジンを交換した。

そして銃を構え、

「くらえっ！」

三点射撃で狙い撃つが当たらずにかすめるだけで、痛撃を与えられない。

むこうが両手をこちらに向けてきた。

いやな予感がしてバレルロールをやると、自分がいた場所にビームが二発飛んでくる。

さらに連続してビームを撃ってくるが、自分も左右上下に体を振って赤い熱線をよけていく。

そうしながらも機関銃を撃つものの、ろくな照準もせずに撃つても当たるはずもない。

唐突に人型が急降下を始めた。

その先をみれば、二つの点がドーム状ネウロイの頂点部にむかって飛んでいるのを確認できる。

なるほど、雁淵軍曹と菅野中尉が攻撃できるだけの余裕を作れたわ

けか。

となれば、こちらも奴に二人の邪魔をさせるわけにはいかんな。自分も、人型の後を追いかけて急降下を開始する。高度に若干の不安はあるが、なにより撃墜できないことには話にならない。

急降下と加速によるGが、ぎし、ぎし、と木製疾風に悲鳴を思わせる軋みをあげさせる。

幸い速度はこちらのほうが出たようで、木製疾風が分解する前に扶桑刀が届く距離へと近づけた。

奴の腕が二人に向けて赤く輝き始めるが、遅いつ！

「ふっ！」

刀を抜き放ちざま、足を切り落として返す刀で胴を逆風に切り裂く！

カツ、とコアを裁ち切る手応えを感じると同時に、人型が破裂するように破片をまきちらしながら消滅していく。

気づけば引き起こしにはギリギリの高度まで降りていた。

間に合うか。

ストライカーを下に向けて全力でエンジンをぶん回し減速を試みる。

湖面にぶつかる寸前で停止すれば、ぶわっと湖面がしぶきをあげ、ふわりと浮き上がった。

湖上に舞い上がって《迷彩》を解除、無線通信を可能にする。

『見直したぜ、くノ一。人型ネウロイを本当に一人でなんとかしちゃうなんてな。やるじゃねえか』

菅野中尉の声がインカムから聞こえてくる。

「中尉こそ、雁淵軍曹と共同とはいえネウロイを撃破したんだからたいしたものですよ」

『へっ、それぐらいなんてこたあねえよ』

『雁淵軍曹、菅野中尉、初美少尉、三人とよくやってくれたよ』

と、ハンナ司令。

「こちらも奴にはやられっぱなしでしたからね。すっきりしました。これより、そちらに合流します」

その後、自分は五〇七と五〇二の混成部隊と合流し、作戦成功を喜び合った。

どさくさに紛れてへんなどころを触ってくる迫水中尉には辟易したものだ（飛行中なので下手に制圧してはもろとも墜落してしまう）、ともかくこうして自分は人型ネウロイに対しての一応の復習はなったわけだ。

今回撃墜した奴は、アフリカのあいつではないだろうが、一度は手を出せない時に自分をいいように追い詰めてくれたのは事実であり、こうして復習ができたのは痛快だった。

逆恨みと言われればそれまでだが、おびえるウサギのように縮こまっていなければならなくなった羽目になったのは屈辱だ。

その鬱憤を晴らせただけでも十分だろう。

自分は、これを最後にサイレントウィッチーズを離れ、五〇二隊の扶桑組とともにブレイブウィッチーズの基地があるサンプトペルブルクへと移動する。

人型ネウロイとのより詳しい交戦記録を確認するためだ。

自分は相手の知識などほぼ持っていない状態で人型ネウロイを撃破できたが、次があつたとしても今回と同じように運べるとは限らない。

なんにせよ、敵の知識は必要なのだから。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の巻 その一

オラーシヤの中でもかなり大きな街であるペテルブルグは、現在無人の都市となっている。

ネウロイの侵攻により、市民は全員避難してしまったからだ。

現在一般市民の居住は禁止されていて、広大な都市には第五〇二統合戦闘航空団の部隊員が本拠地となっている要塞を中心とした場所に居を構えている。

要塞には後付けでウィッチの離発着用滑走路が作られており、スオムス湾にむけて伸びている。

スオムス湾は白海へと通じていて、そこには以前、グリゴリーと称されたネウロイの巢が存在していたが、今年の初め頃にブレイブウィッチーズの手によって壊滅させた。

現在、ブレイブウィッチーズは壊滅的打撃を受けたストライカーユニットの補充や修理もほぼ完全に終えており、部隊としての機能は回復したと言っている。

自分は、ブレイブウィッチーズに所属する扶桑のウィッチ——すなわち、管野直枝中尉、下原定子少尉、雁淵ひかり軍曹の三人とともにこのペテルブルグへとやってきた。

目的は、人型ネウロイの資料閲覧であるわけだが——どうやら連合軍でも人型ネウロイは問題になっているらしく、すぐに移動許可が下りてきた——、五〇二部隊でも人型に関連して色々問題が起き始めているというのは、ペテルブルグへの道すがら管野中尉よりそれとはなしに聞かされていた。

「やあ、あきらくん、よく来たね！ 僕はヴァルトルート・クルピンスキー、カールスラント空軍の中尉だ。よろしく頼むよ」

五〇二の扶桑隊に連れられてサンプトペテルブルクに到着し格納庫の発進速成装置にユニットを納めてる最中にやってきて、自分を出迎えてくれたのはヴァルトルート・クルピンスキー中尉であった。

彼女も相当の女好きと聞いているが、どうやら五〇七隊の迫水中尉のように爛れきった人間ではないようで、スマートな立ち居振る舞いには好感すら持てる。

「初めまして、中尉。初美あきら陸軍少尉です」

ストライカーユニットから足を外して直立すると、扶桑陸軍式の敬礼で挨拶をした。

なんだかんだで相手は上官だからな。

「いいんだよお、そんな堅苦しくしなくても。どうだい、これからバーにでもいって」「何してるのよ、この偽伯爵」

すぱん、と、小柄だがことなく大人びた女性がクルピンスキー中尉の後ろから頭をひっぱたいた。

「いつつう、何するんだよ先生」

「ほんとに見境なしね。ようこそ、ブレイブウィッチーズへ。《くノ一の魔女》、初美あきら少尉」

「よろしくお願いします。えーと……」

「ロスマンよ、エディータ・ロスマン」

ああ、この人がエーリカ・ハルトマンをはじめとして幾人ものエースを育て上げたというロスマン先生か。

この人から学べたら、自分の航空ウィッチとしての腕前も上がるのだろうか。

「よろしくお願いします、ロスマン曹長」

自分が右手を差し出すと、彼女はそれに答えてくれる。

「初美い！ 俺たちや報告がてらラル隊長んところにいってつからな」

管野中尉は、手を振りながら自分にそう告げて要塞の中へと入っていく。

「わかった」

「あら、その人が《くノ一の魔女》さん？」

金髪に黒めのカチューシャをつけたウィッチが、ボードを片手に倉庫へとやってくる、自分を見つけて声をかけてきた。

「初美あきら少尉です、初美、でもあきらでも好きに呼んでください」

「アレクサンドラ・イワーノブナ・ボクルイーシキン。階級は大尉よ。サーシャと呼んでちょうだい」

「高名はかねがね承っております。サーシャ大尉」

アレクサンドラ・イー・ボクルイーシキン大尉は、オラーシャ撤退戦での自身の経験で学んだ戦術を平易な文章にて教本を作成した。その教本は瞬く間にオラーシャ国内に広まり、それまで空戦技術があまり体系化されていなかった同国空軍において、一般的な戦闘教本となった。

教官としても卓越した能力を示したことから、航空学校の校長に就任する要請されたと聞くが、彼女は前線で戦うことを固持して五〇二にスカウトされ現在に至るといふ。

「ありがとうございます。あきらさん。人型ネウロイとの戦闘記録を確認しにきたのでしょうか？」

「ええ。ですが、管野中尉からもこのあたりで人型発見の報告があったと聞いています。その対応も引き受けますよ」

「できるんですか？」

半分はそのために来たようなものだしな。

「ええ。先のヴァラモ島奪還作戦でも、人型ネウロイを撃破しました」

「！ それは本当ですか？」

まるで食ってかかるかのような勢いで、自分の両肩をつかむサーシャ大尉。

「奪還作戦に参加した五〇二の隊員もそれを目撃しています。本当ですよ」

自分は、彼女の大げさな問い詰めに苦笑交じりで答えた。

「詳しく教えてくださいませんか？」

「えーと、それに関してはラル少佐を交えて、ということだ」

サーシャ大尉を落ち着かせようと、声のトーンをあえて抑え気味にして言い聞かせた。

「あ、ああ、そうですね。ええ、すぐに向かいましょう」

ずるずると引つ張られるように、隊長室へと連れて行かれる自分だった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の 巻 その二

自分は、有無を言わさぬサーシャ大尉の強引な案内によって、隊長室へと連れてこられた。

そして、コンコン、とノックして「サーシャです」と告げると、返答を待たずに中へと入る。

隊長室は何もなければ広く、荷物がちよつとでも重なれば簡単に狭くなるような広さで、隊長の机はサインすべき書類が山と積まれている。おそらくひどいときには床にも書類が積まれることになるのだろう。

「どうしたサーシャ」

低いを通りのいい声が部屋に響いた。

ブラウンのボブヘアが、その書類の山との戦争を一時休戦して顔をあげる。

なるほど、この人物がネウロイ撃墜数ナンバースリーの女傑、グンドユラ・ラル少佐か。

「隊長、人型ネウロイの対抗手段が見つかりました！」

サーシャ大尉は喜々としてラル少佐に訴える。

「ああ、管野から話は聞いている。貴様が初美あきらか」

サーシャ大尉の肩越しに自分を見るラル少佐。

「はっ。扶桑陸軍少尉、初美あきらであります」

自分は慌てて、陸軍式の敬礼をする。

「そんな堅苦しい挨拶は結構だ。私が五〇二JFWの隊長のグンドユラ・ラルだ。ハッセから話は聞いている。ミエリッキ作戦の報告書を確認したいのだろうか？」

サーシャ大尉はぎよつとして自分の顔を見た。

「あれは極秘情報です。閲覧の許可だせないはずです」

「どうせ五〇七で大半の情報は見たんだろう。残りをみせたところで今さらだ。しかし、ハッセもよくまあ簡単にあの報告書をみせたも

のだな」

「確かに機密情報とは書かれていましたが、先のトラヤヌス作戦で人型ネウロイは公の物になったと聞いております」

自分は、知る限りの情報を伝える。

「確かにな。だが、詳細——つまり、ウィッチを支配下において操るという事実は公開許可が下りていない」

そうだったのか。さすがにそこまではわからなかったな。

「では、交戦記録の閲覧は不可能ということになるのでしょうか」

「許可する。だが、こちらの条件も飲んでもらう」

「五〇二への入隊は無理ですよ」

前もって言うておくが、噂に伝え聞く彼女の気質から考えれば無駄だろうな。

「そういうな。我々五〇二は常に優秀なウィッチを必要としている」

まあ、だろうな。駄目で元々、ということなのだろう。

「初対面の自分をそこまで買っていただけのはうれしいのですが、自分の立場もあります。ご容赦願えませんか」

「ふむ。まあそうなるな。初美少尉、一つ聞いた起きたいが本当に《もどき》の撃破は可能なんだな？」

「はい。それについては、管野中尉より聞いてはいると想いますが」

「概要はな。どうして洗脳されないのか、はつきりとした理由はわからないのか？」

「あくまで自分なりの推測ではありますが、それでもよければ」

「かまわん」

「自分の固有魔法である《迷彩》は、周囲に溶け込むような色模様と光を除くおおよその波を遮断、あるいは吸収します。それは魔導波でも例外ではなく、おそらく精神操作のための何かも、《迷彩》で無効化できるものと考えられます」

「そういうことか。サーシャ、《もどき》の動向は把握できているか」
ラル少佐は、視線を自分からサーシャ大尉へ移して尋ねた。

「はい。《もどき》は現在、スタラヤルーサを遊弋する超大型ネウロイとともに行動しているようです」

自分がスオムスであれこれやっている間に、超大型ネウロイが出現していたのか。

巨大ネウロイが相手ともなれば、いかなあの二人でも歯が立たないだろう。

「なるほどな。我々がこの超大型ネウロイを撃破しなければ、南下、あるいは東へと向かうだろう。もし東に向かえば、オラーシャの首都モスクワを襲撃という形になる」

「では、ラル隊長」

サーシャ大尉は、ラル少佐に先を促す。

「初美少尉、こつちに来て早々すまないがそういうわけだ。いろいろ言いたいことはあるだろうが、ともかく《もどき》をなんとかしないことには話にならない」

さすがに、これはいやも応もないな。

「了解しました。人型ネウロイは自分が排除します」

「感謝する。サーシャ、全員を会議室に集める。初美少尉にも付き合ってもらおうぞ」

「わかりました、隊長」

「了解、ラル少佐」

自分は、グンドユラ・ラル少佐とともに、会議室へと続くオラーシャ風の長い廊下を歩いていて、ところどころ壁紙が剥がれてレンガがむき出しになっていて、施設の手入れにまで手が回せない状況を感じさせる。

サーシャ大尉は、部隊員全員を呼び出すための放送をやるために、放送室へと向かっている。

「アフリカでは、単身で単の偵察をやったそうだな。それも、貴様の固有魔法の《迷彩》があつてこそか」

「はい。人型ネウロイに発見されて這々の体で逃げ出しましたが」

「だが貴様は生き残ったのだろうか？」

「骨折や肩の脱臼の重傷を負いましたけどね」

アフリカのあの一件を思い出して、歯ぎしりをしてしまう。今まで撤退戦は何度も経験してきたが、あのときのように敵を前にして逃げ

出すような真似は一度もなかった。

「悔しいか」

「悔しくないわけがありません。だからこうして奴らの弱点を探しているのです」

「なるほどな。で、見つかったのか？」

「そう簡単に見つかるわけではありません。せいぜい、見つけたそのときに倒すのが一番だということだけです」

それを聞いたラル少佐は、ははは、と乾いた笑い声を上げる。

「そうか、さすがのくノ一も《もどき》の弱点を簡単には見つけられないか。期待していたのだがな」

「いまのところ弱点は自分、という以外には何もありません」

「ほほう、ずいぶんと大言壮語を吐くじゃないか」

「現状、自分が奴らにとって唯一の天敵だというのは事実です」

だが、今の自分では一対一ならともかく多数を相手にして勝てる自信はない。

ラル少佐のように、《偏差射撃》でも使えばそんなことにはならないのだろうが、そうなると今度は《迷彩》を使えない。では、《雷撃》などの攻撃魔法はどうだろうか。

そこまで思いを巡らせてふと我に返る。

こんな無駄なことをあれこれ考えても仕方がない。下手な考え休むに似たり、だ。

「ただ、そのためにも、航空ウィッチとしての技量を上げる必要はありますが」

「ロスマンとサーシャにでも鍛えてもらうか？」

「許可してくれるなら。もちろんその間は五〇二の手伝いをしますよ」

「わかった。それでいいだろう」

少佐は、オラーシャ語でなにやら書かれた看板が設えられた扉の前に立ち止まる。

「ここが会議室か。」

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 七の 巻 その三

自分は、グンドユラ・ラル少佐とともに、会議室へと続くオラーシャ風の長い廊下を歩いてきた。ところどころ壁紙が剥がれてレンガがむき出しになっていて、施設の手入れにまで手が回せない状況を感じさせる。

サーシャ大尉は、部隊員全員を呼び出すための放送をやるために、放送室へと向かっている。

「アフリカでは、単身で単の偵察をやったそうだな。それも、貴様の固有魔法の《迷彩》があつてこそか」

「はい。人型ネウロイに発見されて這々の体で逃げ出しましたが」

「だが貴様は生き残つたのだろうか？」

「骨折や肩の脱臼の重傷を負いましたけどね」

アフリカのあの一件を思い出して、歯ぎしりをしてしまう。今まで撤退戦は何度も経験してきたが、あのときのように敵を前にして逃げ出すような真似は一度もなかった。

「悔しいか」

「悔しくないわけがありません。だからこうして奴らの弱点を探しているのです」

「なるほどな。で、弱点は見つかったのか？」

「そう簡単に見つかるわけではありません。せいぜい、見つけたそのときに倒すのが一番だということだけです」

それを聞いたラル少佐は、ははは、と乾いた笑い声を上げる。

「そうか、さすがのくノ一も《もどき》の弱点を簡単には見つけられないか。わりと期待していたのだがな」

「いまのところ弱点は自分、という以外には何もありませんね」

「ほほう」眉を上げて驚くラル少佐。「ずいぶんと大言壮語を吐くじゃないか」

「現状、自分が奴らにとって唯一の天敵だというのは事実です」

だが、今の自分では一対一ならともかく多数を相手にして勝てる自信はない。

ラル少佐のように、《偏差射撃》でも使えればそんなことにはならないのだろうが、そうなると今度は《迷彩》を使えない。では、《雷撃》などの攻撃魔法はどうだろうか。

そこまで思いを巡らせてふと我に返る。

こんな無駄なことをあれこれ考えても仕方がない。下手な考え休むに似たり、だ。

「ただ、そのためにも、航空ウィッチとしての技量を上げる必要はありますが」

「ロスマンとサーシャにでも鍛えてもらうか？」

「許可してくれるなら。もちろんその間は五〇二の手伝いをしますよ」

「わかった。それで手を打とう」

少佐は、オラーシャ語でなにやら書かれた看板が設えられた扉の前に立ち止まる。

なるほど、ここが会議室か。

無言で扉を開けると、少佐は中へと入っていき、自分もその後にく。

「傾注っ！」

戦闘隊長が声を上げると、中に居た五〇二部隊隊員が一斉に立ち上がって敬礼をしてきた。

ラル少佐は手で返答すると、サーシャ大尉が「休め」と声をかける。

ガタガタ、椅子を鳴らしながら各々は着席した。

「超大型ネウロイ、《大鯨（グローサヴァール）》撃滅作戦について説明する」

隊員達はざわ、とどよめく。

「隊長、《もどき》の対抗手段はあるんですか？」

プラチナブロンドのショートヘアが手をあげて声を上げる。

「ある。それが彼女だ」

ラル少佐は自分を指名した。

すう、と軽く息を吸って、

「初美あきら扶桑陸軍中尉であります」

自己紹介をして敬礼。

「ほんと、かわいいなあ、あきらちゃん」

「おめえはそればかりだな」

「そりやあきらちゃんは可愛いからねえ」

管野中尉とクルピンスキー中尉がなにやら言い合い、

「定ちゃん、知ってる？」

「うん、ヴァラモ島のネウロイを倒したときに一緒に戦ったよ、ジョゼ」

下原少尉はジョゼ——ジョーゼット・ルマール少尉と言葉を交わしていた。

「ひかり、あきららって強いのか？」

「強いつていうより、すごいですよ。《迷彩》っていう固有魔法で、消えちゃうんです」

「消える？ 消えるってどういうこと？」

「えーっと、景色と同じ色になって、見えなくなるんです。ですよ、あきらさん」

と、雁淵軍曹。

しかしいきなり自分に振るか。

「そうだ。自分の固有魔法は《迷彩》といって、風景と同じ映像を浮かべるシールドで体を包み、同時に電波、魔導波といったものもシールドが吸収して、光学的に透明になったように見せるものだ」

「つまり、初美少尉が《もどき》の対抗手段というわけね？」

さすが察しがいいな、ロスマン曹長は。

「ロスマン先生、どういうことなの？」

「ニパさん、つまり《迷彩》は《もどき》が放つ洗脳の波のようなものも吸収して、結果的に洗脳を防いでしまう、ということよ。でしよう？ 初美少尉」

「その通りです、ロスマンさん。自分が、人型ネウロイ——《もどき》の相手をします。その間に、五〇二隊の皆さんで超大型ネウロイを撃

破して下さい」

「それで、どうやってあのデカブツをやっつけるんだよ、隊長」

管野中尉は、腕を組みながら隊員達のやりとりを眺めていたラル少佐に尋ねる。

「簡単な話だ。まず、あきららには《迷彩》を使って《大鯨》の周りを飛んでもらう。そうすれば、ほぼ間違いなく《もどき》はあきららに釣られて《大鯨》から出てくるだろう。そのままあきららにはあいつを引張って戦域を離れてもらう。あとは我々五〇二が奴のとどめを刺す。決め手は管野とひかりだ」

かなり大雑把な作戦ではあるが、それまで人型ネウロイに対抗する術を見いだせなかった五〇二部隊の隊員達にとって一縷の望みであつたのだろう。

「作戦は明後日、一三〇〇時に開始する。以上だ」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の 巻 その四

会議が終わると、自分を中心にして五〇二部隊員が輪を作っていた。明日、ともに翼を並べて戦う仲だ。少しでも交友を暖めておくにこしたことはないだろう。

「それでなおちゃん、あきらくんはどれぐらいできるんだい？」

「ひかるよりはやるぜ」

管野の言葉を聞いて、雁淵は頬を膨らませた。どうやら中尉の一言は彼女の機嫌を損ねたようだ。

「管野さくん」

「事実だろうが。俺がお前のケツについたとしてもそれはかわらねえ。お前はまだまだひよっこだ」

「それはそうですけど……」

もう少し言い方つてもものも考えてやるべきじゃないのかね、管野中尉は。そりゃあ、上官としてしめておかなければならない部分なのかわかるんだが、せっかく培ってきた雁淵の自信も失いかねないぞ。

「ともかく銃の腕は並みだが戦闘機動と剣の腕は人並み外れてる。そこいらの連中じゃまずかなわないだろうな」

自分が空中で人型ネウロイを切り伏せたところでも見ていたのか。

「なにしろ《もどき》を空中でぶった斬りやがったからな。刀の腕とマニューバに関しちや信頼できる。太鼓判をおすぜ」

同じく超接近戦での戦闘を幾度も経験している管野中尉だからこそわかるのだろうか。しかし、そうあからさまに褒められるとなんとも面映ゆいものだな。

「それは凄いですね」

ロスマンさんが眉を上げて関心した。

「なるほど、隊長が初美さんをほしがるのもわかります」と、サーシャ大尉が得心したように言う。「これでさらに斥候役としても期待できるのだから、どの部隊でもほしがるはずです」

「僕としては、可愛い女の子が増えるのは大歓迎だよ」

やれやれ、どうやらこの偽伯爵殿、中身は迫水中尉と 変わらずか。

「料理はできるんですか？」

ジョーゼット少尉は、戦闘よりもそちらのほうに興味が向くのか。

「忍びの修行で、食べれものを作る技術は学んだが、美味しいものを作る術は学べなかったな。一応五〇一のリネット曹長から味噌汁の作り方やらは習ったが、あいにく料理を学ぶ時間がなくてな」

「それなら是非定ちゃんから習って下さい！」

む、いきなり圧が強くなったな。

「定ちゃんの作る扶桑料理は凄く美味しいんです。だから、料理は定ちゃんからは非教えてもらって下さい！」

「ジョゼ……」

誉められ慣れていないのか、若干照れ気味な下原少尉。

「わかった、機会があればそうさせていただくよ、ジョーゼット少尉」

「あきら、スオムスの前はどこにいたの？」

これまで沈黙をたもっていたニパ——ニツカ・エドワーデイン・カタヤイネン中尉が口を開く。

「そうだな……とりあえず、セダン、パ・ド・カレー、バクー、アフリカ、スオムス、そしてここだ」

「スオムスにいたとき、ハッセは私のこと何か言ってた？」

ハッセ、ハッセ……ああ、ハンナ・ウインド少佐のことか。

「いや、これといって聞いてはいないな」

「ちえー」

不満げに頬を膨らませる。

「おめえはいちいち気にしすぎなんだよ」

管野がごす、とニパの頭を小突く。

「いつたいなあ、管野。殴ることないじゃないか」

頭を押さえながら管野をやぶにらみする。

管野はどこ吹く風で気にしない。

「そうだ、《もどき》に意識をもっていかれそうになった人達全員に訊いておきたいのだが、いいだろうか」

この際だから、《もどき》に洗脳されそうになったときの感覚を尋ねておこう。自分には固有魔法の《迷彩》があるのだから危険性はないはずだが、万が一ということも考えられる。《迷彩》なしで人型ネウロイと対峙したとき、なにがおきるのかわかっていれば何らかの対処もできるかもしれない。

「どんなことでしょう」

サーシャ大尉がそう言った。

「《もどき》に意識を奪われそうになったとき、どんな感じがしたのか聞いておきたいのです。自分の《迷彩》もいつ通用しなくなるかわかりません。そのときのために参考にしたいと」

「そういや、あきらはあいつに意識を奪われたことがなかったんだよな」

と、管野中尉。

「幸いと言っていいのか、《もどき》と遭遇したときは、すべて《迷彩》を使っていたときだからな。どういう状態になるのか知っておきたい」

「えーとですね、私の場合は軽く頭痛がして、ふと意識を失った感じがす。気づいたら、《もどき》の隣を飛んでいました」

これはルマル少尉だ。

「俺は、吐きそうになるぐらいの頭痛がしたな。あれはきつかった」

「私も同じですが、どうなるのか事前に耳にしていたので、堪えることができましたね」

と、管野中尉とサーシャ大尉。

「なるほどな、全員強弱の差はあれど頭痛が共通点としてあるわけか。参考になった。感謝する」

答えてくれた全員に頭を下げた自分だった。・

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の
巻 その五

あのあと、自分は木製疾風をはいて、ロスマン曹長に連れられ、モシン・ナガン片手に射場へとやってきていた。自分の射撃技術の検証と指導のためだ。

《大鯨》と命名されたネウロイの撃滅作戦は、《大鯨》が動く気配を見せないため、明後日に行われることになっていた。

そこで、あいた時間を使って、自分こと初見あきらの射撃技術の促成教練をやるうというわけだ。

ライフル弾を込めたモシン・ナガンを構え、およそ二〇メートル先の台座にのった五センチ程度の正方形の鉄のついたてを狙う。

モシン・ナガンの装填数と同数のついたてが並べられていて、右端に焦点した。

「引きつけ、頬当てとともに問題ないわね。撃って」
「了解」

サイトを標的に合わせ、引き金をしぼればバガン、と大きな銃声が響いて銃弾は標的をかすめ、たん、と倒れた。

「どうやらプレートは蝶番で台に固定されているらしい。」

「ユニットによる衝撃吸収はしっかりできてますね。次。一番左を狙って」

ボルトを操作して排莖、次弾を装填して構える。

「撃て」
銃声が響き、わずかに左に外れてしまう。

「右」
今度は標的に命中して倒れる。

「左」
左端をかすめた。

「右」
中心にヒットして倒れる。

「お疲れ様です。管野さんの言うとおおり、確かに射撃技術は未熟のようね」

まあ、そうだろう。中野学校でも、射撃の評価は丙だったからな。空戦ではなんとか使えるぐらいにまで鍛えはしたが、促成教練だったため根本的な原因の解明と解決はできなかつた。

「原因はわかりますか？」

「わからないわ。もう一度撃つて。ただし、今度は五メートル前に進んで」

「了解しました」

自分は、ライフルに弾を込めてプレートに戻すと、言われたとおりに五メートル進んで標的を撃つ。

さすがに今度は全弾命中し、すべてのプレートを倒すことができた。

「わかったわ。変な癖がついてるように感じる」

「癖、ですか？」

「言葉では言い表せないのだけど、射撃時に体が微妙にブレてるわ。それが原因のようね。何か思い当たる事柄はないかしら」

原因、か。

考えてみても思い返してみても、原因らしい原因はみあたらない。強いて言うなら。

「ないこともないが、扶桑武術……かな」

これぐらいしか、本当に思いつかないのだ。

「では、それが原因ではないかしら。身に染みついた武術の癖が影響しているのでしょうか」

「そういうものなのか」

「そういうものよ」

訳知り顔で頷く曹長は、似たような事例でも見てきたのだろうか。「できることなら、その癖とやらを取り除きたいのだが」

「毎日、何発も射撃訓練をして、少しずつ取り除くしか方法はないのだけど、初美さんにはそんな余裕はないのでしょうか？」

「それだけの余裕があるなら、自分の五〇二への編入も可能だろうな」

「でしようね。それなら、現状としては当たらないことを利用するしかないわ」

当たらないことを利用する？ 不思議なことを言うな。

ロスマン曹長は、首をかしげている自分を見てふ、と微笑み、

「管野さんが言うには、あなたの剣術はかなりのものだとか。ならば、射撃を格闘戦に持ち込むための手段として用いた方がいい、そういうことよ」

なるほど、そういうことか。

「ふむ、相手を自分が望む軌道へと誘導するように射撃すべし、ということか」

「どうせあたらないなら、むしろその方がいいと思うのだけど。あたればあたってで儲けものだし」

なるほどな。現状、急な改善は武術の形を崩すことになりかねないし、それならばいつそ当てることを考えなずに利用する事を考えたほうがいいわけか。

問題点の洗い出しから対応策まであっさりとでてくるあたり、さすがは先生と呼ばれ、慕われるだけのことはあるな。

自分は、曹長のアドバイスに納得して、

「なるほどな、助言に感謝する」

頭を下げた。

「あなたには次の作戦でしっかりと働いてもらわないといけないから、当然のことね」

「期待に応えられるかはわからないが、もちろん可能な限りの協力はさせてもらうよ」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の 巻 その六

「しかし、自分の射撃下手が、戸隠流に起因する物だったとはな……」
翌日の早朝、朝食前。

自分は海に面した尖塔の元、ロスマン先生の言葉を思い返しながらかいた。

『では、それが原因ではないかしら。身に染みついた武術の癖が影響しているでしょう』

ロスマン先生は確かにそう言った。自分では身に染み込みすぎてわからないような、細かな癖が出てしまっているのだろう。

そしてそのようなものは、おいそれとは治らない。急いで作り上げてきた型を崩してしまう。

それならば、先生が教えてくれた方向で射撃を生かすのが正道というものだ。

「納得するしかないな」

十年もかけて身につけた技術が邪魔になるとは、思いもよらないことだった。

とはいえ、今さら古流武術を棄てるわけにもいかない。

何しろ、自分の唯一にして最大の長所であるのだから。

これを手放すということは、打撃魔女としての長所も失うことになる。それだけは避けなければならない。

そんな思索にふけていると、

「どうしたんですか、初美さん！」

調子っぱずれな音量の台詞が聞こえてきた。この声は雁淵ひかり軍曹だ。

「雁淵軍曹か。いや、ちよつと考え事をしていただけだ。軍曹こそどうした、こんなところに」

「朝ご飯の前の訓練しに来たんです」

ふむ、訓練か。

それは面白そうだな。

「訓練？　どんな訓練だ」

そう問うと、軍曹は塔の壁に張り付き、両手に魔法力を集中させ始めた。蒼い光が軍曹の体を包み、リスの尻尾と耳が生えてくる。

「こうやって、魔法力を両手に集めて、はりついて上がっていくんです」

ヤモリのように這い上っていく。

「魔法力の使い方訓練か」

自分も彼女のように手のひらに魔法力を込めて壁面に手を当てれば、魔方陣が形成されて吸盤のようにはりつく。

「それなら、このほうがいいな」

指先に魔法力を集中して手のひらを放すと、全体重が指十本にのしかかる。

「む、これはきつい。だが――」

軽く体を引き上げて、右手を素早く放し少し上の壁面に張り付く。

「なんとかならないレベルではないな」

「大丈夫ですかーっ？」

少し上を行く軍曹が、自分を心配して訊いてきた。

「まだ始めたばかりだぞ」

そう答えて左手を壁面から離し、上へと伸ばす。何度か繰り返して雁淵の隣まで這い上がった。

「ええっ？　初美さん、指先だけでやってるんですか？」

「ああ。これは魔力配分のコントロール技術を身につけるために行う訓練なのだろう？　それなら、これぐらいはやらないとな」

「それじゃあ、塔のてっぺんまで頑張りましょうー！」

軽々と上がっていく。

「自分も、ふんばるか」

彼女を追いかけて、自分も尖塔の先端目指して上がっていく。

「お、初美も始めたのか」

下から、管野の声が聞こえてくる。

「お、あきらくんってばすごいねえ。手のひらじゃなくて指先だけで

「やってるのか」

「あきら、あんなことやって大丈夫なのかな」

ニパとクルピンスキー中尉もか。

「意味があるのか、先生」

「より繊細なコントロールを身につけられるはずですが、一朝一夕では身につけません」

先生にラル少佐まで見物にくるとか、ブレイブの隊員は暇なのか？

「ふむ。ほかの隊員にもやらせるべきか」

ラル隊長、何やら不穏当なことを言っているな。

雁淵はなれているだけあって、もう半分を超えているか。

こっちはまだ四半分なのにな。

「がんばれー、あきらーっ！」

ニパがやたらと元気良く応援してくれる。

やれやれ、これは本腰を入れてやらないといけないかもな。

魔力配分の操作に慎重を期しながらも、大きく手を伸ばす。

さてはて、突端まで登り詰めることができるかな。

結局自分は、四分の三を過ぎたところで魔力配分の操作をしくじり、一度大きくずり落ちてしまうも、雁淵が待つ先端まで登りきるこ
とができた。

二人で一緒に地面まで下りてきたときには、指先が腫れあがり、さらにはしびれて感覚もなくなっていたが、武術の修行中にはもつと大変なことになったので問題はない。

それよりも、見物に来た五〇二隊員の心配をなだめるほうが大変だった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の
巻 その七

「ひかりは何度もやってようやく達成したんだが、さすがだな」

自分は、尖塔での訓練の後、ラル隊長に執務室まで連れられてきた。
なにやら二人だけで話があるようだ。

「あの手の修行は慣れたものですからね」

「そこまで扶桑武術が有効ならば、ぜひともあきらにはこのまま五〇
二に残って教練を頼みたいのだがな」

「それはお断りします」

自分の価値を認めてやり甲斐のある場所を与えてくれる上官の下
で、己の技術を振るうのは確かに素晴らしいものだ。

だが、今、自分は誰よりも認めてくれている方のために欧州にいる。
「やはり無理か」

ラル隊長は、さして感情をみせずに応えた。

自分が五〇五の誘いを断ったのも知っているだろうから、駄目で
元々といった感じなのだろうな。

「お誘いは嬉しく思いますが、自分は皇女殿下に仕える身ゆえ」

「ゴロプから聞いてはいたが、本当なのか？」

まあ、ゴロプ少佐のように川股少将と話をしてもいないだろうし、
関連する書類を読んだわけでもない。納得できないのは当然かもな。

腰に携えた護身刀を見せて、

「こじり——鞘の先に菊の彫り物があるでしょう。これが、扶桑の皇
族があかしとする紋です。自分は、この護身刀を詠宮龍子内親王殿下
より拝領しました」

「ふむ、確かにそうだな。その紋は私も以前見たことがある」

顎に手を当てて、鑑の御紋を興味深げに眺める。

「そういうわけですので、お誘いは辞退させていただきます」

一端言葉を切って、

「それで、わざわざ二人きりになった理由を聞かせていただけますか

？」

「そうだな。明日の《大鯨》撃破作戦についてだ」

「予定では、自分が先行して突入、《もどき》を引っ張り出して撃破というのですが」

「その通りだが、貴様は《もどき》二機を相手にしたことはないだろう。そこで、一機はブレイブの隊員が担当すべきだ考えている」

ああ、そういうことか。

この人は自分のことを心配しているのだな。

能力や技術をうたがった提案ではあるまい。

なぜなら、自分を五〇二部隊にスカウトしようと考えているからだ。そんなウィッチの実力を低くみつもるのはありえない。

「いえ、自分がやります」

少佐は、ほう、と眉を上げる。

「一人でなんとかできるのか」

「成長していない《もどき》ならば問題ありません。それよりも、五〇二の隊員には《もどき》以外の駆除をお願いしたいのです。人型だけならどうとでもなりますが、それ以外のネウロイの相手まではできません」

「わかった。ブレイブウィッチーズが責任を持って露払いを請け負おう」

「JFWの露払いですか。この上なく頼もしく、心強いですね」

「そうだ。だから、《もどき》は絶対に撃墜してくれ。最悪、《大鯨》攻略よりも優先すべきだからな」

確かに、でかいだけのネウロイは相応の犠牲がともなうかもしれないが、撃破は可能だろう。

だが、《もどき》は別だ。

シリンダー攻略作戦の時は、五〇二隊と五〇七隊が合同で《もどき》を撃破はできたが、今相手にしようとしている《もどき》の撃墜が可能だとは言いがたい。

むしろ、意識を奪われて拉致されかねず、ともすれば五〇二の壊滅すらありえる。

そんな無茶は、隊長たるグンドユラ・ラル少佐の好むところではない。

「了解しました、ラル少佐。お任せ下さい」

扶桑陸軍式の敬礼をして答えるのだった。

「あ、初美さん」

朝食を取るために食堂へと足を運んでいる途中、医務室の前を通り過ぎると、ちようどそこから出てきたジョーゼット少尉に呼び止められた。

「いいところに。管野さんから聞きました。指先が腫れてるんじゃないですか？」

む、管野中尉がか。ああみえて、気遣いの人なのか？

「ん？ ジョーゼット少尉か。確かに腫れてるが、気にするほどではないかな」

指先をみれば、紫色になって膨れ上がっていた。

まあ、これぐらいならなんてことはないか、と手をむすんでひらいてをくりかえしていたら、ジョーゼット少尉が無理やり自分の手を包むように握った。

「いけません。手を出して下さい」

むりやり自分の手を取ったジョーゼット少尉は、自分の両手を包むように握って魔法力を解放させた。固有魔法の《治癒》を使うつもりなのだろう。

ほのかに青い光がジョゼの手を中心にして廊下を照らし、彼女の頬に赤みがさした。

次第に指先がむずがゆくなってくる。

なるほど、これが治癒魔法の力か。

これは素晴らしい。ちよっとした負傷ならすぐになおってしまうとはな。

一分ほどだろうか。

かゆみがなくなって少しすると、ジョゼは魔力の放出をやめた。

「これでもう大丈夫ですね」

じんわりと汗をにじませながら、笑顔を浮かべて言う。

指先を見ると、どうやら完治したようだ。

腫れやうずきも完全にひいている。

「本当だ……すごいものだな、治癒魔法というのは」

そう自分が呟いた瞬間、ごぎゆるるる、と腹の虫の鳴き声が聞こえた。

「あ、これは」

頬を朱に染め、おなかを両手で隠す。

「いや、朝食前にすまなかった。食堂に行こうか」

ワールドウィッチーズ異聞 くノ一の魔女 七の巻
その八

食堂は縦長に大きく作られていて、テーブルもそれにあわせて長いものがしつらえられていた。奥の席にはラル少佐が腰掛けていて、左右に隊員達が席を並べている。

自分は、ドアを背にして左側の一番手前に座った。

自分とジョゼ以外はすでに席に着いていて、食事を始めている。

正面はひかりで左は先生だった。

テーブルには、オニオンスープと全粒粉のライ麦パン——いわゆる黒パンと、薄切りのハムに目玉焼きだった。目玉焼きは塩こしようにかけられている。

質素ではあるが、元々ブレイブウィッチーズは補給線が細く、食糧事情もあまりよろしくないと聞くのでこれぐらいでも十分でているほうだといえるかもしれない。

贅沢は敵だな。

酸味のきいた黒パンを、オニオンスープに浸して口に運ぶ。

質素だが黒パンの酸味とスープの塩っ気がマッチして、わりといや、かなりうまい。舌が喜ぶとはこのことか。

貧乏舌といわれるかもしれないが、それでもうまいものはうまいのだ。

「うまいな」

思わず口をついてでる。

普段、あまり口にしない食べ物だけに、新鮮な味覚が舌に嬉しい。

「ザワークラウトとヴルストがあればなおいいんだけど」

と、先生が声をあげた。なるほど、これを作ったのは彼女か。

ライ麦パンはおもにカールスラントを中心にして食されていたのだから、ザワークラウトはきつとあうのだろう。

「あればさらにうまいでしょうが、なくても十分に美味しいですよ、これ」

「ふふ、料理で褒められるのも嬉しいものね」

先生は若干はにかみながら答えた。

「それで、あきら、明日はどうすんだ？」

スプーンを自分に突きつけながら、管野中尉が尋ねてきた。

「どうする、といわれても……」

自分は言いよどみ、ラル少佐に視線を投げる。彼女は食事の手を止めて、

「それについては、朝食後のミーティングで説明するつもりだったのだがな。まあいいだろう。簡単に説明する。まず、初美には先行して突入してもらおう」

「先行してって、《迷彩》を使ってかい？」

と、クルピンスキー中尉。

「そうだ。初美には《もどき》を釣り出し、撃破してもらおう。《迷彩》を使っているから初美の姿は確認できないだろうが、《もどき》はどうせ初美にむかうのだから、どこにいるのか視認できなくても問題はない。そして、我々ブレイブウィッチーズはその間、初美の護衛、並びに小型、中型ネウロイの対応を行う。《もどき》の始末がいたら、《大鯨》を我々の手で潰す。概要はこんなものだ」

それを聞いた五〇二隊隊員達は、銘々が食事の手を止めて思案しだした。

「あきらちゃん、戦闘は基本的に刀でやるの？」

「普段はホー〇三機関銃だが、人型ネウロイが相手だと刀になるな。自分の射撃の腕では、中距離からの射撃よりも扶桑刀の格闘戦のほうが確実だ」

クルピンスキー中尉の問いに答える。

《もどき》程度の大きさなら、通常の射撃距離ではあてられないし、今回の作戦では奴らを引きつけなければならぬ。必然、超接近戦になる。

「それなら、戦闘中は《もどき》をさけていれば問題ないということですね」

「そうなりますね、サーシャ大尉」

「わかりました。私たちは、初美さんが他に気を回して戦闘する必要のないよう、万難を排しましょう」

サーシャ大尉はきつぱりと言い放った。

五〇二の戦闘隊長にここまで言わせてしまったか。

二機ともに撃破する必要はないかとうつすら考えて吐いたが、こちらもその信頼に応えて、人型ネウロイの撃破は絶対にやらなければならないな。

「了解した。人型ネウロイの撃墜はこの初見あきらが責任を持って請け負おう」

肝を据えて、そうサーシャ大尉に告げる。

「頼むぞ、初見少尉」

「お任せ下さい、ラル少佐」

朝食後、自分は雁淵軍曹と一緒にラドガ湖へとやってきていた。

彼女から魔力をうまく扱う訓練を習うためだ。

尖塔に這い上がる以外にも、雁淵軍曹は魔力操作の上達を目的とした修業法を知っているのだという。自分も魔力が普通のウィッチよりも強くないので、似たような境遇の彼女から学べる技術や訓練は多いはずだ。

自分は、雁淵軍曹とさざ波寄せる湖畔に立つ。

クルピンスキーや管野、ニパが見物にきていた。

娯楽不足の前線基地では自分のような来訪者は消閑のタネとなる。

早朝、自分が雁淵軍曹と尖塔を上ったとき何人かのウィッチが見物にきたが、それもこういった事情があつてのことだった。

「ひかり、それで、どうすればいいんだ？」

「ちよつと離れた場所に岩がありますよね。あそこまで、湖面をジャンプして跳んでくんです。こうやって！」

そう言つて、雁淵は三段ジャンプで湖面を蹴り岩場まで到達した。

湖面に足がつくとき魔法陣が現れたのを見るに、シールドを展開して足場としたのだろう。これはまた忍者として失敗したら恥ずかしい訓練といえそうさ。

「なるほどな。ともかくやってみるか」

シールドをはるタイミングと着地のタイミングをあわせる必要があるわけか。シールドを張りながら歩くことも可能だろうが、これを考案したウィッチが目的としているものはおそらく違うと考えられる。

「オン・マリシエイ・ソワカッ!」

摩利支天真言を唱え、ままよとジャンプする。

右足が湖面に着水する寸前でシールドを張り跳躍。

おおっ、と見物人の声が異口同音にあがった。

「せいっ!」

二度目もうまくいったが、三度目はタイミングをあやまり水の中に足がつかったところでシールドをはってしまい、足首から下をぬらしながらなんとか雁淵が待つ岩場にたどり着く。

「こ、こうか、雁淵軍曹」

膝に手をつけて目前に立つ軍曹の顔を見ながら問う。

「はいっ! 一回で成功するなんて、さすが《くノ一の魔女》ですねっ!」

「軍曹がきれいなお手本を見せてくれたからな。なければ一步目で湖にドボンだよ。それで、この訓練方法は誰が考えたんだ?」

「お姉ちゃんです!」

「雁淵孝美大尉か。なるほどな」

軍曹の姉君が考えたわけか。

この訓練を続けければ、集中した魔法力使用と効率的なシールド運用が可能になると思われる。

そして、こうした下積みがあったからこそ、雁淵軍曹のような魔法力が低いウィッチでもあの尖塔登攀訓練ができたというわけか。

「本当にたいした奴だな、軍曹は」

「なにがですか?」

「いや、さすがは巢の撃滅功労者だなと思ったただけだ」

そう答えて、自分はジャンプして岩場から湖畔へと戻る。

「ちよっと、どういう意味ですか、初美さあんっ!」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の 巻 その九

自分は、雁淵軍曹から一通り水渡りの修練を学んだ後、尖塔の突端に上って物思いにふけていた。誰にも邪魔されず思案する場所を探したとき、ここ以外に見当たらなかった。

だから、訓練ついでに指先だけで塔に登って、湖を眺めながら思考を巡らす。

内容は人型ネウロイの撃破方法についてだ。

《迷彩》がきいているから洗脳はされないだろうが、相手の挙動まではまだはつきりと理解できたわけではない。とはいえ、実戦経験がないわけではないので、自分の経験から多少でも人型の動きをシミュレートしておきたい。

頭の中で、相手の動きを予想し、それに合わせた動きを考える。

敵の動きの想定は、ヨハンナ・ウィーゼ少佐のそれだ。自分が訓練で相手にしてきたウィッチの中で、一番技術があり、自分が理解できるウィッチだったからだ。

頭の中で、《クバンの獅子》の機動を想定し、その頭を押さえつけて上をとるような動きを心がけるが、なかなかうまくはいかない。もちろん、脳内での身勝手なシミュレートだから致し方ない部分はあるが、やらないよりはましだ。

「しかし、実際に戦ったウィッチの話も聞かないとだめだな」
などと呟いていると、ウィッチが一人、這い上がってきた。
のぞき見えた銀髪のアートヘアは、ロスマン曹長だ。

這い上がってきて、尖塔の反対側に立ち、

「こんなところでどうしたんですか、初美さん」

「先生……、ちよつと一人で考え事をしたくて」

「どんなことですか？ 相談に乗りますよ」

自分はすぐに五〇二から離れるウィッチだというのに、気にかけてくれるとは優しいんだな、先生は。

「人型ネウロイです。頭の中で、何度か模擬戦を試みたんですが、人型の技量が不明なので、ヨハンナ少佐をあてたのですがなかなか勝てないのです」

「ふふ、それは相手が悪かったですね。ヨハンナ少佐が相手では、まずもって勝てないでしょう。では、ついてきてください。ブレイブウィッチーズには二人、人型ネウロイを撃墜したウィッチがいます。とはいえ、参考になるかどうかはわかりませんが」

先生は自分に告げると尖塔を滑り落ちていき、自分もそれに続いて降りていく。

大きな飾りがあるところで壁を蹴り、すっと着地した。

「教えていただけるのはありがたいんですが、どうして先生はそこまで懇意にしてくれるのですか？」

着地して服についた汚れを払いつつ尋ねる。

「生徒に教えるのは当然ですよ」

さらりと言つてのける。

ああ、やはりこの人は根っからの先生気質なのだなあ。

「なるほど、そうですか」

「ええ、初美さんは手間のかからない、いい生徒です。さ、いきましよう」

歩いて行く方向は、ストライカーユニットの格納庫であった。

サーシャ大尉は、ブレイクウィッチーズが壊したユニットの修理に追われていると聞く。ということは、人型ネウロイを撃破した一人は彼女か。

「戦闘隊長ですか」

「そうです。サーシャ大尉がその一人です」

格納庫の前に立つと、重い扉を片手で開ける。ガラガラと音を立てて、日差しが庫内に差し込み、中のほこりと油が混ざった独特の匂いを含んだ空気が漂ってくる。

「サーシャさん、いらっしやいますか？」

ロスマン曹長は、発進促進装置から外され、整備台に乗せられ整備窓を解放されたユニットを観察しているサーシャ大尉に声をかけた。

こちらに背中を向けて整備のをしていた五〇二の戦闘隊長は、顔を上げて振り返り、

「なにかありましたか、ロスマンさん」と、返答したと同時に、自分の存在に気がついて、「あ、初美さんもご一緒でしたか。どうかしましたか?」

油まみれの軍手を脱ぎながら答えた。

「《もどき》を撃破したときの話を聞かせてほしいの。初美さんが参考にしたそうよ」

「お忙しい中恐縮です。人型ネウロイをどうやって撃破したのか、おしえていただけませんか」

自分がロスマン曹長の言葉に続いてサーシャ大尉にそう尋ねたら、彼女は右こめかみを人差し指で軽くトントンと叩いて、小さくうなずき、

「わかりました」

と、答えた。

「あの時は戦闘中でした。サイレントウィッチーズとの合同作戦中、私たちはシリンドーと呼称されるネウロイからの激しい攻撃にさらされ、視界を失っていたんです。そんな中、《もどき》が私たちの背後にまわり、奇襲をしかけてきました。それに気づいた私は、そのまま攻撃を加えようとした《もどき》に体当たりを行いました」

「体当たり、ですか」

サーシャ大尉の無謀ともいえる行動に啞然として、言葉を失いそうになった。

「洗脳は怖くなかったのですか?」

「それどころではありません。あの時体当たりをしなければ、他の隊員が攻撃にさらされ、部隊の全滅は必至でした。気づいた私が一番に動いて阻止しなければなりません」

おそらく、戦闘隊長としての責任が大尉をそんな危険な行動に駆り立てたのだろう。その重責はいかばかりか。

自分は固唾をのんで聞き入る。

「その後、私は少しの間意識を失い、ニパさんの声で意識を取り戻した

とき、逃げようとする《もどき》を押さえつけて、手持ちの軽機関銃でとどめを刺しました」

「洗脳の影響はありましたか？」

「まったくなかったといえませんが、まあ、その程度です。ジョゼさんの治療の必要もありませんでした」

ふむ、短時間ならば洗脳の影響はごく軽微なものであるということか。

これはいい情報だ。

図らずも口角が上がる。

「ヒントがあつたようですね」

先生が、明るい声で言った。

「ええ、ありがとうございます、サーシャ大尉」

「参考になったのなら幸いです」

プラチナブロンドのオラーシャウィツチは、笑顔でそう答えたのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の
巻 その十

先生に連れられてやってきた次の場所は、娯楽室であった。長椅子がいくつか並べられ、壁にはダーツの的がぶら下がっていて、そこにいくつか矢が刺さっている。

喫煙の習慣を持っているウィッチがいないためかヤニ臭さはなかったが、若干のアルコール臭が漂っているのは、高足のスツールに腰掛けテーブルに肘つきながらウオツカをなめるように飲んでいるクルピンスキー中尉がいたからだ。

長椅子に寝転がりながら、ガリア語の文庫本にのめり込んでいた管野中尉が、本から目を離して先生と自分を見やり、

「お、どうした初美」

と、声をかけてきた。

「その偽伯爵に話があつてきたの」

先生がかわりに答える。

「じゃあ、人型をしとめたもう一人のウィッチって」

「ああ、それは僕だよ。どんな話が聞きたいんだい、あきらくん」

自分は、立ったままの姿勢で、

「人型をどうやって撃墜したのか、そのときの様子を聞かせていただければと」

偽伯爵のような類いの人物は、敬して遠ざけるにかぎる。迫水少佐のように、遠ざけてもふりはらつても張り付いてくる人間はいるものだが、クルピンスキーはまだ口説き方がスマートだから、あのスオムスの痴女のようなことにはならないと思いたい。

「あの時のことか」

管野中尉が何かを思い返しながら呟いた。

「そんなにたいしたことはしてないよ。シリンダー内の《もどき》を撃つただけ」

実にあっさりしたものだ。そんな程度の話ではないだろう。

ロスマン先生は、クルピンスキー中尉の返答を聞いてため息をついた。

「あの時は、シリンドーのコアになっていた《もどき》を破壊するため、管野さんが先頭になってシリンドーに突貫、コアになっていたネウロイをそこの伯爵が撃つたのよ」

「な、たいしたことないだろう？」

「その後、傷だらけになった伯爵は、頭部からの出血で目が見えないままの狙撃でなんとか撃破したわ」

「先生の誘導でね」

「なんだ、先生もその場について知ってたのか。」

「あの時は先生の誘導がなかったらあいつを撃墜できなかつたよ。先生には感謝している」

「昔の戦場を懐かしむような憂いのにじむ表情で言った。」

「まあそういうわけだから、僕のはあきらくんが望むような内容じゃなくて悪かつたね」

「いえ、奴らも逃げるといふ事実を知り得ただけでも十分です。参考になりました」

「自分は、そう言って二人に頭をさげる。」

「三人の話を聞いて、大体の戦術は固まった。」

「ぶつつけ本番になるが、効果はあると思われる。」

「ただ、そのためにはブレイブウィッチーズの援護が完璧に遂行されなければならぬが、ネウロイの巢をも破壊した彼女たちだ。信頼しているだろう。」

「そして、作戦当日を迎えた。」

「空は雲一つない晴天、ネウロイがいなければ気持ちよく空を飛べたことだろうが、今はまだ奴らがいる。」

「のんきに飛べる空ではない。」

「ネウロイを絶滅させる。そのための一歩が今日行われる作戦だ。」

『これより《大鯨》攻略作戦、《エイハブ》を開始する』

「インカムから、ラル隊長の芯の通った声が聞こえる。」

『詳細は説明したとおりだがもう一度説明する。まず初美が《迷彩》を

使用して《大鯨》に接近し、人型ネウロイを釣り上げ、撃破を狙う。その間、ブレイブウィッチーズは初美が狙われないよう周辺のネウロイの掃討を行う。人型の撃墜が確認されたのち、《大鯨》の攻略を行う。以上だ。作戦の成功を願う』

「では、ブレイブウィッチーズ、総員発進します」

少佐のあとをついで、サーシャ大尉が宣言する。

ブレイブ隊全員のストラライカーユニットが轟音をたてて、風を巻き起こす。

格納庫内をつむじ風が暴れ回る。

「出撃っ!!」

号令一閃、サーシャを先頭として次々と飛び立っていく。

ブレイブ隊の最後のひかりが促進装置を離れて飛び立ったのを確認して、

「オン・マリシエイ・ソワカ」

摩利支天手印を結びつつ真言を唱え、発進した。発進の衝撃が体を襲い、速度が離陸可能になるまで一気に上昇し、空へと舞い上がる。

高度三千まで上がると、V字編隊を組んで《大鯨》の遊弋する空域へ向かうのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の 巻 その十一

『これより、敵ネウロイの支配地域に入ります。 総員、攻撃準備。 初美さんは《迷彩》を使用後、先行して突入してください』

サーシャ大尉の号令一下、全員がそれぞれの火器を構える。

自分は、扶桑刀を抜き放ち、

「了解した。自分はこれより《迷彩》を使用する。無線による連絡はできなくなるので注意されたし」

『わかりました。よろしくお願ひします』

「オン・マリシエイ・ソワカ」

摩利支天真言を呟き、《迷彩》を使用した。周囲の音が若干静かになり、見える景色の色もわずかにモノトーン調へと変化した。

今までこんなことはなかったのだが、早くも訓練の成果がでてきたということか？

エンジンのスロットルを開けて、木製疾風をさらに加速させる。

視界の先に、黒い点がぼつぼつと浮かび始め、それがどんどん大きくなっていく。

ネウロイだ。

だが、奴らは自分には気づかない。攻撃する気配すらなく、ただあたりを遊弋しているだけであった。

問題の《大鯨》はどこだ？ と周囲を探っていると、前方一時の方向、俯角十度あたりだろうか。ひとときわ大きなネウロイが発見された。

確かに、それは鯨だった。

黒い表面が禍々しい、異界の鯨だ。

そいつの直上に向かい、誘うように滞空する。

すると、数分で奴の頭頂部から黒い点が二つ、飛び出してきた。

他のネウロイよりも明らかに小型で、そこらに浮かんでいる小型ネウロイと比べても子供かなにかのようだ。

奴らか。

自分は、機関銃を構えて一斉射し、場所をかえる。当たらなくていい。

奴らの頭を押さえつけて上昇を阻止し、上をとりたい。そして、あわよくばあいつらの飛ぶ方向を限定させるのが狙いだ。

そしてそれは成功した。

自分の下方前方を高速で移動し、自分の方向へ盲滅法赤い光線を放ってくる。銃撃された方向への攻撃を行うだけで、明確な目標——つまり、自分がどこにいるかまではわからない。

どうやら、ユニットが発している熱も《迷彩》によって放射が減衰しているらしい。

シールドをはる必要もなく、人型へ降下を開始する。

スオムスで、三隅に空中白兵戦のやり方を説明したことを思い出す。

人型ネウロイが、ぐんぐん迫ってくる。

六角形のうろこが見えるぐらいになったとき、扶桑刀を抜き放ち、

「いえええいっ!!」

気合い一閃、魔力を込めた刀で一体を唐竹割にする。

カッ、とコアを両断するたしかな手応えとともに、一体は爆発しキラキラと輝く破片をまき散らしながら消滅した。

そのまま急制動をかけて上昇、もう一体も刀の錆にしようと接近を試みるも、《大鯨》の中へ逃げ込もうとした。

すぐに追いかけても、まず追いつくことはかなわないだろう。

「そうくるだろうな」

こうなることはわかっていた。

わかっていたことなのだ。

だから、自分は《迷彩》を解除した。

『そっちいったぞニパ!!』

『わかってるよ管野!!』

インカムから声が飛んでくる。

『ちよっ！ 初美さんっ！』

さすが戦闘隊長だ。めざといな。

人型は、突然出現したウィッチ——自分を発見すると、逃走をやめてこちらをむいた。

途端に、頭痛が脳を支配してめまいに襲われる。

「これが洗脳という奴か」

歯をかみしめて、消えそうな意識をつなぎ止める。こめかみや額に汗がにじみ、手足の感覚が麻痺してくる。

少しずつ距離を詰めてくる人型の顔とおぼしき場所、そしてその目の位置に赤い灯火が浮かぶのを見る。

奴との距離は二十メートルはあるか。

まだだ。せめて十メートルまで近づいてくれないと、確実に仕留められない。

ふ、と視界がぼやける。

『……………!!』

耳元で誰かが何か叫んでいるようだが、はつきりとは聞き取れない。

くそ、頭痛が嘔吐を呼ぶ。ここが限界か。

《迷彩》を使う。

頭痛やめまいは軽微になるが、相変わらず視界はぼやけている。

「……………づあつー！」

ユニットの出力を上げ、人型に向かって斬りかかる！

カツ、と何かを断つ手応えを感じるが、その感覚は細い何かだった。

胴体、ましてやコアを割った手応えではない。

人型がどこかに飛んでいく気配を感じる。

「くそつ、しくじったか」

かすんでいた視界が元に戻ると、遙か遠方へ人型が逃げ出しているのを確認できた。《迷彩》を解除して、

「こちら初美。人型は一機戦闘空域外に逃亡を許すも、撃退は完了。繰り返す、撃退は完了。《大鯨》撃破へ移行されたし」

インカムを通して報告する。

『了解しました。総員、《大鯨》へ攻撃開始っ!!』

サーシャ大尉が高らかに宣言した。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の 巻 その十二

あちこちから機関銃の発砲音とネウロイの破壊音が聞こえてくる中、自分は滞空しながら頭を押さえる。痛みとめまいが激しくミキシングされ、脳内で反響を繰り返している。

船酔いと二日酔いと火酒をシェーカーにぶち込んで飲まされたような感覚だ。

「大丈夫ですか、初美さん」

そんな声がどこからか聞こえてきた気がするのと同時に、意識にかかっていたもやが風に吹かれて消えていく。

「う……あ、ああ、ジョゼか。助かった」

こんなことができるのは彼女ぐらいだ。

「はい。少しじっとしててください。すぐに治します」

「戦況を教えてください」

「現在、小型ネウロイの掃討を行いつつ、《大鯨》へ攻撃をくわえています」

散漫としていた意識が、即座に自分の手に戻ってきた。

回復魔法というのは、本当にすごいものだな。

「そうか……助かった。もう大丈夫だ、自分も攻撃に参加する」自分は、ジョゼに頭を下げて上昇を開始する。「サーシャ大尉、これより自分も戦闘に参加する。指示を頼む」

『よかった、無事なんですね。初美さんは直上から《大鯨》に攻撃を加えてください。ジョゼさんは下原さんとロツテを組んで小型ネウロイの排除をお願いします』

「了解っ！」

《大鯨》の直上に移動し、機関銃で一斉射を行った。ダダダダツと銃声が鳴り響き、火線は大型ネウロイに吸い込まれていく。

命中した部分がはじめていくが、それだけだ。

即座に命中した周辺のうろこが赤く染まる。

響がでると想像もしていなかった自分だった。

「大言壮語をはきながらの失態、申し訳ありませんでした」

自分は、頭を下げて謝罪する。

なにかしらの責任問題になっても、抗弁せずに甘んじて処分を受けるつもりだったが、ラル少佐は書類の山の谷間で苦笑しながらこう答えた。

「報告はサーシャより受けている。本作戦の目的は《大鯨》の撃破だ。それが成功したのだから、問題はない」

「寛大な措置、感謝いたします」

「もう一機を仕留められなかったのは残念だが気にすることはない。それで、貴様はこれからどうするつもりだ」

「どうする、とは……ああ、まだここにいるのかそれとも別のところに行くのか、ということか。」

「まだ資料は拝見しておりませんし、先生にもいろいろ教わりたいこともあります。ですからしばらくはここにいますよ」

ラル少佐は無表情のまま片手にもったコーヒーカップを置き、

「そうか。では、しばらくの間だがよろしく頼むぞ。《くノ一の魔女》の腕、頼りにしているぞ」

そう言って、彼女は山積み書類の手にかけ出したので、自分は司令官室を後にしたのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の
巻 その十三

書類保管室で、人型ネウロイとの交戦記録を閲覧したのは、《大鯨》を撃破してから三日経過した日だった。

その間、自分は念のため逃した人型ネウロイが現れる可能性も考え、《大鯨》が遊弋していた空域を中心に偵察任務を行っていたが、それもラル少佐の判断のもと終了し、自分が五〇二へやつてくるきつかけとなった資料の閲覧がようやく可能になったというわけだ。

もつとも、書かれていることは以前ロスマン先生と偽伯爵から聞いていた状況の再確認でしかなく、実りあるものではなかったのだが。よって、自分が五〇二にとどまる理由はなくなつたといえるが、どこに行けと指令を受けているわけでなし、もうしばらくここにやつかいになるつもりだった。

背伸びをしながら保管室を出ると、

「あ、初美さん」

「どうしたんですか、こんなところに」

下原とジョゼが仲良く二人で歩いているところに出くわした。

「ああ、人型ネウロイとの交戦記録の閲覧にな。二人はどうしたんだ？」

「私たちは、これから哨戒任務です」

と、下原が答える。

ふむ、そうか。自分も手が空いたことだし、

「それなら自分も付き合おう。取り逃がした人型ネウロイがまたやつてくるかもしれないしな」

「ありがとうございます、初美さん」

ジョゼはにこやかに微笑みながら礼をいつてきた。

「それじゃあ、飛行計画書の訂正をしてきますね」

下原は一人、廊下を小走りで司令室へと向かった。

「ジョゼ」

「なんですか？ 初美さん」

「あの時は助かった。改めて礼を言う」

自分は、ジョゼの顔を正面から見ながら言った。

あの時、とは人型ネウロイからの洗脳を治療してくれた一件のことだ。

こうしてきちんと礼を言う暇がこれまでなかったので、ちょうどいい機会だと思った。

「気にしないでください、初美さん。いつか私が初美さんに助けられることがあるかもしれませんし、お互い様ですよ」

人の役に立つことがうれしいのだろうか。

心からの笑みを浮かべているジョゼだ。

「そう思うことにしよう」

自然と自分もの微笑んでしまう。

なるほど、彼女のようなムードメーカーがいてこそ、部隊も回るんだろうな。

「それじゃ、格納庫にいつて定ちゃんが来るのを待ってましよう」

「そうだな、行こう」

そういうわけで今、自分は下原&ジョゼコンビと午後の定時偵察に出ている。

「このまま、南方を回ります」

下原は、インカムで管制に伝えると、三人で太陽の方向へと飛んでいく。

しばらく偵察を行っている、

「みなさん、気をつけてください。西に偵察型ネウロイが二機、こちらにむかってきます」

と、下原が機関銃を構えながら警告を発した。

自分とジョゼも合わせて銃器を構える。

「こちら下原、偵察型ネウロイ発見。これより迎撃に移ります」

インカムで管制へ報告し、加速を開始した。

むこうもこちらを発見したらしく、散発的にビームをうつてくるが、あたるところかかすめる気配もない。あっちにしてみれば当たれ

ばもうけ、ぐらいの射撃だろう。

自分たちと偵察型は、ヘッドオンになる。

有効射撃距離に入ると、

「攻撃開始っ！」

下原の号令一下、攻撃を開始する。自分の射撃も含めた銃弾がネウロイの装甲をはぎ、有効打をあたえ最終的にはむこうの攻撃をさせるいとまもなく撃破に成功した。

「こちら下原、偵察型ネウロイの撃墜を確認しました。このまま偵察を続け——」

ネウロイの鳴き声が聞こえるのと同時に、黒い塊が自分の背後からすり抜けた。同時に、左腕が何かにはじかれたような衝撃が走る。

持っていた機関銃の重量を右手で持ちきれず、墜としてしまう。

「初美さんっ!!」

ジョゼが悲痛な表情を浮かべていた。

「初美さん、左腕!!」

下原に言われて、自分の左腕を見る。

上腕部の途中から、左腕が消えていて、血があふれるように流れている。

「なん………だ?」

左腕が刀のようになっていている人型ネウロイが、滞空して自分を見ていた。

「二人とも離れろっ!!」

自分は喉が張り裂けそうなほどの声で叫び、懐から棒手裏剣を抜き放って打つ。

だが、その一撃もむなしく空を切り、人型は、何かに満足したのか、猛スピードでどこかへ飛んでいく。

そして、意識を失った。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 七の
巻 その十四

腕の痛みで目が覚める。

左腕全体が炉の中で焼かれ、とかされているのではと感じてしまうほどの痛みが体を支配していた。

いくら武術をやっていることで痛みになれているといっても、この激痛に耐えられるほどではない。

激痛の火花で脳細胞が焼かれ、杯となりそうだ。

「あ……がつー！」

頭ではないとわかっているのに、体が左腕を忘れていない。

ベッドの上でもんどりうつ。枕をかみしめ、ベッドのパイプを右手で殴りつけた。

涙も鼻水もよだれもダダ漏れだ。

まぶたの裏が真っ赤に染まる。

「は……ひ、ぎっー！」

息が止まりそうだ。

「……………」

痛い、痛い痛い痛い痛痛痛痛痛痛——っ！

「……………さいっー！」

——あ？

「大丈夫です、落ち着いてください、初美さん!!」

激痛で焼かれて何も感じなかった耳や目の感覚が戻ってきた。

「聞こえますか、初美さんっ！」

「じ、じよぜか」

「よかった、意識が戻ったんですね、初美さん」

「なんとかかな。いまだうなってる。じよきようをおしえてほしい」

自分は、汗まみれのまま寝転がり、心配そうに自分の顔を見つめるジヨゼにかすれ声でたずねた。

どうやら、ジヨゼは自分のうめき声を聞きつけ、自分が寝ていた救

護室にやってきて回復魔法を使ってくれたようだ。

痛みが引いたのもそのおかげだろう。

「初美さんが腕を切られてから丸一日がたちました。あれから人型ネウロイは姿を現していませんが、隊長は念のため、しばらく偵察活動の中止を発令しました」

「まだあるはずだ。じぶんのしよぐうをきかせてほしい」

「隊長は、初美さんが負った傷のことを上層部に報告。本部からの連絡待ちです」

そうか。まだ決まってないか。

それなら、だ。

「ジョゼ、助かった。もう大丈夫だ」

回復魔法をやめるよう言ってベッドから立ち上がる。

「初美さん、どこに行くんですか」

「決まってる。あの人型ネウロイをぶっ倒しに行く」

左腕を見ると、二の腕全体に包帯が巻かれ、その先は赤く血でにじんでいた。

「無理です初美さん！ まだ傷は治ってないんですよ！」

「だが自分にしか安全に奴を撃墜できない。自分が行くべきだ」

壁にかかっていた扶桑陸軍の軍装を着て、ベッド横の小テーブルにのせられていた扶桑刀を背中に、殿下から下賜された守り刀を腰に下げ、片手で身につけるのは不慣れでも、これからは慣れていかなければならないな。

「やめてください！ 死ぬつもりですか！」

ジョゼが珍しく強い口調で自分を制止した。

「死ぬつもりなどない。奴を殺すだけだ」

自分がそう言っ て 救護室を出ようとしたそのとき、ドアが開いて、

「残念ながら発進の許可は出せない」

ラル少佐が告げつつ入室した。

「少佐っ！」

「腕をなくしたウィッチを前線に出すわけにはいかない。それに、貴

様には扶桑本国より帰還命令が下った」

帰還命令だって？

その命令を聞いて、自分は言いたいことをぐっと飲み込んだ。

自分は欧州を自由に動くための自由裁量権をいただいている。もちろん、移動の際は事前に報告をしているが、基本的には皇女の名の下、国境すら自由にこえることが許されている。

それ故、作戦命令以外で自分を移動させることは誰であろうとできないが、今回の帰還命令は作戦など何らかの目的を持ったものではなかった。

ただ、帰ってこい、だけだ。

この命令を自分に発せられるのは一人しかいない。

皇女殿下だ。

勅命、いや、親友の頼みを断るわけにはいかなかった。

「わかり………ました」

自分は、食いしばった歯の奥で、その命令を受諾する。

「貴様、本当に詠宮龍子殿下とつながりがあったんだな。直々の通信文を受けたときには目を疑ったぞ。これがその電文だ」

少佐は、自分に電信文を手渡してきたので受け取り、文面を黙読する。

そこには確かに殿下による手書きの文字で帰国をうながすむねの文章がつづられており、最後に詠宮龍子、と記されていた。

「確かに。受け取りました」

自分は、その手紙を片手で折たたんで胸ポケットに収める。

「ラル隊長、その、初美さん、扶桑に帰っちゃうんですか？ それに、うたうのみや？ どなたなんですか？」

今まで自分とラル少佐のやりとりを聞いていたジヨゼが、すこしばかり不安そうな面持ちで尋ねてきた。

「ああ。明日、扶桑陸軍の輸送機が迎えに来る。それから、詠宮龍子とは扶桑皇国の皇女殿下のことだ。初美は、これでも扶桑皇国皇女——あー、扶桑のお姫様から直接欧州で活動するよう言われた騎士なんだ」

「騎士としてではなく忍者としてだがな」

それだけを聞いたジョゼは言葉を失い、自分の顔をきよとんとした顔で見つめる。

「初美さんが、騎士？　ですか？」

「そうだ。ブリタニアの女王陛下から受勲されたデイルムコマンダーだ。貴様、話してなかったのか」

「いちいち言うようなことではありませんからね」

正式な場や貴族を前にしたときには名乗りはするが。誰かに会うたびに自分は騎士です、などと自己紹介するものではない。

「ともかくそういうことだ。初美、魔法で動けるようになっているとはいえ、無茶はするなよ」

「了解しました」

自分は、左腕を奪ったあいつに復習できずに帰国する一握の悔しさを胸に、ラル少佐へ敬礼をして国に戻る準備を開始したのだった。

翌日、五〇二のみんなと別れの挨拶をかわした後、百式輸送機に乗り帰路についた。

帰国までおよそ五日、欧州に禍根を残し、狭い輸送機で空を飛んで扶桑へと戻る。

自分にとつて、欧州での活動は、皇女殿下の頼みだけの問題ではなくなっていた。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 八の
巻 その一

一週間後、自分は一〇〇式輸送機に運ばれて扶桑へと帰ってきた。

立川飛行場に着陸して陸軍病院に移送されると、問答無用で魔眼持ちのウィッチに体を調べられ、左腕の手術が行われた。後で医者に聞いたところによると、皮膚を引っ張って縫合したらしい。

ジョゼの治療魔法でおおよそのは治っていたんだが、やはり応急手当程度でしかなかったようで、皮膚はできあがっておらず、出血が止まる程度だったということだ。

それ以外は、いたって健康そのもので、術後の様子を見るために一週間ほど入院、というのが医者からの指示だった。

もちろんいやなどなく、自分は素直に医師の指示に従って入院した。

皇女殿下のつてもあつてか、帝国ホテルもかくやという豪勢な個室をあてがわれ、食事もたいそう贅沢なものが出された。正直、どうしてもここまで大事にするかな、と考えたが、龍子の過保護っぷりを想像するとこれも当然か、とも思えた。

そうこうして入院生活もあと一日となった昼下がりがりだった。

病室のドアがノックされた。

「どうぞ、あいてますよ」

と、自分が答えると、黒髪おかつぱの女性が顔をだした。

龍子のお付きの侍女、春原乙女であった。

「おまえがお見舞いとはどういう風の吹き回しだ」

自分は、ベッドに腰掛けてやれやれと肩をすくめ尋ねた。

皇女殿下絶対主義、とでも例えればいいのだろうか。熱狂的に龍子を崇拜していて、自分の理想の皇女たらしめんと殿下の行動にすら口を差し挟んでは、そのたびに注意をうける。

龍子に稽古をつけて彼女をぶん投げてからというもの、自分を目の敵にし続けていると、殿下から聞きおよんでいる。

もつとも、その前から自分に対してあまりいい感情を抱いてはいなかったようだが。

「貴様、皇女殿下を投げ飛ばしたと聞いたが、本当か」

開口一番、これか。

はあ、とため息をついてしまった。

「龍子から稽古をつけてくれと言ってきたのだから当然だ。相応の覚悟をもって挑んできたからな。手加減は無礼だ」

「きいさあまああつ——っ！」

歯をむき出しながら叫び、胸ぐらをつかみかかってくる。

「ふん」

自分は、右手一つでそれをいなし、床に投げ捨てた。

「がはっ!!」

春原は背中をしたたかにうち、肺の空気が吐き出されて咳き込んだようだ。

そうして、動きが止まった春原をうつ伏せにして、背中に足を置いて重心を押さえ、

「ずいぶんとなまったものだ、春原。貴様としあつた時にはもう少し骨があつたんだがな。どうした」

「貴様のように武術漬けではなかつただけだ」

きつと苦虫をかみつぶしたようなつらなのだろう。噛みしめた歯の奥から聞こえてくるくぐもつた声だ。

それで、自分はなんとなく気づいてしまった。

こいつは懸想しているのだ。龍子殿下のことを好きになって——愛してしまつたのだ。

なるほど。

こいつの異常な執着も、そう考えればすべて納得できる。

「春原、そこまで好いてるのか」

暴れていた春原が、その一言でぴたりと収まった。

春原の背か中から足を離して、ベッドに腰掛けなおした。のそり、と体を起こして立ち上がる。

「椅子にでも座れ」

自分の案内に従い、慥然とした顔つきを崩すことなく見舞客用の椅子に腰掛けた。

「まず、誤解されたくないからこれだけははっきり言っておこう。自分は、龍子には何の懸想も持ち合わせていない。龍子とは友人、それだけの間柄だ」

「ならなぜ、ああまで貴様を頼る。なぜ自分ではなく貴様なのだ」

「さあな。それは信頼の差じゃないのか？」

「貴様、私が殿下から信頼されていないというのか！」

春原は自分をにらみ、声を荒らげる。

「落ち着け春原。そうは言っていない」

なだめるような口調で、おかつば娘に告げる。

「自分は龍子を投げて、春原は龍子を投げられなかった。その程度の差じゃないのか、ということだ」

「人間として、対等に見ていたかどうか、ということか」

「そうだ。納得したか？」

「私は龍子殿下の侍女だ。貴様のように振る舞えない」

「プライベートな時ぐらい、くだけた調子で話しかけてみる。龍子は気にしないぞ。むしろ喜んでくれるかもな」

「あ、ああ……」

「それから、龍子はエスには興味がない。それを承知で懸想しているのなら、覚悟しておくことだ」

「……わかった」

小さくうなずき、春原は立ち上がった。

「帰るのか？」

自分は尋ねた。

「うん……」

「ああ、それから龍子殿下に伝えてくれ。後で自分も殿下に嘆願するが、自分はもう一度欧州に出向く」

「な……なんだとっ！ 貴様、正気か！」

「いちいち大声を上げるな」

「貴様、左腕がないのだぞ！ もう満足に機関銃も撃てまい。刀もだ。」

戦場では役立たずの貴様が、なぜ戻る！」

「決まっている。守るべきものがそこにいるからだ」

「貴様に何が守れる！ 龍子殿下にこれ以上心配をかけさせるな！」

「守れるさ。ほかならぬ魔女ウィッチをな」

自分は、はつきりと言い放った。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 八の
巻 その二

退院後、自分は陸軍の軍装を身にまとい、龍子の待つ吹上御所に足を向けた。皇居の門前に立つ近衛兵たちは、自分の顔を見ると敬礼で迎えてくれた。

自分も彼らに返礼をして門をくぐり、御所へと向かう。

そして、龍子が住まう棟に近づくと、講談の忍者よろしく壁にさささと駆けより、魔力を右手と左腕に込め、ペテルブルクの尖塔を這い上がった訓練のように壁を登って、彼女の部屋の窓にたどり着くと、

「龍子様、龍子様、初美あきらでござる。龍子様の素にはせ参じたで候」

と言つてコンコンとノックする。

すると、からり、と窓を開けた龍子が、

「くるしゅうない。部屋に入れ」

と、神妙な面持ちで招いてくれた。

自分は、はいていた靴を脱いで窓から彼女の部屋に上がり込む。

皇女殿下の個室ゆえ内装は豪華だが、部屋自体は十畳程度の大きさで、寝室は隣部屋にしつらえられている。

事務仕事もできるよう、天板が広い木製の事務机が設置され、ペン立てにはガラスペンや万年筆、その横にはインク壺、プロッターと呼ばれる、紙にインクのペンで書いたときの余分なインクを吸い取るインク吸い取り器などが置かれていた。

「よく帰ってきたな、あきら」

龍子は満面の笑顔を浮かべて、扶桑に戻ってきた自分を迎えてくれた。

「すまないな、心配をかけた」

「腕は大丈夫なのか？」

包帯が巻かれた左腕を心配そうに見ながら、龍子。

自分は、軽く笑って、

「なに、武芸をたしなんている身だ。いずれ片腕を落とすぐらい覚悟のことはしていた。よもやネウロイにやられるとは思わなかったがな」

と、答えた。

「来て早々だが、龍子、頼みがある」

「春原から聞いたぞ。また欧州に行くというのだろう。駄目だ駄目だ、絶対に駄目だ。あきらは妾のわがままを聞いて渡欧し、妾の代わりに欧州の不遇な民を救ってくれた。しかも片腕まで失ってだ。これ以上、あきらみに無理はさせたくない」

やはりか。多分、春原は自分を欧州に向かわせるよう口添えをしてくれたのだろうが、龍子はこれっぽっちも聞く耳を持たなかったとみえる。

「頼む、龍子。いや、詠宮龍子妃殿下」

自分は最敬礼をして龍子ではなく、殿下に願いを奏上する。

「願い申し上げます。もう一度欧州に行かせてください。あそこには、自分でなければ護れぬ者たちがいるのです。」

自分が行かなければ、ウィッチたちは人型ネウロイにさらわれ、きやつらの手先となってしまう。そうなってはウィッチ同士が殺し合い、同士討ちが繰り広げられ、ひいては欧州の無辜の民も犠牲となりましょう。殿下、もう一度申し上げます。なにとぞ、なにとぞ自分を欧州へ派遣させてください」

「ならぬ」

「どうか、お願い申し上げます」

感情のままに叫び出したい気持ちを抑え、言葉にする。

「ならぬのだ。面を上げよ、初美少尉」

「自分の願いを聞き届けていただけれるまで、頭を上げることはできません。ここから動くこともできません」

そうして、十分ほどの沈黙が部屋を支配した。

皇女はこのとき、どんな顔をしていたのだろうか。

自分をにらみつけていたのだろうか。哀れんでいたのだろうか。悲し

んでいたかもしれない。

が、根負けしたのは皇女殿下のほうだった。

龍子は、何かを諦めたようにため息をもらす。

「てこでも動かぬつもりのような」

「自分にできることをようやく見つけますれば」

「条件がある」

「どんなことであろうと、受け入れます」

「妾を悲しませるな」

「もとよりそのつもりです、殿下」

顔を上げ姿勢を正した自分は、笑顔で言葉を返した。

「満足そうに笑いおつて。まあいい。欧州の話、たつぷり聞かせてもらうぞ」

翌日、自分の師匠である高杉寿庵のところに顔を出したが、あいにく数日前から千葉県警察学校へ教練に向かったと張り紙が玄関の戸にあった。

事前に、自分が入院していた病院にでも連絡をしてくればよかったのに、おそらくずぼらな師匠のことだから、連絡を忘れていたか、あるいはそもそもおぼえていなかったのだろう。

自分は、懐中筆を取り出して紙の裏に、『連絡ぐらいよこせ、バカ師匠』としたためて東京へときびすを返し、浅草に立ち寄った。手土産の浅草煎餅を買うためだ。閉店間際に入ったにもかかわらず、店主は気持ちよく応対してくれて、ありつたけの堅焼き煎餅を一斗缶二つに詰め込んで、となりの茶屋から番茶の葉を一箱、用立ててくれた。

自分はその気遣いに感謝して五円ほどをおいて店を出る。

そうして、東京まで電車で移動して近くのホテルに宿泊すると、ホテルのフロントで電話を借り、東部三三部隊へ定時連絡をいれた。

「こちら、初美あきら少尉です」

『おお、初美少尉でしたか。ちょうどいいところに連絡、ありがとうございます』
『はい』

「その様子だとなにかあったのか？」

『はい、第五〇一統合戦闘航空団のミーナ中佐より連絡がありました。』

おつなぎしますので、少々お待ちください』

「あ、ああ、了解した」

ミーナ中佐だって？ 一度会話を交わし、ペリーヌの件で貸し借りがどうのと軽い口約束をしたのは確かだが、どういうことだ。

『出ました。ミーナ中佐にかかります——初見少尉？ お久しぶりで、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です』

「お久しぶりです、中佐。そちらから呼び出しとは、なにかあったのですか？」

『ええ、そうよ。詳しくはこちらに来てから説明するのだけど、あなたへの貸しを返してもらう必要が出てきたの』

「人型ネウロイ、ではないようですね」

『電信で概要を送っておきます』

しかし、必要とされるなら否やはない。

「偵察、ですか？」

『それも、少々厄介な、ね』

「了解しました。そのように対応いたします」

『よろしくね、初美さん』

「はい」

自分は、受話器を置いてフロントを後にしたのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その三

翌朝、ミーナ中佐から受けた依頼は緊急を要する内容だったらしく、陸軍の一〇〇式輸送機では間に合わないのと、五〇一に籍を置いているウィッチが海軍であるためか、急遽二式輸送機で向かうことになった

。一〇〇式輸送機と違って、二式輸送機はさすがの速度と航続能力で、明らかに時間のかかるリベリオン経由でも一週間弱でロマーニャに到着する。

よって、陸軍の飛行場である立川ではなく、横須賀軍港からリベリオン経由で欧州への出発になる。

起床後、ホテル前にはくろがね四起が自分をまっていた。

自分はそのまま横須賀まで運ばれ、立川からは木製疾風が搭載された発進促成装置と整備品が送られることになっている。

自分が送迎されて横須賀に着いたのは、朝の八時。出立が十時とのことなので、色々な話し合いもあるだろうし、いい頃合いだろう。

「あ、初美陸軍少尉ですね」

横須賀の海軍基地の門に車がとまり、自分が降りると警備担当の兵士が近寄ってきた。階級章をみたところ、どうやら一等兵のようだ。

「今日はよろしく頼みます」

自分はあるく頭を下げて答えた。

「早速ですが、第五〇一統合戦闘航空団のミーナ中佐より電信です」

と、四つ折りにされた紙を一枚手渡してきたのでそれを受け取り、何が書かれているのか確認する。

「ふむ……」

ざっと目を通したところ、マルタ島にネウロイの巢ができたのだが、その対応に苦慮しているとのこと。形状は、ヴァモラ島を占拠したドーム型のネウロイが巨大化したものだったようだ。

なるほど、ミーナ中佐が自分に何をさせたいのか、大体わかってき

たぞ。

「了解しました。対応、感謝します」

「では、ご案内します」

一等兵の案内に従い、二式輸送機の待つ港まで向かう。送ってくれた警備の兵士はそこまで来ると、失礼します、と持ち場に戻っていた。

そこには、陸軍の運搬車が止まっていて、それには木製疾風が収まった発進促成装置とメンテ用の予備パーツが入った木箱が積まれている。

発進促成装置には、海軍の整備兵が三名ほど集まって促成装置から木製疾風を出して、調べていた。どうやら木製疾風がどんなものなのか、確認をしにきたようだ。

「初美だ。行き先の急な変更に付き合わせてしまつてすまないな」

自分は、運転席のドアをノックしてそう声をかけた。

「いえ、ウィッチの役に立ってるなんて、ありがたい話ですよ。気にしないでください」

車窓から顔を出して、笑いながら答えてくれた。

「そういやあ、海軍さんの宮藤軍曹が、ここからストライカーユニットで離陸してすぐの二式に乗って欧州にいったって話ですね」

「そうなのか？」

宮藤軍曹はブリタニア時代に軍規破りをやってしまったせいではない名譽除隊をうけていたはずが、再結成した五〇一部隊へ参加していたという噂を聞いたときには我が耳を疑った。

「本当らしいです。木製疾風を見物に来た整備兵がそんなこと言っていましたよ。なんでも、宮藤軍曹、ぼた餅の差し入れやらで整備兵とは懇意にしていたようで」

「ははあん、そういうわけか。宮藤軍曹は、いわゆる人たらし、なのだろうな。」

そして、彼女の軍籍復帰やその他もろもろの手続き、並びに各方面への折衝は坂本少佐が行ったのだろうが、ああいう軍規破りが部下にいと色々大変だろうなあ。

自分が部下持ちではないことに安堵してしつつ、車の後ろに回って海軍の整備兵たちに声をかけた。

「木製ユニットはやはり気になるか」

ユニットの操縦者である自分に聞きたいところもあるだろうからな。

声の凶太い、五厘刈りの兵士が、

「あ、初美少尉ですか。木製疾風、検分させていただいておりやす」

敬礼をしながら言葉を返してきた。

「ああ、初美でかまわんよ。で、なにか面白いものでも発見したか？」

「木製疾風の装甲板、これ、ネウロイの対ビーム装甲ですか？」

帽子をかぶった生真面目な整備兵だ。

「残念ながら違うな。現在試作段階も終了という話は聞いたが、ユニットの装甲に使えるほどの軽量化は、技術的にできなくはないがかなり力ネがかかるらしい」

「木製で重量があるユニットですけど、戦闘可能時間とかはどうなんでしょうか？」

眼鏡をかけた細面の研究者肌な整備兵が尋ねてきた。

「多少は短くなってるが、増槽をつければ偵察には十分な足を稼げる。速度も六〇〇キロ以上でる。悪くない」

「疾風は重戦で急降下と急上昇が必須でしょうが、強度は問題ありやあせんか？」

と、五分刈り。

「ないわけではないはずだが、このユニットに関してはなにひとつないぞ。整備兵たちが見せてくれた不断の努力の賜物だろう。ありがたいことだ」

「操舵はどうです。重いですか、軽いですか」

帽子が、若干食い気味に訊いてくる。

「わざと重くしてもらってはいる。急な旋回は操舵はユニットによりしくないからな。飛行中のユニット分解ともなれば、いかなウイツチでも死をまぬがれぬ」

「加速とかはどうですか。やはり木製の重量は影響しますか」

眼鏡はずいぶん冷静だな。

「そりやあ影響しないわけがないが、自分の主要の任務が固有魔法の《迷彩》を用いた隠密……じゃないか。偵察だからな。あまり意味はない」

などと整備兵と話していると、春原がやってきた。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その四

「春原か。わざわざ見送りか？」

自分は、顔を春原がやってきた方へ向けて声をかけると、もう一人、陸軍軍装と海軍水練着を着た女性が彼女の背後に立っていたのを確認できた。

龍子か。

あいつ、こんなところに来て大丈夫なのか？

まあ、一般人には顔を知られていないはずだし、着ている軍装もちよつと変わっているか程度で済むからそこまで問題ではない……はずだ。そもそも警護が必要なほど彼女は弱くはないし、八咫鳥を使い魔に持つ春原が常に彼女の身辺警護をやっている。

今ここにネウロイが来たとしても、彼女たちならユニットなしでどうにかしてしまおうだろう。

しかし、しかしだ。皇女殿下がこうして護衛役を一人春原に任せて、ほいほい外出していいものか？

「龍子もよく来たな。わざわざの見送り感謝する」

問い詰めたいのをぐつとこらえて、笑顔で二人を出迎えた。

「気にするな、親友の覚悟を決めた出立だ。見送らなければ友人は名乗れぬ。そういうものだろう？」 春原

「は……いえ、そうだな、龍子」

春原は言いにくそうだ。対等な立場でという約束事でもあるのだろうが、敬愛する龍子に対してぎつくばらんな物言いは抵抗があるのだろうか。

整備兵たちは、いきなり現れた二人の女性に目を奪われたが、それもまあ当然だ。

どちらも格別の美人で、町を歩けば老若男女振り向かせる美貌の持ち主であるからだ。

「君たちは、自分が出立するまで木製疾風の検分をしてくれてかまわ

ない。自分は二人と話があるので、少しこの場を離れる」

そう整備兵たちに告げ、自分は二人を先導して人目のつかない建物の陰へと隠れ、

「いくらなんでもまずいだろう。春原、お前どうして龍子を連れてきたんだっていうか、衛士が止めなかったのか」

自分は、小声で春原を問い詰めた。

いくらなんでも、これは看過できない。

龍子は、そうやって春原に食ってかかる自分を見てくすくすと笑い声を上げた。

「気にするな。父上の許しを得た上でのことだ。あきらが心配するよ
うなことなど、なにひとつない」

皇女の言い分に返す言葉を忘れてしまう。

「うむ、その場には私もいたからな。それに関しては保証しよう」

春原が付け加える。

「マジか……」

確かに、陛下はそのあたりかなり自由な考えの持ち主で、自身もお忍びと称してよく東京を散策なさるが、よもや娘にも許すとは。

父上がなさっているのだから、妾もそれぐらいかまわないだろう、
とでも言って説得という名の脅迫でもやったのだろうか。

「それで、基地の兵士たちにはなんと説明した」

「川股少将の親類縁者ということにしている。川股少将のかわりにお前を見送りに来た、という理由付けだ」

春原が答える。

ああ、そういう筋立てか。

あの人も大変だな。

今回ばかりは同情するぞ。

「それで、春原は」

「私は龍子の警護を任せられた陸軍のウィッチだ」

「春原、そんなのでよく騙せたな」

「堂々としていれば疑われないものなのは貴様もわかってるだろう。
それに、正体を知られたところで何がどうなるわけでもない。ゴシツ

プ雑誌になにか書かれるかもしれないが、そんなのはいつものことだ」

ブリタニアほどではないが、我が皇国にも皇族をおもちゃにする雑誌はあるからな。

「それはそうだが……」

「そう気に病むな。なにかあってもあきららには迷惑をかけん」

皇女にこう言われては納得するしかない。

「わかった。いちいち気にするのはやめにしよう」

などと話していると、遠くから、初美さーん、どこですかー、と、自分を呼ぶ声が聞こえた。

「あきら、お呼びだぞ」

と、春原がとつと行け、と言外に促す。

「わかった。春原、皇女殿下をしつかり守れよ」

「護衛に関しては貴様よりも優秀だ。任せておけ」

「これ以上怪我をしてくれるなよ。妾はそれだけが心配だ」

「ご安心を。さすがにこれ以上不覚をとることはありません。では、御免」

自分は二人に頭をさげて、自分を呼ぶ声の主へと向かう。

「すまない、ちよつと諸用でな。どうした」

「あ、初美さん。木製疾風の二式輸送機への搬入、終了しました。機長がフライトについての説明をしたいとのことですよ」

眼鏡の整備兵が、海軍式の敬礼をしつつ言ってきたので、自分はずいずい輸送機の機内へと入り、欧州までの航路や機内での注意事項を受けるのだった。

そうして、出発の時刻がやってきた。

自分は窓辺に座ると、自分を見送る二人に手を振って別れの挨拶をする。

二人とも、笑顔で手を振り替えてくれた。

一週間後、自分はネウロイとの戦いの待つ欧州へと戻るのだ。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その五

一週間の移動を終え、ロマーニヤの第五〇一統合戦闘航空団基地に到着した。

五〇二のペテルブルク基地もそうだが、ずいぶん風光明媚な場所や建物を本拠地とするのだな、などと思いつつ、痔ができそうなほど座らされて疲れがたまつた腰を叩きつつ、タラップを降りると、そこにはミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐とポニーテールに眼帯をつけたウィッチが待っていた。

ふむ、彼女が名に聞くとこのころの坂本美緒少佐か。

「初美あきら陸軍少尉、ただいま到着いたしました」

タラップから地面に降りると、自分は陸軍式の敬礼で名を名乗った。

「こうして直接会うのは初めてね、私がミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐。ミーナ、と呼んでちょうだい」

「私は扶桑海軍少佐、坂本美緒だ。階級のことには気にせず、坂本でかまわない」

「では、少しの間になると思いますがよろしくお願いします、ミーナ中佐、坂本少佐」

「早速だが、左腕の状態はどうなっている。まだ完治はしていないのか？」

と、坂本少佐が訊いてきた。

「はい、完全には治っておりません。抜糸もしておらず、完治にはもう少しばかりかかるかと」

自分がそう答えると、少佐はうなずいて、

「ミーナ、すまないが作戦会議は少し後にしてくれるか？」

「わかってるわ、宮藤さんね」

などと言って、微笑んだ。

自分の腕の治療を先に済ませてしまうのか。

「ああ、そういうことだ。初美、まずその腕を完治させなければならぬいな。ついてこい」

少佐はそう言つて、自分を基地へと案内する。

「了解しました。失礼します、ミーナ中佐」

赤髪の女公爵に頭を下げて、自分は颯爽と歩を進める少佐の後をついていく。背筋がすつと通っているあたり、かなりの使い手のようだ。武術家として、講道館剣術とは試し合いを試してみたくなるが、それをぐつと飲み込む。

「どうして左腕を失つたのか、詳しい事情を聞かせてはくれないか？」

少し後ろを歩く自分に、優しい口調で問いかけてきた。

「五〇二との共同作戦で、自分は人型ネウロイを二機相手にしました。

一機は撃破できたのですが、もう一機を仕留め損なつたのです」

「ふむ」

「ともかく、その作戦は、人型ネウロイを一機逃した以外は成功し、無事超大型ネウロイの撃破をしました。それから数日後、自分は下原貞子少尉と、ジョーゼット・ルマール少尉とともに定時偵察任務に就きました。そのとき、偵察型ネウロイを撃墜したのですが、不意を打つて人型ネウロイが自分の背後からやってきて、腕を切り落としたのです。その人型は、おそらく自分が撃墜に失敗した奴のはずです」

腕を落とされた時の衝撃と痛みを思い出してしまい、左腕の傷口を押さえてしまう。

「なぜそう言い切れる」

「自分が撃墜した人型ネウロイは、扶桑刀で切り伏せたのですが、そのときの様子を奴は見っていました。そして、自分の腕を切り落としたネウロイの右腕は、扶桑刀のような形状をしていたのです」

「なるほどな、そういうわけか。大変だったな」

「自分はウィッチである以前に忍者であり武術家です。腕の一本ぐらい、いつでもなくす覚悟はあったので、気にはしておりません。それよりもあの時、人型ネウロイを撃墜できなかった後悔のほうが大きいです」

「どうしてだ」

「人型ネウロイは、ウィッチを洗脳し、操る先兵です。あいつらからウィッチを守るのは、自分をおいて他にはいません」

そこまで言い終えると、自分は息を吸って、

「自分は、彼奴らからウィッチを守りたいのです」

宣言するように強く言った。

それを聞いて、少佐はふと立ち止まり、

「そうか、お前も護りたいのか。そうか、そうか」

と言つて唐突に笑い始めたものだから、自分はいぶかしんで彼女の顔を見た。

自分は何かおかしなことでも言ったのだろうか、と思っていると、少佐はさっぱりとした笑顔で、

「いやあ、すまんすまん。これから初美少尉と会わせる宮藤も同じことを言つて、無茶をして欧州までやってきたのを思い出してな」

と、自分の右肩を叩きながらそう言った。

それか。人をバカにするような人物ではないと思つていたので、唐突に笑い出されてどうすればいいのか迷つてしまった。

「ああ、横須賀基地での一件ですか。噂を聞いたことはありますが」

「理由如何によつては、初見少尉の偵察任務参加を見合わせようと思つてはいたのだが、それを言われてはな。宮藤を欧州に連れてきた手前、引き下がるしかあるまい。さあ、医療室まであと少しだ。行くか」

「了解です、坂本少佐」

「初美、私のことは階級抜きで呼んでくれ。海軍と陸軍の間柄ではあるが、同郷の人間にそうよそよそしくされるのもな」

なるほどな。気っ風のいい人柄だとは聞いていたが、その噂は本当だったか。

「わかりました、坂本さん。よろしくお願いします」

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の
巻 その六

自分と坂本さんが治療室に到着すると、そこに待っていたのは一人の女医と髪の毛が外はねしている焦げ茶の髪が印象的な女の子だった。

女医は妙齢の美人で、おそらくウィッチ専門の軍医かなにかなのだろう。

ということとは、女の子が噂の宮藤芳佳軍曹か。

「待たせたな、宮藤。アレツシア先生、お願いします」

「初美あきらさんね、こちらに座ってちょうだい」

女医——アレツシア先生が、丸い回転椅子へと招いたので、自分はそのに従い腰掛けて上着を片手で脱ぐ。下には白いティーシャツ一枚を着ている。

「うわ……」

宮藤軍曹が、自分の左腕を見て声を上げた。

腕を欠損した人間を目にするのは初めてなのだろうから、そういう反応にもなるな。

「ちよつと失礼するわね」

女医は気にせずに包帯を外しにかかる。

くるくると、巻いていた包帯を手早く取り去り、傷口にあてがっていたガーゼに手をかけて、

「痛いかもしれないけど、我慢してね」

かなり真剣な面持ちで言った。

「痛みには慣れています。さつとやっってください」
「わかったわ」

うなずいて、びつとガーゼを引き剥がす。

皮が剥がされるような激痛が一瞬走るが、意識の外に外して無視をする。

傷口に張り付いているガーゼのほつれた糸も、ピンセットで丁寧に

取り除いてくれた。

「抜糸もするけど、我慢してね」

そして、傷口を結んでいた絹糸を切って、一本ずつ素早く丁寧に抜く。

当然、癒着した傷口に痛みが走り、そのたびに眉や頬がぴくつと動いて反応してしまう。

作業自体は十分とかからずにすんだが、さすがに脂汗が顔面から吹き出ていた。

「さすがだな。そこまで痛みには耐えられるとは」

坂本さんは、かなり感心した風に感想を述べた。

「意識の外に痛みをおいやればいいだけなんです、普通の人にはお勧めできませんね」

「さ、宮藤さん、あとはお願いね」

そう先生が言うと、

「わかりました。あとは任せてください」

宮藤軍曹は魔法力を発現して自分の左腕に両手のひらをかざし、意識を集中する。柴犬の耳と尻尾が生えてきて、青い光が治療室全体を包む。

すると、ほぼ同時に傷が塞がり、皮膚も外皮まで完璧に形成された。ガーゼを剥がしたり抜糸した時の痛みも一瞬にして引いて、その治療速度と効果にはただただ驚くばかりだ。

なるほど、これが噂に聞く宮藤軍曹の治療魔法か。

「ふう、これで大丈夫のはずです。どこか痛むところとかありませんか？」

宮藤軍曹は、額ににじんだ汗を拭いながら訊いてきた。

「ああ、全く問題ない。すごいな、軍曹の治療魔法は。自己紹介がまだだったな。自分は、扶桑陸軍、初美あきら少尉だ。お二人には深く、深く感謝する」

自分は、二人に頭を下げて感謝の意を表す。

左腕がなくなった以外は、すべて元通りになったようなものだから。いくら感謝してもしきれない。

「そんな、気にしないでください」

ニコニコと笑顔を浮かべ、宮藤軍曹は言った。

「傷がなおってよかったわ」

と、アレツシア先生。

「ところで坂本さん」

「なんだ、宮藤」

「どうして初美さんが五〇一に来たんですか？」

む、いきなりそうきたか。あの作戦に関してはまだ秘密のはずだ。

「宮藤に傷を治してもらいに来たんだ。そのかわり、初美はしばらくの間、五〇一で働いてもらうがな」

なるほどそうきたか。

当然といえば当然か。

「そういうわけだ、しばらく厄介になるがよろしくたのむ」

自分は、坂本少佐にあわせてそう答えたのだった。

その後、自分は坂本少佐に連れられて、ミーナ中佐の待つ執務室へとやってきていた。目的はもちろん、ドーム型ネウロイの偵察任務についてだ。

「ミーナ、私だ。入るぞ」

坂本さんがドアをノックすると、中からどうぞ、と声が聞こえる。

ドアを開けて、少佐と自分は中へ入った。

「待たせたな、ミーナ」

「いいのよ、それで初美さんの怪我はもう大丈夫なの？」

「はい。完全に治りました。凄いものですね、宮藤軍曹の治療魔法というのは。生まれたときからこうだったのでは、と錯覚するぐらいに治療していただけました。感謝します」

「そう、すっかりよくなったのね。では、偵察任務のほうもできそうなのね？」

「もちろん、万全整えて任務にあたらせていただきます」

自分はうなずいて答えた。

「よかったわ。では、偵察任務の概要について説明するわね」

ミーナ中佐は、机の引き出しから大きめの茶封筒を一つ取り出し

た。

「まずはこれを見てちょうだい」

封筒の中から、数枚の写真を出して、自分たちに見せる。

その写真には、マルタ島を覆う黒いドームが写っていた。

「初美さんは見覚えがあるはずね」

「ええ、ヴァラモ島を占拠していたネウロイとほぼ同じタイプの要塞型ネウロイだと考えられます。ただ、規模はこちらのほうが遙かに巨大だと思われませんが」

「そうね。初美さんの見立ては正しいわ。そりれに加えて、海面とネウロイの隙間はかなりあるから、ストライカーユニットをはいたウィッチ一人ぐらいなら楽にくぐり抜けられる」

「つまり、その隙間から入り込んで、内部を偵察する、というわけだな。しかし、そんなことが本当にできるのか？」

坂本少佐は、腕を組んで首をかしげた。

「それができるのよ、初美さんならね」

と、自分に説明を促すミーナ中佐。

「自分の固有魔法は《迷彩》といって、電磁波、魔導波などの波を吸収し、迷彩色で周囲に溶け込むシールドを張ることができます」それを受けて、自分は事情を知らない坂本少佐に説明する。「熱などは防げませんが、ネウロイの目には透明にうつるのでおおよそどんなところでも、安全に偵察が可能になります」

「そういうことか。それなら確かに可能だな」

自分の説明をきいて、少佐はうんうんとうなずいた。

「偵察任務の決行は明後日に行います。必要な機材は、すでに用意してあります」

「了解しました。では、失礼します」

自分は敬礼をやって、執務室を後にしたのだった。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その七

自分は、坂本少佐の案内された道に戻って二式輸送機が停泊している場所までやってきた。すでに木製疾風は荷下ろしされ格納庫へとうつされていたようだ。

大抵、輸送機の発着場所と倉庫は間近になるように作られているので、あたりを見回してそれっぽい場所があるか検分すると、大きな出入り口の奥に発進促成装置が並べられた建物が見つかる。

ふむ、あそこが格納庫のようだな。

どんなものか物見遊山にのんびり歩いて行くと、遠目からはわからなかったが格納庫のすみでストイラカーユニットを整備台にのせてなにやら整備をやっている女性——おそらくウィッチがいた。

「失礼、何をしていますのですか」

自分は、そう彼女に声をかけた。

「ん、ああ、過給器の調整をな。見かけない顔だけど、おたくは？」

リベリオン陸軍の制服をきたウィッチは、作業の手を止めて自分の方を見た。

制服をみる限り、該当する人物は一人しかいない。

シャーロット・イエーガー大尉か。

「失礼しました。本日付でしばらく五〇一に厄介になります。扶桑陸軍少尉、初美あきらであります」

「ああ、今朝のミーティングで隊長がいつていたのはあんたか。えーと、《くノ一の魔女》、だったかな？ あたしは、シャーロット・イエーガー、リベリオン陸軍大尉だ。よろしくな」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

「堅苦しいなあ、もつとくだけた感じでかまわないぜ」

と、笑顔を浮かべながら自分の左肩を叩いた。

ふむ、腕のことは気にしないか。このあたはさすが自由主義と個人主義のリベリアンだな。

初対面の人間に心配されても対応に困るしな。

「わかった。シャーロット、よろしく頼む」

「チツチツチ、あたしのことはシャーリー、と呼んでくれ」

ふむ、シャーリーは別の名前の愛称だった気がするが、本人がそうよんでくれというならやぶさかではない。

「わかったよ、シャーリー。それで、どうして過給器なんてみていたんだ。整備兵に任せればいいじゃないか」

「あたしは機械いじりが好きでね。あたしのユニットはあたしが整備することにしてるんだ。魔力配合を少し調整して、もつと早くならぬいか挑戦してるんだ」

「なるほどな。でも、どうしてそんなに速度を求めてるんだ」

「ボンネビルフラッツって知ってるかい？」

「いや、聞いたことないな」

「リベリオンのボンネビル・ソルトフラッツっていう塩の大地があつてな。毎年八月に、そこでバイクのスピードレースが行われてるんだ。ウィッチになる前、あたしはそこで世界最高速をたたき出した。好きなんだよ、あたしは。速いのが好きなんだ」

「好きならしようがないな」

そう、自分が武術をやっているのも、結局のところ好きだからだ。好きなものは寝食を忘れて取り組みたくなる。

それはどうしようもないことなのだ。

「そういうや、ペリーヌがお前を探してたな。あいつとは知り合いなんだろう？」

「まあ、知り合いではあるが……わかった。ちよつと探してみよう」

考えてみればそうかもな。自分がここに来た表向きの理由もミーティングで知らされてるだろうし、それを知ったペリーヌなら一悶着起こしてもおかしくはないからな。

あいつはああ見えても、友人が傷つくのをひどく恐れる一面がある。

「邪魔したな、シャーリー」

「いいよ、しばらくここに居るんだろ。それなら仲間さ」

そう言つてシャーリーと別れたはいいものの、五〇一基地の地図は手元になし地理も明るくもない。さてどうすればと思索しながら基地内をさまよつていると、包丁で何かを刻んでいる音が聞こえてきた。

到着したのが昼過ぎだったから、おそらく夕食の準備だろう。

ということとは、リネットさんか宮藤さんが料理をしていると言つてとだ。

包丁の音がする場所までくると、大きめの厨房にたどり着いた。

出入り口の横の壁を数回ノックして、

「失礼します」

と、声をかけた。

そこにいたのは、やはり宮藤さんとリネットさんの二人だった。

「あ、初美さん。傷は大丈夫ですか？」

「あきらさん、お久しぶりです」

「宮藤さん、腕は全く問題ないですよ。それからお久しぶりです、リネットさん」

「……あきらさん、その腕」

「これですか。ネウロイにやられたんですよ、詳しいことは後で説明します。それから、ペリーヌが自分を探していたと聞いたのですが、どこにいるかわかりませんか？」

「それなら、自分の部屋で本を読んでいると思います。ペリーヌさんの部屋は……」

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 八の巻 その八

リネットさんからの案内を受けて、自分はペリーヌの部屋の前までやってきていた。

部屋をノックして、

「初美です」

と、告げると、ばたん、と何かを投げ捨てるように置く音がして、ドタバタ足音うるさく扉の前まできて、騒々しくドアが開け放たれた。

「初美さん！ 無事でしたの？」

と、自分の両肩をつかんでがくがくと揺さぶった。自分を見つめる目は若干潤んでいて、もう少しなにか刺激があれば落涙してしまいそうだ。

「あ、ああ、まあ、生きているという意味では無事だな。死んでたら会えない」

「ああもうっ！ そういうことじゃありませんの！ 私、あなたが腕を落としたときいたから気が気ではなかったんですよ！ それなのに初美さんときたら……」

彼女をここまで心配させていたのかと思うと、平気な顔をしている自分がなにやら悪事でも働いてしまった気分になってくる。

「その、すまん」

ペこりと頭を下げる。

「ま、まあいいですわ。つもる話もあります。さ、お入りになつて」
そうして、招かれるままに彼女の部屋へと入室する。

足の高い丸テーブルと椅子がいくつかあって、机が横壁に設置されていた。

ベッドは簡素で、おそらく他の隊員と同じものだろう。

ペリーヌと自分は、その丸テーブルを挟んで向かい合わせに座ると、

「まず何から話そうか」

「腕ですわ。どうしたんですの、一体。あなたほどのウィッチがどうして」

「まあ、まずはそこからだな。腕が落とされたのは、もうかれこれ半月以上前になるか。五〇二との共同作戦で人型ネウロイを一機討ち漏らしたんだが、そいつが何日か後の哨戒任務の時に襲ってきてな。自分の扶桑刀を真似た腕にして、背後からばっさり切り落としてくれたよ」

まるでおのれの腕が落とされでもしたのかと思わせる沈痛な面持ちのペリーヌを見て、自分は落とされるのが当たり前、など考えていた事実を改めようと決めた。

自分のことだけならまだいいが、友人にここまで心配させるものではない。

「すまなかった、ペリーヌ」

「どうして謝りますの?」

「いや、ペリーヌの顔を見て、自分の体や命は自分だけのものではないのだなと実感したんだよ。龍子殿下の時にはそう思わなかったのだな。不思議なものだ」

「あなた、よりにもよって自国の皇女殿下にまで心配をかけたんですのっ☒」

ペリーヌは、素つ頓狂な声を上げて立ち上がる。

「あ、いや、まあ、その、落ち着いて」

自分は、落ち着くようどうどう、とウマを落ち着かせるようなゼスチャーでペリーヌに言ったが、とうの彼女はそんな様子など見せないどころか、さらに鼻息を荒くしてまくし立て始めた。

「これが落ち着いてなんていられませんわっ! あなた、大体にして何事につけても捨て鉢になりすぎではありませんの? あなたが左腕を失ったと聞いたとき、私がどれだけ心配したのかわかってるのですか? 本当にもう少し、自分の体を大切になさいっ!」

まるで母親にでも叱られている気分だ。

肩身を狭くして、うつむいてしまう。

「うるさいぞペリーヌ、何騒いでんだよ。サーニヤが起きちまうだろ」

と、言いながら、ドアを開けて一人の女の子がクレームをいれてきた。銀髪のロングヘアで、透き通るような白い肌の持ち主だ。

「なんですの、エイラさん。ノックぐらいしてください」

ふむ、彼女がエイラ・イルマタル・ユートイライネン中尉か。

「なんだそいつ」

と、エイラはぶつきらぼうに言った。

「初美あきら扶桑陸軍少尉。怪我の治療のために、宮藤さんのところにやってきたウィッチですわ。ミーナ隊長が朝のミーティングの時に言っていましたでしょ」

「寝てたからわかんねーよ。お、左腕ないのか」

これまた、ずいぶんと軽い口調だ。ペリーヌの心配っぷりに比べてドライだが、それがありがたくもある。

「ええ、人型ネウロイにやられました」

と、苦笑交じりに答えた。

「そうか、それで宮藤の魔法目当てにこっちにきたのか。で、腕は治ったのか？」

「あ、はい。それはこの通りに」

左袖をめくって、断ち切られた左腕を見せる。

「おー、こうなるのか。な、さわっていいか？」

「かまいませんよ」

と、言うのと、遠慮なしになでてきた。まだ神経が刺激になれていないので、かなりくすぐったいが、なんとか身をよじるのをこらえる。

「くすぐったいのか？」

「ええ、神経がまだ感覚になれてないので」

「そっか。じゃ、またなー」

言うだけ言って、風のように部屋をでていってしまうエイラ。

「もう、なんなんですかのあの方」

エイラとのやりとりに毒気を抜かれたのか、すっかり落ち着いたペリーヌは、こほんと咳払いを一つすると、

「まあ、そういうわけですから、もう少し自重なさい」

「わかった、わかりました」

自分はそう答えた。

「ところで、佐東准尉は息災か？」

以前、自分が義勇兵としてペリーヌの領地に滞在した折りに、パ・ド・カレーの空域の偵察をやっていた。

そのとき、飲んだくれのウィッチである佐東准尉が居城の庭に落ちて一騒動を起こしたのだが、自分がパ・ド・カレーを離れることになり埋め合わせとして自分の代わりに彼女を偵察をやるよう手配をしたのだ。

「ええ、偵察もしつかりやっていただけてますし、色々助かってますわ。ただ、酒が入ると途端に役立たずになるのは勘弁してほしいですが」

「酒癖は相変わらずか」

「それでも、哨戒任務だけは本当に一級品で、私たちと哨戒していると、常に最初にネウロイを発見してるのですわ」

「まあ、あいつはそれだけが取り柄だからな。いや、役に立っているようではなかった」

などと話していると、ドアがノックされた。

「ペリーヌさん、そろそろお夕飯ですよ」

と、ドアの外から宮藤さんの声が聞こえる。

「わかりましたわ、すぐにいけます。さ、行きましようか」

自分は、ペリーヌと二人で食堂へむかったのだった。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 八の巻 その九

自分は、ペリーヌに連れられて夕食の待つ食堂へとやってきていた。

すでに幾人とは顔合わせをしているが、まだまだ知らないメンツもいる。

ずらりと並んだ五〇一の隊員を前に、自分はミーナに促され自己紹介を始めた。

「自分は扶桑陸軍少尉、初美あきらであります。コールサインは《くノ一の魔女》。本日より短い間ではありますが、五〇一の諸氏とともにロマーニヤの空を護ることになりました。よろしくお願いします」

と言って、頭を下げる。

異口同音に、よろしく、と言葉が返ってきた。

そのまま席に腰掛けて、食事を始める。

ご飯、味噌汁に納豆、ジャガイモの煮つ転がしや葉物野菜の和え物と純和風の食事だ。二式輸送艇にのせられてきた支援物資の一部を使っているものだろうな。

「ねえねえ、初美さあ」

金髪ショートウィッチ——エーリカ・ハルトマンが声をかけてきた。

「左腕のことか？」

「うんうん。痛そうだね、どうしたの？」

「細かいことはともかく、人型ネウロイに切り落とされて、その治療のために宮藤軍曹のお世話になりました」

簡単に答えて、ご飯に醤油を絡めた納豆をかけて口に入れる。

「そうかあ。大変だったんだねえ」などどちつとも感情のこもっていない声で答えながら、食事を始めた。「ほんと、宮藤の扶桑料理はおいしいねえ」

「ねえねえ、シャーリー」

小麦色の肌の少女といっぴいぐらいの年若い女の子が、隣のシャーリーに声をかける。

「ん、どうしたんだ、ルツキーニ」

「《くノ一の魔女》って、どういう意味なの？」

「んー、そうだなあ」

返答に迷い、シャーリーが腕を組んで考えていると、

「くノ一とは、簡単に言えば扶桑の女スパイのことだな。初美は、その中でも名門の一派である戸隠という忍びの技術を受け継ぐ魔女だ」

言葉を詰まらせた彼女の代わりに、坂本少佐が答えた。

「それで、《くノ一の魔女》なんだ。ねえねえ、初美って強いのか？」

「これはまた難しい質問だなあ」

ははは、と乾いた笑いが漏れた。答えるのが困難な問いに頭を抱えて考える。

確かに、武芸者としては強い。

ウィッチとしても、それなりの実力を持っていると云っぴいだらう。

だが、人間としてはどうか。

「強いといえぱ、強い。弱いといえぱ、弱い」

「何いっぴてるかわかんないよお」

「うーん、そうだなあ。マーシャルアーティストとしては、強い。それもとびきりだ。剣の腕前に関してはおそらく坂本少佐よりも強いだらうな」

この台詞を聞いた坂本少佐が、む、と眉を上げる。

講談館剣術の腕前を見ておきたいからな。ちよつとした挑発だ。

「ウィッチとしてもまあ、強いといえるが、自分が理想とする強さから見れば弱いということだ。わかるか？」

自分が理想とする強さと、今手にしている強さの間には大きな差、いや、隔たりがある。この隔絶した隙間を埋めるには、どうすればいいのか。

「むじゅかしすぎてわかんない」

などといっぴて手をバタバタと動かすと、隣のシャーリーが彼女の頭

を撫でた。

「まあ、世間的に見れば強いが、自分の満足できる強さではない、ということだ」

「それで、あきらはいつまでここにいるんだ？」

と、エイラ。

「区切りのいいところまで、としか言えないな」

まあ、自分の任務は今のところ極秘のようだしな。

「そっか。今度サーニャと一緒に夜間哨戒に付き合えよな」

「わかった」

自分はそううなずいて返事をする、冷めないうちに、夕食を口に入れていくのだった。

夕食を終えてから、自分はあてがわれた仮の居室で手荷物の整理を行った後、お湯をいただくことにした。

脱衣所は、扶桑の竹籠が棚に並び、いくつかの籠に着衣が納められていて、坂本少佐曰く、ウィッチ専用にしつらえられものらしいが、いくらなんでも広すぎやしないか？ などと思いつつ、自分も着衣を脱いで折りたたみ、籠に収めて浴室へと向かった。

湯気が浴室を支配し、誰がいるのかまったくわからない。

かけ湯をして、湯船に身を沈める。

心持ちぬるめだが、移動に疲れた体にはそれがちょうどよかった。

「お、誰かきたのか」

シャーリーの声が湯気の向こうから聞こえた。

自分はその声のほうへと湯をかいて進めば、そこにはシャーリーと彼女の豊かな胸に頭を預けて湯船に身を沈めているルツキーニがいた。

「よお、初美かあ」

と、朗らかに微笑んで左手をあげて挨拶してきたので、自分も左腕をあげた。

「なあ、その腕本当に痛くないのか？」

「宮藤軍曹の魔法で直してもらった前までは、たまに存在しない左手の指がかゆくなったり、痛みが走ることもあったんだが、今はもうすつ

かりなくなつたよ。凄いものだな、宮藤軍曹の回復魔法は」

自分は、失つた左手の先を見ながら答える。

「それならよかつた」

「よかつたよかつたー」

と、シャーリーにルツキーニが言った。

「腕を切り落とされたつて話を聞いてから、ペリーヌとかリーネは凄く心配してたんだぜ」

「やはりそうだったか。ペリーヌには絞られたよ」

「ははは、やっぱりそうか。それで、これからどうするんだ？」

声のトーンは変わらないが、何か勘付いているようだ。

自分があちこちでやってきたことを含めて考慮すれば、自分が何か事情を持つてこの基地を訪れた理由ぐらい、ちよつと頭が回る人間ならばわかつてしまふだろう。

「ばれましたか。実は人型ネウロイに操られて、五〇一のスパイに来たんですよ」

などと軽口をよそおつてごまかした。

ふうん、と鼻にかかつた声を出して、

「まあ、言えないならいいさ」

事情があるんだろう、と言ひ、

「ルツキーニ、そろそろ上がろうか」

「うん、あがるあがるーっ」

二人は湯船から出ていき、自分は広い湯船を独り占めにして、ゆったりと入浴を楽しむのだった。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 八の
巻 その十

翌朝の朝食前、自分は適当な広場を見つけて六尺ほどの棒を手に、棒術の修練をしていた。片腕での扱いは困難で、かなり棒術の制限がかけてられているが、それでもできないことはない。

杖術は、突かば槍、払えば薙刀、持たば太刀、杖はかくにも外れざりけり、と言うが、棒術もまた同様で、刃がついていないだけ自由に扱えるので、持ち手の長さを操れば太刀としても使える。

それだけ応用が利く武器で、長さを選ばなければ長めの杖だろうがなんだろうがすぐに見つけられるのも杖術と同じく何かと重宝する術だ。

そうして、片手でも可能な棒術の技術を模索しながら小一時間ほど汗を流していると、木刀を二本携えた坂本少佐がやってきた。

「初美、腕試しといこうか」

「昨晚の誘いに乗ってくるあたり、少佐もまだまだ若いですね」

自分は、笑みを浮かべながら答えた。

「なに、貴様は腕のある奴だと聞いていたからな。誘われなくてもお相手願ったよ」

「侍と噂に名高い坂本少佐だ。期待してますよ」

棒を地面に置き、少佐が投げ渡してきた木刀をキャッチする。

「では……戸隠流忍術免許皆伝初美あきら、一手仕ろうか」

右手で青眼に構える。

「講道館剣術坂本美緒、参る」

自分と坂本は互いに名乗り合い、挨拶代わりに剣先をコツツ、とあわせた。

「せいっー」

刷り上げるように切っ先をあげて額をかち割りに来たのを、木刀のみねで受けてそのまま滑らせ、返す刀で少佐の額に切っ先を当てた。

いくらなんでも、申し合わせたように剣を使うことなんてあり得な

い。どうやら、自分の腕を確かめにきたようだ。
舐められたな。

「まずは一本、ですね」

「凄いな、あっさりと流されて一本取られたのは初めてだ」

「自分の腕を計りにきたのはわかってますよ、少佐。満足ですか？」

一歩後ろに引いて、下段に構えつつ言った。

「わかるか」

と、呑気に言ってきた。

これには、武術家としての自分の矜持をいささか傷つけられた。

視界が血の色に染まったような錯覚を覚え、

「舐めるな！ 講道館の小娘がつー」

気づけば、ありつただけの殺気を込めて怒声を放っていた。

そこらの人間なら、気あたりだけで腰を抜かすだろうが、真正面から受け止めて平然としているあたり、さすがは講道館剣術の師範から直接指導を受けただけはあるか。

「侮ったな！ 貴様の前に立つのは扶桑陸軍初美あきら少尉ではない！ 戸隠流次期宗家、免許皆伝者の初美あきらだぞ！」

一拍おいてかぶりを振り、

「すまなかつた、初美殿。本気で参る」

五行の構えで言う脇構えになり、相対する自分はカールスラント流剣術の雄牛を構える。左半身になって、霞の構えよりも高く柄を頭上にあげ、相手の鼻先に切っ先を向ける構えだ。

視線を誘導し、視野を狭めることができる。

自分を見る坂本の目に殺気が宿った。

そうだ、自分はいつが真剣になったその瞳を見取りたかった。

ぞくりと肌が粟立ち、身震いするこの感覚も久しぶりだ。

これほどの殺気を飛ばせるあたり、坂本もやはり相応の実力はあるのだな。

くくつと喉の奥から自然と笑い声がこぼれる。

「いえあつー」

気合い一閃、そのまま眉間に向けて突きを放つが、坂本はずっと後

ろに下がりがりながら頭を横にふって避け、大きく一步踏み込んで脇に構えた木刀で自分の左脇を叩き切りにきた。

だが、自分はそれをすでによんでいて彼女の動きに合わせて、脇を護るように木刀を立てる。

カツツ、と木刀が打ち合わさる音が響くと同時に、自分は大きく体を沈めて木刀を背負うようにしながら少佐の木刀を滑らせ、受け流して立ち上がりお互い青眼に構えた。

「ああまであおってくれたのだ。よもや卑怯とは言うまいな」

「むしろ嬉しいよ」

自分と坂本はにやりと笑みを浮かべ合う。

「しかし、本当に女の腕力か。私の剣を片手で受けてもまったく握りが揺るがない」

「だからこそその師範代だ。甘く見るなよ」

「心から謝罪しよう——せりやあつ」

加減のない唐竹割りが飛んでくる。

自分は一步踏み込み、木刀を横一文字にして受け止めつつ少し右に軸をずらしつつ坂本の一撃を流し受け、返す刀で面打つが逆風に切り上げてきて、カン、とはじいてきた。

跳ね返された木刀の勢いを殺さず、くるりと回って右胴を切りに行く！

今度は坂本がガツと受け止め面打ちにくるが、またも自分はいいつの木刀を受け流して姿勢を崩させてから袈裟斬りかかり、当たる寸前でびたりと止めた。

坂本は、一筋汗を頬にたらしながら、

「参った」

と、答えた。

「久しぶりにいい汗を流せた。坂本殿には感謝する」

自分は剣を引いて、一步後ろに下がり頭を下げる。

「こちらこそ試す真似をしてすまなかった、初美殿」

彼女も自分と同じように一步下がって頭を下げてきた。

「坂本さああああんっ！」

宮藤の声が聞こえてきた。

「朝食でもできたか。どうやらここまでのようだな」

木刀を返しながら自分が言うのと、

「そのようだな。では行こうか」と、坂本少佐は答え、「朝メシか、宮藤！」

駆けてくる宮藤に手を振って挨拶をした。

「朝ご飯できましたー、あれ？ 初美さんも？」

「まあな、呼び出し感謝する」

そして、自分たちは食堂へと向かうのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その十一

朝食後しばらくして、自分は吹き流しをつけた木製疾風を履き五〇二基地の沿岸上空に浮かんでいた。

右手にオレンジ色に塗装された訓練用のMP40を構え、腰には木刀を携えている。

MG42やホー〇三機関銃は片手で操れはするが、両手持ちと比較すると命中精度は遙かにおちるので、五〇一基地で余っていたMP40を借り受けた。

そして、一〇メートルほど距離を置いた場所にはMG42を両手に携え、同じく吹き流しをつけたバルクホルン大尉が飛んでいて、少し離れた空域にはミーナ中佐と坂本少佐、それにペリーヌ、エーリカが浮かんでいる。

中佐は審判役で三人は見物だ。

「ヨハンナとロスマンに訓練をうけたそうだな、初美中尉」

「二人にはこつてりと絞られましたよ」

自分は、確かに《魔女の一撃》作戦の後ヨハンナ・ウィーゼ大尉から徹底的にしごかれた。

原因は作戦時、作戦隊長であるヨハンナの命令を無視して数多のネウロイを足止めしようとしたことにある。この時の命令違反がどうやら彼女の逆鱗に触れたらしく、懲罰的な意味合いも含めて座学から空戦マニニューバまでたたき込まれるはめになった。

「ヨハンナに仕込まれたその腕、落ちていないか試してやろう」

いやいや、それはさすがにない、と思いたいところだ。

「目にももの見せてやりますよ」

強気で言ったつもりだが、どうやら我知らずと笑みを浮かべていたよう
うで、

「楽しそうだな、中尉」

と、バルクホルン大尉も微笑みながら言葉を返してきた。

彼女もこの模擬戦を楽しみにしていたのだろう。

「大尉も同じようですね」

ふっ、と笑って、

「ヨハンナとロスマンの直弟子だからな。がっかりさせるなよ」

『模擬戦は、先に二勝したほうが勝利とします。お互い、距離を取った後ヘッドオンで交差後直進、十秒経過したら模擬戦開始。ペイント弾が命中するか、刀が吹き流しに触れたら勝ちとします。二人とも、準備はいい？』

ミーナ中佐の声がインカムから聞こえてくる。

自分と大尉はそれなりに距離を取って、

「了解しました。初美、準備はできています」

『バルクホルンだ。合図を頼む』

ミーナ中佐がカウントダウンを開始した。

『5・4・3・2・1・開始っ！』

魔道エンジンに力を込めると、呪符プロペラが轟然と回転して自分の体を直進させると同時に、大尉も自分に向かってきた。

お互い交差時に視線をかわしてすれ違い、一〇秒経過すると自分は体を反転させて上昇しながらバルクホルンがどこにいるのかと視線をさまよわせた。

自分に背を向けた状態で同じように急上昇して、頭をおさえようとしている。

距離はかなり離れていて、おそらく今自分が撃っても当たることはないだろう。

この時ロスマンの言葉が頭をよぎった。

—— 射撃を格闘戦に持ち込むための手段として用いた方がいい。

大尉の進行する場所へ向けて、ダダダッ、と流し打ちをした。

案の定、大尉は上昇をいったんやめて旋回へと切り替えたので、自分はそのまま大尉を視認しながら彼女の頭を押しさえつけ、急降下。木刀を抜いて上段に構えるっ！

「せりゃあっ！」

振り下ろした木刀が吹き流しに触れる寸前、するりと逃げるように

視界からかき消えた。

自分の仕掛けとマニニューバをよんで、バレルロールで回避したのだ。

『狙いはいいが、決め手に欠けるな』

「これで勝てるとは思っていませんよ、大尉」

上昇機動に移行しつつ、大尉を視界に収めようと体を返して空を見上げると、彼女の影は空になかった。

なるほど、太陽の中か。

となれば、そこを中心として背をむけ不規則機動で狙いをそらし続ける。

案の定、自分を狙って火線が二本、飛んでくる。

それで、位置は大体把握した。

MP40を担ぐようにして銃口を太陽に狙いをつけ、流し撃つ。

命中など期待していない。

あくまで威嚇射撃だ。

そこにおまえがいるのはわかっているぞ、という意味表示だ。

急上昇を敢行し、大尉の頭を取ろうと試みたが、今度は彼女が自分の頭を押しさえつけるため、威嚇射撃をしながら降下してくるので、いったん誘うように降下する。

そして、バルクホルン大尉は食らいついてきた！

そのまま、自分は螺旋を描きながら上昇していくが、途中で彼女は自分の意図に気づいて、追跡をやめて垂直上昇へと移行した。

軌道の内側に入って、好位置をとりに来たのだ。

円錐の内側を沿うように上昇していき、頂点にさしかかったところで急降下すると、必然的に自分を追いかけてきた敵は自分に背後を取られる格好になる。

バルクホルンはそれに気がつき、自分の旋回半径の内側についてきたということだ。

「くっ……さすがだな、大尉」

エンジンの出力を上げて体を上向かせ、その勢いを借りて内をついてきた大尉のさらに内を狙うが、バレルロールで自分をオーバー

シュートさせて背後を取りに来た。

宙返りで彼女の背後をつこうとしても、追跡してくるバルクホルンを振り切れなかったため、自分が優速であることを活かしてハイヨーヨーで詰め寄る大尉を追い越させてやり過ぎ、吹き流しを斬りにいく！

「とつたっ！」

気合い一閃、抜刀して吹き流しを見事叩いた。

『なっ！』

『初美中尉の勝利っ！』

バルクホルンの驚きの声とミーナ中佐の宣言が、ほとんど同時にインカムから聞こえてきた。

「取らせていただきましたよ、大尉」

『さすがヨハンナに空戦をたたき込まれただけのことはあるな。だが、次はこうはいかんぞ』

「このまま次も勝たせていただきます」

大尉はどうやら自分を侮っていたらしい。

その後は何度か背後をとるものの吹き流しを木刀で叩くことはかなわず、ものの見事に返り討ちされてしまい、結局二連敗を喫して負けてしまったからだ。

人類最強の四人に引けを取らない技量の持ち主から一度でも勝ちをとれたのだから、ここは満足すべきところだろう。

ともかく、こうして自分と大尉の模擬戦は終了した。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その十二

自分とバルクホルン大尉は、模擬戦のペイント弾や汗で汚れた体を洗うため、シャワーを浴びに来ていた。

三戦やって一勝二敗。スコアが五十に満たない自分がかのヴァイス・フュンフを相手に一勝をもぎ取れたのだから、自分に空戦技術を仕込んでくれたヨハンナ少佐の面目も潰さずにすんだはずだ。

髻のように髪の毛を結んでいる紐を外し、シャワーの栓を軽く回すと、シャワーヘッドから水がこぼれ落ちてきた。

指で温度を確認し、あたたかくなってきたら、全開にして頭からシャワーを浴びる。

訓練の緊張が、汗とともに洗い落とされていくようだ。

「話によると中尉はヨハンナに指導を受けたようだが、ストライカーユニットで行う格闘戦闘の距離感の掴み方は、あいつがやっている教練にはなかったはずだ。どこで学んだか教えてくれないか？」

左隣のブースでシャワーを浴びている大尉が尋ねてきた。

「あれは、正確に言えば空戦技術とはいえませんが」

「ふむ。ではなんだ」

「あの技術の基幹は扶桑武術です」

「扶桑武術？ あー、坂本少佐の剣術のようなか」

講道館剣術とは成り立ちが異なるが、それを口にする必要はないな。

頭からシャワーを浴びながら、

「似たようなものですね。そうした武術の訓練で養われた感覚です」

そう答える。

「習得するには時間がかかりそうだな」

「大尉には必要ありませんし、五〇一の隊員にも無用の技術だと思いませんよ」

バルクホルンは二百機以上のネウロイを撃墜したスーパーエース

だ。

今持っている技術だけで十分に戦えるし、それに戸隠流を学んだとしてもそれを空戦機動として活用する時間が彼女には残っていない。もちろん、生涯をかけるというのなら教授するのもやぶさかではないが、そういうわけでもないだろう。

「そうか。役に立つなら習おうと思ったんだがな」

「簡単に使えるようにはなりませんよ。相応に時間がかかります」

ふむ、と一考した大尉は、

「身につけるにはどれぐらいかかるんだ？」

尋ねてきたということは、習いたいのだろうな。

「そうですね。才能がなくて十年、普通は五年、あつて二年というところでしょうか」

「それだけ時間がかかるなら、習ってもすぐに空戦にはいかせないか。ちなみに訊くが、初美はどれぐらいで身につけたんだ」

「一年です」

手裏剣を実戦で使えるぐらいにまで打てるようになったのがそれぐらいだからな。自在に、と条件がつくともう少し時間がかかったが。

あの武器は対象との距離をまず正確に把握して、その距離に応じた打ち方を選択するか、あるいは打つのに適した重心の手裏剣を選ぶ必要がある。

「天才なんだな、初美は」

「武術に関しては当世一ですよ、自分は」

バルクホルンはこの台詞を聞いて、たいした自信だと言って、

「そうでなければ私から格闘戦で一勝をとるなんてこともできないか。あのハイヨーヨーは見事だったしな」

言葉をつないだ。

「ありがとうございます。当世一のウィッチから褒められるのは、ほまれでしょうね」

「しかしその後はてんで駄目だったな。中尉はもう少し優速時の機動に関して勉強したほうがいい。あれではたとえ速度で勝っていても

やられてしまうぞ」

痛いところを突かれた。

優速時の判断が未熟なのは事実だ。

「ヨハンナ少佐からも詰めめ甘さをなんとかするようには、と言われてはいるんですがね」

超接近戦なら、扶桑刀で確実にとどめをさせるので問題ないのだが、しとめそこなつた時の機動に問題があるのだ。最初の一戦目で勝利をつかむが、二度の敗戦はケツを取られて撃たれたのだ。

どうにも、通り過ぎた後の機動があまりらしく、ネウロイ相手ならともかくウィッチだと簡単に後ろを取られてしまうらしい。

「普通のネウロイがあいてならそれでかまわないんだろうが、人型ネウロイが相手となると、今のままではやられるだろうな」

「大尉っ！」

思わず声を上げてしまう。

自分の目的は、欧州の誰にも話したことはないはずだ。

「腕を落とされた恨み、はらすつもりなんだろう？」

「……はい」

「話は聞いている。人型に腕を落とされたんだろう」

「確かにそうですが……」

「私でも復讐を考える。軍務がなければな」

「でしようね」

「それでだ。しばらくここにおいて訓練をつままないか？　ここには腕利きしかないし、空戦技術の向上は中尉のこれからにとつても重要だ。ミーナからの了解は得ている」

自分の任務自体は、島の偵察移行は決まっていなくて、任務が完了しても、人型ネウロイを探して欧州をあてどなくさまようだけだ。それならここにおいても問題はないだろう。

扶桑に連絡して委細を報告する必要があるが、欧州行脚をやるにしても同じ手間だしな。

パンツ、と両頬を手で叩いて、

「お願いできますか」

「もちろんだ」

翌日早朝、自分はストライカーユニットの倉庫内で、撮影機材を納めたリュックを背負い守り刀の小太刀を腰に差し、ウエストホルダーにはリベリオン軍から提供されているM1917リボルバー、胸のポケットには棒手裏剣を五本携え、増槽をつけた木製疾風を履いて出発準備を整えていた。

昨晚のうちに作ってもらっておいたおむすびを口に放り込んで水筒の麦茶を飲み、一息ついて、

「こちら《くノ一の魔女》、偵察任務による発進許可を願う」

管制塔に発進許可を求めた。

マルタ島への偵察任務のために発進だ。前日の内に、詳しいミーティングは終わっていて、発進手続きなどは普通の偵察任務と同様に行うことになっている。

『こちら管制塔、《くノ一の魔女》の発進を許可する』

「オン・マリシエイ・ソワカ。《くノ一の魔女》初美あきら、発進する」
エンジンの出力を上げると、梵字が描かれた大きく青い魔法陣が床に浮かび上がり、発進促成装置からユニットを開放した。

馬にでも蹴り飛ばされたかのような衝撃とともに、開け放たれている出入り口から飛び出してふわりと空へと舞い上がり、マルタ島へと飛んでいく。

推測航法は以前習得したので、多少航路を外れたとしても問題はなく、マルタ島へ巡航速度でのんびりと飛行する。

『初美さん、聞こえる？』

基地を飛び立つてから二十分ほどたったコロ、インカムから一瞬のノイズの後にミーナ中佐の声が耳に入る。

「感度良好です。初美は現在、マルタ島へ向けて巡航速度で飛行中。なにかありましたか、中佐」

『昨日ミーティングした通り、初美さんにはマルタ島を覆う要塞型ネウロイの内部に侵入し、偵察をやってもらっただけど、わかっているかね？ くれぐれも無茶はしないように』

「了解しますよ」

自分はこれまでの作戦で無茶しかしていないからな。案の定釘を刺しに来たか。

『それから、昨日トウルデーから聞いたのだけど、訓練目的でしばらく五〇一に滞在してくれるの?』

トウルデーとは、バルクホルン大尉の愛称だ。

「ええ。昨日の大尉との模擬戦で自分の空戦技術が未熟であることを指摘され、誘われたので」

『よかった。助かるわ、中尉』

「いつまで滞在できるかわかりませんが、よろしくお願い——」

マルタ島までもう少しかかるのだが、進路上にネウロイの機影が二つ確認できた。

『どうしたの?』

「偵察型ネウロイです。《迷彩》を使います。しばらく通信ができなくなります」

『わかったわ、気をつけてね』

「了解」

《迷彩》を使用すると、インカムからはホワイトノイズが聞こえてくる。

「さて、どう相手にするか」

腰に下げた守り刀に手をかけて、上昇を開始した。

偵察型のネウロイは、特に問題なく簡単に撃墜できた。

降下して守り刀でネウロイを切り裂き、シヤンデルで残り一機のケツをとってそのまま魔法力を込めた手裏剣を打って終了だ。偵察型程度なら、《迷彩》を使用した自分の敵ではなく、何機いようとも無傷で撃墜することなどたやすい。

偵察型はコアを持たない。

コアの有無がどうしてネウロイの強さに関わっているのかわからないが、行動パターンも限られていて行動を間違えなければ撃破されることはない上に、自分には《迷彩》がある。

「こちら初美、偵察型ネウロイ二機撃破」

自分は、撃墜後、マルタ島へむけての飛行を再開し、インカムを通

じて連絡を入れる。

『お疲れ様、初美さん』

ミーナ中佐が受信したようだ。

『そろそろ無線の受信範囲外になります。いいですか、絶対に無理はしないように。偵察が無理だと判断されたなら、任務の達成、未達にかかわらず帰投しなさい。これは絶対に守ってもらいます』

釘を刺されたな。

「努力する」

無茶をせずにどうにかなるならやらないのだが、どうしてかいつも無茶をする状況に陥ってしまう。

『はあ……これだから扶桑人は』今、なんだか凄い侮辱をされた気がする。『頼みましたよ、初美さん』

「わかった、無茶はしない」

『それでは、作戦の成功を祈っています』

「感謝する。通信を終了する」

そう告げて、自分は速度を上げた。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その十三

マルタ島上空、自分は《迷彩》を用いて浮かんでいた。

これから島を包む要塞型ネウロイの内部へと侵入し、写真をとる。それが今回の作戦内容だ。

ヴアラモ島の時と同じく人型ネウロイは中にいるだろうし、ウィッチたちを守るために自分が一人で奴らを撃破する。

問題は、やり方だ。

奴らをネウロイとして扱っていたが、人間としてあいつらを捉えなおそう。

考え方や心構え、戦い方を根本から変えるのだ。

奴らはネウロイではない。

人間と考え、彼らを暗殺する。となれば、空戦機動は必要ない。

場所と状況が重要だ。

「さて、いくか」

方針を定めた自分は、半球状の装甲側、海面ぎりぎりまで降下して自分が入り込める隙間があるか確認した。

装甲はどうやら五メートル以上の隙間を空けて浮かんでいるようで、これなら十分に中へと潜り込める。

そのまま、ゆっくりと中へ飛行する。

内部はヴアラモ島のネウロイと同じく頂点部にコアが浮かび、正方形のネウロイがかなりの数浮遊していた。

「何もここまでの島と同じじゃなくてもいいだろうに」

人型ネウロイが二機、自分を見つけて飛んできた。

舌打ちして要塞外へと飛び出して増槽を投下し、すぐに上昇して外壁に張り付いて出方を待つ。

一機、もどきが現れて、自分を探しているようだ。

そしてもう一機要塞型から姿を見せた瞬間、自分は急降下して背中から守り刀を突き立てる！

怪鳥の如き声と同時に人型は崩壊し、白く輝く結晶のような破片が散らばるが、同時に自分から距離をとろうと動き始めた残りの一体は、両腕から熱線を放つ。

だが、自分は動きの起こりから狙いを察知し、よけるために身を屈めてうまく回避できたものの、リュックをえぐられてカメラなどの撮影機材は消滅してしまった。

「ちっー！」

舌打ちして小太刀を鞘に収め、ホルスターからリボルバーを抜き放ち、全弾ネウロイへ向けて撃つ！

距離にして十メートル。拳銃弾が当たるギリギリの距離だが、弾丸はなんとか右肩と左足に命中し、動きが鈍った。

その刹那を見逃さず、リボルバーを捨てて手裏剣を二本、魔力をこめながらコアの存在する胸部へと抜き打つ！

カカツ、と二本とも胸の中心に突き刺さり手裏剣はコアへと到達した。人型の体表に白く輝くヒビが走り、みじんに砕け落ちた。

「ふう……」

人型ネウロイをネウロイとして扱うのをやめ、人間として捉え暗殺した。

殺すには、戦闘機動など無用だ。

それは、くノ一として長年鍛えてきた技術だ。

常にこのやり方で対応できるわけではないが、何かしら障害物が存在する場所であるならば十分に応用できるのは、今回の一件ではつきりしただろう。

「しかし、カメラがなくなったのは痛いな。まあ、内部状況はヴァラモとほとんど変わらんから絵にすれば問題はないだろう」

なんなら、《迷彩》を使ったままネウロイのコアを破壊してもいいのだが、偵察が絶対命令で、それ以上のことを行う許可は出していない。「戻るか」

帰投するための燃料も心許ない。

急いで基地へと帰還するのだった。

基地に帰投し、坂本少佐とミーナ中佐へマルタ島で起きたことを口

頭で説明し、見た状況を簡単な絵にしたためた。

なにより二人を何より驚かせたのは、人型ネウロイ二機の撃破だ。

「ほ、本当なの？ もどき二機をあなた一人で？」

椅子に座っていた中佐が、机を叩くように手を置いて立ち上がる。

「はい、撃破しました」

「どうやったんだ？」

坂本少佐は、若干食い込み気味に尋ねてきた。

「暗殺ですよ。環境を利用して有利な状態で不意を打ち、相手を不利な状況におとしいれ、対応される前に殺す。自分は戸隠流忍術の師範代で、忍術には暗殺術も含まれていますから、簡単とまではいいませんが難しいことでもありません」

「暗殺、か。我々普通のウィッチには不可能だな」

「そうね、初美さんじゃなければできないようね」

ふむ、と腕を組んで眼帯の少佐は呟くように言い、ミーナが彼女の意見に同意しながら椅子に腰を下ろす。

「それで、マルタ島の内部はこの絵の状態だったわけね」

「ええ、大きさ以外はヴァラモ島の要塞型ネウロイと全く同じでした。自分なら、そのまま要塞型ネウロイを破壊できましたが、命令には撃破が含まれていないのでコアの破壊は行いません。それでよかったですよね」

「かまいません。あのネウロイに関しては、西部方面統合軍司令部よりある作戦の決行を命じられています」

「ある作戦？」

自分は首をかしげて尋ねた。

きな臭い匂い、とまではいかないものの、やはり何かいやな気配は感じる。

「第三二統合作戦飛行隊、アフリカのマルセイユ大尉とハルトマン中尉の合同作戦です」

「ティナとの、ですか？」

一瞬耳を疑ったが、司令部の事情もあるのだろう。

自分が、マルセイユ大尉のことを愛称で言ったものだから、二人と

も一瞬驚いた表情を見せたが、

「そうか、初美はアフリカにも行ったんだったな」

坂本少佐が、自分の経歴を記憶していたのか、自身を納得させるように呟いた。

「ええ、自分はそこで初めて人型と遭遇しました。奴らとはその頃からの因縁です。それで、作戦内容は」

本来なら、二人が自分に作戦内容を話す義務はないだろうが、前段階の偵察任務を成功させたのだから、それぐらいなら教えてくれるだろう。

「扶桑海軍の伊四〇〇型潜水艦でマルセイユ大尉とハルトマン中尉を輸送、ネウロイ内部に潜入し、二人でこれを撃破します」

「伊号ですか。我が国もマルタ島奪還には力を入れているようですね」

伊四〇〇号は、扶桑海軍が製造した最新鋭の潜水艦と聞いている。

確か、二名のウィッチを運搬、発進させることができる超大型の潜水空母で、地球を一周半移動する航続距離を持っているという。

海軍の虎の子だろうに、使用許可がおりたな。というか、よく地中海近海を航行していたものだ。

「知っているか。さすがはくノ一だな」

「恐縮です。それで、ティナ——えーと、マルセイユ大尉はいつ頃到着するんですか？」

「明日、よ」

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞・零

初美あきらは、齡（よわい）十二にして戸隠流忍術の師範代であった。

それは彼女が武術の才に長けていることを意味している。

戸隠流の道場では、二十歳をこえようかという大の男を投げ飛ばし、墓肌（ひきはだ）竹刀で打ち据えてきた。手裏剣を打てば百発百中、弓ならば矢の筈（はず）（矢の矢尻とは反対の部分）に矢が当たる継ぎ矢もたびたびおきたほどだ。

そんな彼女は、師匠——高杉寿庵に認められ内弟子となるのに半年、そこからは忍者となるための技術を徹底的にたたき込まれ、一年とかからずに師範代へと技量をあげていた。

最後の忍びとも呼ばれ、天賦の才をほしいままにした師匠をしてかなわないと言わしめる初美は、高杉とかねてより付き合いの深かった中野学校校長より武術教師の招聘を受け、彼のかわりに同校に教授として赴くことになる。

その初美の運命の日、すなわちウィッチに目覚めたその日も、彼女は中野学校で武術教練に励んでいた。

「そうだ。相手が一本背負いを書けてきたときには、反対側の手で相手の顎を押し上げ、そのままとられた腕に巻き込むようにして後ろに投げる」

「二はいっ！二」

学生たち——全員、二十歳をこえた男性ばかりである——を前に、初美は幼い声を張り上げて説明する。彼らの目には彼女を幼女だからと馬鹿にした様子などみじんもない。

目の前の少女が自分よりも強く、多人数を相手にしてもひるむことなく投げ飛ばし、とどめを刺す實力を持っていることを身をもって体験しているのだから当然だ。

ことの始めはこうである。

初美が武術を教授するために陸軍中野学校へ初めて教練を行うためにやってきた時、学生たちは目の前の彼女の實力を甘く見て高をくく

り、せせら笑った。

あの最後の忍者の高杉寿庵がよこした師範代が年端も行かぬ木っ端のガキかと。早くも耄（もう）碌（ろく）したかと高笑いした者もいた。

もちろん、彼女のことを侮らず、神妙な面持ちで迎えている学生もいるにはいた。あの高杉寿庵が師範代と送り出してきた人間なのだ。見た目にとらわれてはならない、と認識した。

だが、初美を軽んじた学生はそんな彼らをも馬鹿にしたように笑った。

そして、それを聞いた初美は無表情にこう言い放つ。

「今笑った奴、相手をしてやるからかかってこい」

この言葉が彼らの怒りに火をつける。

雪崩のように初美へ襲いかかっていく学生たちを、一五〇センチにも満たない少女はくるくると駒のように回って彼らをいなした。

全員が足を突っ掛けながら振り返れば、初美は年相応に可愛らしくあつかんべえ、と舌を出した。

これが学生たちのしやくにさわった。

今度は初美を取り囲んでさながら小さな獲物に群がる野犬のごとく襲いかかる。

だが、そこから先は初美の一人舞台だった。

押し寄せる学生たちを投げ打ち、倒し、怒りにまかせ本気で蹴ってきた足を取ってすくい投げる。そうして十分もかからずに全員が疲労困憊で床に倒れ伏した時、ようやく自分たちが侮った少女が、桁違いの実力を持った達人であることを理解した。

こんな事情もあって、学生たちは彼女の指導を真面目に聞いているのだ。

「本日の教練はこれで終了とする！」

初美がそう言うと、学生たちは列を作り、ありがとうございました、と口をそろえて言い、頭を下げるのだった。

初美は、衣服などが入った鞆片手に夕暮れ時の赤い空の元、中野学校を出て門の前で一人車を待っていた。

道場のある千葉県野田まではかなりの距離があり、車でざつと二時間近くかかるため、普段は中野学校の寮で寝食をとっていた。だが、翌日は二週間に一度道場に顔を出して中野学校での様子や、自身の稽古のために道場へ顔を出す日だったので、前日のうちに戻るため車での送迎を陸軍に依頼していた。

十分ほど待っているところがね四起が一台、彼女の前に止まって、「初美さん、お待たせしました」

運転手の初雁（はつかり）恒夫陸軍二等兵が降りてきて笑顔で言った。細身ながらもなかり体をきたえこんだ男で、まだ二十歳に満たない年若い兵士だ。初美は彼に武術を教え込んだらどれほどの腕前になるのだろうか、と常日頃から想像していた。

「いえ、こちらこそ送迎、感謝します」

と、答えて、初雁が開けてくれた後部ドアから車内に乗り込んだ。ばたん、と閉められ、二等兵は運転席に戻ると、早速車を発進させる。

「今週はいかがでしたか」

ガタガタと揺れる車内、初雁は陽気に尋ねてきた。

「柔術を主に教練しましたが、皆さんよく話を聞いてくれて、大過なく終わりました」

「そうですね、そりやあよかった。あつしもね、柔術ってんですか？

興味はあるんですがなにせ主計課の冷や飯食らいでしてねえ。なかなか教えを請うわけにもいかんのですわ。なにせ学もない、家も貧乏、おまけに暇もないのないうづくしでしてね」

などと明るく笑いながら饒舌に語った。彼は、初めて会ったとき初美を子供扱いせず、丁重に扱った男性の一人だった。

初雁は、初美を送迎して五回目になる。それだけ送迎すれば彼女に對して気心が知れてくるのも当然だ。会った当初は腫れ物に触るような扱いだったが、前回あたりから笑い話などを交えながら会話を楽しむようになった。

「じゃあ、今日道場についたら軽く修練でもしてみますか？」

と、初美は軽い気持ちで誘ってみた。

「お、教えていただけませんか？ カネなんてありませんぜ」
「安心してください、お金なんて取りませんよ。教えるのもほんのさ
わりです」

「もちろんでさあ、それでかまいやせん」

初美の提案に、初雁は即答する。

「それなら、今日から始めましょう。どうせ明日の送迎のために、野田
に泊まるのでしよう」

「ええ、是非。いやあ、ありがてえなあ」

それから目的地までの二時間、二人は他愛ない会話を交わしながら
過ごした。

道場は、野田から少し離れた場所にあり、林の中の砂利道をガタガ
タと揺られながら向かうことになる。

そして、あと十分もすれば道場に到着するそのときだった。

「しかし、十月ともなると、夜が更けるのも早くなりやしたなあ」

「本当に。空気が冷たくなるのも早くなったようで、若干肌寒いです
ね」

などと、二人が雑談をしていると、ヘッドライトに照らされた黒い
塊が初雁の目にうつった。

緩やかにブレーキを踏む。

じやりじやり、と砂利を踏む音が響く。

「なんだありやあ」

「どうしました？」

「いえ、道の先に黒い何かがでてきやしてね。ちよつと待つてくだせ
え」

身を乗り出して、正体を見極めようと目をこらす初雁二等兵。

後部座席に乗っている初美が、身を乗り出して道の先を見ると、そ
の黒い塊はのそりと動き出して、遠吠えをあげる。

熊の声だ。

「ちよつと、熊じゃないですかあれ」

「そうですね。切り返して逃げるとしやしよう」

少しばかり切羽詰まった様子の中雁は、慌ててギアをバックに入れ

てアクセルを拭かそうとするが、車体があくんと震えて後進せず止まってしまうた。

「こ、こんな時にエンスト!」

初雁は、慌てて携帯していた十四年式拳銃を抜いてマガジンを挿入、ボルトを引いた。

「初雁さん、熊相手に拳銃弾では相手になりません。軍刀を貸してください」

固唾を呑みながら、初美は二等兵に言った。

「しかし初美さん!」

「いいから早く貸してください。刀ならまだ歯が立ちます」

「わかりました。でも、無理はしないでください」

初美は、ゆっくりと車から降りて車の前に立つと手渡された軍刀を構える。

戸隠流忍術の師範代たる初美といえど、熊を相手にしたことなど一度もない。

彼女の腕が、軍刀が、果たして熊の分厚い毛皮を切り裂きけるのか。少しづつ、すり足で近づく初美にあわせて、熊はずしん、と地面を踏みならしながら歩み寄る。

「いえあああああつ!!」

叫び声を上げ、猿のような跳躍を見せて飛びかかる。

「グオッ!」

立ち上がって、横薙ぎに右腕を振るってくるのを空中でとっさに刀で防御すると、巻き込まれるように体が持っていかれ、背中から地面にたたきつけられる。

「がはっ!」

圧力で胸が潰され、肺の中の空気が強制的に吐き出された。

ごろごろと転がり、距離をとりながら立ち上がる。

「げはっ、がはっ」

胸を押さえてむせる。

「初美さんっ!」

車から出てきた初雁が、南部十四年式を構えて三発撃った。一発が

立ち上がった熊の右肩あたりに命中するが、八ミリ口径では熊の毛皮にとつて豆鉄砲だ。

「ありがたいっ！」

踏み込んで、逆風に切り上げようとするが熊は機敏だ。左腕をたたき下ろしてきたので、踏鞴を踏んでしまい爪が額をかすめた。ぷしゅつと血が噴き出し、顔が血で染まる。結局熊の懐に入ることはかなわず、またも後ろに下がる。

血が、左目に入って視界が悪くなる。

狭くなつた視界に、木の枝に小さな動物が顔を出してる様子が入つた。

「モモンガかムササビか」

初美は、全身から力を抜いた。緊張しては、技もろくに出せない。

「いやあああああああつ！」

そうして声を上げ、刀を青眼に構えて前のめりに足を進めた。

熊も、恐ろしい速度で両腕を振り下ろしてくる。

腕が彼女の頭をたたき落とそうとするその刹那、初美を見ていたモモンガが飛んできて、彼女の臀部に手を触れる！

青い輝きが夜道を照らす。

「初美さんっ！」

突然の青い光に視界を奪われたのか、腕で目を隠しながら初雁が叫んだ。

「くっ！」

自分の中に生まれる不可思議な力が、青光を伴ってあふれ出る。

熊はそれに驚き、後ろに下がった。

ぷるん、とモモンガの太く長い尻尾がお尻から弾むように出てきて、丸い耳が頭に生えてくる。

「これならっ！」初美は、刀を構え直し、「くるか！　くるなら叩き切るっ！」

と、熊をにらみながら宣言すると、四つ足の獣は後ずさりどこかへと走り去ってしまった。

しばし呆然とした後、からん、と軍刀を墜としてその場にへたりこんでしまう。

「初美さん、その耳と尻尾……」

初雁はそばに駆け寄ると、彼女に生えてきた耳と尻尾に目を奪われた。

ふさふさの毛皮に包まれた耳と尻尾は、明らかにモモンガのそれだ。

「あ、ああ……どうしよう。私、魔女（ウィッチ）になっちゃった」

初美は、年相応の感情を見せながら半泣きになって初雁を見上げたのだった。

初美は初雁とともに無事エンジンがかかった車で道場へと向かう。はえてしまった尻尾も耳もしまい方がわからないのでそのまま、道中にもふもふの尻尾を不安げに毛繕いしながら無言で車に揺られていた。

初雁も彼女の様子を見て雑談をするわけもなく、沈黙を保ったまま車を運転する。道場まではそう遠くなく、十分とかならずに道場に到着した。

道場の門前に車を横付けすると、初美はよろよろ車を降りて、

「本日は送迎、ありがとうございます。明日もよろしくお願いします」

と、頭を下げる。

「まあ、シヨックかもしれないませんが、そう気いおとさんでください」

「はい……」

うなだれながら返事をする、初雁は車を出して野田へと車をむけた。

「はあ」

ため息をつきながら、道場の門をくぐって庭へと続く道を進み、師匠が住む住居の勝手口へと向かった。

勝手口はドアノブ付きのドアで、薄い戸板がみすぼらしかった。

こんこん、とノックして、

「師匠、ただいま戻りました」

ドアを開けると細い廊下が続き、左手に障子が並んでいる。

からり、障子が開いて、紺色の作務衣を着た細面な壮年が顔をのぞかせた。

高杉寿庵。初美あきらの師匠であり、戸隠流の宗家でもある。

「よう、かえつ……」初美の様子を見て一瞬言葉を失い、「お、おう、あきら。どうしたその尻尾と耳は」

「簡単に説明しますと、ちよつと離れたところで熊に襲われてモモンガが助けてくれて、魔女（ウィッチ）になりました」

「ふぎけてそんな格好をしていた訳ではないのだよなあ。まあ、こつちきて炬燵にでも入れ。外は寒かろう」

「失礼します」

頭を下げて師匠の家にあがると、招かれるまま居間へと入り掘り炬燵に足を入れる。

「それで、どうなんだ。しつぽとかしまえねえのか？」

「私がウィッチになるなんて予想もしてなかったので、情報もなく」

「ふむ……ちよい待ってな」

炬燵から出ると、廊下にある壁掛け電話を手にとってどこかに電話をかけ始めた。

「いつのまに電話なんてついたんだ？」

首をかしげる初美。彼女が住み込みで鍛練をつんでいたときにはなかったはずだ。

「おう。川俣んとこつないでくれ」

——川俣？ 少将のところか？

廊下から漏れてくる師匠の声を聞いて、電話相手が誰かを推測する。

「ん、ああ、すまねえな、こんな夜遅くに。どうだい、うちのあきらは。ほう、ほう、いや、貴様にちよいと聞きたいことがあつてな。ああ、魔女についてちよつとな。いや、まあそうなんだが。あきらが魔女になつてな。ああ。それでちよいと学校のほう休ませてほしいんだ。馬鹿いえ、そんなんじゃないよ。じゃあな——つーわけであきら、おめえしばらく中野に行かねえでいいぞ」

高杉は電話を終えると、なんでもないように初美に言った。顎をかきながら、居間に戻り部屋の片隅にある木箱からミカンを何個か手に取って、

「まあ、その耳と尻尾も、そのうち引っ込むだろう。いちいち気にする必要はねえわな。ほれ、食いな」

ミカンを三個ほど初美を見ずに投げ渡すと、慌てて出した彼女のちいさな手の上にすべておさまった。

「師匠——」

「あきら、貴様が気に病むこたあねえ。だいたいだ、貴様が悪いわけでもなんでもねえ。足かせでもねえ。ちよいと人より力が強くなっただけだ。魔女になったからといって、軍に入らなきゃならねえわけでもねえからな。まあ、落ち着くまではのんびりしとけつてことだ。おらあ寝るぜ」

わざとらしい大あくびをしながら、初美の師匠は自分の寝室へと歩いていった。

「師匠……」

初美はそう呟いて、ミカンの皮をむき始めたのだった。

翌日、初美は炬燵の中で目を覚ました。

耳と尻尾はいつの間にかなくなっており、それだけでかなり心は落ち着いた。

やはり、自分のものではない何かが生えているのは精神的によろしくない。

炬燵の上にはご飯とめざしが二匹、それに漬物ののつた皿が置かれている。師匠が用意してくれていたらしい。

「いただきます」

手を合わせて一礼し、ご飯に箸をつけた。

米は若干固めに炊かれているが、これは高杉曰くよく噛んで咬合力を鍛えるのが目的とのことだ。

「おう、起きたか。耳と尻尾は引っ込んだようだな」

縁側の障子が開いて、縁側に面している裏庭で稽古をしていた高杉が声をかけてきた。

「あ、はい、師匠。昨晩はお見苦しいところをお目にかけて申し訳ありませんでした」

箸を置いて姿勢をただし、頭を下げる。

「いやなに、きにすんな。普段から大人びてた貴様が、年相応にしおらしくしているのなんざめつたに見れねえからな。それでチャラだ」

「趣味が悪いですね、師匠」

「そう言われたくないなら、日頃から子供らしくしてろってことだな。軍人相手になまってないか試してやる。こい」

「朝ご飯食べてる途中なんですがね」

ため息つきながら炬燵から離れて、素足のまま庭に出て、対峙する。二人の身長差はおよそ三十センチ。初美にとってはこの背丈の差こそが大事だった。この差に勝機を見いだすのだ。

「わかってるな？」

「常在戦場。どこにいようとなにをしていようと、常に戦場にいると心得よ」

「そうだ。ゆくぞ」

ぬるり、と高杉の体が動いて、上体が倒れるように初美の頭、眼窩に親指をかけようとしてくるのを、左腕で受けながら懐へ入り込み、みぞおちへ肘を使った体当たりを行う。

高杉はそれをうけ後ろに転がりながら初美の胸を蟹挟みにして、そのまま後ろに倒れ込みつつ彼女の首を脇に抱えるようにした。

技が決まった段階で、師匠は初美を解放して立ち上がる。

今度は初美が腕をあげて両肩をつかみ、右足を刈ろうとするところを、高杉は左手を脇の下から差し込んで腕を絡め、足下に頭がおちるように転がす。

そうやって、何度か組み手を繰り返し、お互い上がってきた息を整える。

「なまっていたかと思ったが、なかなかどうして、一人稽古でも頑張っていたわけか」

「免許皆伝をいただいたのですから、腕を廃らせるわけにはまいりません」

「内弟子になって、貴様だけが俺の指導をすべてこなしたからな。そうあつてもらわねば教えた甲斐がないというものだ。メシ食えメシ」初美が言われたとおり居間にもどつて食事を再開したのを傍目に見ながら、高杉は縁側に座つて言い始めた。

「早朝、貴様が魔女になつたことを知つた川俣の野郎が、改めて電話をかけてきてな。東部第三三部隊に所属させたいと言ひ出してきた。ウィッチとして欧州に潜り込み、情報を送つてほしいんだとよ。間者を何人かはむこうに行かせているが、ウィッチは未だにいないから、学校としてはなんととしても正式に東部第三三部隊に所属してほしい、ということだそうだ」

「私が……ですか？　まだ魔女になつたばかりで右も左もわからないのにな？」

「そうだ。適性をみてからだだが、空戦は特別に扶桑海事変で活躍した大ベテランの江藤敏子元中佐を招聘、陸戦は西泉（にしいずみ）童子大尉を教官に当てるらしい。速成教育の後、少尉に任官、欧州へ派遣する」

「空と陸つて、どういうことですか？」

「できるならば、貴様には陸と空両方のウィッチの技能を学んでほしいそうだ」

「はあ……」

あまりの突拍子もない話に、初美はきよとんとしたままだ。我がことのように感じられないらしい。

「最終的な判断は貴様に任せるが、個人的にはウィッチとして欧州に行つてほしいと思つている」

「どうして、ですか？」

「見聞を広め、ネウロイとの戦争がどういうものなのか、人を救ふことの意味を肌で体験し、人として成長してほしい。戦場だ。目前で人が死ぬ身もあるだろう。貴様が死ぬことだつて考えられる。そこは戦場だから当然だろう。しかし、俺は生き延びるための術（すべ）を徹底的にたたき込んできたつもりだ。違うか？」

「確かにその通りですが」

言葉を失う初美。

それに、これまで彼女に対して何も望まなかった師匠が、初めてそうあってくれと願った言葉だ。

「わかりました。師匠の願いを叶えましょう」

最後のご飯粒を一つ、口に運んでからそう答えたのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その十四

翌日、自分は早朝、蒼天の下偵察任務についていた。

前日の人型ネウロイと行われた戦闘では、ストライカーユニットにほとんど負担をかけていないので、魔道エンジンの整備もチェックだけで済んだから、自分から買って出たのだが、ただ偵察に出たわけではない。

目的があつた。

それは――

「こちら《くノ一の魔女》、加東圭子少佐、応答願います」

インカムをオンにして呼びかけた。

自分は、アフリカよりやってきたケイとティナを出迎えた。

そろそろ、彼女たちを乗せたカールスラント製の輸送機、JU五二が通信圏内に入っているはずだ。

少ししてノイズが混ざり、

『こちらケイ。久しぶりね、アキラ』

加東少佐の応答がきた。

「お久しぶりです、ケイ。マルタ島の露払いは済ませておきましたよ」

『ミーナ中佐から報告を受けてるわ、人型ネウロイが出たそうね』

「ええ、二機出現しましたが、問題なく撃墜できました」

と、会話していると、空の向こうに黒い点が見えた。ふむ、あれが二人が乗ってきたJU五二だな。

「ただいま、そちらの機影を確認しました。これより五〇一基地までエスコートを行います」

『了解したわ。ありがとう、アキラ』

増速してすれ違い、反転してはるばるアフリカよりやってきた輸送機の右に並ぶと、窓からケイとマルセイユの顔が見えた。

手を振って挨拶をするものの、左前腕部がないのを失念していた。

『アキラ、お前左腕』

マルセイユが驚きの声で尋ねてきた。

「詳しい話はさておいて、人型に切り落とされたんだ。宮藤軍曹の治癒魔法で、今は何の問題もない」

『問題もないってお前』

泰然自若がモットーとも言える大尉が、驚きとあきれがミックスされた声音で言った。

「自分はシノビであり武術家だ。腕や脚の一本ぐらいいなくなる覚悟はできていた。日常生活は全く問題なくおこなっているし、ネウロイを倒すのにも苦労はない。だから心配してくれるのはありがたいが大丈夫だ」

と言ってはみたものの、傍目から見ればそう思えぬだろうな。

『しかし、アキラ』『テイナ、本人が問題ないというのだから問題ないのよ。それで、マルタ島のネウロイはどうなの』

と、ケイが言い募ろうとするマルセイユを押さえて尋ねてきた。

「詳しくは基地についてミーナ中佐から直接聞くといいだろう。ただ、テイナならば手こずりはするだろうが、一人でも撃破可能だな」
『それをロツテで攻略させるとか、総司令部もずいぶんと暇なことを考えるもんだ』

あきれ気味に大尉。

「マルタ島救出作戦を宣伝にしたいのだろう。戦費は常にカツカツで、集める手段はどれだけあってもたりないのが現実だからな」

『せちがらいな』

「世の中そんなものだ。大体戦費がなければストームウィッチーズも干上がってしまうからな」

『違うわね』からからと笑うケイ。『そういうわけだからしっかり頼むわ、テイナ』

『わかったよ』

マルセイユは慥然と答える。

インカムから、ざっとノイズ音が入った。

どうやら、五〇一基地の通信範囲にきたらしい。

連絡はJU五二のパイロットがやっているだろう。

だから、自分が基地の管制と通信する必要はないだろう。

「さて、そろそろ到着だな。エスコートは終了だ。自分はこれより偵察任務に戻る」

『了解したわ、アキラ。また会いましょう』

「久しぶりに二人の顔を見て嬉しかったよ」

『こつちこそ、お前の元気な顔を見られてほっとしたさ。またな』

自分は、ロールしながら輸送機の上を越えて、航路を西へと向けたのだった。

「それで、どうしてアキラは左腕をなくしたの？」

自分が事務所で偵察任務の報告書類を書いているところに、ケイがやってくるや否や、そう尋ねてきたのは昼食前の時間だった。

そろそろ食事でもと思っていたのだが、ケイのずいぶんと思い詰めた顔を見て、それを諦めることにした。

「やっぱり気になりますか」

「当然よ。ちよつとの間でも一緒に戦った仲だもの」

自分は、軽くため息をついてこの成り行き——五〇二部隊での経緯について簡単に語って、油断が原因で左腕を喪失したことを説明した。

その間中、加東さんは自分の説明を、メモ書きしつつ何も言葉を差し挟まずに聞いている。彼女は軍に復帰するまでは記者をしていたらしいから、自分の経験談も何かのネタににできるしれない、ということなんだろう。

「というわけで、自分はこうして隻腕になってしまった」

「そうだったのね。苦労はないの？」

「あるといえばあるが、おおむね問題はないかな。これでも忍者だ、片手になったときの訓練も怠ってはいなかったのが功を奏した。まあ、左手で箸を使う訓練もやっていただけだな」

失ったのが左腕だったのだから、その訓練は無駄だったわけだが。

片手に機関銃、片手に守り刀の二刀流ができないのは正直なところ厳しいものがあるのは事実なので、ここは講談よろしく、右腕を仕込み刀にしてしまおうか。

「それで、どうして片腕を失っても欧州に戻ってきたの？ そんな状態なら、勇退も許されるでしょう」

「確かにそうだな」自分は一息ついて、「端的に言えば、ウィッチを守るのは、自分だけだから、かな」

「守れるって、人型ネウロイからってこと？」

小さくうなずいて、

「自分は片腕を失ったが、それでも人型を洗脳の危険なく倒せるのは、ウィッチ多しといえど、今のところ奴らの驚異からウィッチ達を守れるのは、自分しかない。それなら、自分がやるしかない。加東さんも同じ境遇になったら、自分と同じことをやるだろ？」

静かに、自分の内の言葉を口にした。

「確かにそうね。アキラなりの決意があつたのことだったわけね」

「そうだ。ウィッチ達はネウロイから無辜の人たちを守り、戦う。でも、誰がウィッチを守る？ 自分しか守れないなら、自分がやるしかない」

「ありがとう、アキラ。これで納得できたわ」

そう告げて、彼女は腰を上げ部屋から出た。

自分は、止まっていた作業の手を動かして、報告書類の続きを書き始めたのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その十五

マルタ島解放作戦前日の朝、自分は雲ひとつない地中海の空をキー
○六で《迷彩》を使用しながら飛翔していた。

改めてネウロイに占領されているマルタ島の様子を確認するため
だ。新たな人型ネウロイが、また要塞型ネウロイにやってきていない
かの調査だ。

もし奴らがきていたら自分が人型を撃破し、明日行われる作戦決行
の阻害要因を取り除く。これは、ミーナ少佐から直々に発令された極
秘任務で、表向きは偵察で基地の北方を飛んでいることになってい
る。

別に、秘匿任務とする必要はないのではないかと尋ねたのだが、
『この作戦は戦費確保のための宣伝の意味合いが強い。その作戦遂
行に問題となる事案がありました、というのはさすがに体面が保てな
いわ』

とのことで、このあたりの事情は理解できたから異論をはさみはし
なかつた。

自分は、ネウロイの直上百メートルの位置にとどまり、出方をうか
がう。

「さて、ネウロイの直上にきたわけだが。これまでの行動を考えたら、
《迷彩》を使った自分がこれぐらいの距離に近づくと、奴らは偵察のた
めに外にでてくるはずだが」

出てくる気配はないように感じられたが、西から水面ギリギリをネ
ウロイへ向けて飛翔する影が二つ、見受けられた。

ふん、こちらの作戦を察知したか、あるいは何らかの情報伝達に
よって駐留していた人型が撃墜されたのを知って、ようやく駆けつけ
たっというところか？

自分は、奴らがネウロイの内部へ侵入する手前で後方を飛ぶ人型へ
と降下、守り刀を抜き放ち、背中からコアを刺し貫いた!!

瞬間、ビキツと全身に亀裂が入り、一気に砕け散った。

このまま、前方を飛翔する人型へと向かい、両足を切り落とす。悲鳴を思わせる声を上げ、ネウロイは停止し、ありつただけの光線を自分に向けて放つ！

ほぼ至近距離のため、いくら《迷彩》を使っても位置はばれていくし、回避も不可能だ。

ウィッチとしての本能がシールドを展開した。なんとか、わずかに下方へ傾けられたのは僥倖だ。

ビームを受け流した反動が、ぐん、と自分を上へと押し上げた。その勢いを借りつつ斜め上へと上昇、ビームを受けているシールドの面を真下へと傾けていく。

そうして赤い閃光をすべて受け流し、きしむストライカーユニットを無視して超小径のトンぼ返りを敢行、やつの背後に回り込み、袈裟に斬りかけた。

若干浅くなってしまったが、わずかでもコアに刃が届けば、ネウロイは崩壊する。そして、その手応えは確かにあった。

奴は慌てて急上昇、自分から逃げ出す。

自分は、腰の鞘へと短刀を納めると、基地へと帰投を開始する。

怪鳥の如き悲鳴とともに、ネウロイの破壊音が聞こえてきた。

任務、完了だ。

基地に帰投した頃には、負担をかけたストライカーユニットがいやな咳き込みをして、ユニット足先付近にある排気マフラーから黒煙を吐き出していた。それもどちらか片方ではない。両方だ。

魔道エンジンの状態がおかしいことを無線で連絡しておいたので、自分が滑走路に降りると同時に、外に出されていた発進促成装置へと納める。

キー〇六は、そのまますぐに整備隊へと引き渡され、整備室に運ばれていく。

自分は、それを眺めながら、はあ、と深く息をついた。

ミーナから言い渡された任務は、なんとかクリアしたものの、ユニットを破損してしまったのは痛いところだな。

まあ、五〇二隊のブレイクウィッチーズに比べたら、問題はないだろう。

などと自分をごまかすようなことを考えていると、自分が帰還したのを見かけたのだろうか、ミーナ中佐がやってきた。

「人型ネウロイ、いたみたいね」

「はい、無茶なマニューバをやったせいで、エンジンが故障してしまいました」

「人型がもたらす脅威を未然に防げたのだから、それぐらい安いものだわ」

「詳しくは、後ほど提出する報告書で確認をお願いします」

「それにしても、初美さんは本当に優秀ね。ラル少佐がヘッドハンティングしようとしたのもうなずける話だわ」

五〇五のゴロプ少尉も自分のスカウトを企んでいたようだし、自分、ずいぶんと高い評価をされているのだな。

正直、悪い気分ではないが、いささか迷惑でもある。

「スカウトされても、答えられませんよ」

「ええ、坂本少佐から大体の話は聞いているわ。人型ネウロイから、ウィッチを守りたいんでしょ？」

「そうです。ウィッチはネウロイから人類を守るために戦いますが、その肝心のウィッチを、誰が人型ネウロイから守るのか。自分ならそれができる。だから守る。それだけの話です」

「動機は違うけど、そのあたり、宮藤さんとそっくりね」そう言ってくすと笑うと、「それができるのが凄いのだけどね。私はそろそろ共同作戦に向かうわ。初美さんはゆっくり休んでいて」

そう言って、彼女は基地の中へと戻っていった。

治部をねぎらってくれてはいるが、そんなわけにもいくまい。

報告書を書かないといけないからな。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 八の 巻 その十六

マルタ島解放作戦は、無事成功に終わったとミーナ隊長より聞いたが、その後ハルトマンとマルセイユの間にもちよつとしたいさかいがあつたらしく、エーリカは始末書を書くのに色々と苦労したらしい。

本来なら営巢入りしてもおかしくない事件だったが、解放作戦の立役者がそんな大事件を起こしたとあつては外聞によろしくないと判断した司令部は、特別に始末書のみでことを収めるとしたと、ミーナ中佐より聞かされた。

自分は、本来ならマルタ島の偵察が終了した時点で、五〇一を離れてもよかつた。

ただ、そこは乗りかかつた船、作戦終了までとどまることにしたが、それがもたらしたのはストライカーユニットの故障である。

キー〇六の修理は、エンジンのプラグ焼き付けだのなんなので、エンジンのオーバーホールが必要になり、ついでに機体整備も行う結果となる。

結局、なんだかんだで一週間、時間をかけることになった。

その間、自分は宮藤軍曹が使っていた零式艦上戦闘機を借りて哨戒任務を手伝つたり、エイラに強引に誘われ、サーニヤと三人で夜間哨戒に出たりした。

零式は、噂通り軽快な操縦性で、高い運動性能は陸軍の傑作ユニットである隼と共通する部分があり、自分の空戦スタイルにもあつていた。

そんな一週間、偵察型ネウロイとの定期戦闘以外は特に何もなく、五〇一の隊員達もつかの間の平和を謳歌していた。

が、そんな短い夏休みも、総司令部が打ち立てた一大反攻作戦——オペレーションマルスの発動によって終わりを告げ、キー〇六の修理がおわつた自分もこの五〇一を去る時が訪れる。

ミーナと坂本は、倉庫で修理がおわつたストライカーユニットを撫

でている自分のところへやってきて、声をかけてきた。

自分は、すでに五〇一基地出立の準備を終えていて、今すぐにも飛び立てる状態だ。

「いつてしまうのね、初美さん」

中佐の声音は、寂しさが見え隠れしていた。

「ええ。ミーナ中佐との約束であるネウロイの調査はもちろん、最初に撃墜した二機の奴らに加え、後に現れた人型も撃破しました。そして、あいつらはおそらく巣からやってきたはずです。合計四機。巣には奴らもいないでしょう。となれば、自分にはもうここにいる理由もありません」

「初美さんには、オペレーション・マルスにも参加してほしいかったのだけど……」

「そう言うな、ミーナ。初美にも事情がある」

「そうね、そうよね。初美さん、これまでの協力、感謝するわ」

人柄を感じさせる柔らかな笑顔を浮かべながら、ミーナ中佐が言った。

「いえ、借りた恩義を返しただけですから、お礼は……」

自分は、若干困惑気味に言葉を返す。

確かに、ペリーヌを呼び出させるだけの借りを返すためとはいえ、これほどのことをする必要はなかったかもしれないが、なにぶん人型ネウロイが敵として出てきては関係ない。

なぜなら、人型ネウロイからウィッチを守るのが、自分自身に科した使命であるからだ。

そこに貸し借りだなんだと理由をつけて逃げ出すなど、許されるものではない。

「しかしだな、初美。我々五〇一はお前に対して、すぐには返しきれない借りができてしまったのは事実だ」

坂本少佐は、どこか神妙な面持ちで言った。

「それなら、またいつか、自分がこのストライクウィッチーズを訪れた時、一宿一飯を預らせてください。それでチャラです」

「そんなことでもいいのか？」

「かまいません。人型ネウロイの件は、自分と詠宮龍子妃殿下の願いですから」

「わかりました。そのときは改めて歓待させてもらおうわ」

「では、自分はこれで。お世話になりました」

二人に頭を下げて跳躍し、キー〇六、木製疾風戦闘脚を履いた。

モモンガの尻尾と耳がはえて、倉庫を青い魔法光で照らし出す。

扶桑陸軍式の敬礼をして別れを告げ、

「管制、扶桑陸軍中尉初美あきら、発進する」

自分は、無線機を通して、管制に離陸を報告し、

「オン・マリシエイ・ソワカ——」

一気に魔法陣が広がり、うなりを上げる魔道エンジンと倉庫内に風を巻き起こす呪符プロペラ。

さすがは名高きストライクウィッチーズの全ユニット整備を担当する整備兵だ。

轟く排気音からもわかる。

オーバーホールは完璧で、新品同様のエンジンへと生まれ変わった。

「発進するっー！」

バシヤン!!

音を立ててストライカーユニットは開放され、滑走路へと躍り出てあつという間に離陸速度へと加速、飛び立つ。

基地上空へと舞い上がると、自分を見送る二人の上官へ宙返りの挨拶をして、一路北へと飛び立ったのだった。

くノ一の魔女くストライクウィッチーズ異聞 九の 巻 その一

夕暮れが近づいたサン・トロン基地は、自分が訪れたことで一騒ぎが起きていた。

事前にここへ訪れることは伝えていたし、作戦指示書も届いていたはずだ。

キー〇六の整備とそれにかかる費用は扶桑皇国が出すことになっているので、資金面は問題ないし、かかる資材も後日皇国が補填する手筈になっている。

それでも騒ぎになっていたのは、この基地が特殊な部隊の本拠地となっているからだろう。

なぜなら、ここはハイデマリー・ヴァルプルガ・シユナウハー大尉ただ一人が所属する第一夜間戦闘航空団第四飛行隊の基地で、彼女以外のウィッチが駐屯することなどこれまで一度もなかったという。

そこに、扶桑のウィッチがいつときとはいえ駐留し、しかも、その目的が名目上とはいえベルリンの調査任務だ。

事前通達があったとしてもちよつとした騒動になるのも当然だろう。

もちろん、作戦目的は他にある。

人型ネウロイの壊滅。

それが自分の望みだ。

そして、もしあるならば人型ネウロイの製造工場のようなものが、ネウロイの大本営と目されるベルリンにあるとふんでいる。

今回の調査任務は、これが作戦目的であった。

自分は、発進促成装置にユニットを格納してから、若干騒がしい格納庫を後にした。

中に入ると、みかけたカールスラントの空軍兵士に声をかけ、隊長がどこにいるのかと居場所への道順を尋ね、彼女が夕食を取るため食堂にいと聞いてそこへ向かった。

ここにいるウィッチが隊長ただ一人なのだからか、ウィッチ用の食堂はさほど大きい作りではなく（それでも、二十畳ほどの大きさがあり、内装も充実しているのだが）、部屋と同じくさほど大きくないテーブルで、黒パンとソーセージ、それにザワークラウトを食べている白髪メガネの女性がいた。

「食事中に失礼します、シユナウファー少佐」

自分は、ドアのついてない食堂の壁をノックして声をかけた。

名前を呼ばれた赤目の彼女は、伏せ目がちの顔を上げると食事の手を止めて咀嚼中のものを飲み込み、

「あ、初美あきら少尉ですね。サン・トロンへようこそ」

そう答えて椅子から立ち上がった。

「初美あきら扶桑皇国陸軍少尉、本日サン・トロン基地に着任しました」

そう言つて陸軍形式の敬礼をすると、彼女はカールスラント空軍形式の敬礼で返してきた。

「わずかな間ですが、お世話になります」

「着任書類と同封されていた作戦書を見ましたが、本気ですか？」

「でなければ本基地に作戦協力を要請しません」

「作戦司令部からも協力命令が下りてるので、よほどのことがない限り協力はします。が、理由をおしえてくれますか？」

「自分は、人型ネウロイの壊滅を目的としております。そのためには、人型ネウロイの製造基地壊滅が必須で、その場所が現状わからない以上、ベルリンにあると考えるのは当然です。そして自分一人ならば、どんな場所だろうとネウロイに発見されはしません」

確信を持って言い切った。

「それでも、あの作戦はとても承認できるものでは……」

うつむいて、懸念をあらわにする。

「自分の固有魔法、『迷彩』はレーザー波を吸収し、ネウロイの認識を阻害するものです。自分を捉えるにはストライカーユニットからの廃熱を感知する以外にありません」

自信を持って断言した。

これで納得してほしいものだが。

最悪、少佐の承認がなくても総司令部からの承認を得た本作戦は実行できるが、隊長の許可があるのとないのとではいろいろ物事がスムーズにいく。

「それでは、今夜の夜間哨戒に付き合ってください」

ふむ、そういうことか。自分の固有魔法がどういいうものか、実地で確認してもらうのが一番かもしれないな。

幸い、五〇一にいたとき、エイラとサーニャに連れられて夜間哨戒を経験したし、

「了解しました。では、仮眠させていただけたいのですが、部屋を用意していただけますか？」

それから、自分は仮眠室へと案内された。

夜間哨戒の準備のための仮眠はほんの数時間だが、その時間で哨戒をやるための体力は回復できた。

自分は、哨戒の発進時間からは少しばかり早い格納庫へと移動して、発進準備が整えられていた木製疾風が用意されている発進促成装置の手すりに体を預ける。

五〇一に身を寄せていたとき、エイラのすすめもあって夜間哨戒を経験したが、よもや早速役に立つとは思ってもよらなかった。

経験はなんであろうとしておくものだな、と思えた。

扶桑皇国で空戦ユニットを扱うための速成教育を受けていたときは、飛行経験が少ない自分では習得が困難とされて夜間哨戒の教育は受けなかったわけだが——同時に、推測航法を学ぶ必要なしと判断された——人の奇妙な縁によって哨戒を経験できたのは大きい。何しろこうして今、ハイデマリー少佐の要請に従うことができるのだから。

背後に何者かが近づいてくる気配を感じたので振り返ると、そこにはハイデマリー大尉が立っていた。

「お待たせしました、アキラさん」

「いえ、自分も今来たところです。参りましょう」

「ええ、本日はベルリンの方角の偵察を行います。アキラさんの作戦

目標の下見にもなるでしょう」

む、これは気を遣わせてしまったか。

「少佐」

言葉を詰まらせてしまう。

「あきらさんの望みは聞いています。人型ネウロイを壊滅させたいんですよね」

「ええ。感謝します、少佐殿」

自分はそう頭を下げて木製疾風に足を通した。

ヴン、と空気がうなる音が格納庫に響いて、青い光がストライカーユニットを中心に広がる。隣のハイデマリー少佐も、同様にユニットを履くと同様に床が魔法陣に輝き、呪符プロペラの出現に続く。

二人のユニットが、同時に魔道エンジンの轟音を響かせ、プロペラは颯風を巻き起こし髪の毛や軍装をはためかせる。

「管制塔、これよりハイデマリーと初美少尉は夜間哨戒に出る」

『了解しました、少佐』

耳にはめてあるインカムから、管制官の声が聞こえてくる。

「ハイデマリー、進発する」

「くノ一の魔女、発進する」

十分にプロペラの回転数が高められたユニットは、発進促成装置から解き放たれ、自分たちを庫外に飛ばして空へと舞い上げた。

くノ一の魔女くすトライクウィッチーズ異聞 九の
巻 その二

静寂な夜空を、二人のストライカーユニットが轟音切り裂き飛翔する。

ハイデマリ少佐は、規定高度まで到達すると魔道アンテナを展開して、

「初美さん、夜の空って暗くて寂しくて、上も下もわからなくなったりして大変でしょう?」

そう言ってきた。

「ええ、五〇一での実地訓練でも、僚機の二人がいなければ上下がわからなくなつてパニックになっていました」

「ふふつ、でも、魔道アンテナがあると一人ではないんですよ」

自分に手を伸ばしてくるので、握り返してみると、耳ではなく脳に直接声が響いてきた。

『あ、初美さんですね?』

『む、新入りのナイトウッチか?』

『違うぞ、以前話した扶桑のくノ一ウッチだ。な、あきら』

不思議な感覚だ。

脳の中で別人が騒いでいる。

「こ、これは……?」

「ナイトウッチの魔道アンテナによる通信です。こうやって、通信しておしゃべりしてるんです」

「あ、は、初めまし……て? 扶桑陸軍の初美あきら少尉です」

『初めましてじゃねーぞ、あきら。忘れんなよなー』

『お久しぶりです、あきらさん』

「む……エイラとサーニヤか」

『ふむ、ということはおぬしとは初顔じゃな。わらわはハインリーケ・プリンツェシン・ツー・ザイン・ワイトゲンシュタイン。カールスラント空軍所属の大尉じゃ』

む、この声がかの有名な姫様か。

ということは、そうか、五〇六も無事設立されたのだな。

貴族階級のウィッチを集めるのにずいぶん難儀している、という話は小耳に挟んでいたが、設立に必要な人数はかき集められたのだな。

「五〇六JFW、無事設立されたんですね。よかった」

あのまま設立しなかったんでは、自分が骨を折った甲斐がない。

『なぜそこでノーブルウィッチーズが出て……しかし初美、初美……おぬしひよつとして、《ぎっくり腰》作戦での偵察任務を担った初見少尉殿か！』

「そうです。大尉、ご存知でしたか」

「《ぎっくり腰》作戦？」

少佐は、自分を見て首をかしげる。

「あー、五〇六隊の基地近辺には、大量のブラウシユテルマーが存在していて、その撃滅作戦が行われました。その作戦名が《ぎっくり腰》作戦です」

『幸い、B隊の基地にブラウシユテルマーはなかったがな。初美殿は、その作戦で偵察任務を担い、見事成功したのだったな。まさかあの作戦に参加したウィッチとこうして言葉を交わせるとは、今宵はなんとも奇妙な縁を感じるぞ』

B隊？ 五〇六はA隊とB隊に分かれているのか。どういうことだ？

『あきらまじげな、そんなことしてたんだ』

「都合よく使われるだけの使いっ走りですよ」

と、エイラの言葉にこたえた。

『だが、そのおかげで妾達はこうして部隊の本拠地を持つことができた。感謝するぞ、初美殿』

見たこともない貴族に、ここまで言われるのはなんともはや曰く言いがたいものがある。

「しかし、B隊とはどういうことですか？ 五〇六はA隊B隊に分かれていますか？」

『あー、それはな。いろいろ面倒な話がついてまわるのじや』

『確か、集まりの悪い貴族ウィッチの補充としてリベリオンがウィッチを送り込んで、それがB隊としてデイジョン基地に配置されることになったんだよな』

と、エイラが興味のなさそうな声で補足説明をしてくれた。

なるほどな、そんな事情でA、Bの二隊に分けられたというわけか。そのあたりの事情は探っておくべきかもしれないな。

『それで、どうしてあきらさんはハイデマリーさんと一緒にいるんですか？ 人型ネウロイ関連ですか』

「そうです、ベルリン偵察のために、サントロン基地にきてくれたんです」

ハイデマリー少佐が自分の代わりに答えてくれた。

『ベルリンじゃと？ それに人型ネウロイとはどういうことだ』

あ……ひよつとして、大尉は人型のことしらない、とか？ 人型の案件は、まだトップシークレットなんだったか？ いや、トラヤヌス作戦で情報は解禁されたはずだな。

「人型のネウロイがいて、彼らはウィッチを洗脳、誘拐して傀儡とするのです」

自分が、簡単に大尉の疑問を解消した。

『そうだぞ、五〇一も手を焼かされたんだ』

『宮藤さんも、ネウロイの巢に連れ去られましたしね』

ま、マジか。マジでそんなことがあったのか。

ブリタニアでのネウロイとの戦争が終結したあの一件はどうやら最高軍事機密になっていいるらしく、気になって軽く調査してみたのだが、人型ネウロイが扶桑海軍の空母赤城を乗っ取り、コアとなって宮藤のストライカーユニット投下により撃破されたとなっていた。

だが、人型ネウロイにそんな能力があったとは考えづらい。

おそらく、何か重大な事案があつて、それがこの時の一件を最高軍事機密としたきっかけなのだろう。

突然、魔道通信にザザッと雑音が混じり、少佐の緑色に輝いていた魔道アンテナが真っ赤になる。

「む……これは、ネウロイか」

「そうです。方角は一時、上方」

その台詞と同時に、ハイデマリ少佐が指摘した方角から、赤い光が瞬いたのが見えた。自分はすぐさま手を離すと左にロール、少佐は右にロールして分かされると、その間隙にネウロイの光線が走った。

「中型の反応、数は二。任せられますか？」

「任された。自分は片腕ウィッチだが、相応の働きはしてみせよう」

少佐と自分は、上体を反らして高度を上げ、ネウロイへと突貫した。